

k y u s h u

i n s t i t u t e o f

t e c h n o l o g y

平成19年度

# 現状と課題

九州工業大学工学部自己点検・評価報告書

九州工業大学大学院工学研究院部局評価委員会

# 目 次

1	はじめに	1
2	工学部・工学研究科の教育	
2.1	2007年度卒業生アンケート(工学部)	2
2.2	2007年度修了生アンケート(工学研究科)	40
2.3	教育達成度評価アンケート：雇用主(2005年3月以前卒業生)	76
2.4	教育達成度評価アンケート：雇用主(2005年3月以前修了生)	86
2.5	教育達成度評価アンケート：卒業生(2005年3月以前卒業生)	96
2.6	教育達成度評価アンケート：修了生(2005年3月以前修了生)	105
3	工学部・工学研究科の管理運営	
3.1	工学部・工学研究科の組織図	114
3.2	各種委員会活動の点検・評価	116
3.2.1	工学部・工学研究科人事構想委員会	116
3.2.2	工学部・工学研究科部局評価委員会	116
3.2.3	工学部教務委員会	117
3.2.4	工学部学生委員会	120
3.2.5	工学部入学試験委員会	121
3.2.6	工学部・工学研究科教育方法等開発委員会	124
3.2.7	工学部・工学研究科安全環境委員会	127
3.2.8	工学部・工学研究科情報化推進委員会	128
3.2.9	工学部・工学研究科広報委員会	130
3.2.10	工学部学生募集活動委員会	130
3.2.11	工学部・工学研究科予算委員会	133
3.2.12	工学部・工学研究科図書委員会	134
3.2.13	大学院工学研究科学務委員会	135
3.2.14	大学院工学研究科入学試験委員会	137
3.2.15	DNA実験安全管理委員会	138
3.3	教員組織	139
3.3.1	教員の配置	139
3.4	事務組織	142
4	工学部の財政	

4 . 1	工学部の運営費交付金配分状況	143
4 . 2	科学研究費補助金の採択状況	145
4 . 3	外部資金導入状況	146
4 . 3 . 1	寄附金	146
4 . 3 . 2	民間等との共同研究	146
4 . 3 . 3	受託研究	147
4 . 3 . 4	寄附講座	147
4 . 3 . 5	寄附金の利息	148
5	工学部と社会とのつながり	
5 . 1	工学部の地域貢献活動	149
5 . 1 . 1	大学公開	149
5 . 1 . 2	公開講座等	149
5 . 1 . 3	北九州市民カレッジへの協力	151
5 . 1 . 4	出前講義	151
5 . 1 . 5	情報公開	154
5 . 2	学生の国際交流	155
5 . 2 . 1	外国人留学生（国籍別・課程別・費用別）在籍状況一覧表	155
5 . 2 . 2	外国人留学生（学科別・専攻別）在学状況一覧	156
5 . 2 . 3	学生の海外派遣	157
6	おわりに	158

（平成20年度大学院工学研究院部局評価委員会委員名）

## 1. はじめに

このたび平成19年度版「工学部自己点検・報告書・現状と課題」を発刊するはこびとなりました。これまでと同様に、平成19年度に実施された卒業生・修了生アンケート、教育達成度評価アンケート、ならびに各種委員会の活動などについて記載しています。

平成16年度に実施された国立大学法人化の後は、中期計画・中期目標の年度計画に基づいて教育・研究活動が進められています。工学研究院部局評価委員会は卒業生・修了生、そして企業へのアンケート調査を行い、その結果を各種委員会活動にフィードバックさせることを主たる目的として活動してきました。平成20年度には国立大学法人としての5年間の評価が行われますが、これらアンケートの結果は教育目標の達成度を測る指標として活用できると期待しています。

本冊子は6章から構成されています。第2章「工学部・工学研究科の教育」では、2008年3月に実施した卒業生・修了生に対するアンケート、2008年4月～7月の間に実施した企業に対するアンケート、そして教育達成度評価アンケートと同時に実施した2005年3月以前の卒業生・修了生に対するアンケートの結果について述べています。これらのアンケートの結果は過去4回分のデータを含め5年分のデータとして比較しています。企業に対するアンケートに関しては、企業側から見た本学の卒業生・修了生の評価を“全体としての傾向”として、簡潔にまとめています。2005年3月以前の卒業生・修了生に対するアンケートは3年分のデータとなっています。卒業・修了後3年を経過した本学同窓生を対象としたアンケートでは必ずしも十分とは言えないかもしれませんが、法人評価の観点からも有用と考えています。第3章は「工学部・工学研究科の管理運営」で、2007年度の工学部組織および各種委員会の活動等について記載しています。第4章は「工学部の財政」で、外部資金の獲得状況、民間との共同研究等について記載しています。第5章は「工学部と社会のつながり」で、公開講座、出前講義等について記載しています。第6章の「おわりに」では、本報告書の編集作業にあたった部局評価委員のコメントを記載しています。

昨年度より、閲覧の利便性を考慮して本報告書を工学部のホームページに掲載しております。これにより、学内外に九州工業大学工学部・工学研究科の内容を公表し、社会に開かれた大学としての役割を果たしたいと考えております。

最後となりますが、平成19年度版の「工学部自己点検・評価報告書・現状と課題」をまとめるにあたりご協力頂きました教育職員、および事務職員の皆さまに心から感謝申し上げます。

平成20年1月吉日

古曳重美（大学院工学研究院部局評価委員会委員長）

## 2 工学部・工学研究科の教育

### 2.1 2007年度卒業生アンケート（工学部）

アンケート実施年月日 平成20年2月13日

アンケート回収率

学年	配付枚数	回収枚数（回答率）
4年生（卒業予定者）	597枚	405枚（67.8%）

[1]所属する学科・コース名を書いて下さい。

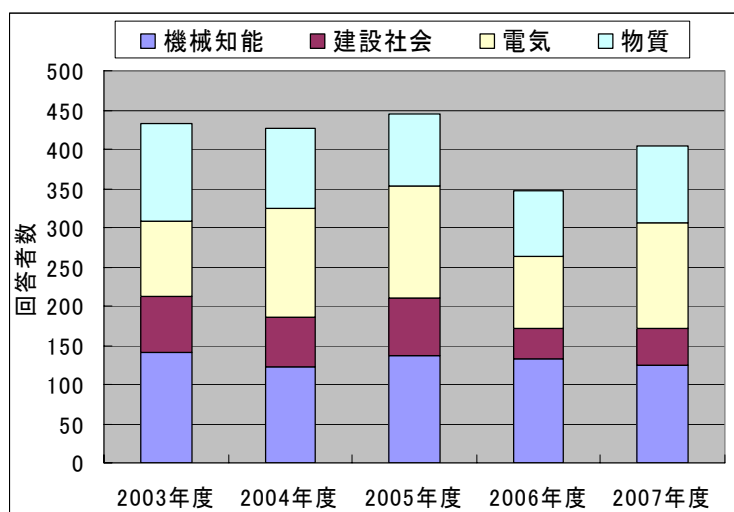
機械知能工学科（125名）

建設社会工学科（47名）

電気工学科（134名）

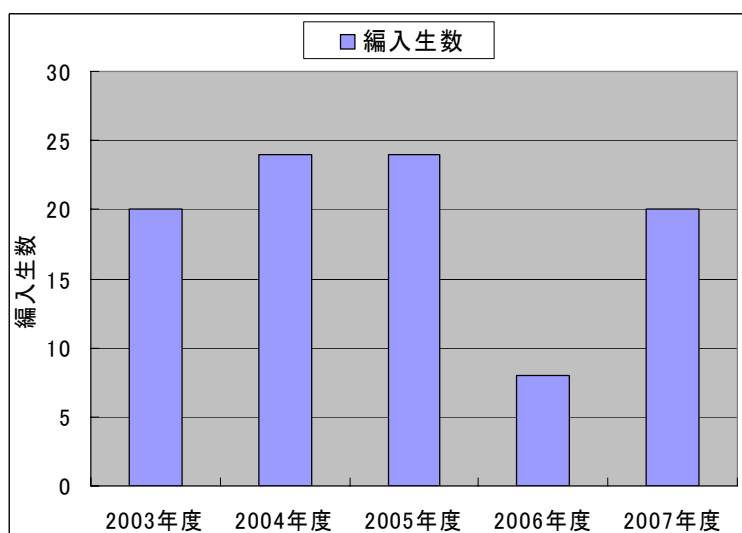
物質工学科（99名）

昨年60%以下に低下した回答率が、今回はそれまでの水準に達し70%近い値となった。今後もこの水準が維持できるようにしていければよいと思われる。



[1-1]3年次編入の人は[ ]に○を入れて下さい。 [20名]

昨年大きく低下した回答数は、今回それまでの回答数に概ね戻った。編入生は20人程度なので、相対割合では容易に大きく変化してしまうが、今後もこの水準を安定して維持できればよいと思われる。

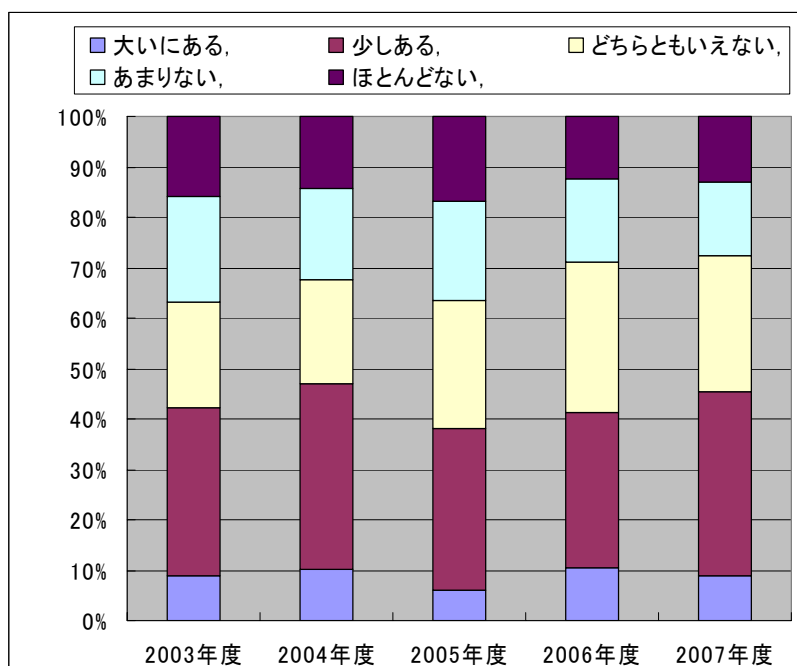


[2]大学教育があなたの成長（自己形成）に及ぼした効果についてお尋ねします。

[2-1]人間科学科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

（法学，経済学，社会学，哲学，倫理学，歴史学，語学，保健体育学，文学，教育学等）

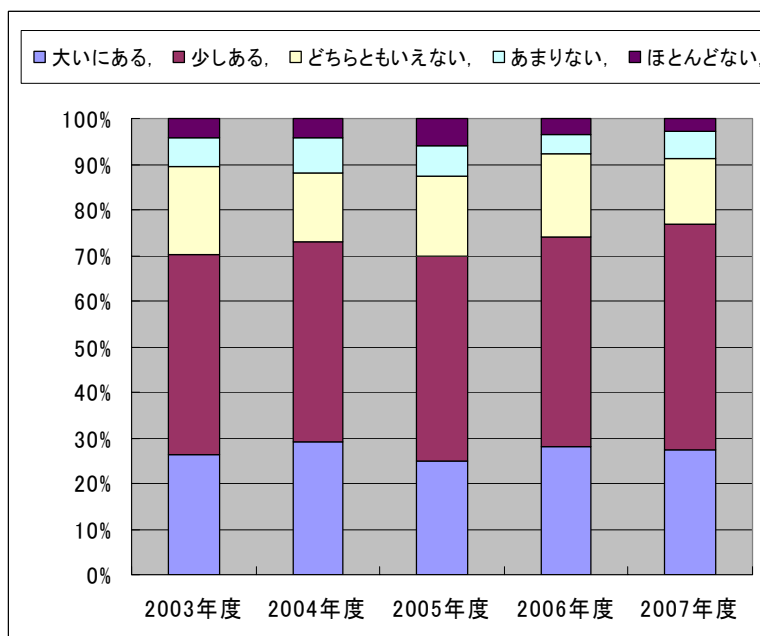
効果があると判断した割合が昨年に続き僅かに増加し、過去5年では4年前と同じく最も高く、人間科学科目の教育改善が順調であると判断される。



[2-2]工学基礎科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

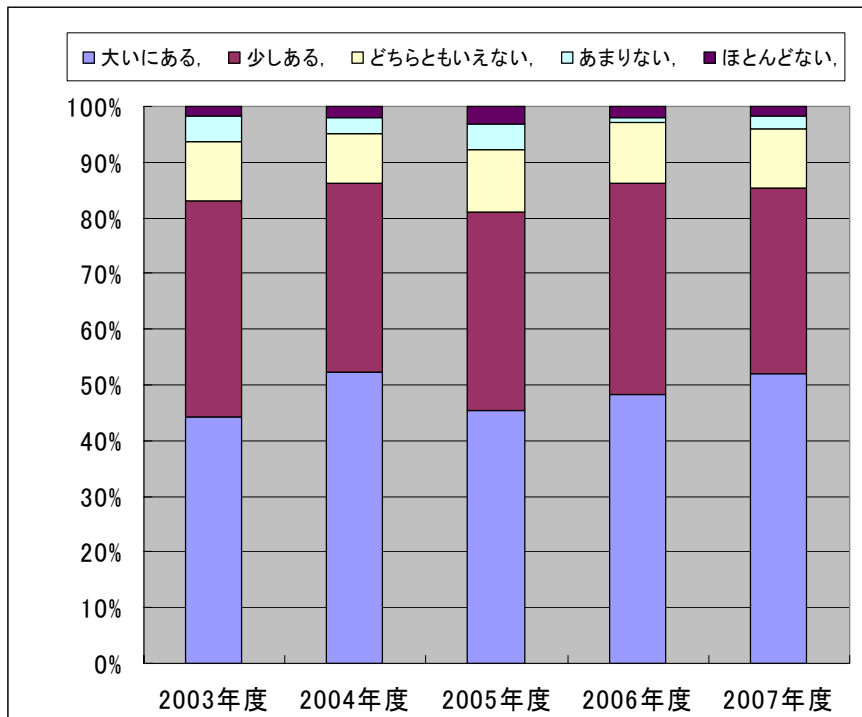
(数学, 物理学, 化学, 情報関連基礎科目)

昨年に続き, 効果が「あまりなかった」「ほとんどなかった」との回答割合が低水準で維持され, 「ある」の側の回答割合も増え, 改善がみられる。今後もこの程度の水準が維持されれば工学基礎科目として良好と思われる。



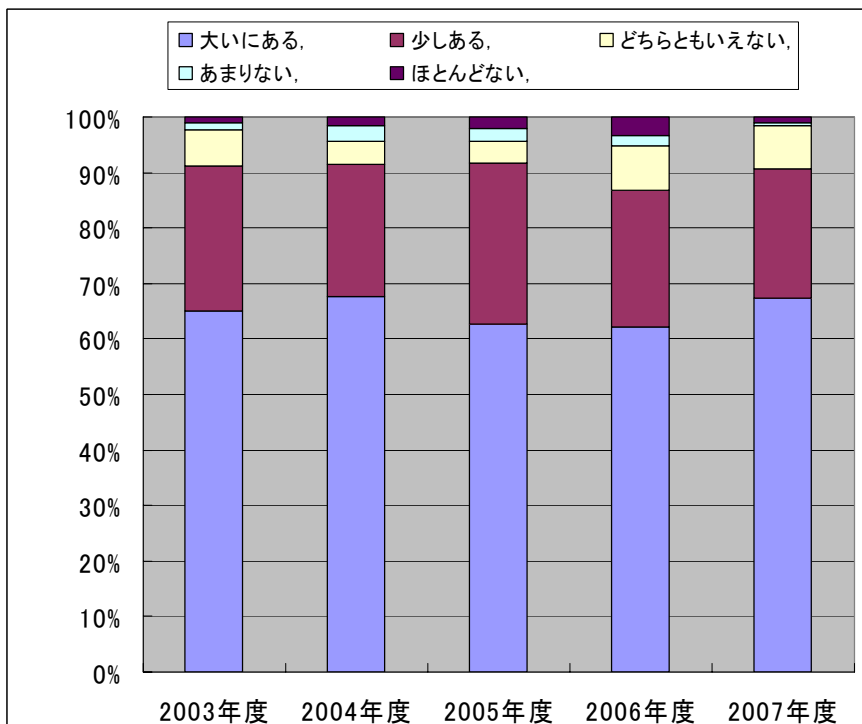
[2-3]工学専門科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

工学専門科目に対して「大いにある」が増加しており, 又, 「ない」も低水準が維持され, 改善傾向がみられる。今後もこの水準が維持されれば良いと思われる。



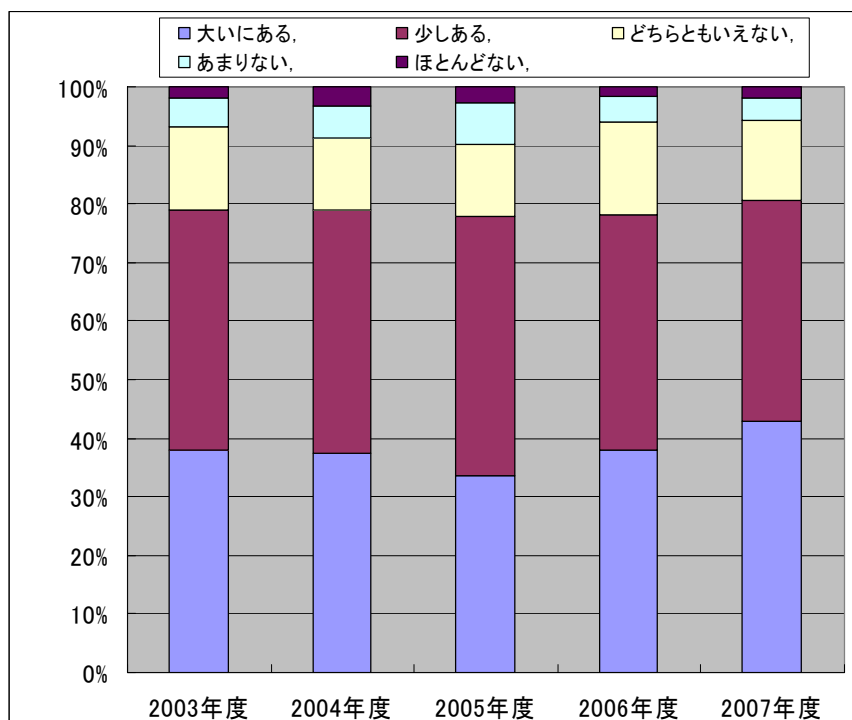
[2-4]卒業研究はあなたの自己形成に効果がありましたか。

卒業研究に対して、「大いにある」が最も多く、「ある」以上も90%と高水準が維持されている。今後もこの水準が維持されれば良いと思われる。



[2-5]実験・実習・演習・製図はあなたの自己形成に効果がありましたか。

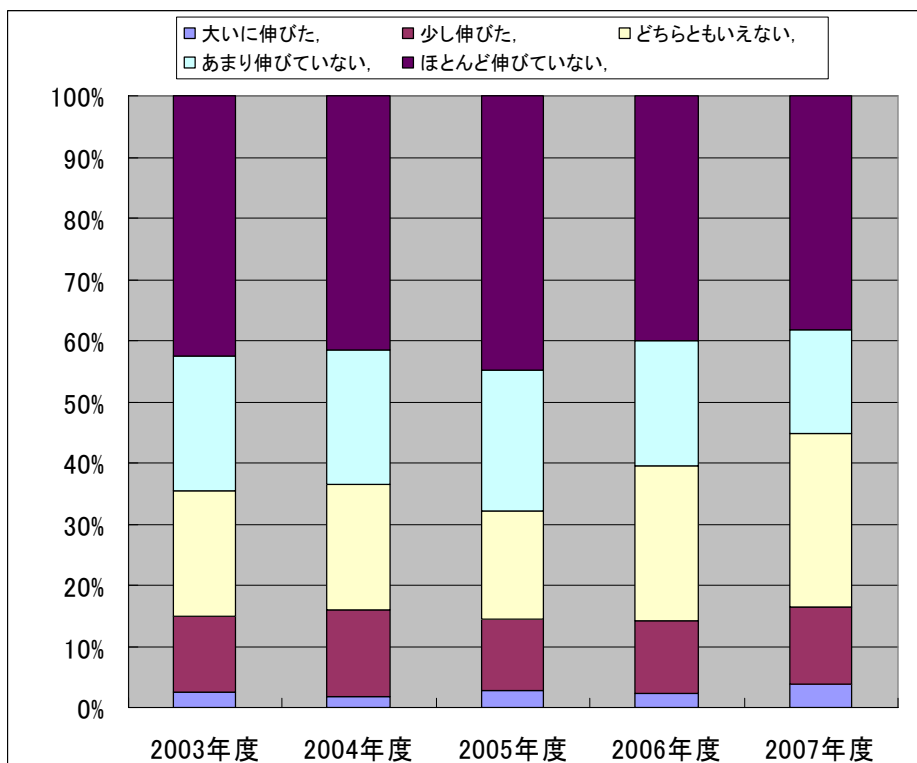
実験・実習・演習・製図に関しては、「大いにある」が最も多く43%、「ある」を含めると90%と高水準が維持されている。今後もこの水準が維持されれば良いと思われるが、「大いにある」が更に増えればより理想的である。



[3]英語力についてお尋ねします。

[3-1]大学の4年間であなたの英語力は伸びましたか。

英語力については、伸びたと回答しているものが、年々僅かながら増加しているの改善がみられるが、伸びていないと回答する者が依然多く、今後、さらなる改善が望まれる。

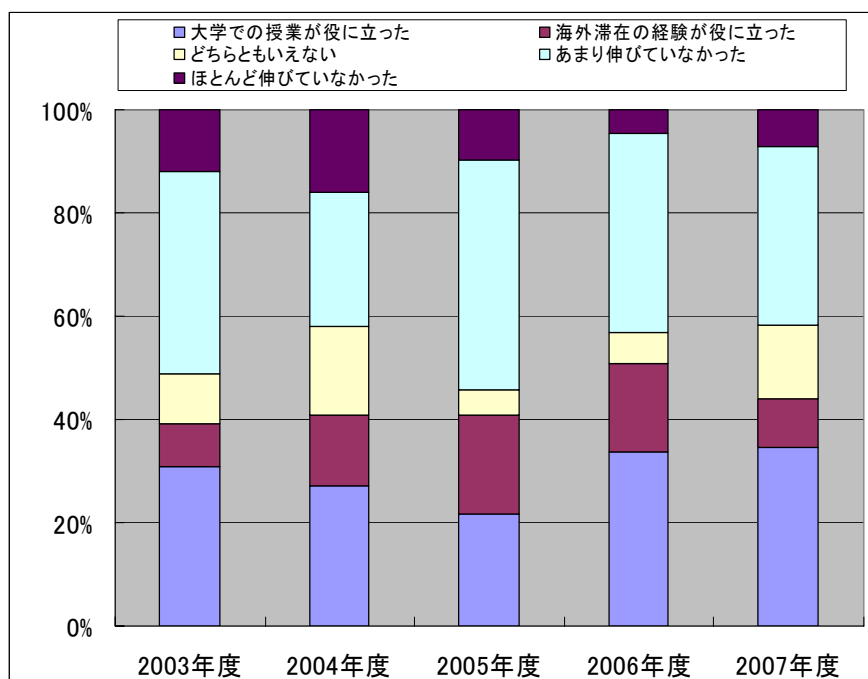


[3-2][3-1]でA（大いに伸びた）またはB（少し伸びた）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

英語力が伸びた理由についての回答は、大学での授業を挙げる者が最も多く、海外滞在の効果も挙げられる者の割合は減っている。専門科目などのタイトなカリキュラムの中で、改善に繋げるには、如何に効



率的な英語教育を行うかに工夫が求められる。



E (その他) [具体的に： ]

- ・ TOEICの勉強したから
- ・ 卒論のために英語の論文を読んだ
- ・ 卒業研究のために英語の文献を読む必要があったので
- ・ 目的をもって(卒研等で)英語に触れたことで理解が深まった。
- ・ TOEIC受験のため

英語力が伸びた理由について、研究などの文献や受験を挙げるコメントがあり、研究サイドからの動機付けや自修への誘導も有効な要素であると思われる。

[3-3][3-1]でD (あまり伸びていない)またはE (ほとんど伸びていない)と答えた方：その理由は何ですか。

英語力が伸びていない理由として、低学年でしか科目がないことを挙げる理由が多い。確かに、高学年では専門科目中心の時間割となっており、今後、科目の配置の折合いの議論も必要と思われる。

- ・ 英語の講義のほとんどが1年次なので、忘れてしまう。
- ・ 英語を使う機会が少ないと思います。
- ・ 1年次のみの学習なので
- ・ 使う機会がない。時間がない。
- ・ 1年で授業がなくなる為
- ・ 全然使わない。
- ・ 一年で英語の授業の全てが終わるから。
- ・ 勉強しなかったから。
- ・ 身近に英語を使う機会がなかった
- ・ 大学で英語を勉強する必要がない
- ・ 満足いく授業でなかったから。
- ・ 機会がない(英語を使用する)
- ・ 勉強しなかった
- ・ 大学に入ってほとんど勉強しなかったから
- ・ 英語をしっかり勉強しなかったため。

- ・ 特に何もしなかったから。
- ・ 接する機会が少ない
- ・ 勉強量が少ないから。
- ・ 英語を学ぶ機会も話す機会も少ない。
- ・ 何もしていないから。
- ・ ほとんど勉強していないから。
- ・ 授業が少なかったから。
- ・ 勉強する機会がなかった。
- ・ 意欲がわかなかった
- ・ 今は全く触れていないのでわすれている。
- ・ 授業数が少ない。
- ・ 英語の時間が少ない
- ・ 勉強しなかったから
- ・ 講義が短期に集中していたため卒業時においては英語力の伸びは感じられなかった
- ・ 1年以降あまり勉強していないため
- ・ 2～3年でつかわなかったから
- ・ 英語に触れる機会が少なかった。また自分からそうしようとしなかった。
- ・ 勉強しなかったから
- ・ 高専時よりも英語に力を入れていない
- ・ 特別、英語に力をそそいでいなかったため。
- ・ TOEIC や和訳中心で興味がわかなかった。
- ・ 高校に比べて授業が少なく、特に積極的に英語に触れなかった。
- ・ 高校時代のほうが英語の勉強をしたから。
- ・ 英語を使わなかった。
- ・ 勉強不足
- ・ 一年で勉強した後、特に使わなかった。
- ・ 身を入れて勉強していなかったから。
- ・ TOEIC
- ・ 自分でやった分しか意をなしていないため。
- ・ 一時的にしか触れる機会がなかった。
- ・ そもそも1年期以外で大学では英語を学んだ覚えがない。
- ・ 大学での授業にもあまり意欲的に勉強しなかった。
- ・ 授業のレベルが低い
- ・ 英語に接する時間が短かった
- ・ ほとんど英語に触れなかったから
- ・ 勉強時間が少ない
- ・ 英語の勉強不足だから
- ・ 自己であまり勉強していないため
- ・ 勉強していないから
- ・ 進学のためにTOEICを受験したときに少し勉強しただけで継続した勉強ができなかったから
- ・ 英語の授業が少なく、実戦で使えるものはなかった。
- ・ やる気がなかった
- ・ レベルの高い授業ではなかった
- ・ ドイツ語を中途半端に学んだから
- ・ 昔に比べ、英語と接する機会が減った。
- ・ 授業が簡単だった。
- ・ 目標がなかったから。
- ・ 勉強不足
- ・ 大学3年から英語の講義を受けておらず、自主的にも勉強しなかったから。
- ・ 継続的に勉強を行わなかったから
- ・ 編入、2年間、英語の授業なし。
- ・ TOEICのスコア的に、10程度だったのでほぼ変化なし
- ・ 自らすすんで勉強しなかった為。
- ・ 英語の授業を受けてない。TOEICも受験してないので勉強しなかった。

- ・ 英語の講義は，1年次にしかないため。
- ・ 英語の教科が少なすぎる
- ・ 英語の授業が1年生で必修が終わるため，英語に触れる機会が少なくなったから
- ・ 英語を使うことが全くないため。
- ・ 英語を覚えてどうこうという目標がなかったため。
- ・ 1年生の講義でしか勉強しなかったから
- ・ あまり英語にたずさわる機会がなかった。
- ・ 英語にふれる機会なし
- ・ 1年次以外授業をやっていないから。
- ・ 高校の時程英語の勉強をしなかったから
- ・ 英語を使う機会がへった。
- ・ 3，4年で結局なにもしなかったから。
- ・ 少ししか授業がなかった為
- ・ 英語を使う機会が少ないから。
- ・ 全く勉強していなかった。
- ・ 実際に英語を話す機会がほとんどないから。
- ・ 1年次にしか講義はなく，後は自分でやらなかったから
- ・ 英語にふれる機会が少なかったため
- ・ 英語にふれる機会がなさすぎた
- ・ 授業以外での勉強がない。
- ・ そもそも，工学部で英語を必死に勉強する意味が分からない。
- ・ 勉強しなかったから
- ・ 実感がない
- ・ 英語の勉強をしていない。週1では伸びないと思う。
- ・ 英語を話す機会が少なかったから。
- ・ 英語を使う機会がなかった。
- ・ 英語を学ぶ機会が少ないから。
- ・ 教科書が中学レベル，授業形式が高校と同じ。
- ・ 一年次でしか授業をとらなかったから。
- ・ 勉学不足
- ・ 英語を学習する機会が少なかった。
- ・ 英語というものを理解することがおそかった
- ・ 英語にふれる機会が少なかった。
- ・ 実用性がない
- ・ 勉強しなかったから。
- ・ 使用する場面がない！！
- ・ 使用する機会がなかった。
- ・ あまり勉強しなかった。
- ・ 真剣にとりくまなかった
- ・ 英語の勉強量が減ったから
- ・ 使う環境がない
- ・ 復習をしっかりしなかったから。
- ・ 先生の教え方に努力が見られない
- ・ 授業以外に英語に接してないから。
- ・ 授業が少ない
- ・ 理由が分かれば良いのですが...
- ・ 自主的に英語の勉強をしなかったから。
- ・ 自分で英語の勉強をしていないということは十分に認識していますが，基本的に日本の英語の授業は実際に使えるようなものではない。文法が大切なのは前提であるが，その上で，英会話を練習できるような授業を入れた方がよい。今の日本の教育では，文法は高校で十分にやっていると思うので，九工大で，グローバルに活躍できる人材の育成のために，英会話の授業は必要と感じています。本来は高校でもすべきだとは思いますが...
- ・ 授業でやっていても，毎日英語に触れていたわけでもなく，やはり英語は毎日少しずつしなくては伸びないと思うから。
- ・ 自分自身英語力を伸ばそうという気持ちじゃなかったから。

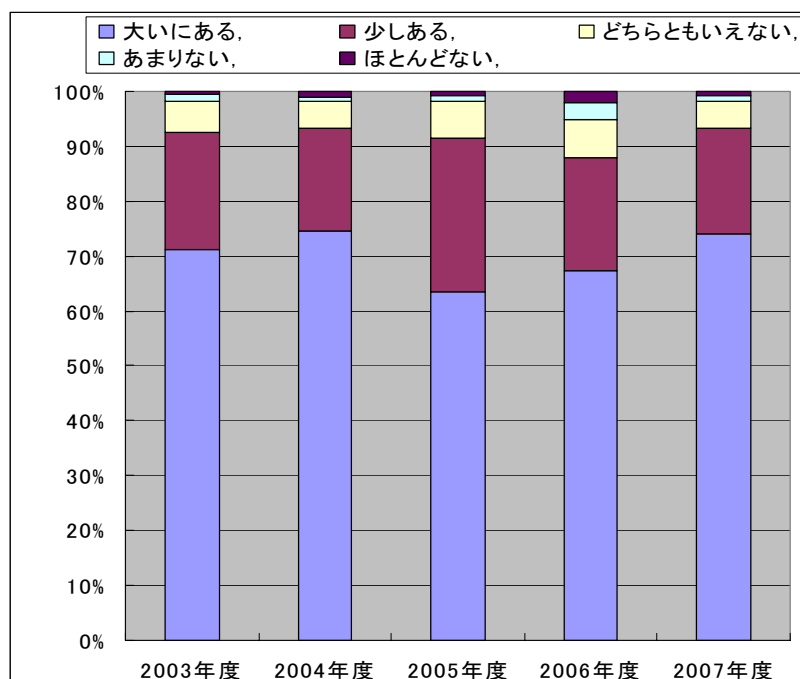
- ・ 英語に関する授業が少なかったこと，英語の勉強を怠った。
- ・ 3・4年次に英語の授業が少ない。
- ・ 授業以外で英語に接することがなかった
- ・ 別々の先生が教えるので先生を同じ人にしてほしい
- ・ 英語の授業のレベルが低かったから。
- ・ 現状維持だから。
- ・ 英語に接する機会が減ってしまったから。
- ・ 留学するのに不便な条件がたくさんあるから
- ・ 勉強しなかった。
- ・ 1年次の授業しか受けていなかったから
- ・ 授業がぬるい。ほとんど伸びていなかったというか力は確実に落ちた。
- ・ 英語の授業が2年間しかなく，英語を使う機会も少なかったため。
- ・ 授業以外で特に取り組まなかったため
- ・ 勉強にならなかったから
- ・ 英語の授業が少なく，授業内容も高校のレベルと同じ程度だったため。
- ・ 学校的に英語に力を入れてなさすぎる。英語を話す人と触れ合う機会がなさすぎる。
- ・ 日常的に英語に触れる気機が少なかったため。また積極的に習得しようとしなかったため。
- ・ 英語を勉強する機会があまりなかった。
- ・ 英語の授業数が少なかったため
- ・ 英語の授業がない
- ・ 英語を使う機会がないから
- ・ 授業内容が良くない
- ・ 授業数（英語を使うこと）が少なかったから。
- ・ 勉強をあまりしなかったから
- ・ 興味が薄かった。
- ・ 勉強をあまりやらなかったから。
- ・ 3，4年で英語にふれるきかいがへった。
- ・ 勉強不足
- ・ 能力を向上させようとする意識が足りていなかった。
- ・ 英語の授業が少なかった。
- ・ 授業数が限られている
- ・ 1年次にしか，英語の授業を受けておらず，英語にふれる機会が局端に減ってしまった。
- ・ 分からない
- ・ 必修科目の単位を取得して以来，本格的に勉強していないから。
- ・ 英語にふれる機会が少なかった
- ・ 授業内容の密度が薄かったため
- ・ 授業をあまり履修していなかったので，伸びることはない。
- ・ 伸びてないものは伸びてない
- ・ 授業が少なかったから。
- ・ 授業数が少なく，また内容も高校と比較すると薄い。
- ・ 自分のやる気がなかった。
- ・ 勉強時間が少ない
- ・ 勉強しなかったから
- ・ 英語の講義を3，4年の時受けてなく勉強してないため
- ・ むしろちぢんだと思う。
- ・ 英語で物事を考えないから
- ・ 授業形式には限界があると思う。「TOEIC 点以上合格」とかにすればまだ伸びると思う。
- ・ 英語を話す機会があまりない
- ・ 自分で勉強しなかった。
- ・ 継続して勉強する習慣が身につけられなかったから。
- ・ 英語に対する苦手意識が強く，積極的でなかった。
- ・ 使う頻度が少ない
- ・ 高校に比べて英語の授業数が少なく，英語に接する時間が減ったから。
- ・ 専門的な英語しか，卒業前には覚えていなかったから。

- ・ 英語にふれる機会がない。
- ・ 英語を使う機会が少なかった
- ・ やる気。
- ・ 英語を使う機会が少ない
- ・ 講義の中容が充実していなかった。英語の講義が少なすぎる。
- ・ それにいたる十分な内容ではなかった。
- ・ 英語に接する機会が少ない。
- ・ 2, 3年のときに英語をほぼ使わなかった
- ・ 英語の授業が少ない。
- ・ 週一回の授業では伸びないと思われるから
- ・ 授業以外であまり英語に触れなかった。
- ・ 2～3年時に英語を使う機会がない
- ・ 英語にふれる機会が少なかったため。
- ・ 英語に触れる機会が少ない。
- ・ 英語に接する機会をほとんどもたなかったから
- ・ 週に1～2回程度の授業で伸びるはずがない。
- ・ 大学に入って勉強量が減ったから
- ・ あまり勉強しなかったから
- ・ 勉強しなくても、単位をとれたから。
- ・ やってないから
- ・ 英語を勉強する機会がなかった。
- ・ 英語にあまりふれなかった。
- ・ 全く勉強しなかったため、逆に英語力が落ちた。
- ・ 2年で必修の授業がなくなったため、それ以降勉強しなかった
- ・ 1年で単位を取った後、ほとんど使用しなかった為
- ・ 勉強不足。
- ・ 実際に使うことがなかった
- ・ 使う機会がなかった。
- ・ 自習にたよる所が多く、高校英語までの実力からあまり伸びたように思えない
- ・ つかえない
- ・ 英語が苦手だから
- ・ 英語とのかかわりがなかったから。
- ・ 授業が少ない
- ・ 英語にふれる機会が激減したため。
- ・ 英語に触れる機会が少ない。授業のレベルが低い。
- ・ 今まで程英語に触れる機会がなかった。
- ・ 英語の勉強をほとんどしなかったから
- ・ 授業が簡単すぎる
- ・ そんなに授業数が多くなかったから
- ・ 英語がきらいだから。勉強したくない。
- ・ 英語の授業がほとんどないから。
- ・ 英語の時間が少ない
- ・ 英語の科目を
- ・ 英語を学ぶ環境が無い。カリキュラムについても、工夫が必要と思われる。スピーチなどを取り入れる。

#### [4]卒業研究についてお尋ねします。

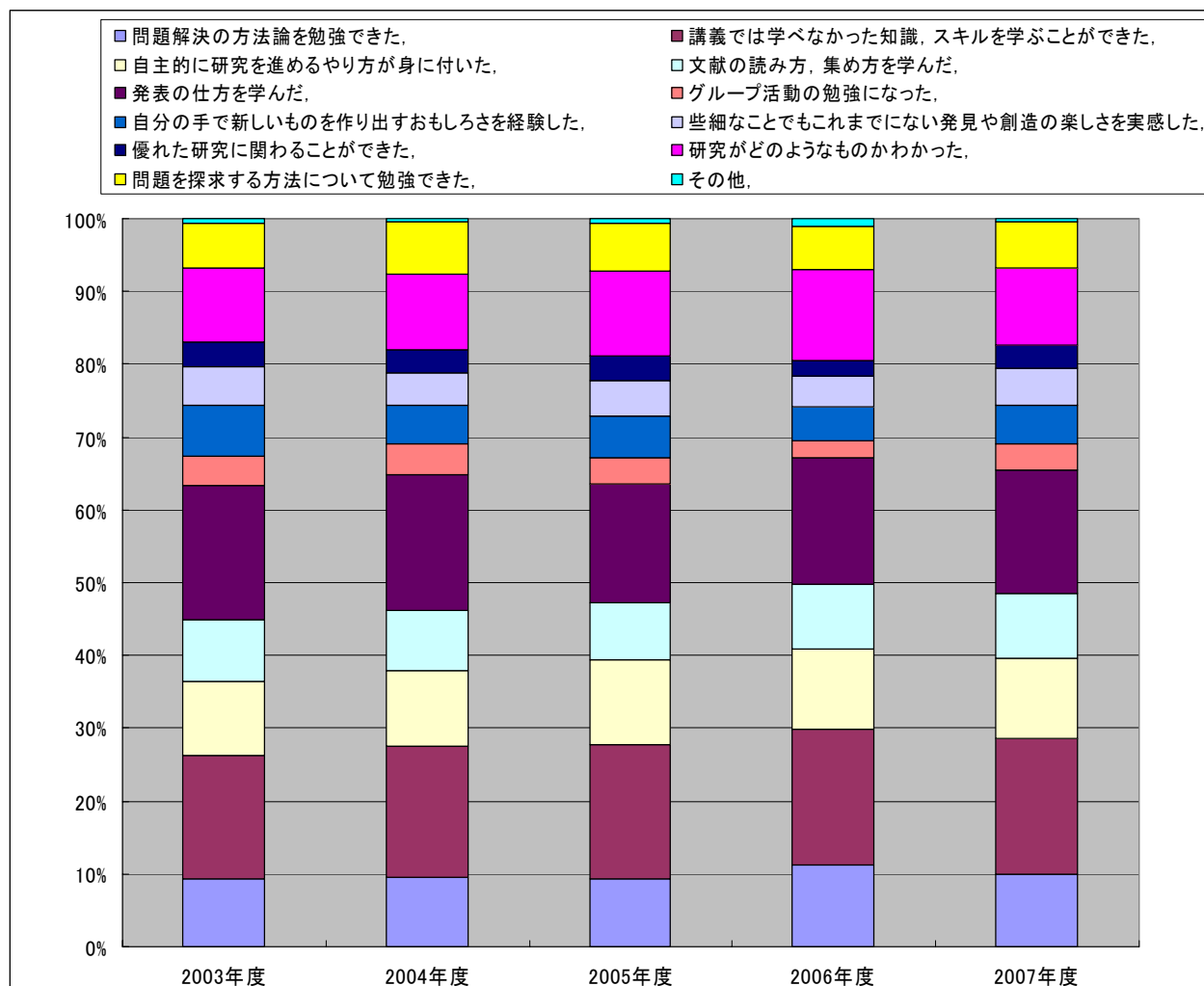
##### [4-1]卒業研究の意義はあると思いますか。

卒業研究の意義について「大いにある」「ある」との答えの割合の合計は、昨年90%をやや下回ったが、今年は90%を越え、卒業研究の重要度の意義が保たれていると判断でき、今後もこの水準が維持されることが重要である。



[4-2][4-1]でA（大いにある）またはB（少しある）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

卒業研究の意義について「大いにある」「ある」との答えた理由については、問題解決方法、講義では学べない事項、発表の仕方など多面的な回答となっており、理由は複合的なものであり、それこそが卒業研究が意義深い理由であると判断され、工学部における卒業研究を通して学ぶことの重大さを、今後も認識しておくべきと考えられる。



L (その他) [具体的に： ]

- ・ 成人としてのマナー
- ・ 問題について考えることを経験した。
- ・ この大学でしかできない研究ができた。
- ・ 研究に携わることで自分自身の生活スタイルがひきしまった。
- ・ パソコン技術の発達。
- ・ 根性がついた。
- ・ 研究の大変さ
- ・ 高い志をもった人たちと一年間過ごせたこと。

[4-3] [4-1]で卒業研究の意義がD (あまりない) またはE (ほとんどない) と答えた方：その理由は何ですか。

卒業研究の意義について、小数ながら「ない」との答えた理由については、必ずしも自分の思い通りのテーマや手法でない場合等にそう答えたようであるが、そのようなことを回避する対応がどこまで現実的に可能か、吟味事項である。

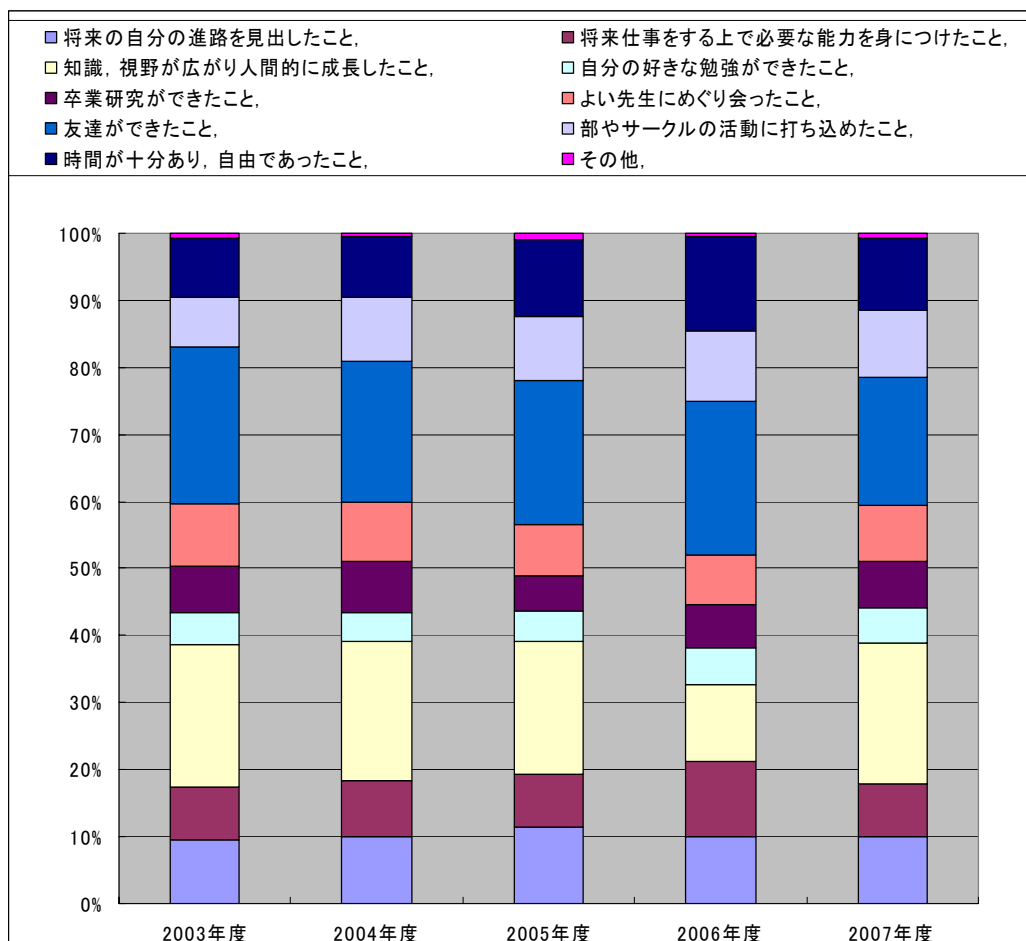
A [具体的に： ]

- ・ 最新でないため
- ・ 希望する研究室ではなかったから。モチベーションを上げる為に、学部3年のときに論文発表の場に出席するべきだったと思う。じゃないといくら配属されても興味がわかない！！
- ・ 一部の研究室以外はほとんどコピーだから

- ・ 人生に関係ない
- ・ 特に時間がかかりすぎて、他の資格習得に差しかえがあるため。
- ・ 学部卒の場合あまり意味がない。
- ・ 自分のやりたい研究テーマを選びたいから。

[5]大学生生活を振り返って、どのようなことがよかったですか。(複数回答可)

今年も、これまでの傾向と同様の傾向で、知識や視野の広がり、友人が出来たことなどを中心として、多面的にバランスのある回答となっており、健全な回答分布であるように思われる。



J (その他)[具体的に: ]

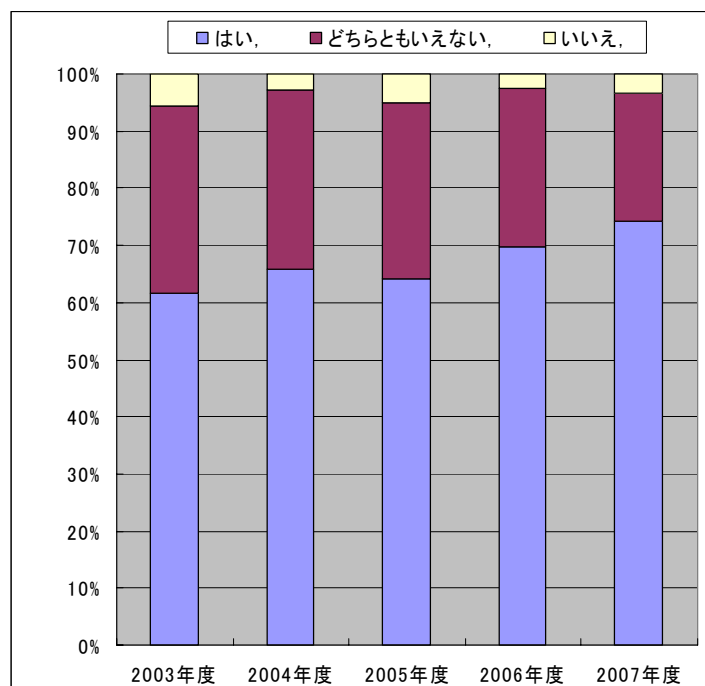
- ・ いくつかの失敗を経験したこと
- ・ 自分の良い所、悪い所を見つめることができた。
- ・ アルバイトで甘えた性格を治して、初対面の人でもコミュニケーションができるようになった。
- ・ 九工大は他大学と比べて大変ですが、授業をこなしつつ、空いている少ない時間で自分のやりたいことができた。具体的には、バイトでためたお金で、普通自動車と普通自動二輪と大型自動二輪の免許をとることができた。そして今現在大型バイクを買って乗っています。
- ・ 寮生活
- ・ 特になし
- ・ 自分を見つめ直すことができた

[6]入学した学科についてお尋ねします。

[6-1]現在の学科に入学してよかったですか。



入学した学科については、良かったと思わない者の割合は今年も含め、例年数%と非常に低く、第一希望で入学していない場合でも、充分納得のいく学生生活を送ることが出来ていることを示していると判断できる。



[6-2][6-1]でC(いいえ)と答えた方：その理由は何ですか。

入学した学科については、良かったと思わない理由は、向いていないと思っていたとか異なっていたとか、個人的な経緯による場合が多いようである。

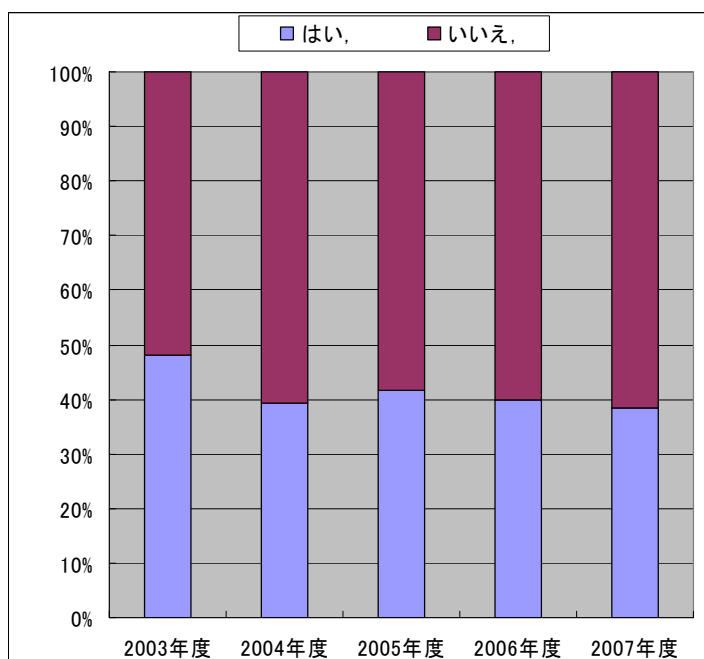
A[具体的に： ]

- ・ 実際に機械を扱うことがほとんどなく、紙面上の知識しか得られず、実感が得られなかったため。
- ・ 自分に向いていないと思った。ついていけなかった。
- ・ いい友達ができただから
- ・ 色々なことに興味を持ちはじめた。
- ・ 自分が理系でないことを実感したから
- ・ 入学時に第2志望は適当に書いて願書を出したが、そこに受かっており、浪人しようか入学しようか相当迷った。けど今になって考えるとどこに行こうが同じだったと思う。
- ・ 電気工学科は就職の幅が広く、どこの企業でも必要とされると思うからです。
- ・ 電気は幅が広く、専門的なのはあまり勉強できない
- ・ 進路が変わったため
- ・ 他の学科に興味があるため
- ・ 面白くないため。
- ・ 拘束時間が長い。他学科も興味があった。
- ・ 思ってたところとちがっていた。工学らしいことをしてないかんじです。
- ・ 自分が勉強したかったことと違っていた。思っていたものとまったくちがっていた。

[7]入学時の目標の達成についてお尋ねします。

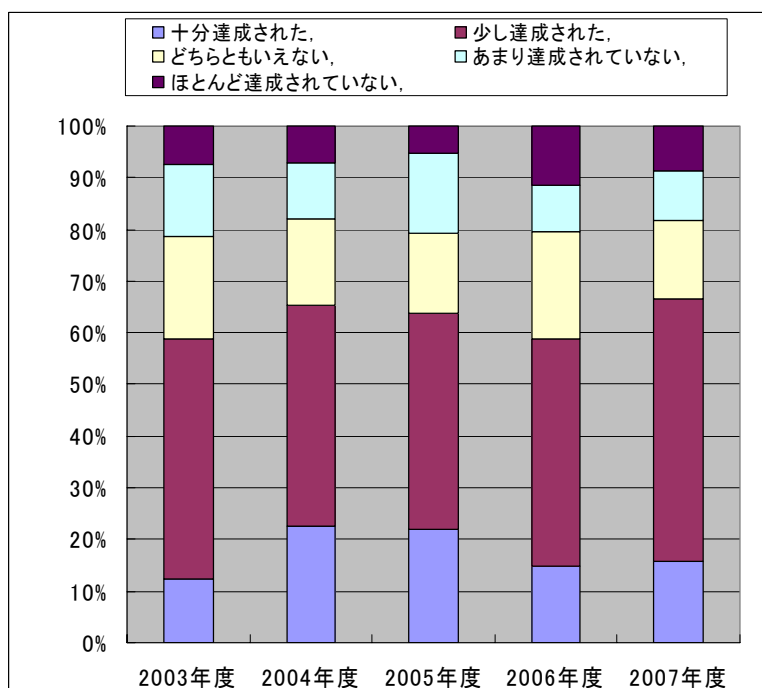
[7-1]あなたは入学の時に大学で達成したい目標がありましたか。

入学時に目標を持たずにいる者が約60%で過去ほとんど変化がない。目標の程度、意味が個人個人で異なることもあり、この数字をどう判断するかは社会状況などにも及ぶ分析も必要となろう。



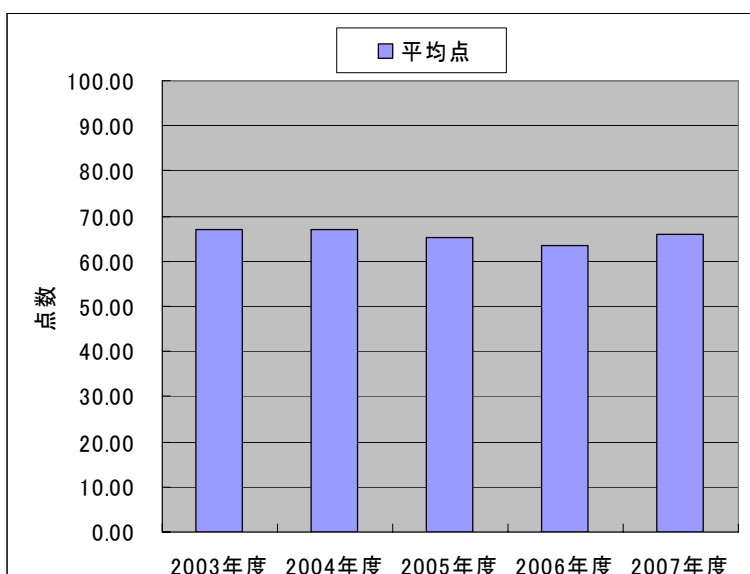
[7-2][7-1]でA(はい)と答えた方、それは現在どの程度達成されていますか。

目標のレベルにもよるが、今回は達成されたと感じている者の割合が2/3程度で昨年度より増えていることから、改善効果がうかがえるが、「十分」の割合が増えることが望まれる。



[8]在学中の学生生活の満足度に対して100点満点で点を付けるとすれば何点と思いますか。

今回の満足度のポイントは66点で例年と大差ない。この数値は目標が高いと低く出ることになるので一概に言えないが、概ね健全な数値と判断される。

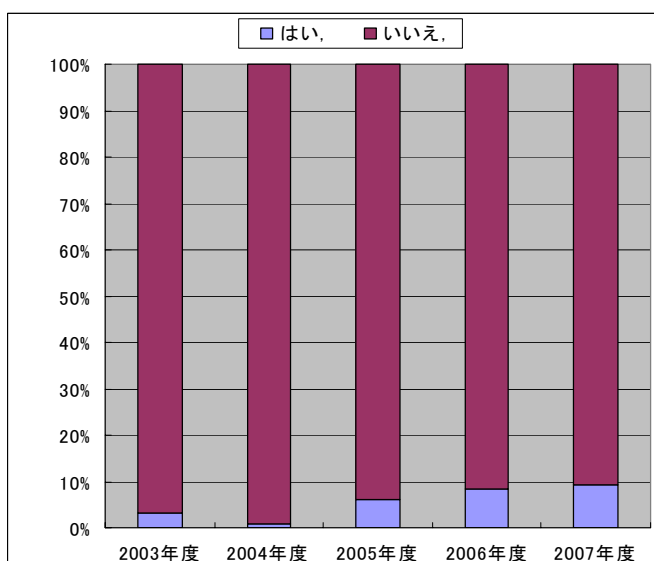


[9]卒業により取得予定の資格についてお答え下さい。

(本学の教育目標に適合しない資格(自動車免許等)は除外します。)

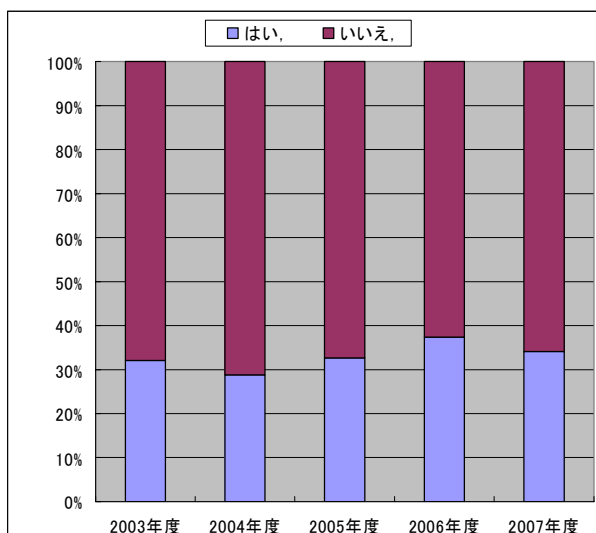
[9-1]あなたは教員免許取得を目標としていましたか。

昨年に続き、教員免許の取得の希望者が微増した。このような学生がいることは認識しておくべきであるが、実際に教員をどの程度目指していた等についての情報の収集も今後、必要となるかも知れない。



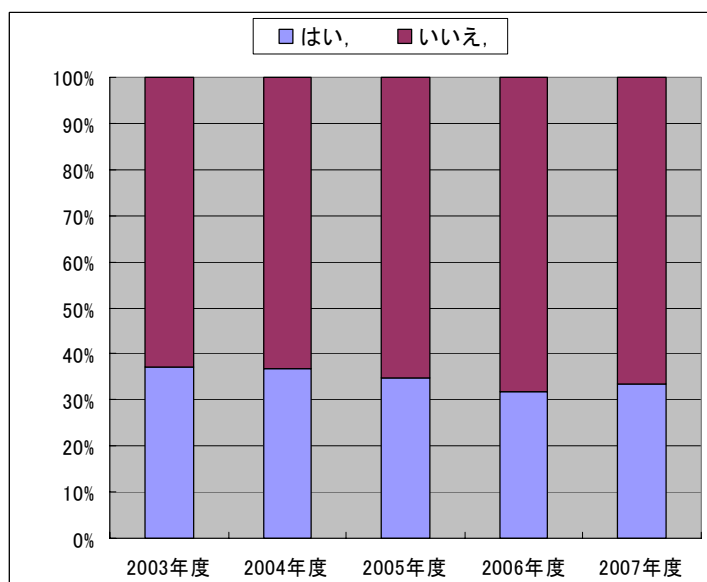
[9-2]教員免許(数学)が可能でしたら、あなたは取得を希望しましたか。

今回もこれまでと同じく、30%余りで推移しているが、希望の程度についての情報も必要かと思われる。



[9-3]あなたは卒業後資格（教員免許を除く）を取得する予定ですか。

卒業後資格の予定については、「はい」の割合が今回も例年と変化がそれほどない。



[9-4][9-3]でA（はい）と答えた方：どのような資格を取得する予定ですか。

卒業生は種々の資格を何らかの情報で意識しているが、具体的な正式名称で無いものも多く見受けられ、漠然と周りからの情報として取得の必要性を聞かされていると判断される。

A [具体的に： ]

- ・ 危険物取扱者。
- ・ 技術系，仕事に必要な資格
- ・ 工業系の資格
- ・ 未だ漠然としているが，英語通訳（士）の資格が欲しい。
- ・ 基本情報，語学，インターネット関連。
- ・ 技術系
- ・ 上級システムアドミニストレーター
- ・ S E 関連

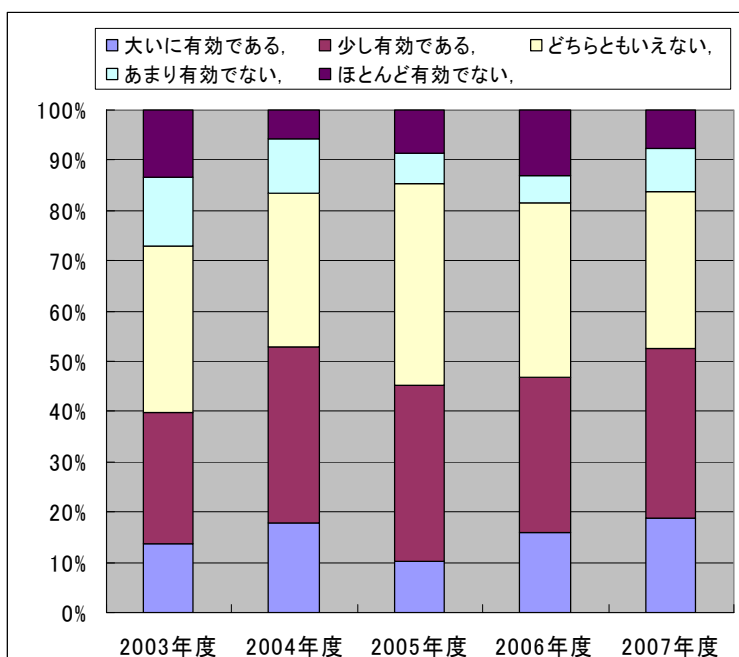
- ・ 自分に必要なもの
- ・ 危険物取扱
- ・ 機械分野
- ・ 基本情報技術者，甲種危険物
- ・ 技術士
- ・ 大型自動二輪
- ・ 基本情報技術者
- ・ シスアド，基本情報技術者
- ・ 会社が必要といったもの。
- ・ 英検準 1 級
- ・ ソフトウェア開発技術者
- ・ 技術士
- ・ 技術士など
- ・ 技術士及び技術士補
- ・ 技術士
- ・ 測量士補
- ・ 技術士（建設部門）
- ・ 技術士など
- ・ 測量士補，技術士，土木施行管理技士
- ・ 二級建築施工管理技士。
- ・ 技術士
- ・ 技術 補
- ・ 技術士
- ・ I Tスキル全般
- ・ 技術士，コンクリート診断士
- ・ 建築士，技術士
- ・ 基本情報技術者，システムエンジニアに関係のある資格
- ・ 技術士補，技術士
- ・ 1 級土木施工管理
- ・ 技術士，一級建築士，コンクリート技師
- ・ 一級建築士
- ・ 技術士
- ・ 技術士。
- ・ 技術士，施工管理技士
- ・ 技術士，ビオトープ管理士
- ・ 建築士
- ・ 具体的には考えていないけど，余裕があれば取得したい。
- ・ 電気主任技術者
- ・ 職種で必要であると思ったものを取る。
- ・ 未定。
- ・ 一陸無
- ・ 電気主任技術者試験（第 3 種），ソフトウェア開発技術者等。
- ・ 電検
- ・ 電験
- ・ 基本情報技術者
- ・ 基本情報処理，T O E I C などに代表される上級資格を取得していきたい。
- ・ まだ決まっていないうちにとりあえずは何か
- ・ 仕事に役に立つ資格。
- ・ 情報処理技術者
- ・ 第三種電気主任技術者
- ・ 電験 3 種
- ・ 電気主任技術者第一種。
- ・ 電験
- ・ T O E I C ，電験等

- ・ 電験
- ・ 電験
- ・ 電検 3 種
- ・ 電気主任技術者
- ・ 電気主任技術者検定
- ・ わからない
- ・ 情報。
- ・ 電気工事士 1 種，電気主任技術者 2 種。
- ・ 電気主任技術者，TOEIC，ファイナンシャルプランナー
- ・ 電気工事士
- ・ 電気主任技術者第一種。
- ・ シスアド
- ・ 電検
- ・ 電検
- ・ 電気技術系，パソコン系。
- ・ 秘密
- ・ 電験 3 種
- ・ 基本情報技術者
- ・ 基本情報技術者。
- ・ 具体的には未定
- ・ 陸上無線資格
- ・ 第 1 級陸上無線技術士，TOEIC
- ・ 電検
- ・ 基本情報
- ・ 電検
- ・ 未定。
- ・ 電気主任技術者
- ・ TOEIC など
- ・ 情報処理技術者
- ・ 第一級陸上特殊無線技士
- ・ 無線技師
- ・ 第 1 級無線，電気通信主任技術者
- ・ 無線なんちゃら
- ・ 基本情報技術者
- ・ 電気主任技術者，技術士，
- ・ TOEIC
- ・ 電気主任技術者 2 種
- ・ 甲種危険物取扱い責任者
- ・ 1．ファイナンシャルプランナー 2．行政書士 3．TOEIC 990，TOEFL 点 4．マイクロソフトオフィススペシャリスト（エクセル・ワード） 5．シスアド上級 6．基本情報技術者 7．マウス検定 8．MBA 9．漢検 1 級 10．数検 1 級 11．作文検 1 2．英検 1 級 1 3．国連英検特 A 級 1 4．調理士免許 1 5．医師免許 1 6．薬剤師免許 1 7．空手赤帯以上
- ・ 危険物取扱者，TOEIC。
- ・ 公害防止管理者
- ・ 危険物取扱い資格
- ・ 危険物
- ・ 危険物取扱
- ・ 危険物取扱。
- ・ 危険物取扱
- ・ TOEIC
- ・ 危険物取扱
- ・ 仕事に必要な資格
- ・ 危険物甲種
- ・ ボイラー技師
- ・ 技術士

- ・ 模策中
- ・ いろいろ
- ・ 技術者に必要な資格
- ・ 危険物等。
- ・ 危険物乙類 4 種
- ・ 危険物等
- ・ 危険物。

[9-5][9-3]でA（はい）と答えた方：大学の授業は資格取得に有効ですか。

資格取得に大学の授業が有効かどうかについては、今年も含め、半数以上の者が有効であると感じている。そうでない者は、授業が資格試験に直接関係しない場合などに有効性を感じないからとも想像され、授業に資格取得を意識した内容を盛り込むかは別途に判断することも必要になるかもしれない。



[9-6][9-5]でD（あまり有効でない）またはE（ほとんど有効でない）と答えた方：その理由は何ですか。

大学の講義と資格取得のための勉強は違う、資格取得に直接関連する内容が少ない、自分が目指す方向と違うので関心がないとの回答が見受けられる。以下に卒業生の回答を示す。

A [具体的に： ]

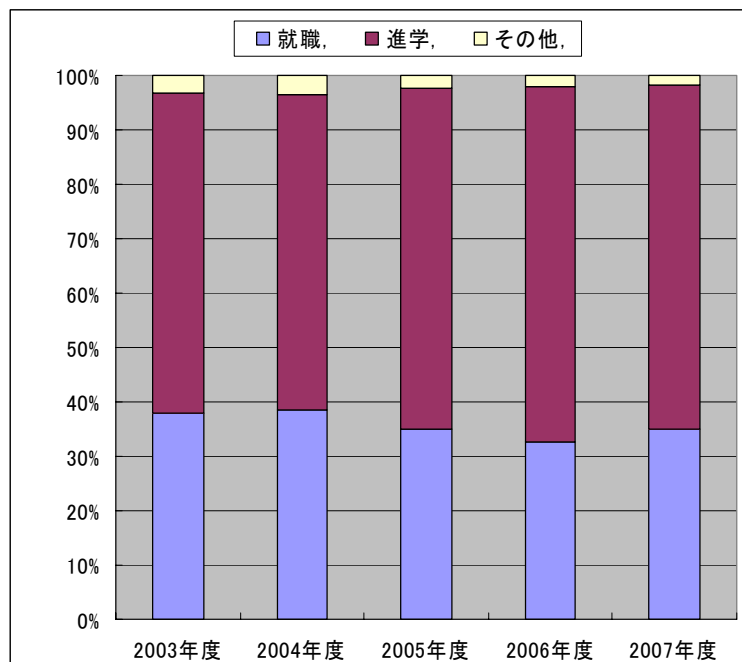
- ・ 本大学の英語学習は明らかにレベルが低い。文法、単語等、あらゆる面においてまだ高校の方が高い。技術英語の授業も受けたが、たしかに難度は上がっていたが、それだけで、大学側からの英語（英会話）学習への積極的な姿勢が感じられない。
- ・ 大学の講義とは本質的に違う。
- ・ 授業で資格を取れるようにしないと無理
- ・ 資格を取る集中講義などがあっていいのでは
- ・ 関係ないから
- ・ 専門が機械なのに情報の資格を望むから。
- ・ 有効である理由がないから
- ・ 大学の授業を受けるだけでは資格を取得することはないから
- ・ 今までに有効であったと思えた場面がなかったため。
- ・ 講義が主で、実習が少ないため。
- ・ 専攻と別の業界を目指すため

- ・ 資格のほとんどは実務内容も範囲に入る。そこの授業が階無。テストに絞り込んだ勉強法でもあったのでどのみち一から復習する。
- ・ 専門とは違ってくる。
- ・ 資格取得に必要な知識をあまりおしえてもらわなかったから。
- ・ 勉強にならないから。
- ・ 自分が工学系の就職を希望しないので、
- ・ 期末テスト，単位のための勉強になっている部分が大
- ・ 授業は知識の使い方を学ぶためのものであって資格取得するために作られてないから
- ・ 内容がほとんど違う。
- ・ 大学は学問をする所なので資格取得に有効か否かはどうでもよい，というかそこにこだわってほしくない
- ・ あまり関係ないから
- ・ 取得できる資格が少ない。工業大学なのにかかわらず。
- ・ 資格取得に関係があるのかを教えてもらえないので資格取得する気にならないから

[10]卒業後の進路についてお尋ねします。

[10-1]あなたは卒業後就職しますか，進学しますか。

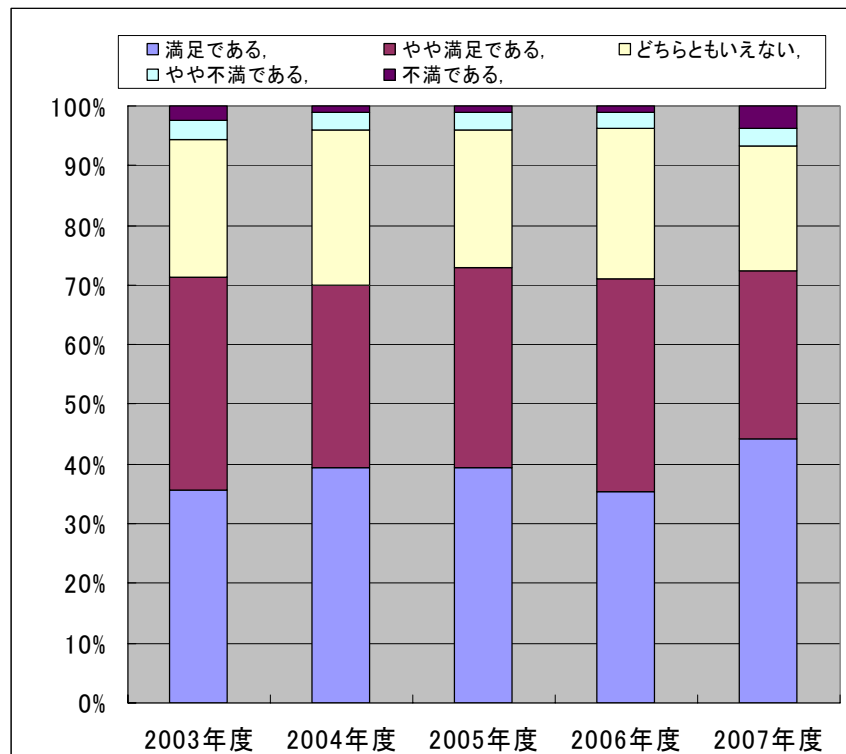
進学する卒業生が2003年度に60%弱であり，2004年度もほぼ同じであるが，2005年度から2007年度にかけては60%強となり，学部生の進学率はやや増加している。



[10-2]あなたは卒業後の進路に満足していますか。

2003年度から2007年度の傾向を見る。「満足である」と「やや満足である」が70%以上の高い水準にあり，しかも，その割合が増加傾向にある。





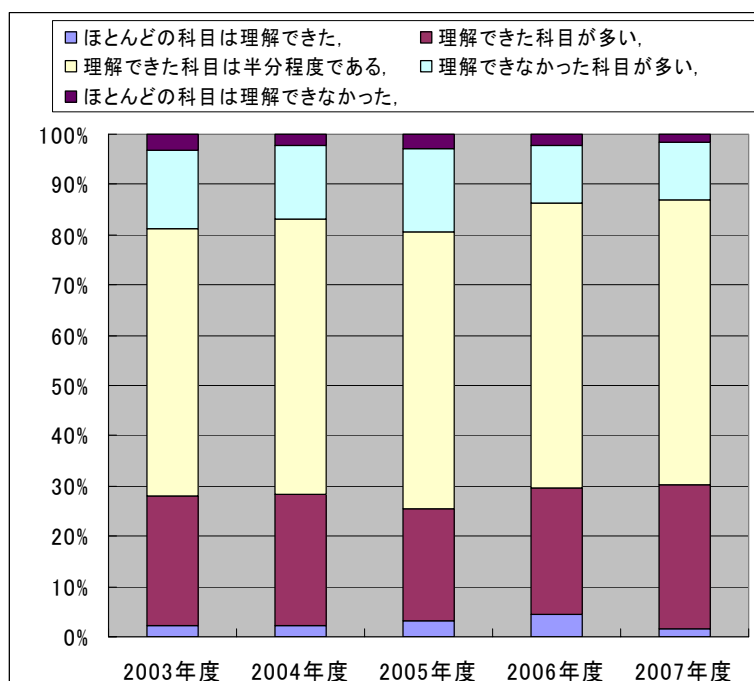
[10-3][10-2]でD（やや不満である）またはE（不満である）と答えた方：その理由は何ですか。

卒業後の進路を安易に決めたことへの後悔、自分の希望通りにいかなかったことへの不満をあげた卒業生が比較的多かった。

- ・ 学校推薦でしか会社を受けることが出来ず、結果がどうであれ妥協せざるをえなかった為。
- ・ 自分に向いていないと思ったから
- ・ 希望の研究室に行けないこと。
- ・ 進路が希望どおりではない
- ・ 研究室がまったくもって興味がない分野であるため
- ・ 希望どおりならなかったため
- ・ 金銭的問題
- ・ 就職すればよかった
- ・ 就職すればよかった。
- ・ 疲れてしまった
- ・ 希望通りいかなかったから
- ・ 就職に失敗したから
- ・ 研究内容が難しい
- ・ 就職がうまくいかなかったため
- ・ 院に行きたい
- ・ 年齢が災いしてほとんど推薦を受けられなかったです。
- ・ 研究室選びを間違えた
- ・ 就職活動の時の、計画、情報集収が不十分であったこと。
- ・ 改修工事により通常予想される生活ができないから
- ・ 研究室（今のところ）が思っていたところとちがっていて、それで2年間はきつい。
- ・ もう少し企業研究をして、もっと他の企業も見ればよかったと思ったから。
- ・ この先やくにたちそうにない生命体の勉強をしないといけないから

[11]これまでに受講した科目の理解度はどの程度ですか。

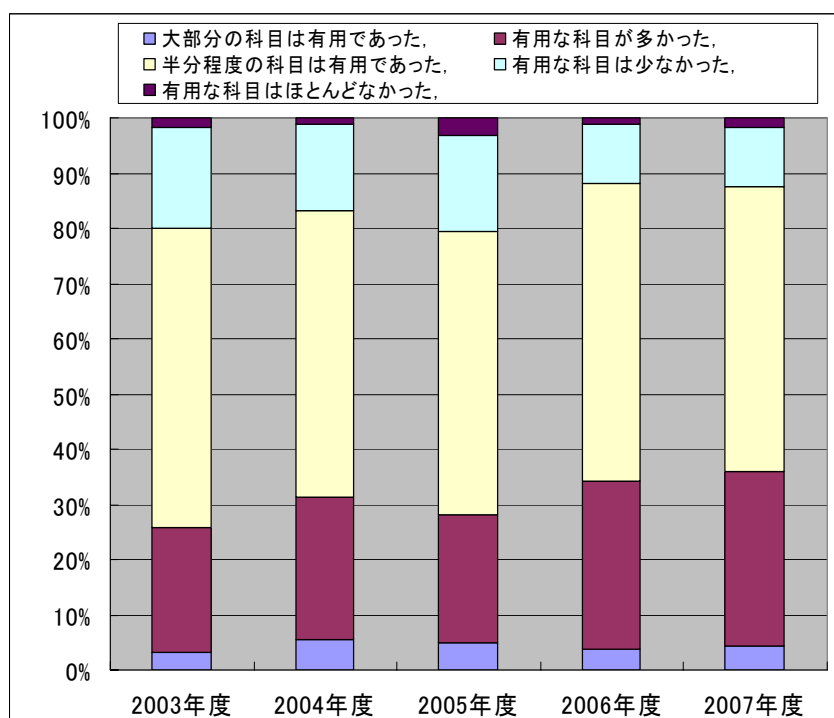
2003年度から2007年度の傾向を見る。「ほとんどの科目は理解できなかった」と「理解できなかった科目が多い」の割合が約20%から減少し、特に、2006年度、2007年度と連続して約13%に減少している。更に、「理解できた科目が多い」と「ほとんどの科目は理解できた」の割合も改善の傾向にある。



[12]履修価値のあった科目の割合についてお尋ねします。

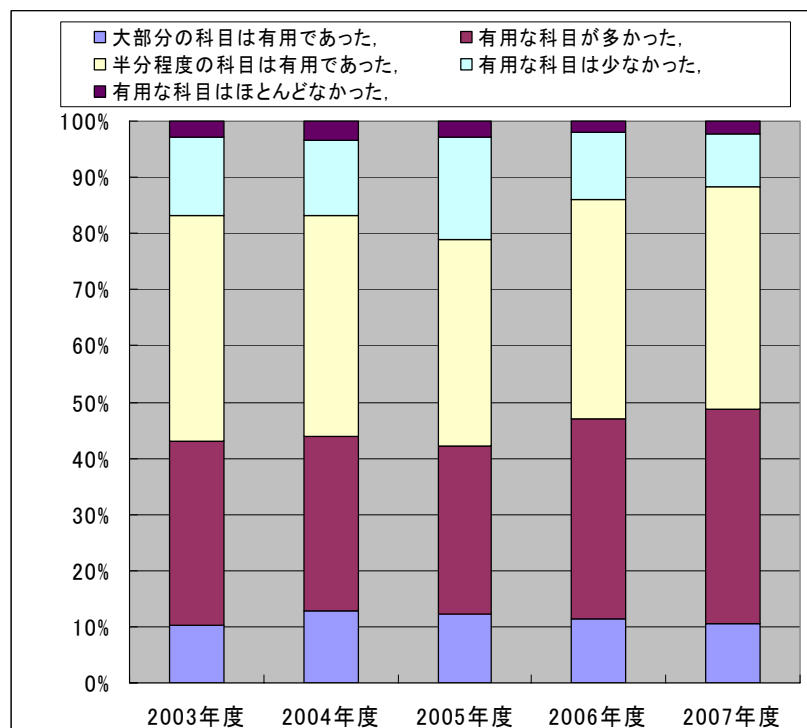
[12-1]受講した講義科目（演習科目を含む）の中で、自分自身の成長のために有用であり、履修価値があった科目の割合はどの程度ですか。

2003年度から2007年度の傾向を見る。「有用な科目はほとんどなかった」と「有用な科目は少なかった」の割合が20%から減少して、特に、2006年度と2007年度には12%程度に減少している。その一方で、「有用な科目が多かった」と「大部分の科目は有用であった」の割合は26%から35%程度に増加し、改善の傾向にある。



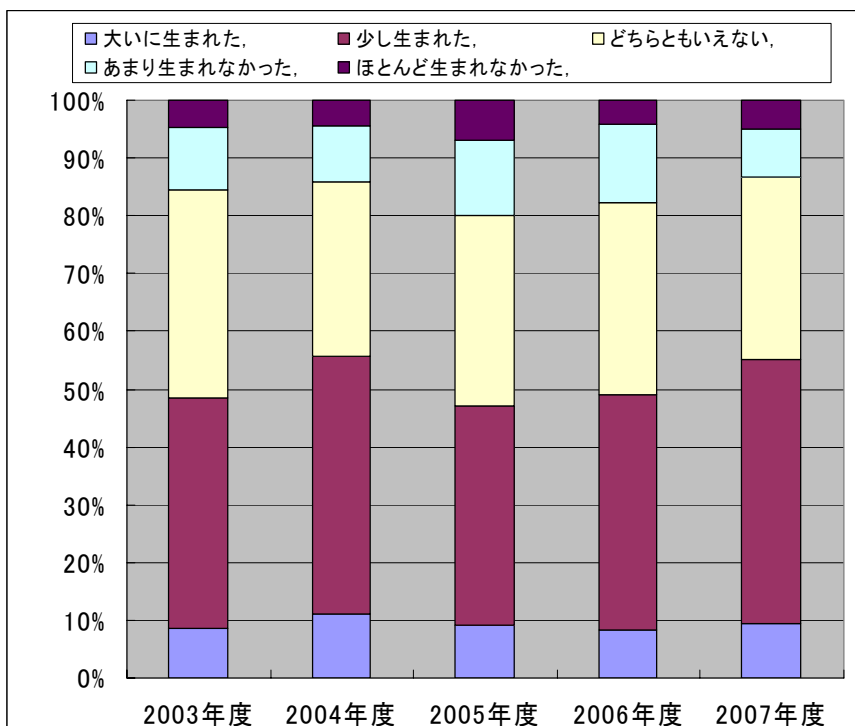
[12-2] 受講した実験・実習科目の中で、自分自身の成長のために有用であり、履修価値があった科目の割合はどの程度ですか。

2003年度から2007年度の傾向を見る。「有用な科目はほとんどなかった」と「有用な科目は少なかった」の割合は17%から減少して、特に、2006年度と2007年度には13%程度に減少している。その一方で、「有用な科目が多かった」と「大部分の科目は有用であった」の割合は43%から48%にやや増加しており、全体として改善の傾向にある。



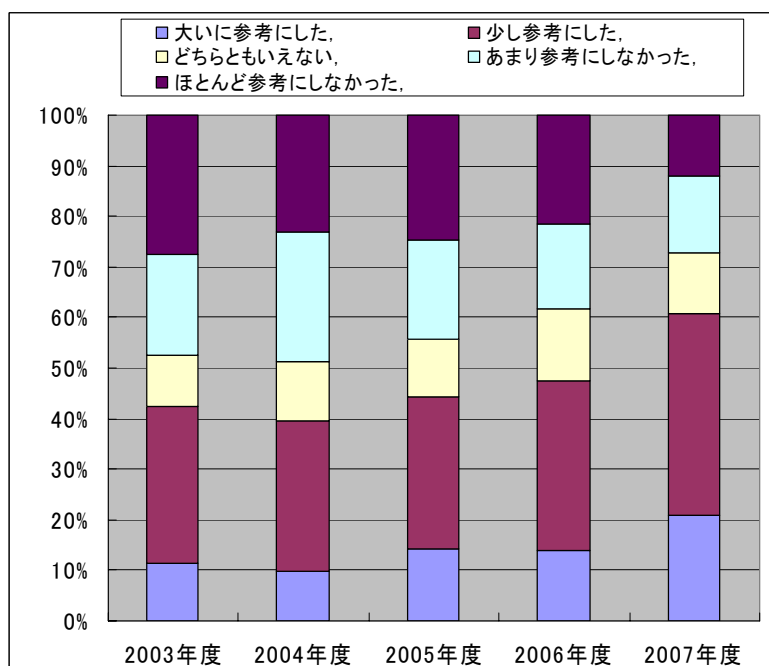
[13] 大学における教育により、将来への自信や意欲が生まれましたか。

2003年度から2007年度の傾向を見る。否定の割合は14%から20%程度で変動し、肯定の割合も47%から56%程度で変動しており、今後の動向を観察する必要がある。しかし、肯定の割合は2005年度から3年連続して増加しており、改善の傾向にある。



[14] 講義科目を選択する際に、シラバスを参考にしましたか。

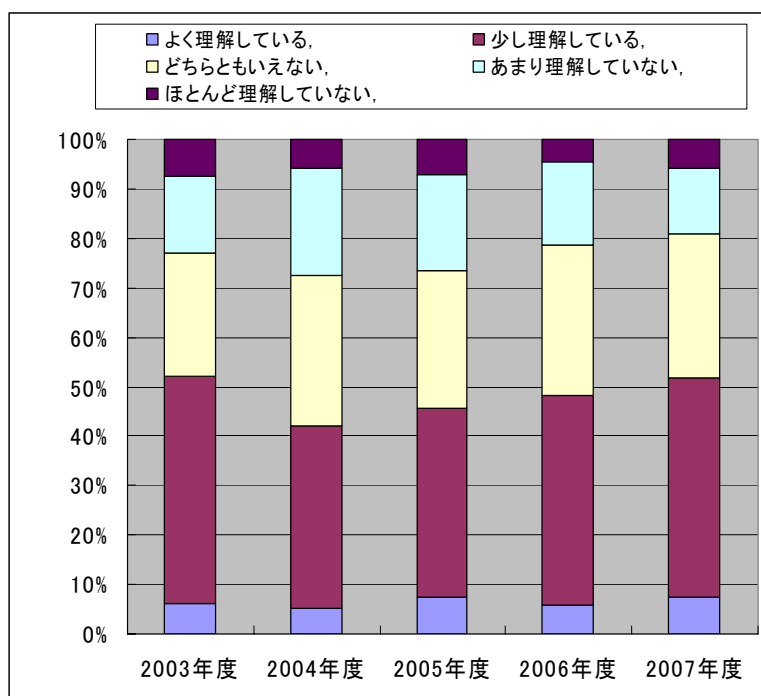
2003年度から2007年度の傾向を見る。「ほとんど参考にしなかった」と「あまり参考にしなかった」という否定の割合が48%から27%と減少し、「少し参考にした」と「大いに参考にした」という肯定の割合が42%から61%へと増加しており、改善されている。



[15] カリキュラムについてお尋ねします。

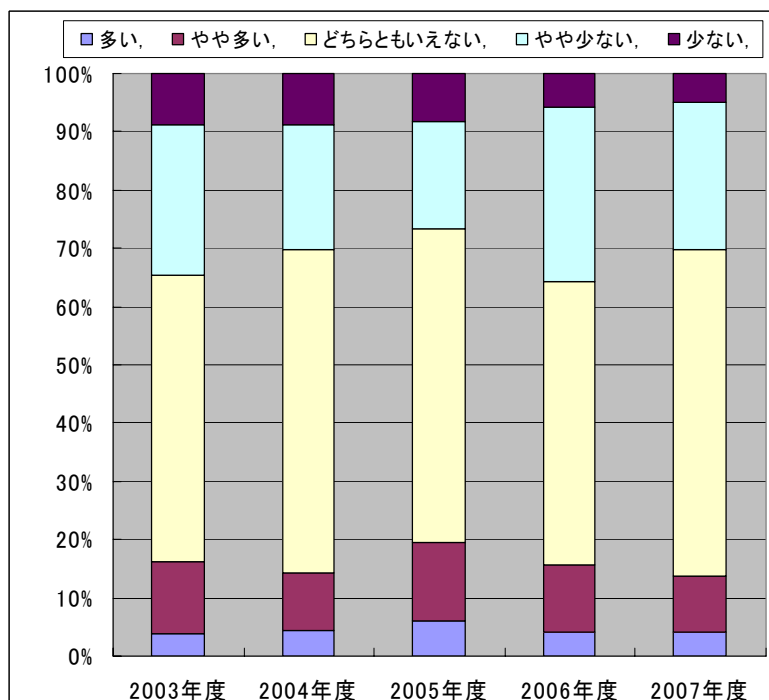
[15-1] カリキュラムの中で、科目間のつながりを理解していますか。

2003年度から2007年度の傾向を見る。2004年度以降、4年連続して、「ほとんど理解していない」と「あまり理解していない」という否定的な回答が28%から19%と減少し、「少し理解している」と「よく理解している」という肯定的な回答が42%から51%に増加しており、改善の傾向にある。



[15-2]カリキュラムの中で、実験・実習科目の比重は多いと感じますか、少ないと感じますか。

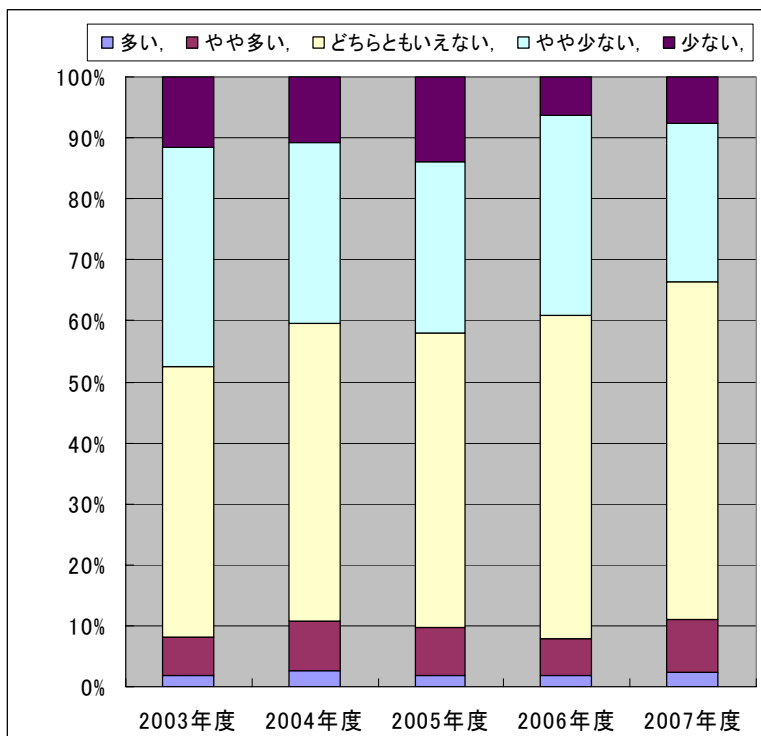
2003年度から2007年度の傾向を見る。「少ない」と「やや少ない」は30%程度、「やや多い」と「多い」も15%程度であり、その割合にあまり変化はない。



[15-3]カリキュラムの中で、演習時間の比重は多いと感じますか、少ないと感じますか。

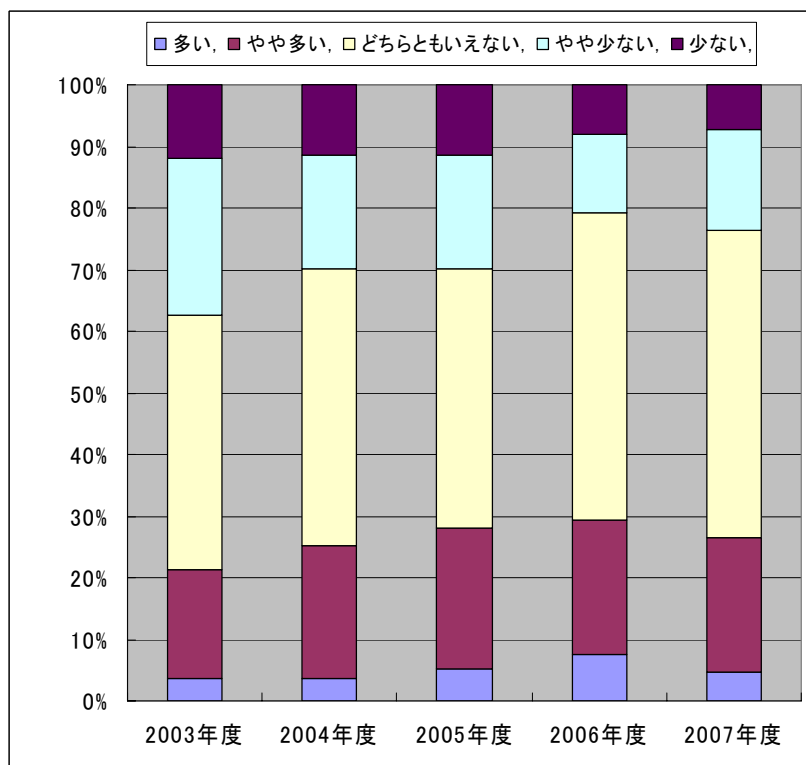
2003年度から2007年度の傾向を見る。「少ない」と「やや少ない」は48%から34%に減少しており、演習

時間の比重が少ないと感じる学生が減少している。



[16] 受講した科目全般について、教育への熱意があった担当教員の割合はどの程度ですか。

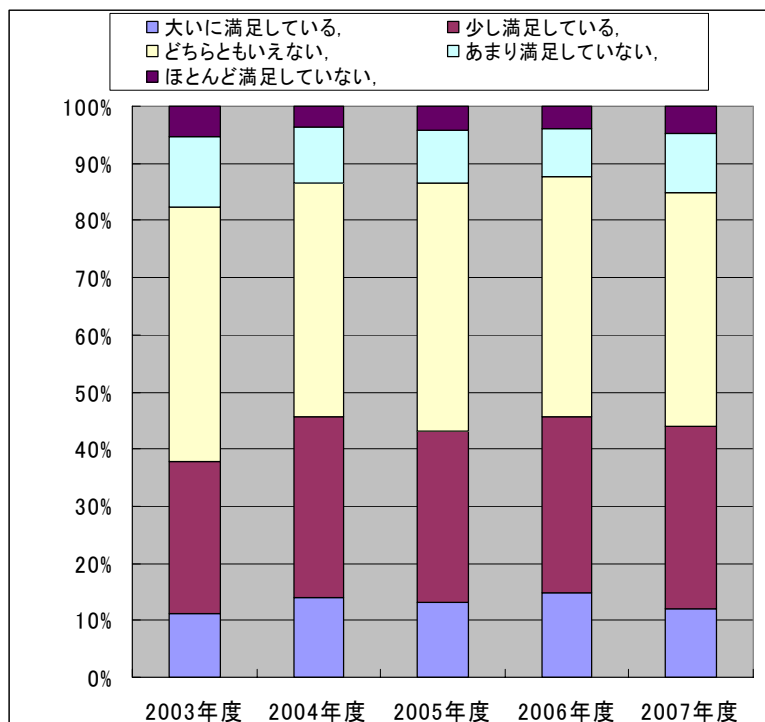
2003年度から2007年度の傾向を見る。2003年度から2006年度では、「多い」と「やや多い」が21%から29%に増加し、「やや少ない」と「少ない」が38%から21%に減少しており、教育の熱意に対する評価が上昇している。2007年度では評価がやや低下したが、前年度までの水準を維持している。



[17] 成績評価についてお尋ねします。

[17-1] 成績評価（秀、優・良・可・不合格・未履修）に満足していますか。

2003年度から2007年度の傾向を見る。2003年度に比べて2004年度以降は、「大いに満足」と「少し満足」は37%から約45%と増加し、「あまり満足していない」と「ほとんど満足していない」は18%から約13%に減少しており、満足度についてやや改善されている。



[17-2][17-1]でD（あまり満足していない）またはE（ほとんど満足していない）と答えた方：その理由は何ですか。

種々の意見が回答されたが、大きく分類すると、成績についての不満足度が強いことの原因として、一方で「自分の努力の不足や結果が伴わない勉強」をあげるものと、「成績評価の手続きの公正さについての疑念」をあげる者がいた。

- ・ もっとがんばればよかった
- ・ 自身の勉強不足で思い描いた成績が取れなかった事。だがこれは仕方ない。不満なのは、その様な私が取れなかった課目をカンニングによって受かっていく人達がいるという事。また、一生懸命勉強して“秀”を取っても、全く勉強することなくカンニングで同じ成績が取れる、という事に腹が立つ。真面目にやっている側としては意欲が失せる。対策といってもあってないようなもので、カンニングを見つけても見て見ぬフリをしている試験官もいた。そんな光景を見て受講をそれ以降やめてしまった事もある。
- ・ 成績がかんばしかなかったから。
- ・ 合否だけでいいのでは
- ・ もっと頑張ればいい成績になったから
- ・ 勉強不足
- ・ 合格すれば何でもいいと思う
- ・ 勉強に時間を費やさなかった。
- ・ 勉強不足
- ・ 成績全般が良くなかった。
- ・ J A B E E ってなんだっー！？
- ・ J A B E E ！？
- ・ 休学した人間に単位出して、普通に出席した人間に単位出さないなどありえない、某教科
- ・ 自分では不合格だと思っていた科目が合格になっていることがあった。もっと評価を厳しくしても良いのでは、と今は思う
- ・ 可が多かったため。
- ・ 基本点取り虫養成所、田舎くさいし役に立つとは思えない。

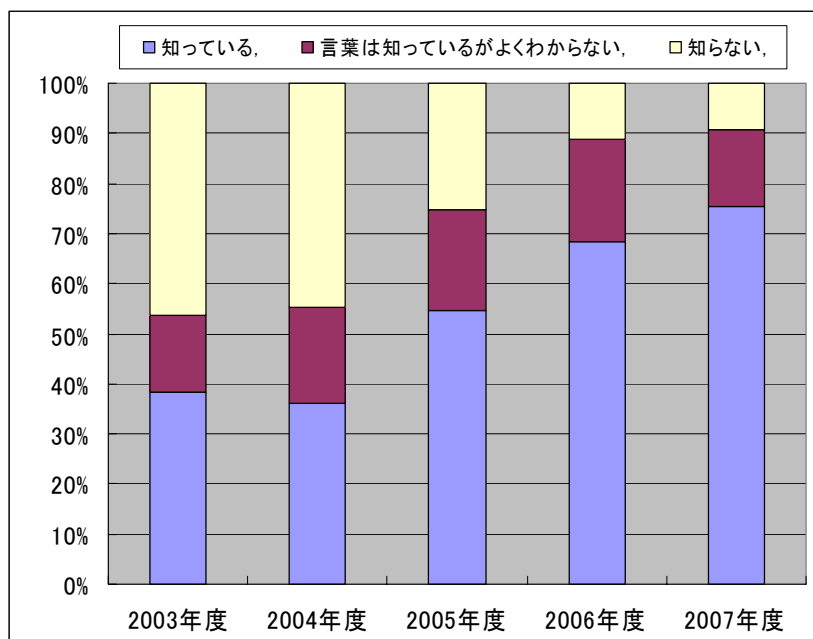
- ・ 1, 2年生の期間は, なまけていたため, 成績が悪いからです。
- ・ がんばり不足
- ・ 良い成績でないから。
- ・ 判断基準がわかりにくい, 教官ごとに異なる
- ・ もうすこし頑張れた
- ・ 勉強が不十分であったため
- ・ 評価方法が不明瞭
- ・ 成績が悪いから
- ・ 自身が勉強を怠っていたから。
- ・ 4段階の評価は少ない, 階層が
- ・ 評価の仕方が人によって違うから
- ・ 教員が割と自己中心的でそんな人がつけた成績であるから
- ・ 再試は可になるため
- ・ 勉強する時間があまりなかった。
- ・ 担当講師によって, 同じ科目でも試験の難易度がちがうから。
- ・ 1つの評価の範囲が広い
- ・ 先生の感情に左右されるから
- ・ あまり良い成績を残せなかった。
- ・ 自分の努力が足りない
- ・ 未履修が多かった
- ・ だって悪いんだもん
- ・ 秀の必要性に疑問
- ・ 不合格, 未履修の定義があいまい
- ・ 自分自身良い成績ばかりでなかったため
- ・ カンニングしたやつらが秀や優を取得しているから
- ・ もう少し勉強しとけばよかった
- ・ 理解するのに十分な教授法でない
- ・ 合格, 不合格または未履修のみにしてほしい
- ・ 再試で優とか出す教員がいた為。本試で可をどうにかとったのに, 再試で優とる人がいたりして理不尽
- ・ 成績が良くないため。
- ・ 多くの勉強時間を費やして試験にのぞんでも, 不合格になったものがあるから
- ・ 先生に成績データを消された。
- ・ 自分の思っていた点数とちがった
- ・ 低いわ!!
- ・ せいせきわるかった
- ・ 勉強した量と比例しなかったから。
- ・ 過去問ばかりに頼りすぎてあまり良い結果が得られなかった。
- ・ もう少し頑張れた気がします
- ・ 勉強してもくれない単位があるから

[18] オフィスアワー (質問・相談時間) についてお尋ねします。

[18-1] オフィスアワーという制度を知っていますか。

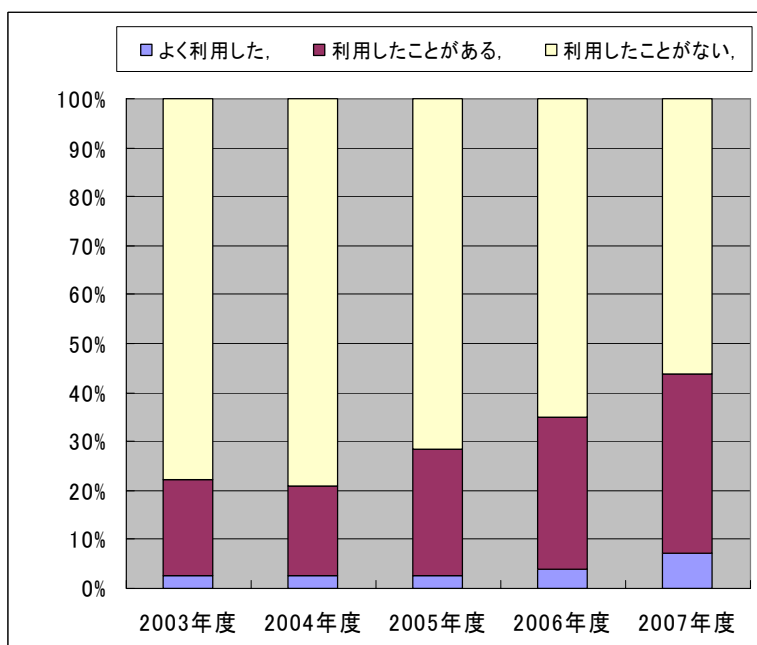
2003年度から2007年度の傾向を見る。2003年度から2007年度にかけて「知っている」は38%から75%に増加し、「知らない」は46%から9%に減少しており、大きく改善されてきている。





[18-2] オフィスアワーを利用して、教員に質問した経験がありますか。

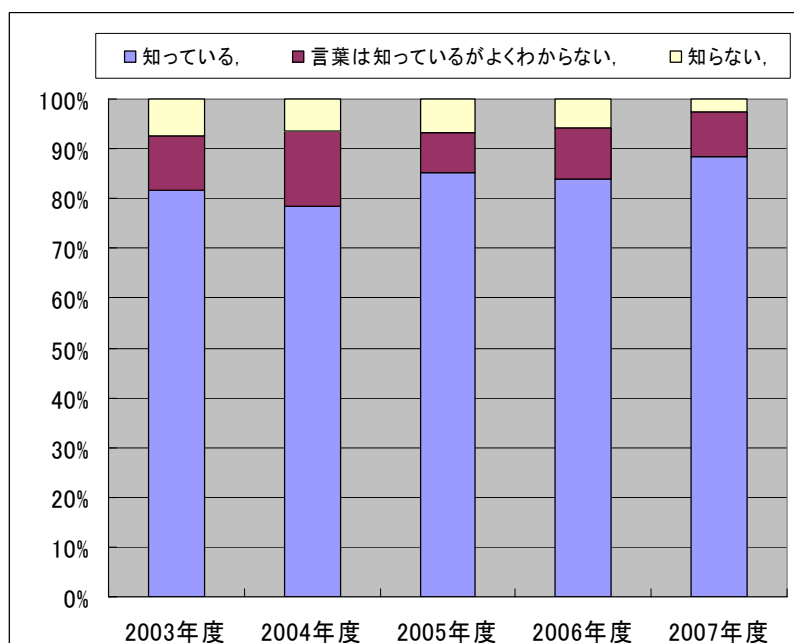
2003年度から2007年度の傾向を見る。「よく利用した」と「利用したことがある」は、22%から43%と大きく増加している。



[19] ティーチングアシスタント (TA) についてお尋ねします。

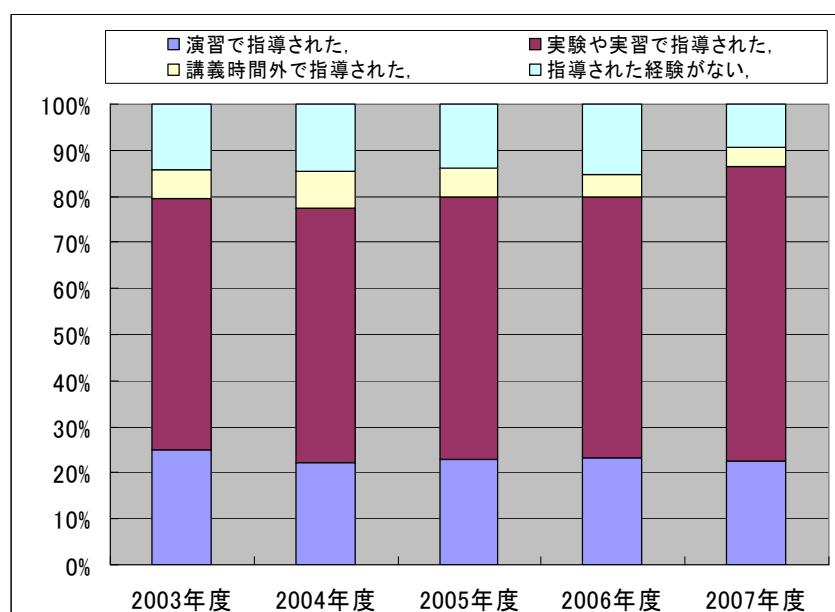
[19-1] ティーチングアシスタント (TA) という制度を知っていますか。

TA制度を「知っている」の割合は、2004年度から徐々に増え、2007年度には88%になっている。制度が定着していると判断される。



[19-2]ティーチングアシスタント（TA）に指導してもらった経験がありますか。（複数回答可）

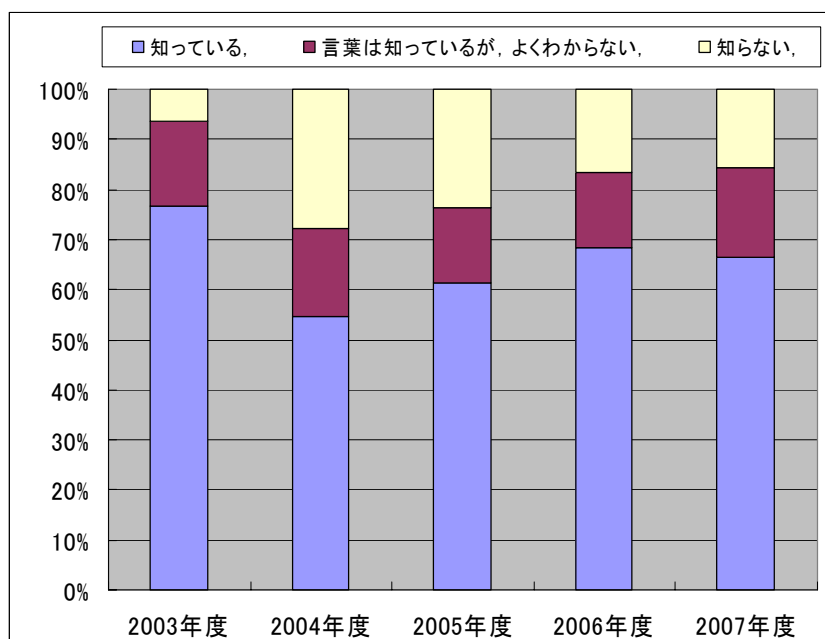
2007年度には、90%が「演習」「実験・実習」「講義時間外」のいずれかの指導を受けた経験があり、制度が定着している。



[20]指導教員制度についてお尋ねします。

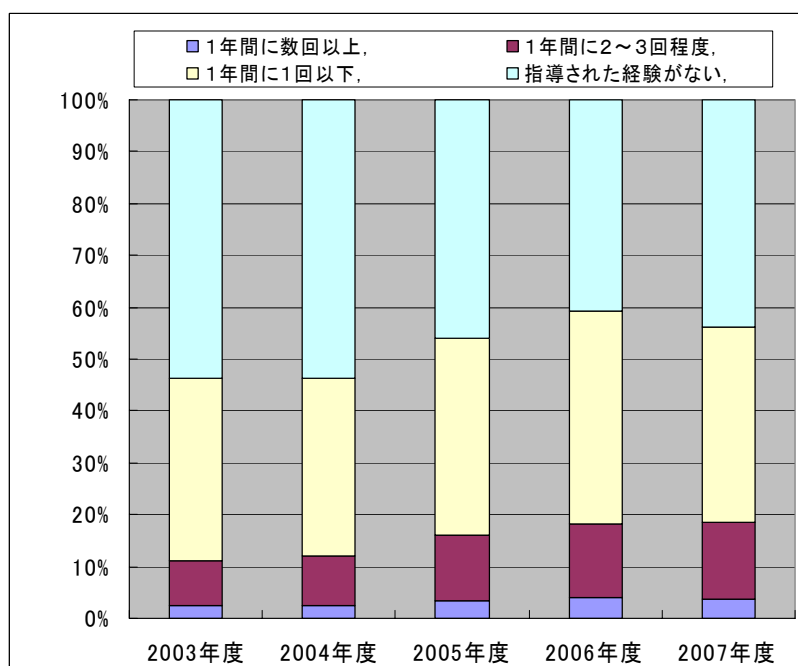
[20-1]指導教員制度を知っていますか。

指導教員制度は、2004年度から2007年度にかけて改善傾向が認められ、67%の学生が知っている。しかし、「知らない」または「言葉は知っているがよくわからない」の割合がまだ34%あることは、制度の周知方法も含めて今後の検討課題である。



[20-2] 1年生から3年生の間に、指導教員から指導やガイダンスを受けた経験がありますか。(受けた経験のある方は、1年間の平均的な回数を答えて下さい。)

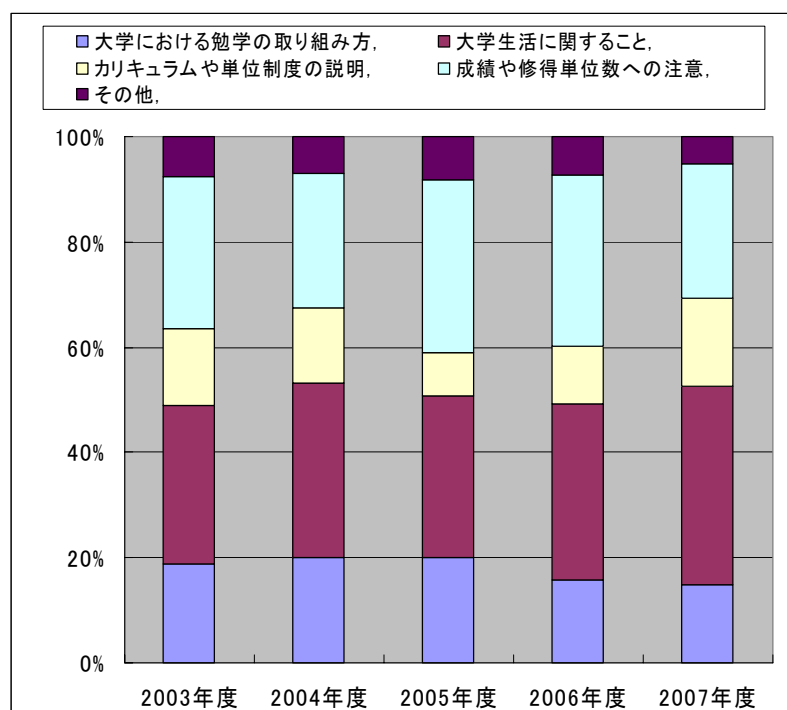
指導された経験が無い割合は着実な減少傾向が認められるが、まだ40%程度もある点は、今後の検討課題である。まず、最初に、その理由を明らかにし、次に、指導教育のあり方に改善が望まれる。



[20-3][20-2]でA(1年間に数回以上)、B(1年間に2~3回程度)、C(1年間に1回以下)のいずれかを答えた方: 1年生から3年生の間に、指導教員から指導を受けた内容を答えて下さい。

(複数回答可)

複数回答であり、勉学の取り組み、生活全般、カリキュラム、単位、成績のいずれも話題になっており、経年変化もほとんどない。



E (その他)[ 具体的に： ]

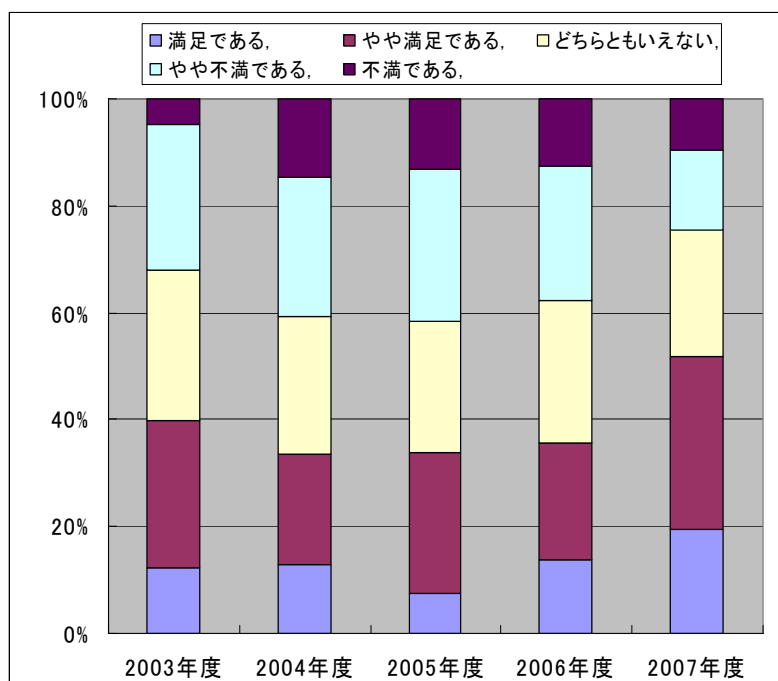
大学生生活、進路変更、就職、進学などについての相談が実施されている点は指導教員制度の趣旨に合致している。

- ・ 質問に答えてもらった。
- ・ わすれた
- ・ 成績表をもらう
- ・ 大学生生活に関する事だったと思うが、4年間で1度しかなかったのでよく覚えていない。もっと頻繁に呼び出して色々指導して欲しかった。
- ・ 進路について
- ・ 就活、進学について。
- ・ 進学大丈夫か?とかいろいろ。
- ・ 就職か進学かの相談
- ・ 転学科
- ・ 忘れた
- ・ コース選択について
- ・ 懇談会など。
- ・ 大学院試験に関する事
- ・ 大学生生活に関する事で困ったことがないかどうか。
- ・ 休学について
- ・ あいさつのみ。

[21]施設や設備等についてお尋ねします。

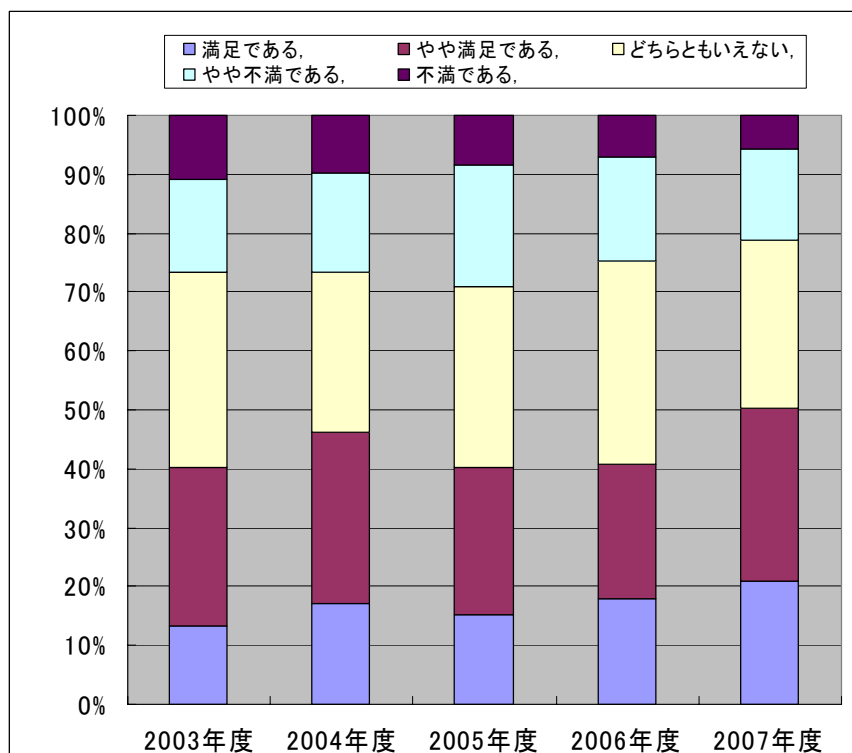
[21-1]教室の広さ、席数、明るさ等について、満足していますか。

2006年度以前は「不満である」と「やや不満である」とする意見が40%程度あったが、2007年度には25%に減少している。その一方で、「満足である」と「やや満足である」が約35%から52%に急増している。学生の満足度が大きく改善されている。



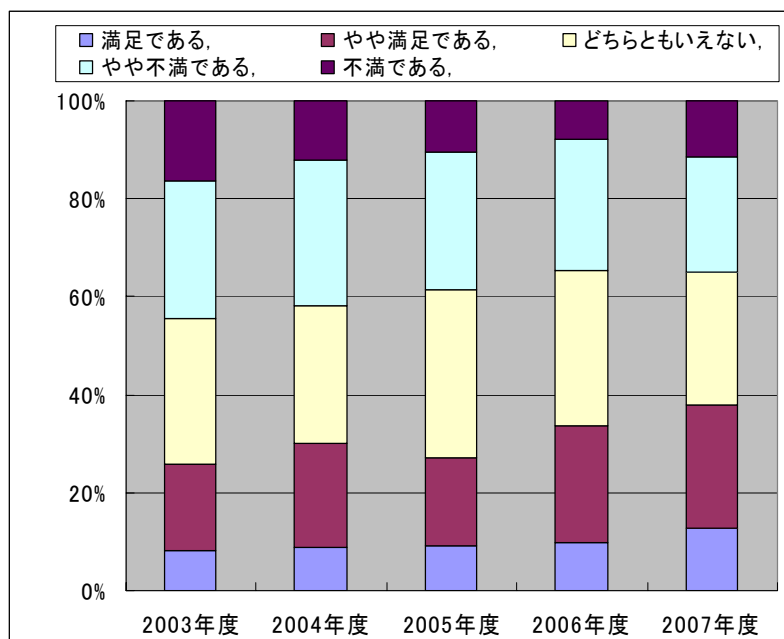
[21-2]必要な設備（マイク，OHP，プロジェクタ等）に満足していますか。

かなり充実してきた感がある。しかしまだ2割が不満となっており，特に，プロジェクターはすべての教室や院生ゼミ室には必要であろう。今後の継続的取り組み改善は続ける必要がある。



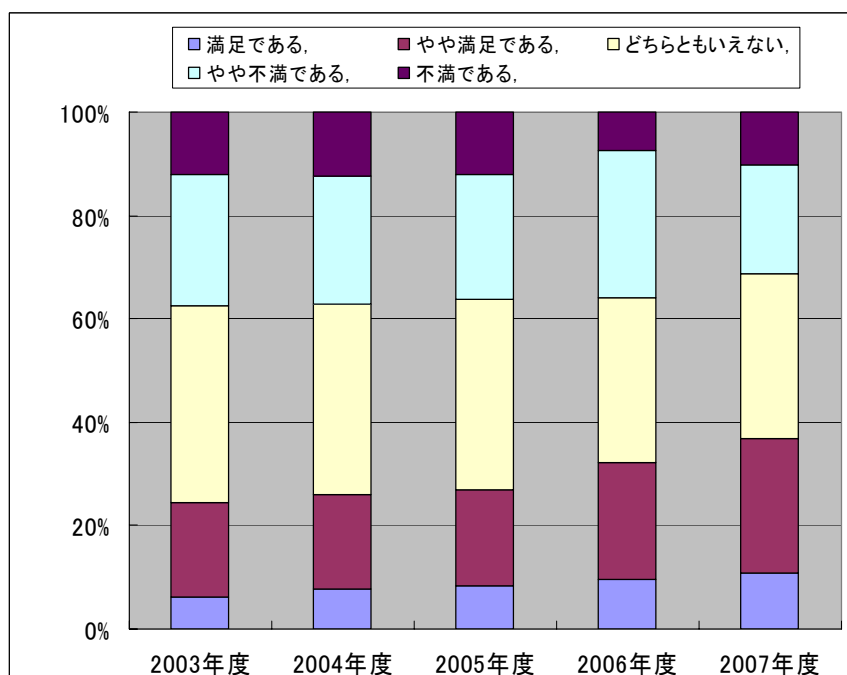
[21-3] 1年生から3年生の間に利用した実験室・実習室の広さ，明るさ等について，満足していますか。

明らかな改善傾向がみられる。建物のリフォーム化，新築化に伴って徐々に改善された結果であろう。いまからも新築・リフォームの際にはこの観点からの設計も考慮にいれると十分であろう。



[21-4] 1年生から3年生の間に利用した実験・実習に必要な設備・装置について、満足していますか。

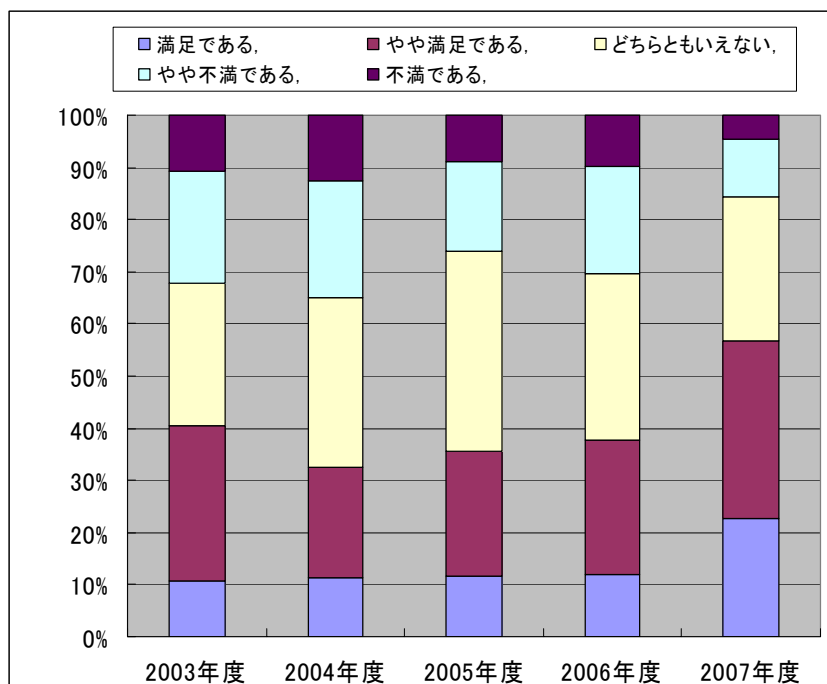
徐々に改善されてはいるが、未だ否定的評価が3割強もあることが問題であり、今後の改善に向けた一層の努力が必要である。



[22]情報機器についてお尋ねします。

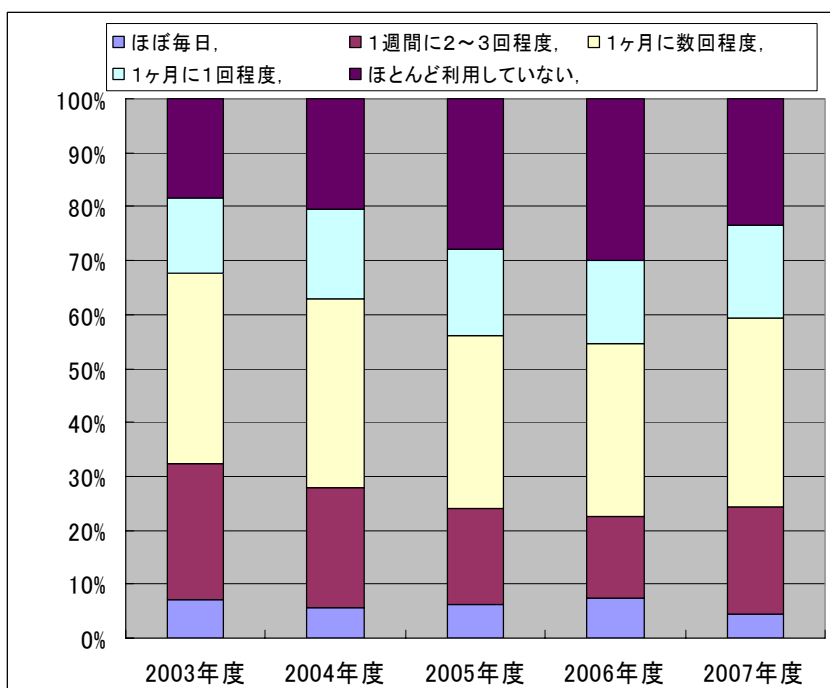
[22-1]情報機器（コンピュータ端末等）の整備状況について満足していますか。

明確に改善傾向がみられるが、不満足とする意見も3割あり、今後の継続した改善に向けた一層の取り組みが必要である。



[22-2] 1年生から3年生の間に、講義以外でネットワークや情報サービス(ソフトウェア,教材を含む)を、どの程度利用しましたか。

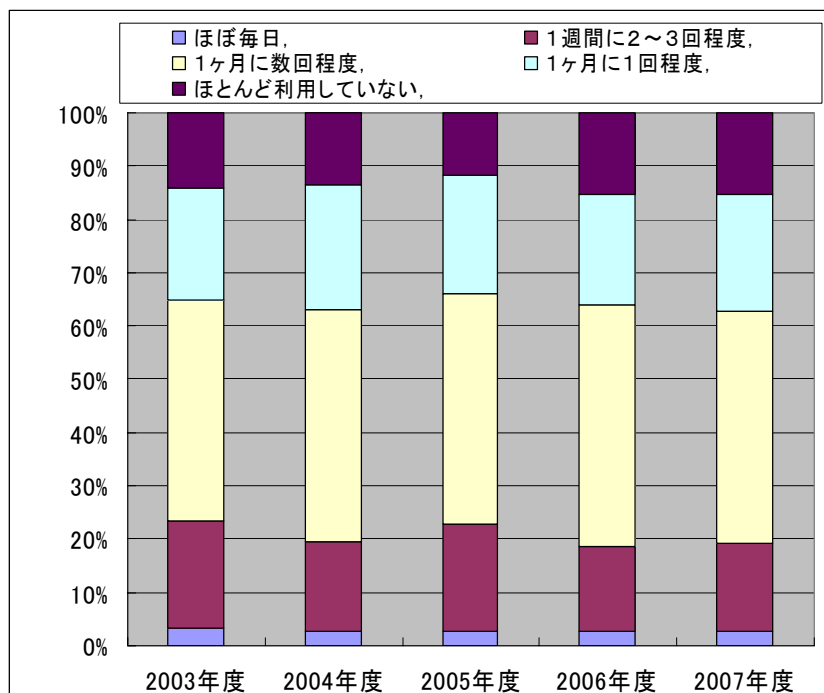
利用頻度はほぼ横ばい状態である。情報ネットへの精通を促す努力をすることが重要である。



[23] 図書館についてお尋ねします。

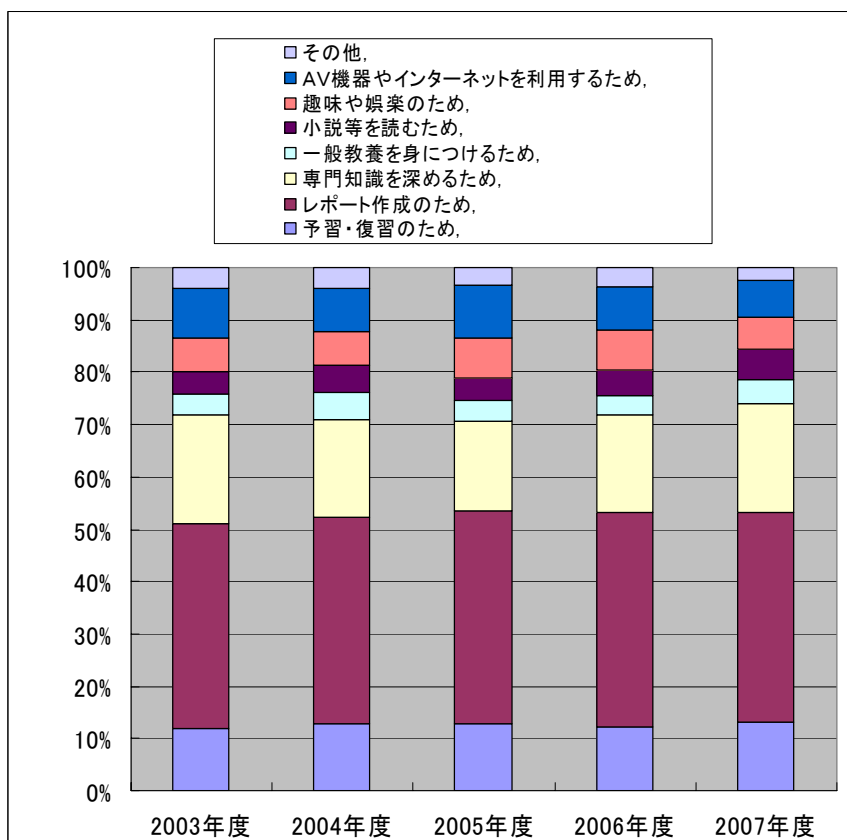
[23-1] 図書館を利用している頻度はどの程度ですか。

利用頻度に大きな差はないが少し改善された感がある。開かれた図書館づくりを一層進めてゆきたい。



[23-2] 図書館を利用する主な理由を教えてください。(複数回答可)

昨年度とほぼ同じである。全体として図書館利用の理由にはこの3年間で大きな変化は見られない。



H (その他) [具体的に: ]

図書館の利用形態については大きな変化は無い。インターネットをさらに利用しやすくと図書館利用者数は増加すると思われる。

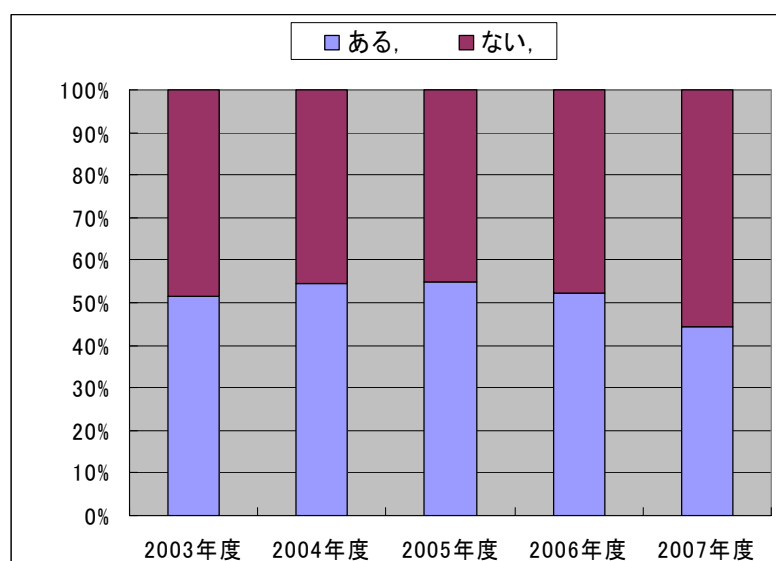


- ・ テスト勉強
- ・ 卒業研究のため
- ・ テスト勉強
- ・ 図書館うるさすぎ！！
- ・ 新聞を読む。
- ・ 研究のため
- ・ 文献収集
- ・ 試験対策
- ・ 新聞を読むため
- ・ テスト勉強
- ・ テスト勉強。
- ・ 試験勉強
- ・ 試験勉強
- ・ テスト勉強
- ・ テスト勉強
- ・ 睡眠するため
- ・ 英字新聞を読むため。

[24]工場見学やインターンシップ（工場実習）についてお尋ねします。

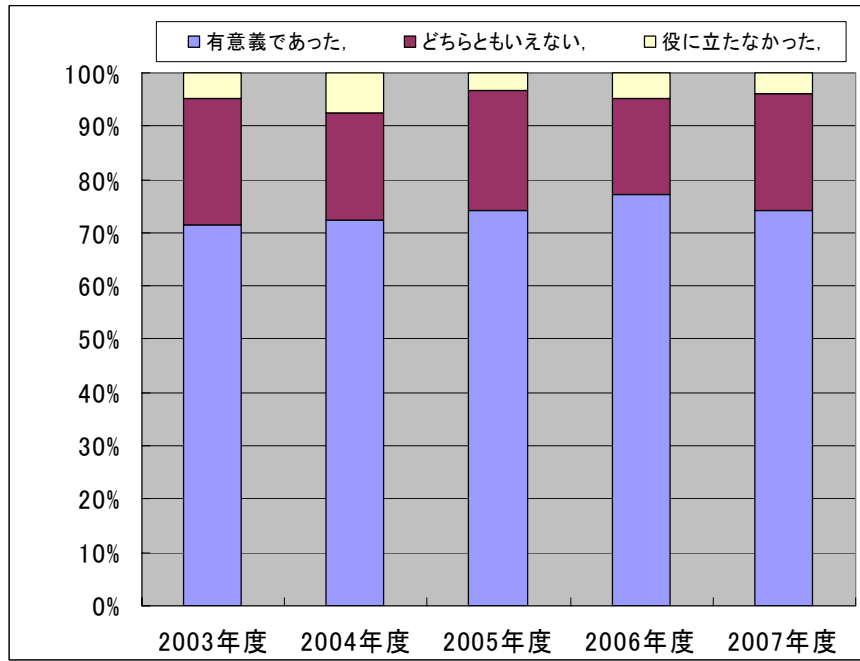
[24-1]工場見学やインターンシップに参加した経験がありますか。

若干の減少傾向にある。半数以上の卒業生は経験しておらず改善へ向けた更なる努力が必要である。



[24-2][24-1]でA（ある）と答えた方。工場見学やインターンシップに参加した経験が、自分自身の成長のために有意義であり、履修した価値がありましたか。

一昨年度とほぼ同じとなっており、ここ5年間の傾向は変わっていないといえる。75%のインターンシップ経験者が有意義と答えており、インターンシップ参加者が増大するよう今後も努力が必要である。



## 2.2 2007年度修了生アンケート（工学研究科）

アンケート実施年月日 平成20年2月13日

アンケート回収率

課程	配付枚数	回収枚数（回答率）
博士前期課程	348枚	272枚（78.2%）
博士後期課程	24枚	6枚（25.0%）

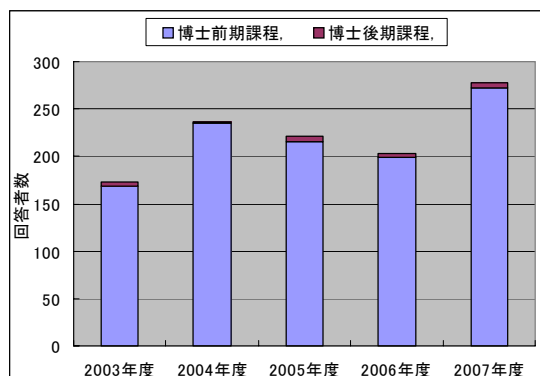
[1]あなたの課程，専攻についてお答え下さい。

[1-1]あなたが修了される課程は何ですか。

昨年度に比べ，博士前期課程も，博士後期課程も大きく回答率が上がっている。これはアンケートの趣旨を理解してもらう努力の結果と思われる。今後もこの結果を保持する努力を続けることが必要であろう。

A（博士前期課程）272名

B（博士後期課程）6名



[1-1] あなたが修了される課程は何ですか

[1-2]あなたが修了される専攻は何ですか。

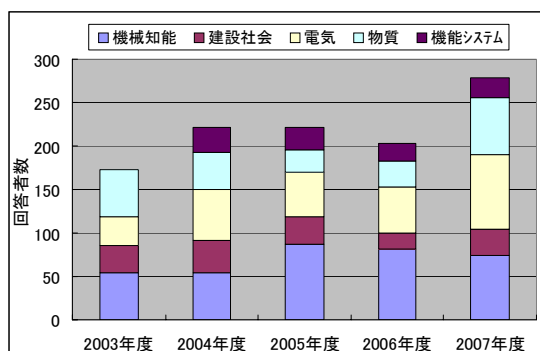
機械知能工学：75名

建設社会工学：30名

電気工学：85名

物質工学：66名

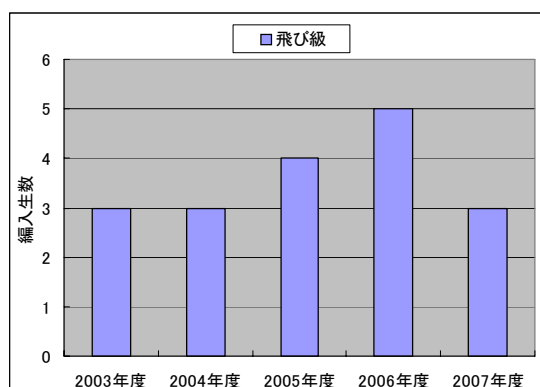
機能システム創成工学：22名



[1-2] あなたが修了される専攻（分野）は何ですか。

[1-3]飛び級入学の方は [ ] に を入れてください。

飛び級の入学者の数は3名で2006年度から2名減少している。

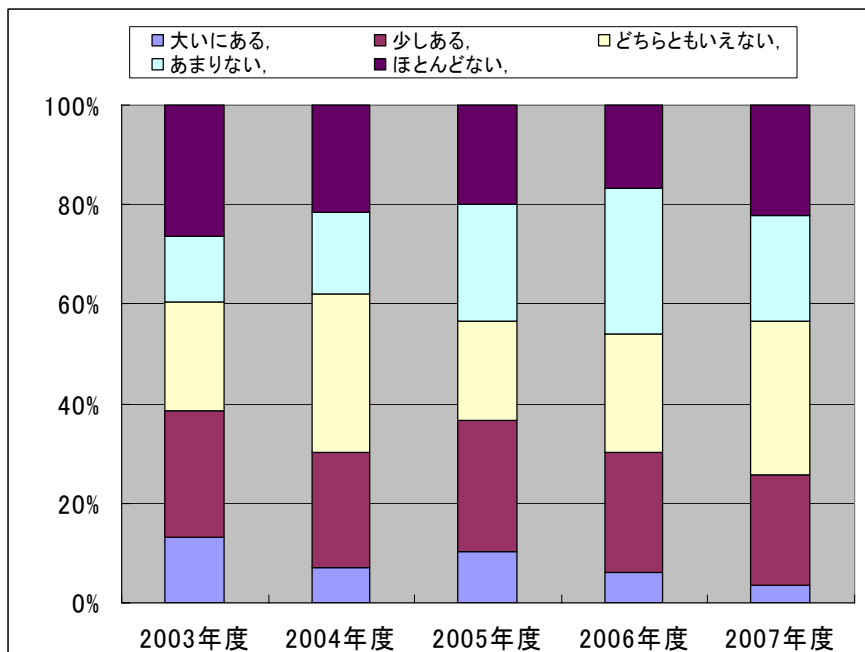


[1-3] 飛び級入学の方

[2]工学研究科における大学院教育があなたの成長（自己形成）に及ぼした効果についてお尋ねします。

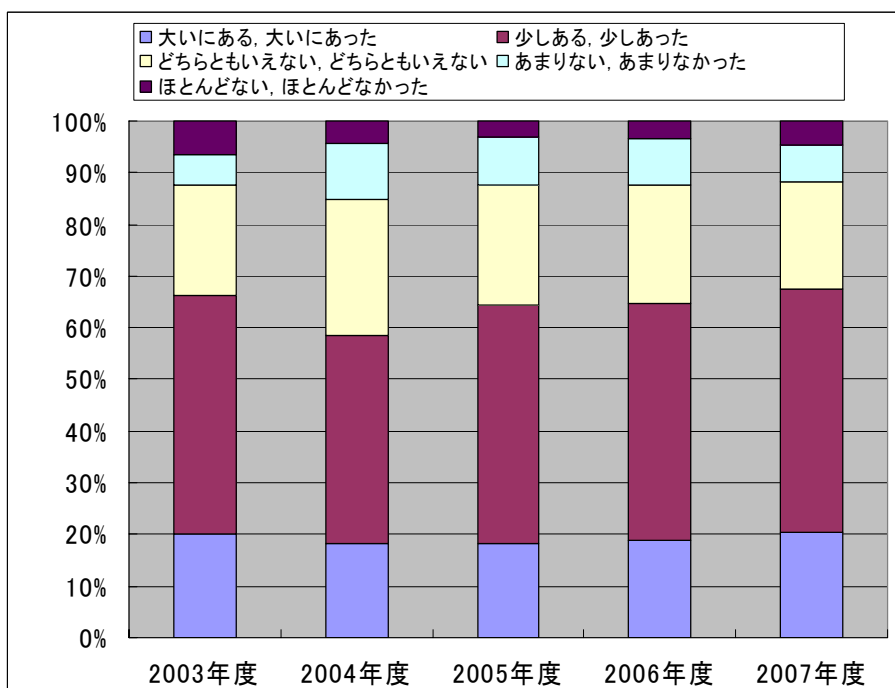
[2-1]外国語科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。（受講生のみ）

「ある程度ある」以上の減少傾向がさらに進み、「どちらともいえない」が大幅に増えている。改善に向けた努力が必要である。



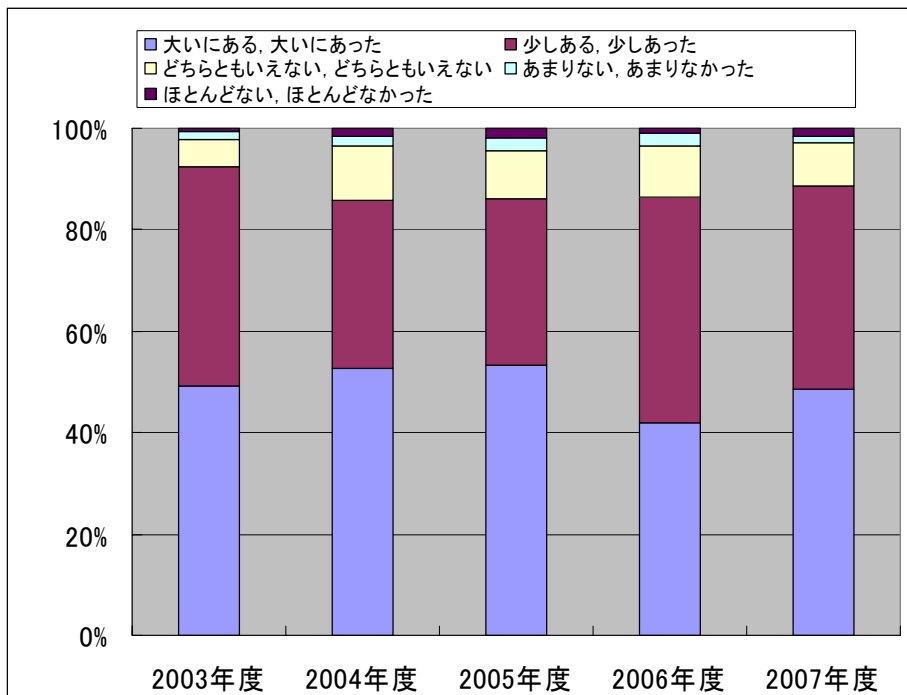
[2-2]共通科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

昨年度と同様の傾向を示し、共通科目の教育効果については、「かなりある」以上が6割以上の水準にあり、一定の効果を果たしていると思われる。しかし、13%程度の修了生は教育効果に対して肯定的な回答をしておらず、さらに改善に向けた努力が必要である。



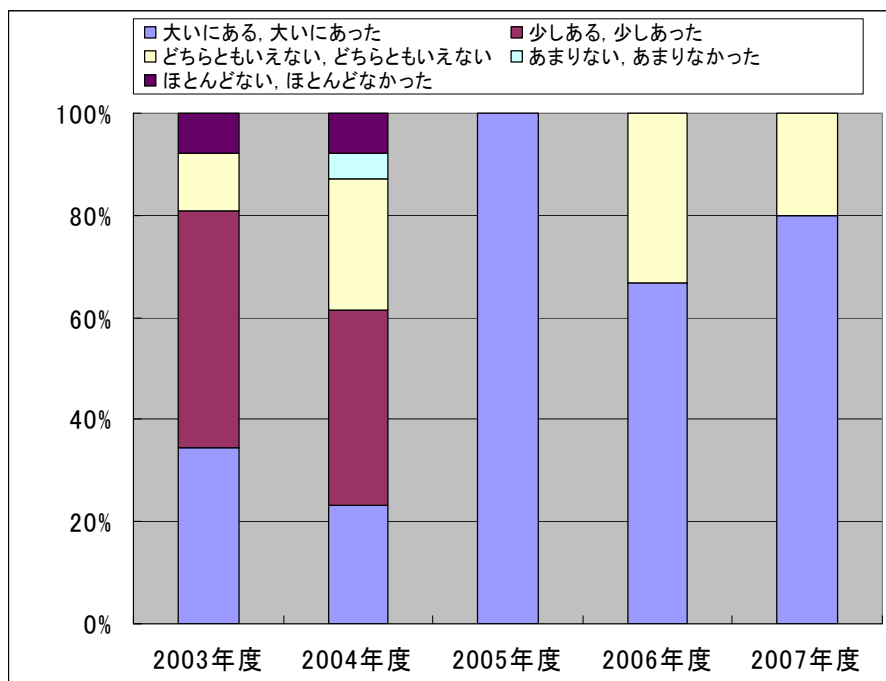
[2-3] 専門科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

安定した推移を示し、ここ5年間は大きな変化はない。専門科目の自己形成に対する高い影響力がうかがえる。この傾向を保持する努力を続けることが重要である。



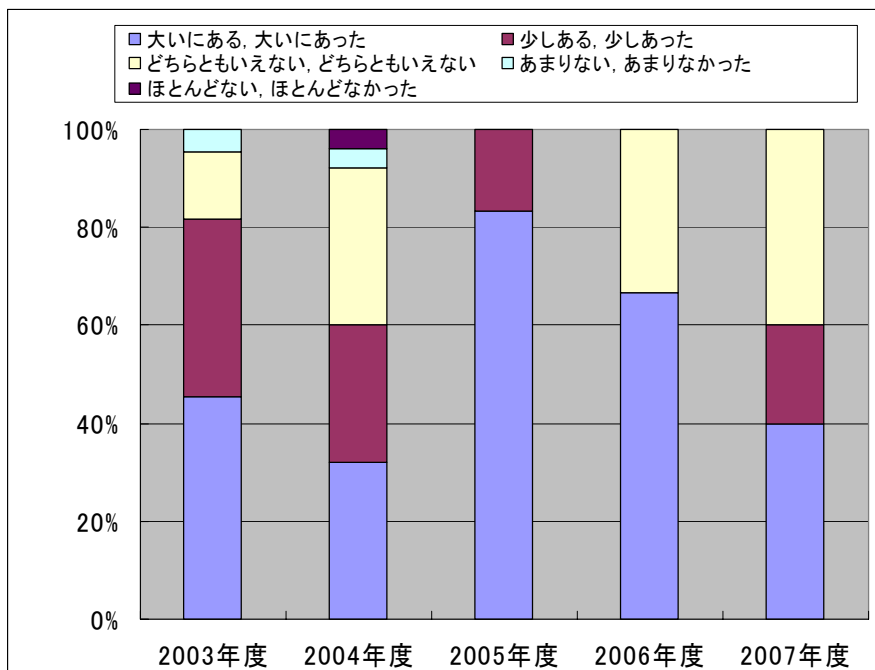
[2-4] 学外研修・特別演習はあなたの自己形成に効果がありましたか。(博士後期課程の方のみ)

博士後期課程の回答者は5名で4名が「大いにある」と回答している。1名が「どちらともいえない」にしているが、これは本人の自己努力によるところもあり一概にアンケート結果から議論すべきではない。本来ならばやはり100%「大いにある」になるべきであろう。事前の心構えなどをトレーニングする必要があるかもしれない。



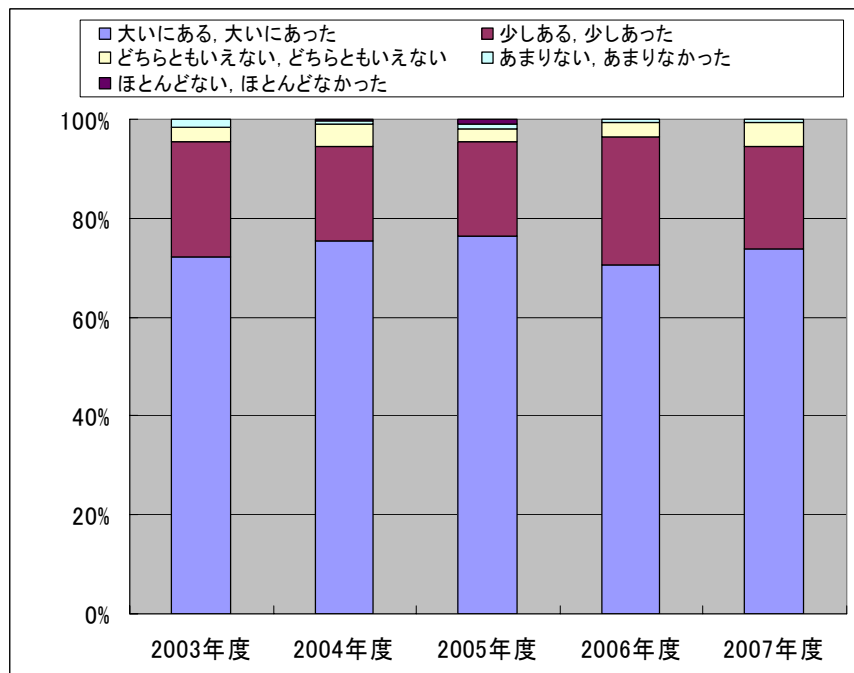
[2-5]プロジェクト研究はあなたの自己形成に効果がありましたか。(博士後期課程の方のみ)

博士後期課程の回答者は5名と少ないので統計データとしての有効性には慎重を要するが、博士後期課程の学生の回答は「おおいにある」、「ある程度ある」であり、2006年度修了生はこれらの科目の効果をおおの程度は評価していると判断できる。



[2-6]学位(修士・博士)論文のための取り組みはあなたの自己形成に効果がありましたか。

昨年度とほぼ同様であり、学位(修士・博士)論文取り組みの自己形成効果については、「大いにある」と「かなりある」の合計が9割以上の水準を保持しており、一定の教育効果が肯定的に受け止められていると判断できる。

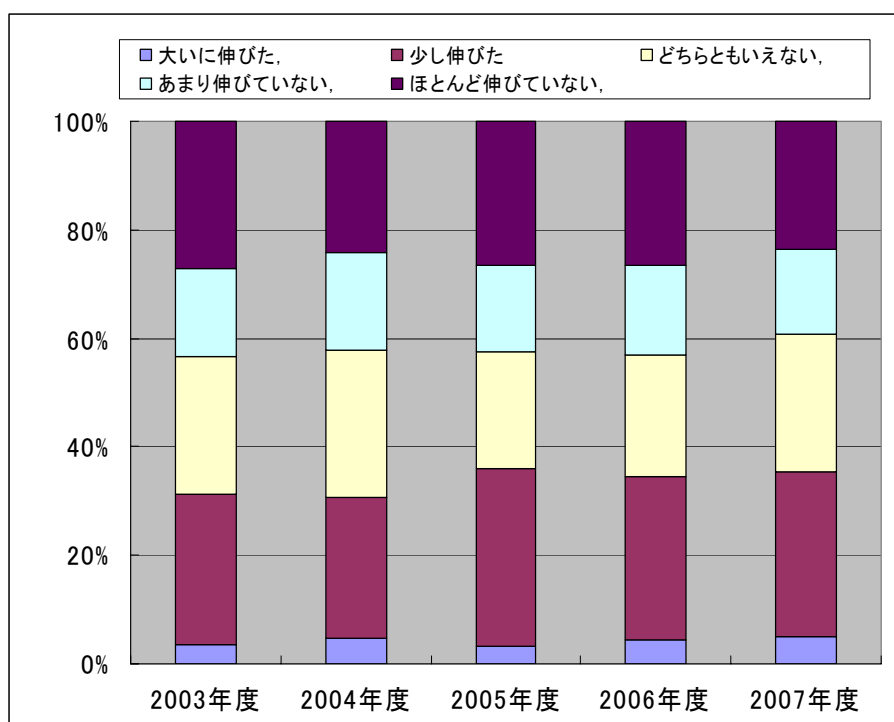


[3]英語力についてお尋ねします。

[3-1]研究科の在学期間であなたの英語力は伸びましたか。

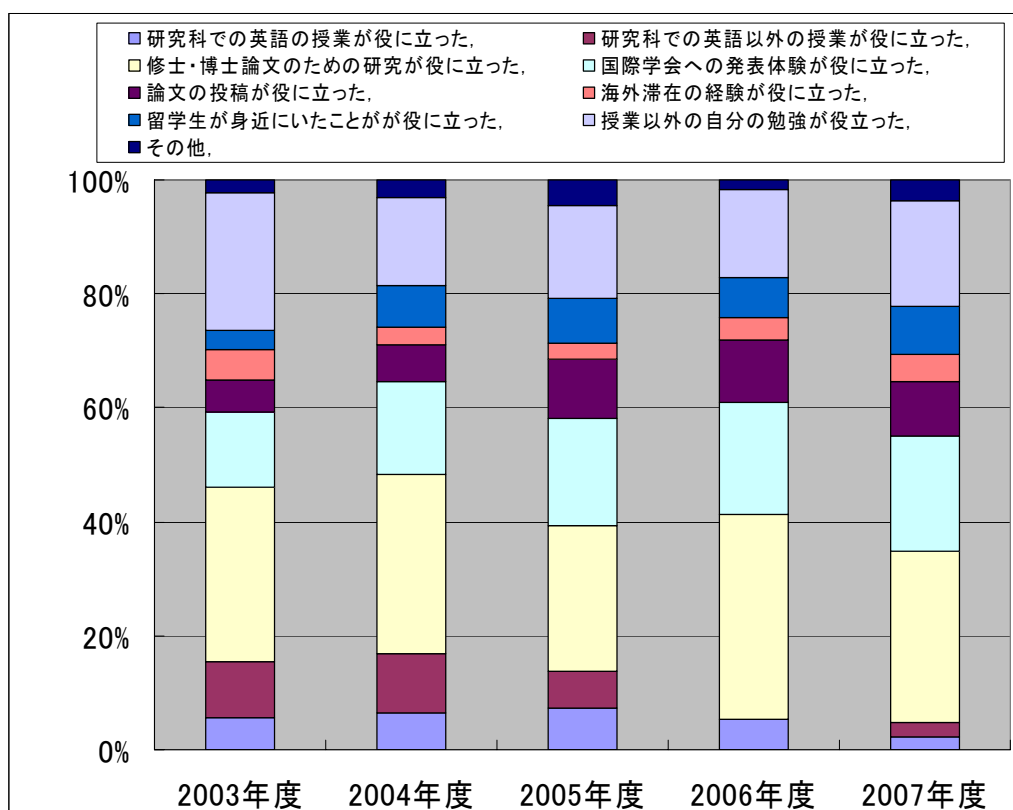
依然として英語力が「ほとんど伸びていない」とする者と「あまり伸びていない」とする者の合計が4

割を占めていることは、教育方法に改善すべき課題があると判断すべきであり、今後の重点課題として対策に取り組む必要がある。専門科目での英語導入が必要と思われる。



[3-2][3-1]でA（おおいに伸びた）またはB（少し伸びた）と回答された方：その理由は何ですか。（複数回答可）

昨年度とほぼ同様の傾向であり、「修士・博士論文のための研究」以外では、「国際学会への発表」「論文投稿」「留学生との交流」などが英語力の向上に役立ったと回答する者の割合が比較的多くを占め、国際的交流活動への参加が英語力向上に一定の効果を持つことが統計データに現れているものと判断できる。また「自分の勉強」とする回答もかなりあり、常日頃から各教官の「英語のすすめ」も効果があると思われる。



I (その他)[具体的に]

- ・ ゼミが英語だったから
- ・ 学外活動で海外へ行った経験。
- ・ TOEIC対策
- ・ 英語の論文を読んだ
- ・ 英語ゼミ，マイコンやセミコンのデータシートを読む必要があり読んでいたから
- ・ 海外の講義（インターネット）
- ・ 外国語の論文を読む機会が多かったので。

[3-3][3-1]でD(あまり伸びていない)またはE(ほとんど伸びていない)と答えた方:その理由は何ですか。

社会に出てからの英語の必要性の認識不足，さらに英語に接する機会が少ないことなどから，英語学習に対する努力の不足を自分自身で感じている。何れにしても「英語力」を必要とする機会増大の方策が望まれる。

- ・ 英語に触れる機会があまりなかった。
- ・ 英語に触れる機会があまりなく興味が持てなかった。
- ・ 英語の勉強をしなかった。国際学会に参加して，英語の必要性を痛感しました。
- ・ 英語に触れる機会があまりなかったから。あっても論文を読む程度。その量も少なかった。
- ・ 英語にふれなかった。
- ・ 勉強する機会が少なかった。
- ・ 英語を必修にしていないから。
- ・ 努力欠ぼう。
- ・ 継続してないから。
- ・ 論文等で，読む場合はあるが，じっくりと見たり，聞いたりする機会がなかったため。
- ・ 授業を受けなかったから。
- ・ 英語の勉強を全くしていない
- ・ 英語に触れる時間がなかった。
- ・ 英語の勉強をしていないから。



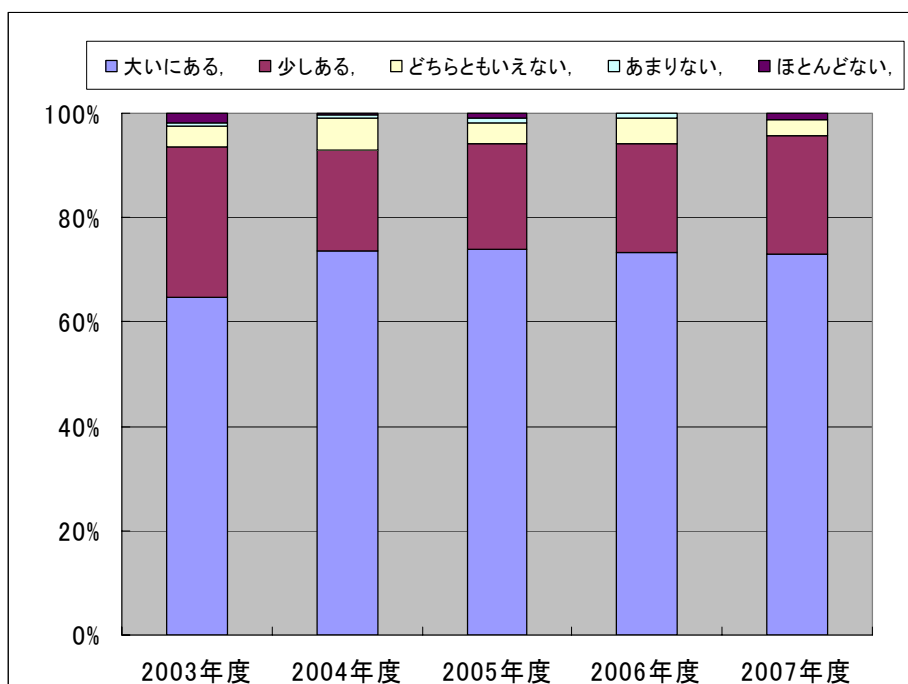
- ・ 勉強不足
- ・ 英語に触れていない。
- ・ あまり英語に触れるチャンスがなかった。研究が忙しかった。
- ・ 自ら積極的に英語に取り組んでいなかったため。
- ・ 英語を勉強していない。
- ・ 授業等を選択していなかった。
- ・ 授業数が少ない。
- ・ 勉強しなかった。
- ・ 英語よりも専門科目のほうに力が入ってしまうから。
- ・ 英語を話す機会がなかったから。
- ・ 自主的に勉強しなかったため。
- ・ 勉強を怠ったため。
- ・ 英語にふれていないから。
- ・ 不真面目が故
- ・ 英語の講義を受けていない、自分の研究分野に英語論文にない。
- ・ 継続的に学習しなかったから。
- ・ 科目なし。
- ・ 英語に関わることがほとんどなかったから。
- ・ 英語を使用する機会が少なく、勉強もしていない。
- ・ 英語に接する機会がなかった。
- ・ 英語を使う必要がほとんどなかったから。
- ・ 英語を活用する機が無かった。
- ・ 取り組まなかった。
- ・ あまり英語にふれていない。
- ・ 使用機会がなかった。
- ・ 英語科目がないため。
- ・ 本人の姿勢
- ・ 外国語について学習しなかった。
- ・ 授業を受けていないから。
- ・ 研究のほうに時間を使い英語学習をする時間が少なかったため。
- ・ 論文くらいしか英語を読む機会がなかった。
- ・ 特に勉強していない。
- ・ 持続的な勉強をしていないため。
- ・ 勉強していない。
- ・ 勉強する時間を作れなかった。
- ・ 伸びる努力をしなかったから。
- ・ 英語にふれる機会がない。
- ・ 進んで英語を学ぶ取組みをしなかったから。
- ・ 何もしなかったから。
- ・ 英語が必修でないため。履修していないため。
- ・ 努力がたりなかった。
- ・ 努力してなかった。
- ・ 履修していない。
- ・ 授業を受ける必要がなかったため。
- ・ 英会話などの実践的な能力は身につかなかったから。
- ・ 英語に触れる機会が少なかった。
- ・ 勉強が少ない。
- ・ 授業が少ない。
- ・ 英語を勉強する機会がありませんでした。
- ・ 実際に使う機会がなかったから。
- ・ 勉強不足のため。
- ・ 勉強時間が足りなかった。
- ・ 特に勉強しなかったため。
- ・ そんなに自主的に取りくまなかった。

- ・ 授業内容が不十分
- ・ 特に英語を必要とする事が無かったから。
- ・ 授業など，実用的な内容でなかった。
- ・ 英語に接することが少なかった。
- ・ 使う機会がなかった。
- ・ 話すことをしていないから。
- ・ 講義の内容をあまりおぼえていない。
- ・ 英語を使う機会が少なかった。
- ・ 勉強してないから。
- ・ 研究が忙しい。英語をやるひまがあつたら研究をやる。
- ・ 英語の授業が少さい。内容がうすい。
- ・ [ 3 2 ] のことが特に無いから。
- ・ にながてです。
- ・ 1年の頃しか受けていないから。
- ・ 英語を使う機会がない。
- ・ 勉強していないから。
- ・ 勉強してない。
- ・ 英語に触れる時間が少なかったから。
- ・ 英語にふれる時間があまりなかったから。
- ・ あまり英語に触れていないため。
- ・ 使う機会がないから。
- ・ 日常会話等の語彙力が低下したように思う。
- ・ 高校の授業と余り変わらないため。
- ・ 日常から英語にとりくむ習慣がつかなかった。
- ・ T O E I C の点数がいまいち
- ・ 授業から得る物がなかった。
- ・ 聞きとれない。
- ・ 講義も2年で1つしか受けていないし伸びた感じはしなかった。
- ・ 継続して英語学習に取り組むことがなかったため。
- ・ そう思うから。

[4]学位（修士・博士）論文のための取組みについてお尋ねします。

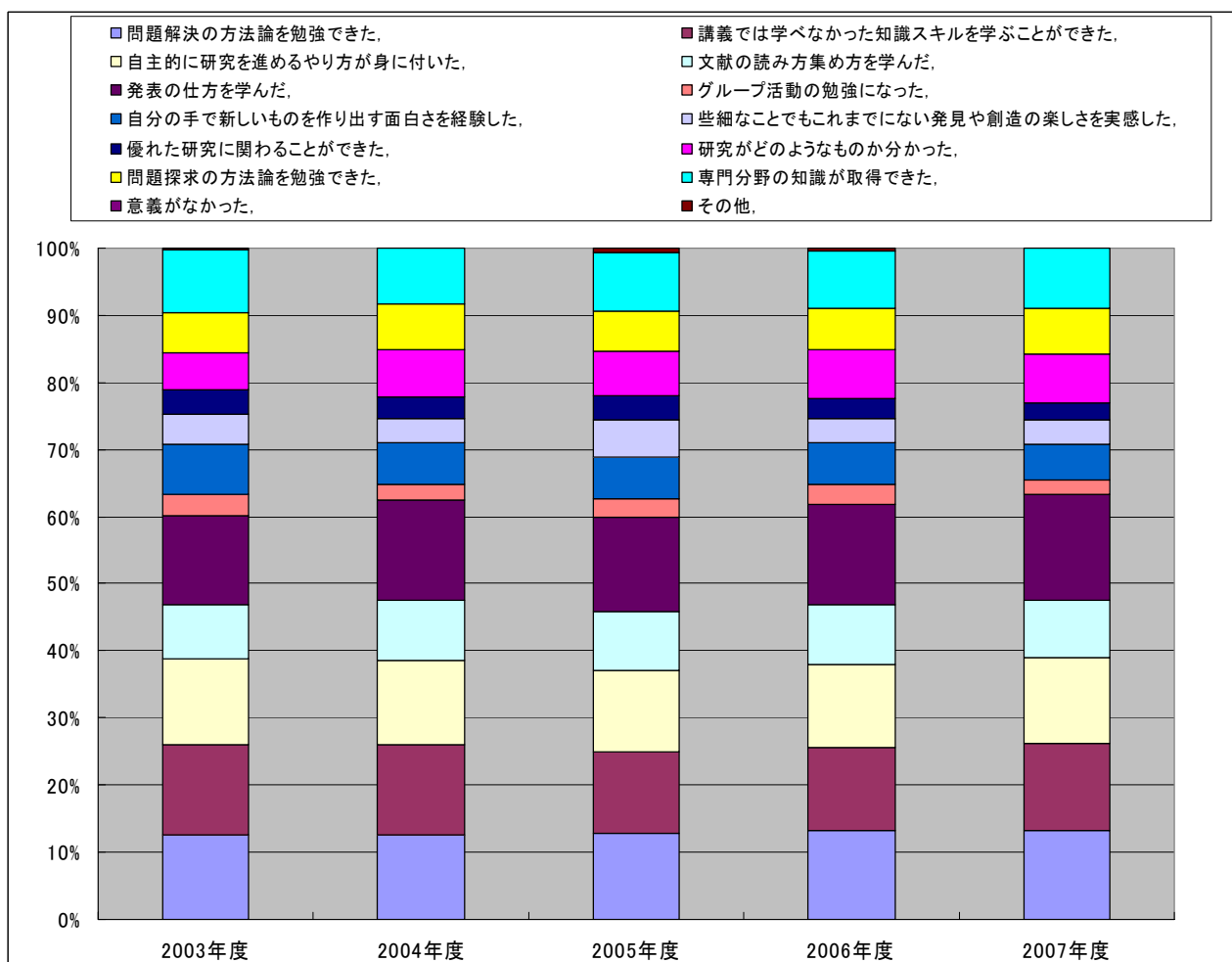
[4-1]学位論文の意義はあると思いますか。

昨年度と変わっておらず，学位論文のための取組は大学院教育において重要と判断される。



[4-2][4-1]でA（大いにある）またはB（少しある）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

昨年度とまったく変わっておらず，課題解決の方法論，講義では学べない知識・スキルの取得，文献の読み方・集め方，発表の仕方が上位を占めており傾向は変化していない。



N (その他) [具体的に： ]

(この項目に回答した学生はいなかった。)

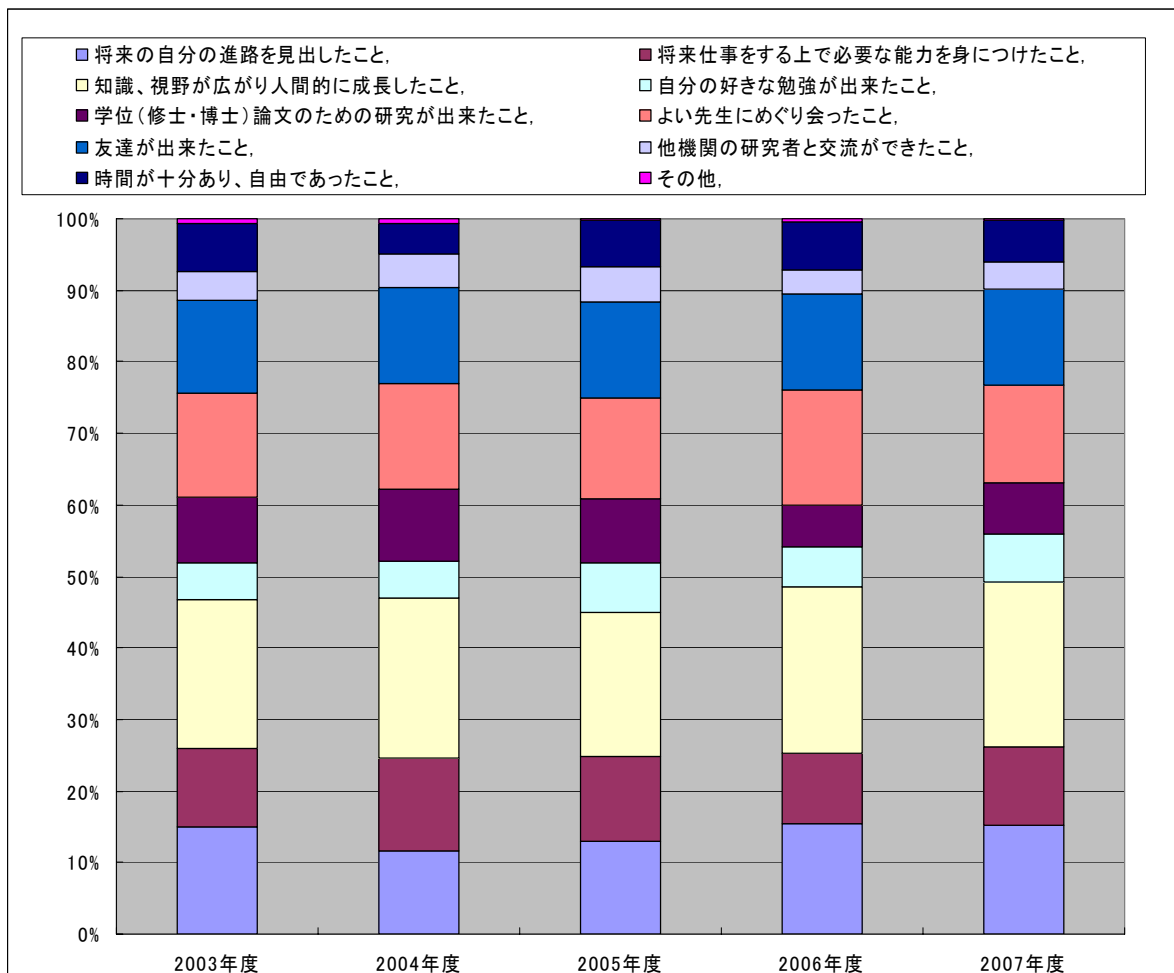
[4-3][4-1]でD (あまりない)またはE (ほとんどない)と答えた方：その理由は何ですか。(複数回答可)

昨年度は以下のような回答があったが、今年度はないようである。学生の意識と客観的な評価が必ずしも一致するとは限らない。論文やレポートをまとめることもエンジニアの重要な仕事である。

- 論文作成時間で時間がかかってしまうから、その間に、研究を進めていた方がよい。

[5]研究科生活を振り返って、どのようなことが良かったと思いますか。(複数回答可)

昨年度とほぼ同じで「将来の自分の進路を見いだした」と「知識・視野が広がり人間的に成長した」, 「友達ができた」「良い先生に巡り合えた」などが割合的に多く、研究生活が人生の一つの大きなかなめになっていることが分かる。



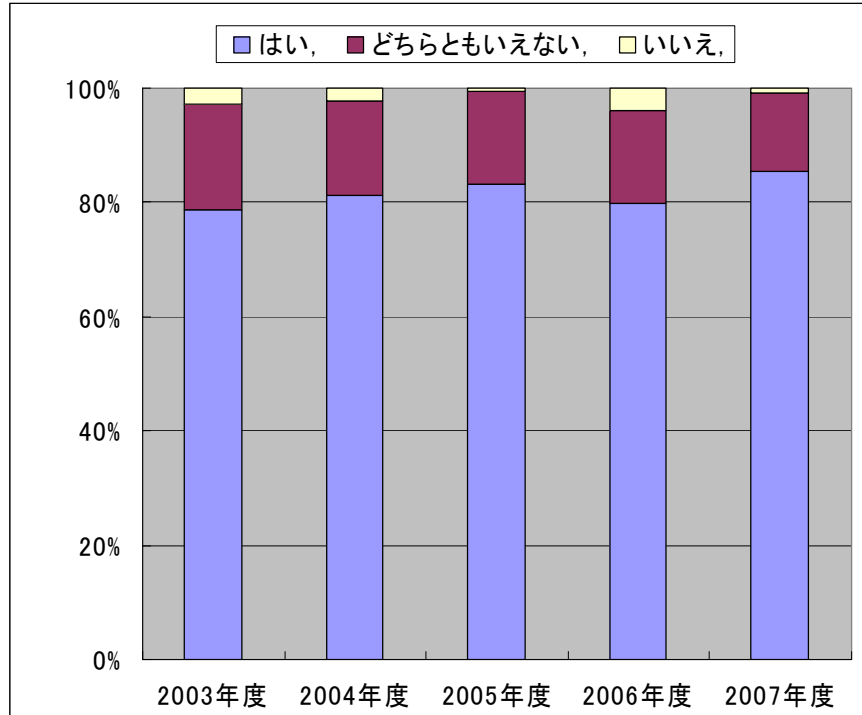
J (その他) [具体的に： ]

- サークル活動

[6]入学した専攻についてお尋ねします。

[6-1]現在の専攻に入学してよかったと思いますか。

「はい」がこれまでになく高い値を示しており、院生の意識の高さが伺える。



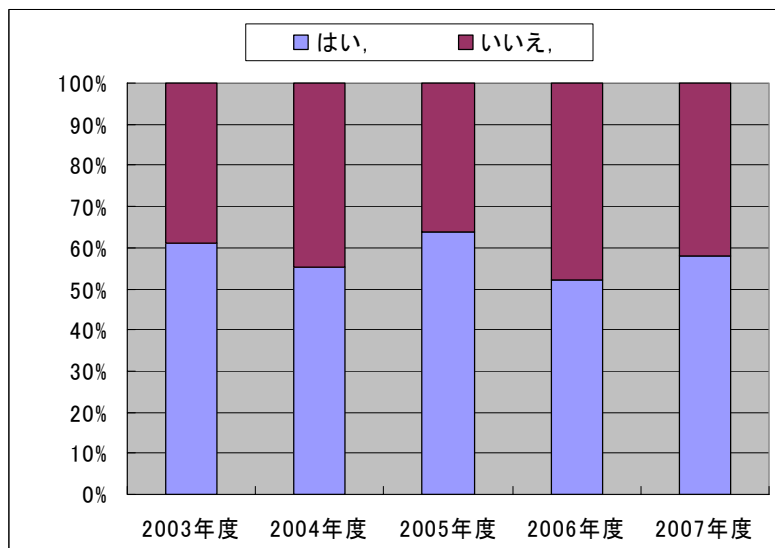
[6-2][6-1]でC (いいえ) と答えた方：その理由は何ですか。

- ・ 文系にいけばよかった。
- ・ 性に合ったから。
- ・ 思っていたところとちがっていた。

[7]進学時の目標についてお尋ねします。

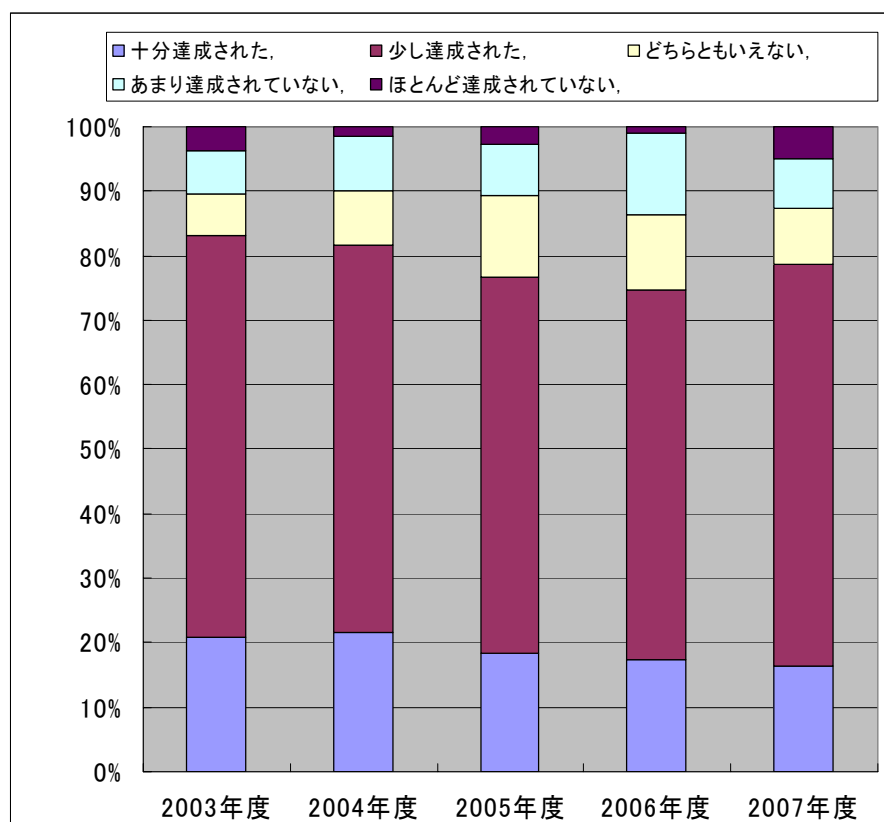
[7-1]あなたは進学の際に研究科で達成したい目標がありましたか。

目標を持って進学した院生の割合は60%近くまで回復したが、今後の推移を慎重に見守る必要がある。



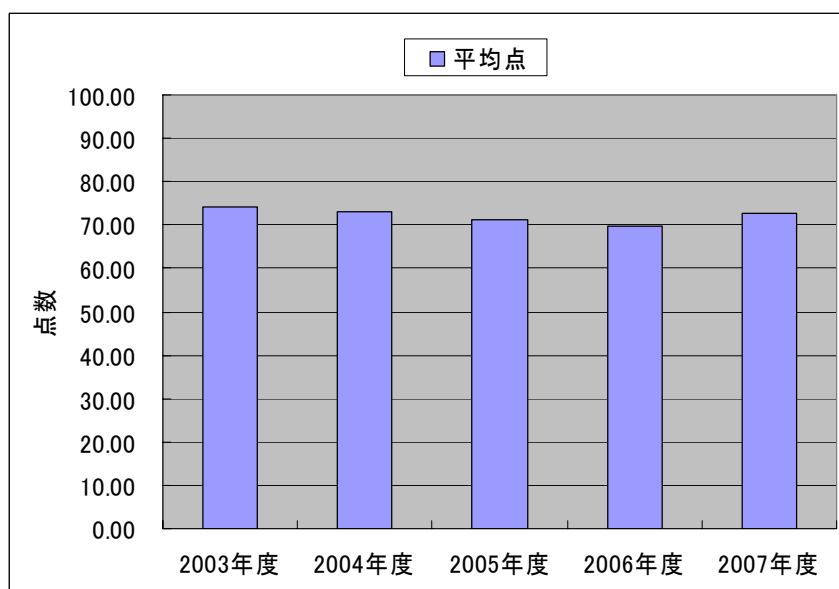
[7-2][7-1]でA (はい) と回答した方：現在どの程度達成されていますか。

達成感を有している院生の割合は80%近くまで回復しているが、「ほとんど達成されていない」とする院生も5%に近く、今後注意を払って推移を見守っていく必要がある。



[8] 研究科在学中の学生生活の満足度に対して100点満点で点を付けるとすれば何点と思いますか。

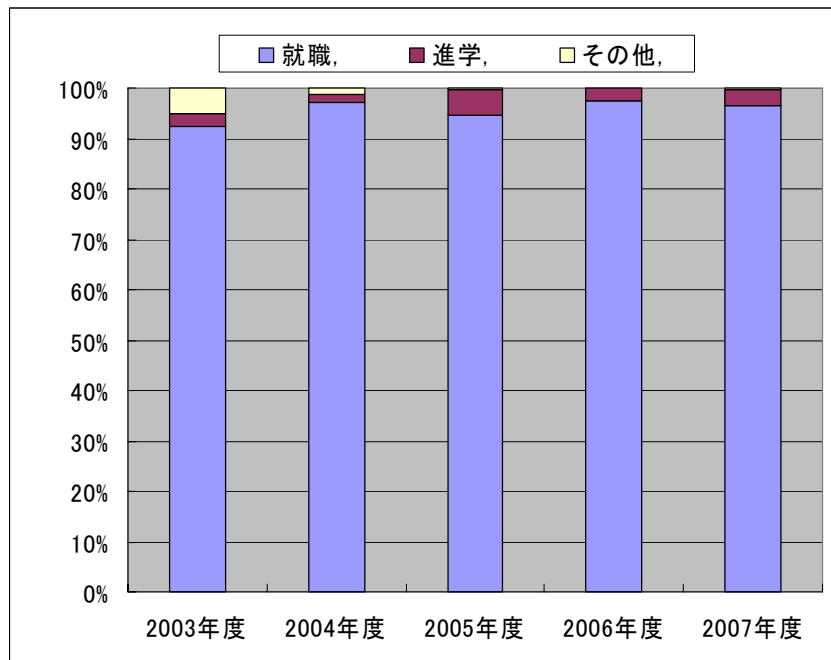
達成感を有している院生の増減と同調しているように見える。さらに向上に向けた努力が必要であろう。



[9] 修了後の進路についてお尋ねします。

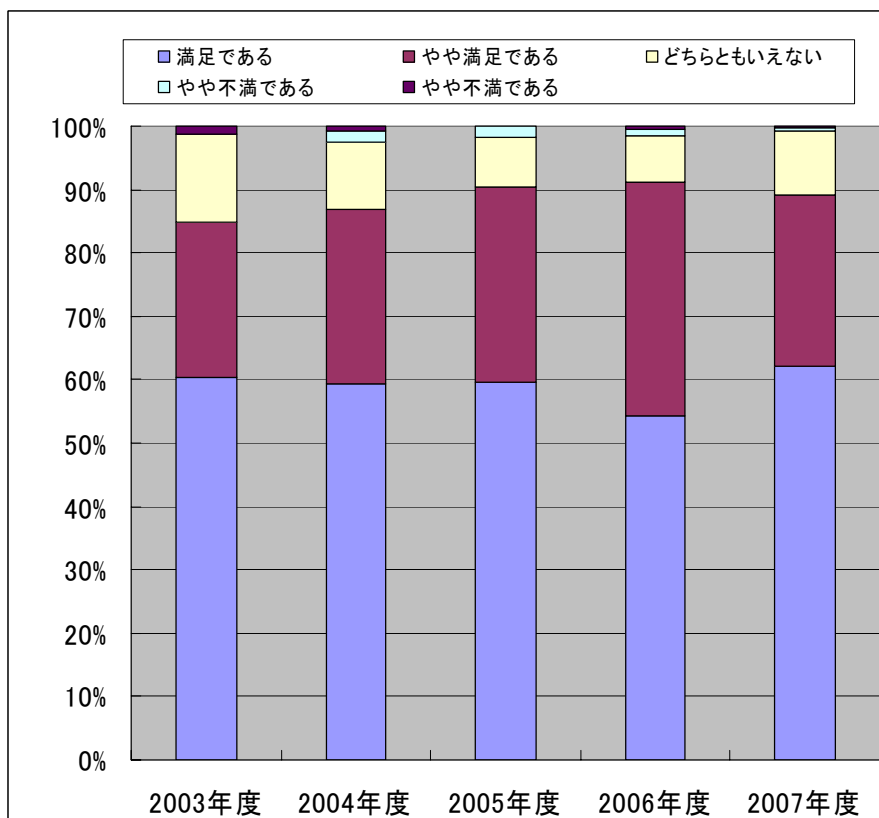
[9-1] あなたは修了後就職しますか、進学しますか。

就職する院生が95%以上で残りの学生が進学する様子は変わらないが、今後後期課程の充足率向上に向けた努力が必要であろう。



[9-2]あなたは修了後の進路に満足していますか。

修了後の進路に不満足を感じている院生の割合は少なくなっている。



[9-3][9-2]でD（やや不満である）またはE（不満である）と答えた方：その理由は何ですか。

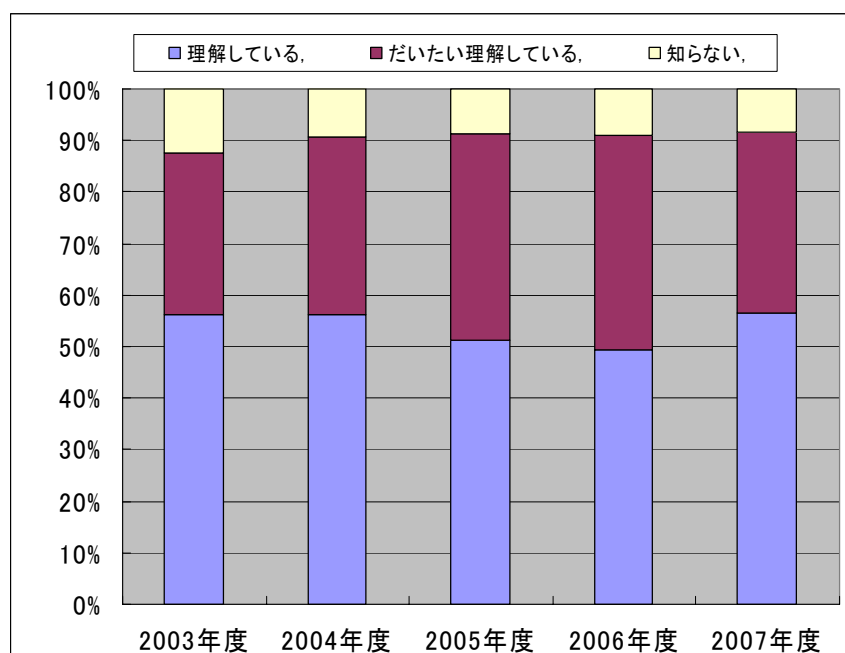
不満足感と言うよりは不安感と言った方が適切と思われる。

- ・ 自分に自信がない。

[10]研究活動についてお尋ねします。

[10-1]進学時の研究室の配属決定方法を理解していますか。

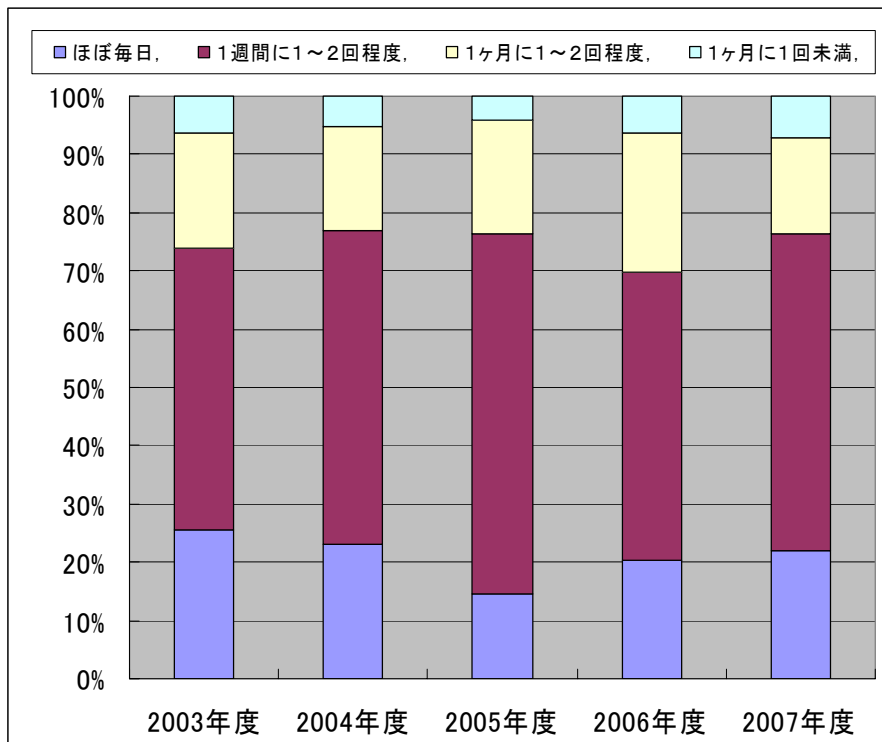
研究室配属決定方法を知らない院生は10%以下であるが、さらなる周知徹底が必要であろう。



[10-2]研究指導はどの程度の頻度で受けましたか。

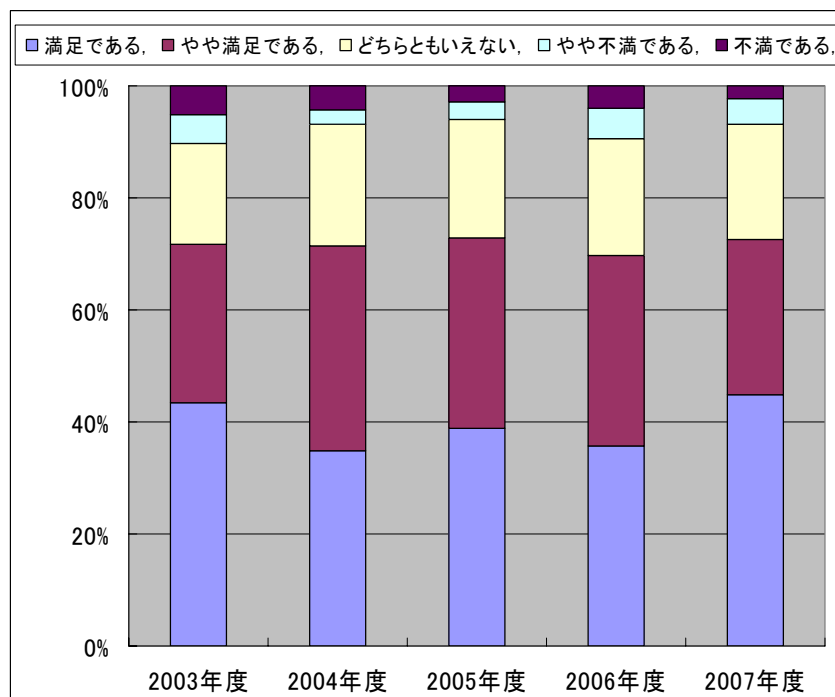
昨年度から反転して、「ほぼ毎日」と「1週間に1～2回程度」の研究指導を受けた院生が増加し、「1ヶ月に1～2回程度」の院生も減少した。しかし、「1ヶ月に1回未満」と回答した院生が増える兆しも見えるので、その原因を調査し、教員が院生の研究指導にもっと多くの時間を割けるような対策を講じる必要がある。





[10-3]あなたの研究に対する指導方法について、どのように思っていますか。

「不満である」と「やや不満である」と回答した割合は、昨年度と比べて減少したが、更に院生の研究指導方法改善の努力・工夫を続ける必要がある。



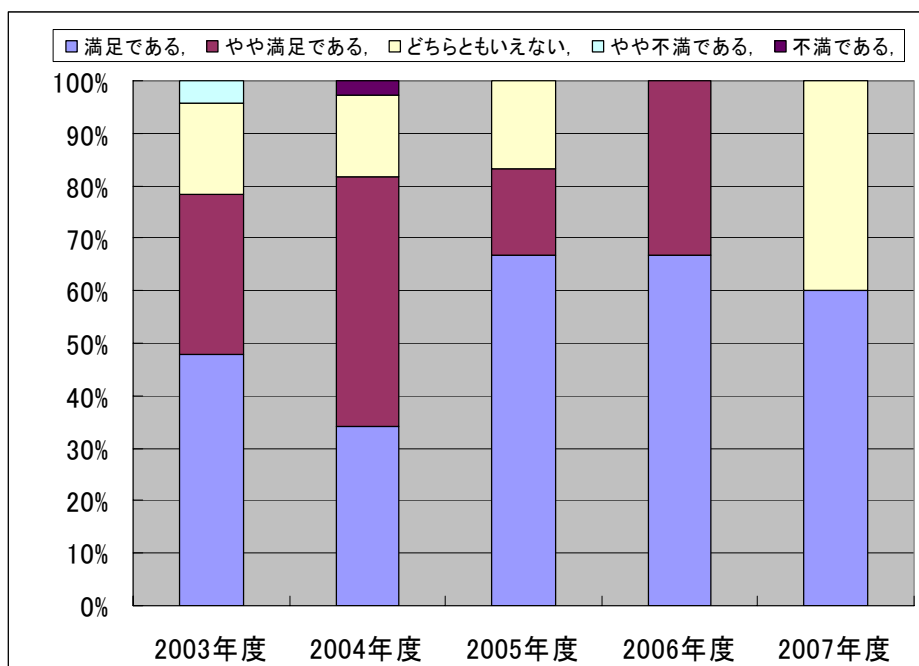
[10-4][10-3]でD（やや不満である）またはE（不満）と答えた方：その理由は何ですか。

一部解釈不能な理由もあるが、特に指導時間が少なかった場合に不満を感じている様子が伺える。その原因を調査し、教員が院生の研究指導にもっと多くの時間を割けるような対策を早急に講じる必要がある。

- ・ 研究室によって指導の内容に差がありすぎる。
- ・ 先生の研究に対する知識が少ない。
- ・ 指導方法・意見がばらばら。（指導者によって）
- ・ 研究方針を明確に
- ・ ゼミ（先生との話し合い）が少な過ぎる。
- ・ 毎回言っていることが違う。
- ・ 研究のビジョンが見えなかったこと。
- ・ ゼミが少なかったから。
- ・ ディスカッションをあまりしなかったから。
- ・ 研究の方向性を示してほしかったから。
- ・ 難しく具体的な指示がほしかった。
- ・ 指導があまり行われていなかったため。
- ・ 放置しすぎ。
- ・ 落ちついて、深い話し合いがしたかったから。
- ・ 意見がなかなか通らなかった。
- ・ 話がかみあわない。
- ・ 指導というより、状況報告だけ。教官と話したくない、会いたくない日が何日もあった。

[10-5]あなたの研究に対する指導体制（指導教官グループ）について、どのように思っていますか。（博士後期課程の方のみ）

後期課程修了生の有効回答は5枚だけであるが、特に否定的な解答は無い。

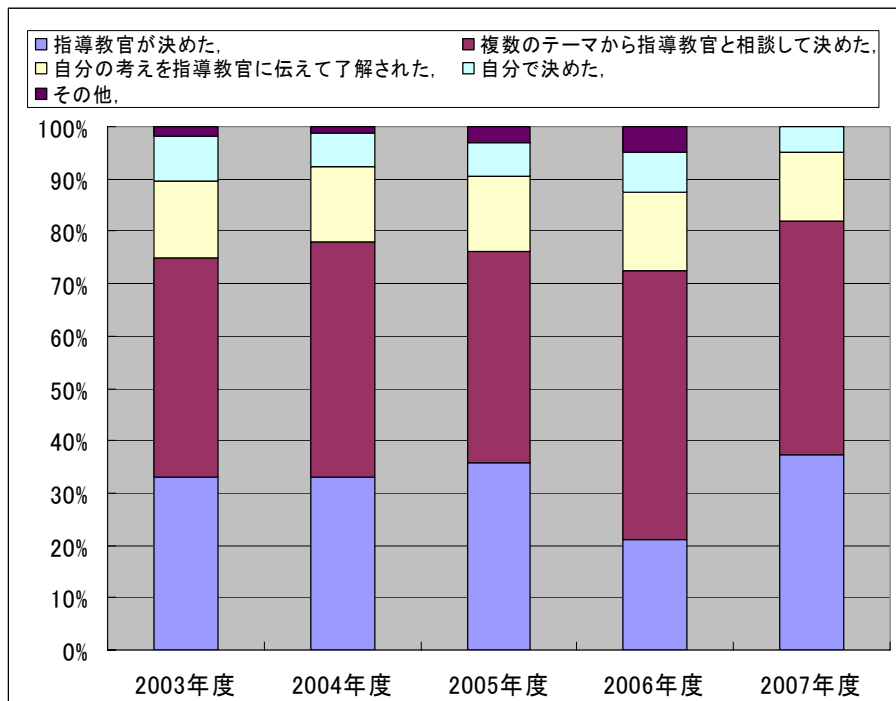


[10-6][10-5]でD（やや不満）またはE（不満）と答えた方：その理由は何ですか。

（この項目に回答した学生はいなかった。）

[10-7]研究テーマはどのように決定されましたか。

院生が自分で決めた比率が下がり 指導教官がリーダーシップを取って研究テーマを決める割合が増えた。

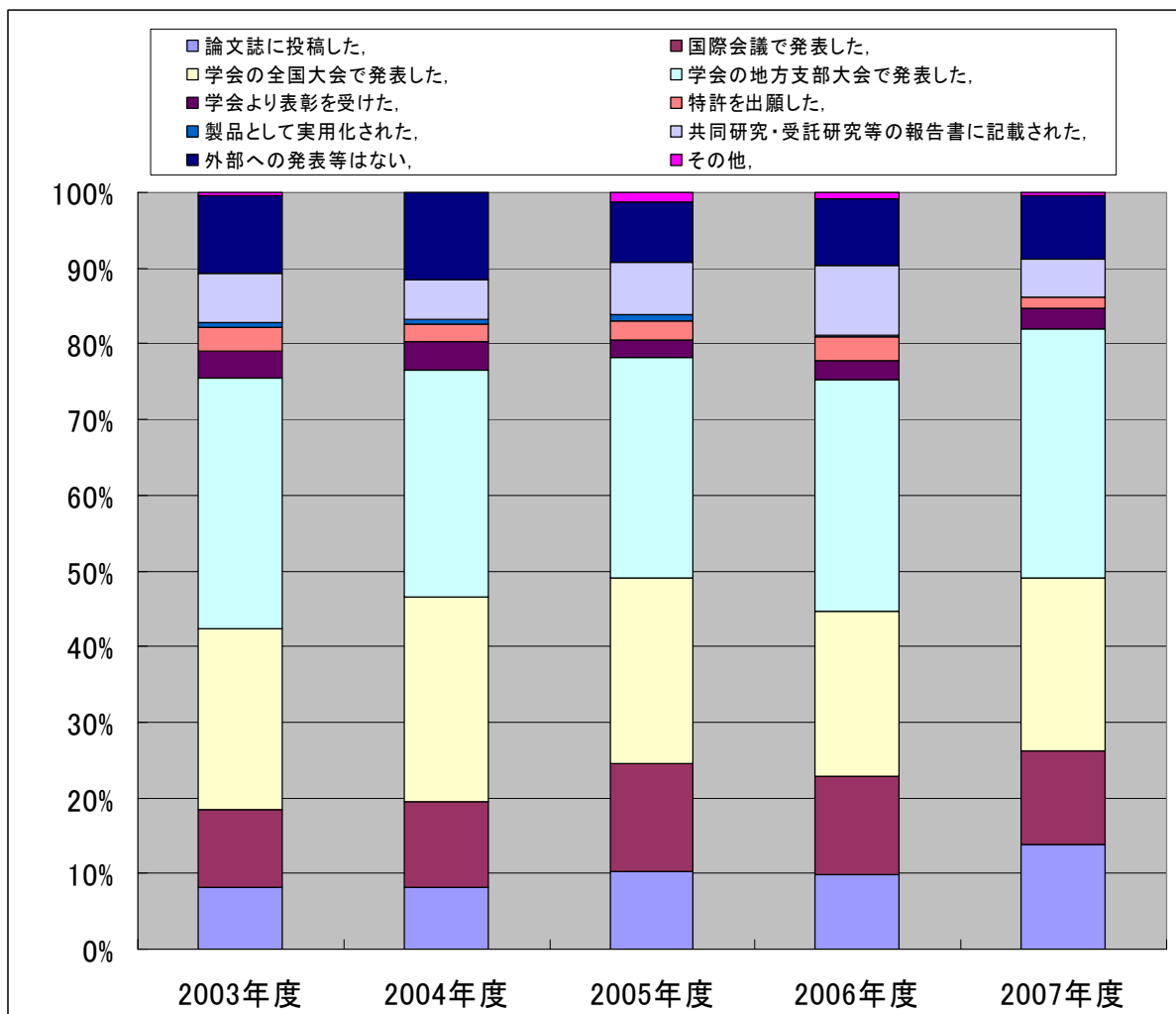


E (その他) [具体的に： ]

(この項目に回答した学生はいなかった。)

[10-8]あなたが在学中に研究したテーマの成果は下記のうちどれに該当しますか。(複数回答可)

論文誌への投稿がこれまでになく増え、国際会議や学会の全国大会での発表も高い水準を維持している。

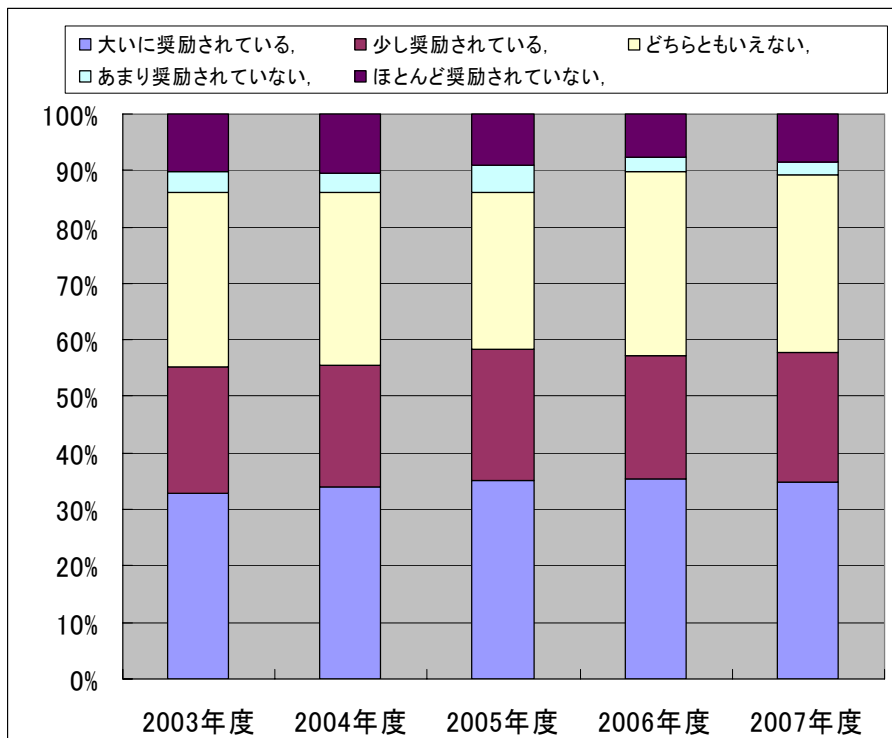


J (その他) [具体的に： ]

- ・ 受託研究。ただし報告書への記載はされていない。
- ・ 日経新聞に掲載された。

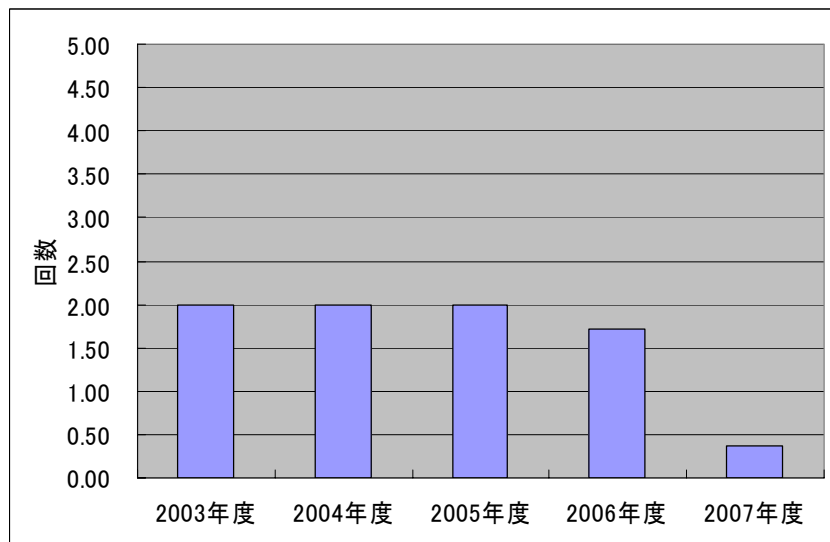
[10-9]学外での研究活動(学会発表や他機関での研究活動等)を奨励されていましたか。

2003年度以降は多かれ少なかれ推奨されていると感じている学生の割合が増加しており、否定的な回答は10%程度に止まる。



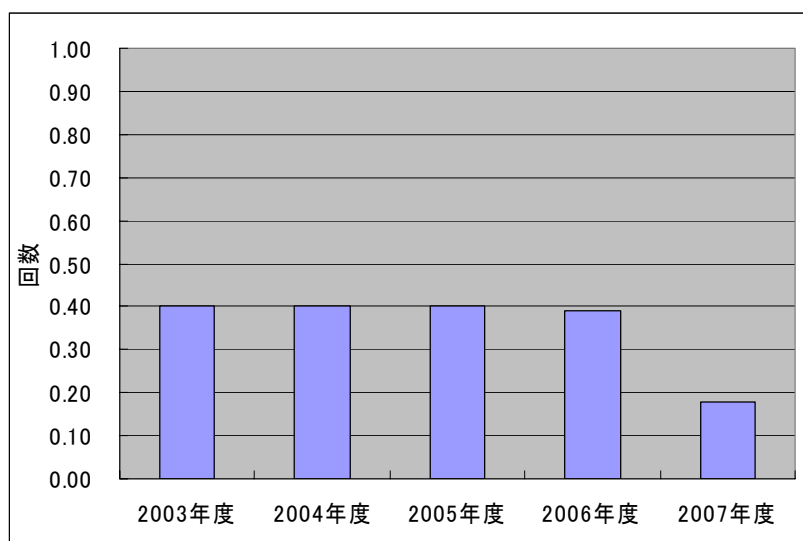
[10-10]あなたは在学中に国内学会（大会等）で何回発表しましたか。

論文投稿は増え、また学会の全国大会での発表などの成果は高い水準を維持しているが、院生の発表回数は0.37回に激減している。



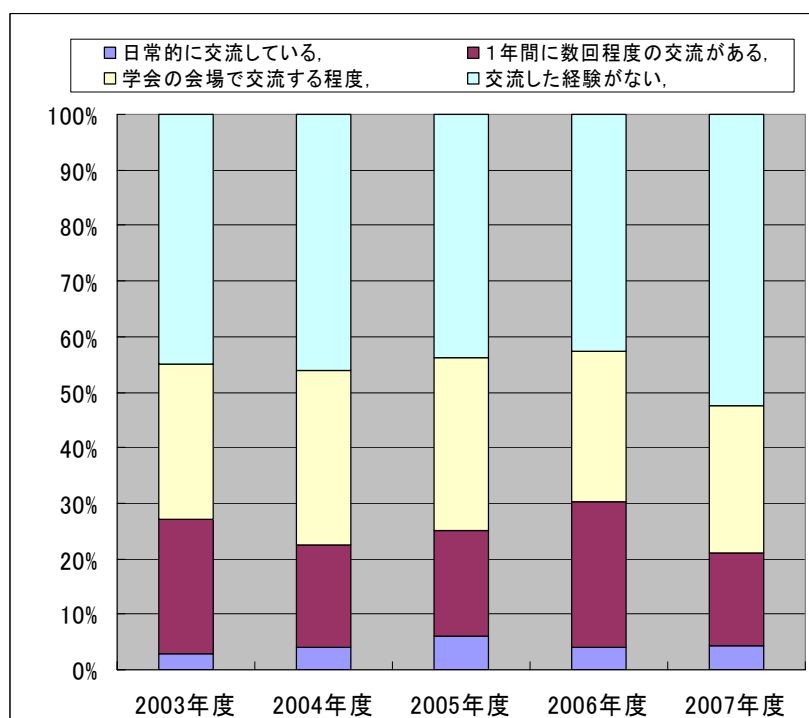
[10-11]あなたは在学中に国際会議で何回発表しましたか。

論文投稿は増え、また国際会議発表などの成果は高い水準を維持しているにも関わらず、院生の発表回数は0.18回に激減している。



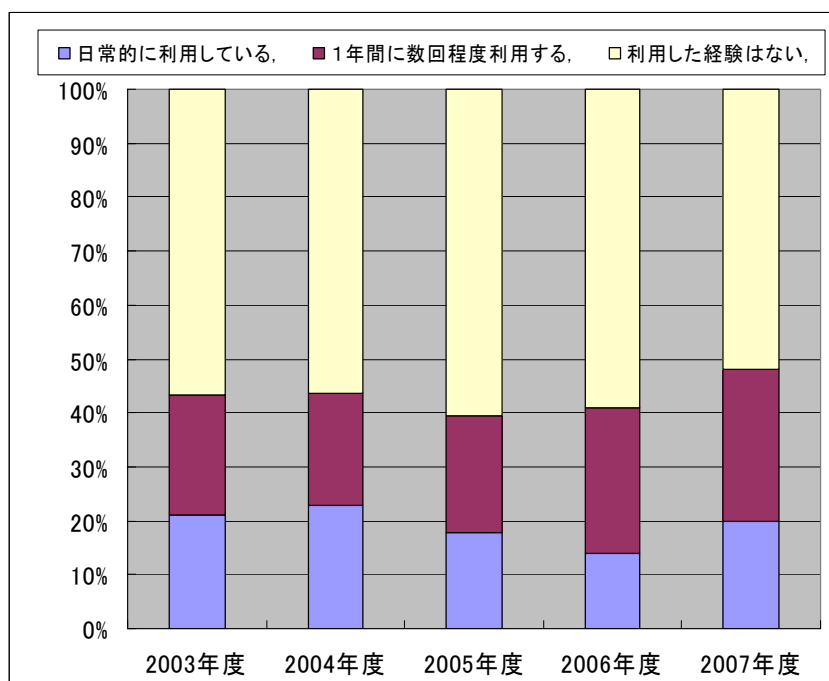
[10-12]学外の研究者（国内および国外）と研究交流した経験がありますか。

国際会議発表回数が0.18回に激減したためか、交流経験のない院生の割合が半数を超えた。



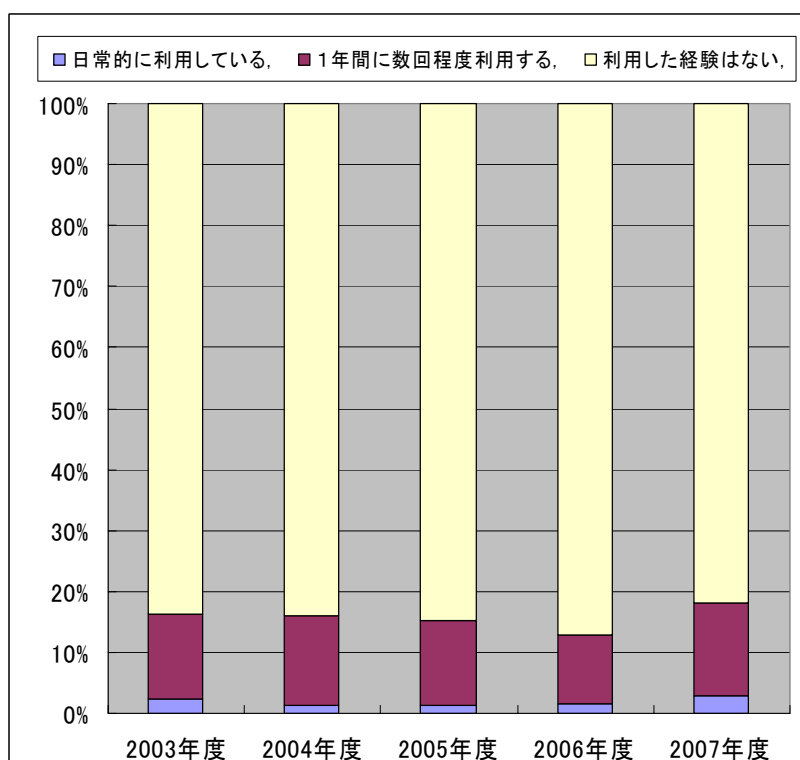
[10-13]学内の共同利用施設（情報科学センター，機器分析センター等）を研究のために利用した経験がありますか。

経験者の割合が増加し，50%近くになっている。



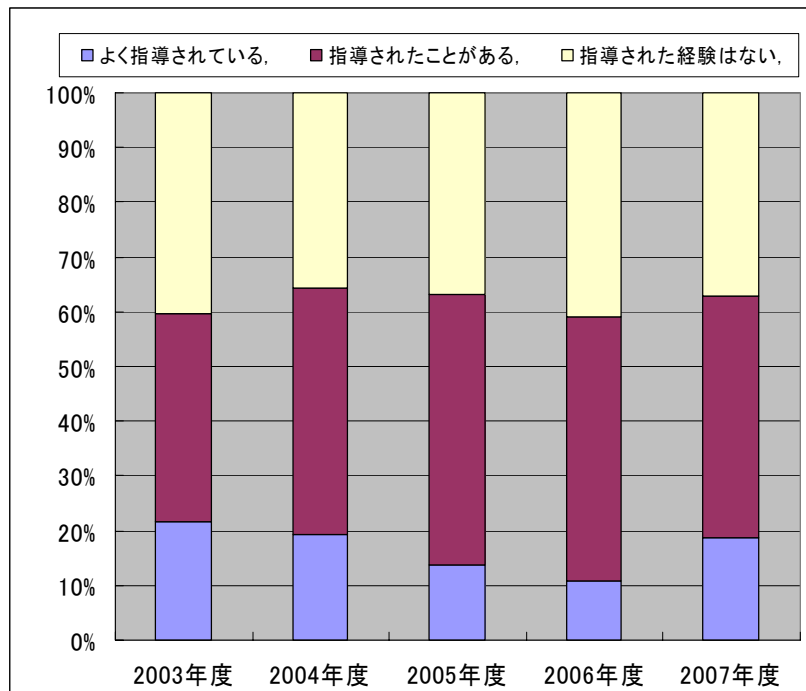
[10-14]学外の共同利用施設等を研究のために利用した経験がありますか。

経験者の割合が増加し、20%近くなった。



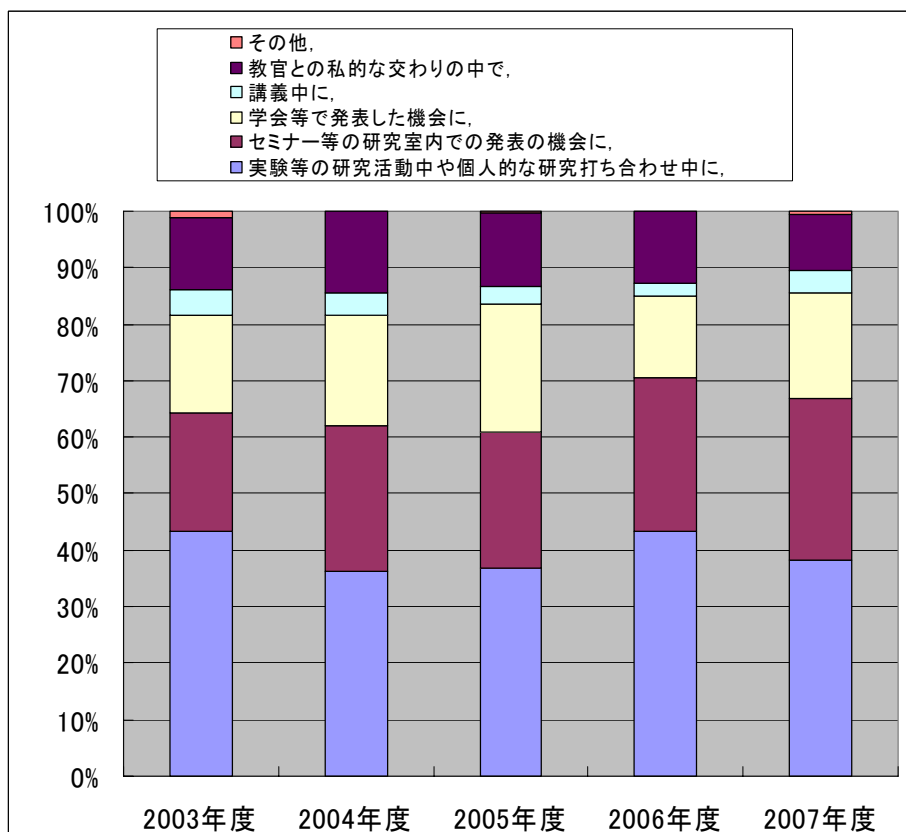
[10-15]学位論文の研究を通して、研究遂行に対して競争意欲が向上するような指導を受けたことがありますか。

よく指導されている院生が増え、指導された経験の無い院生は40%以下に減少した。しかし、依然として指導改善の取り組みは必要である。



[10-16][10-15]でA（よく指導されている）またはB（指導されたことがある）と答えた方：それはどのような機会に指導されましたか。（複数回答可）

教員との個人的な研究打ち合わせやセミナー，学会発表等で指導を受けている学生の割合は85%に達した。





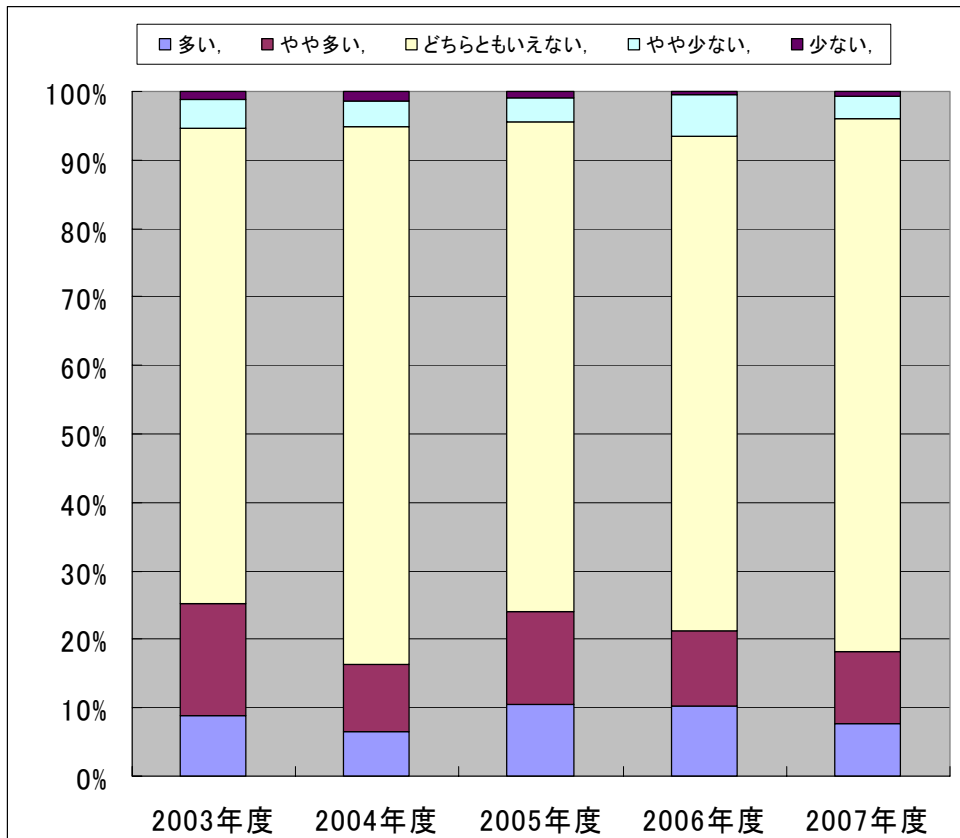
F(その他) [具体的に: ]

- ・ 共同研究時

[11]工学研究科における講義・演習等についてお尋ねします。

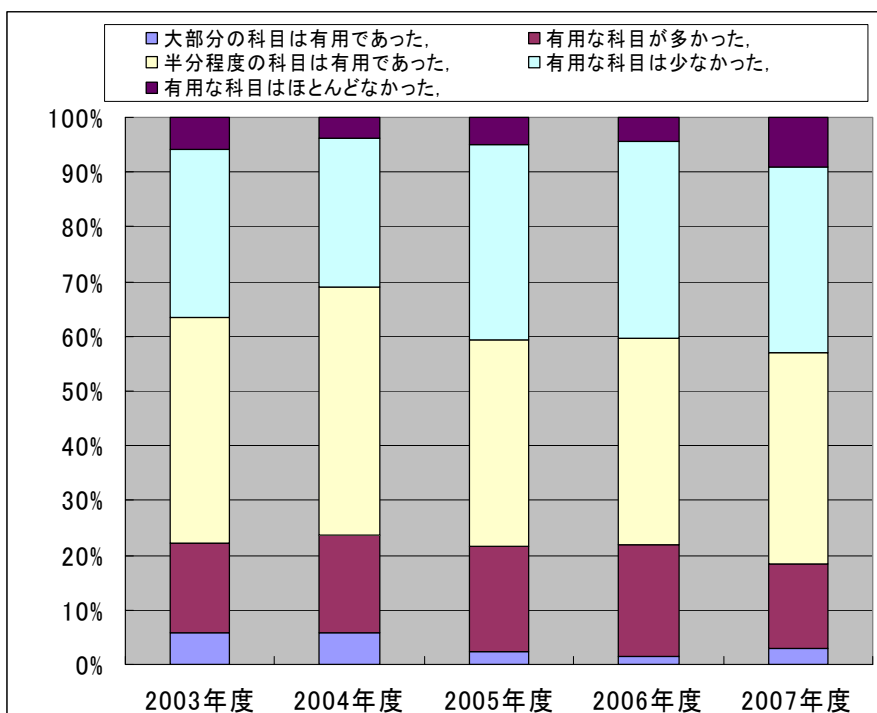
[11-1]工学研究科における講義・演習等の必要要件単位数は多いでしょうか、少ないでしょうか。

「やや多い」、「多い」と回答した院生も「やや少ない」、「少ない」と回答した院生も、いずれも減少している。



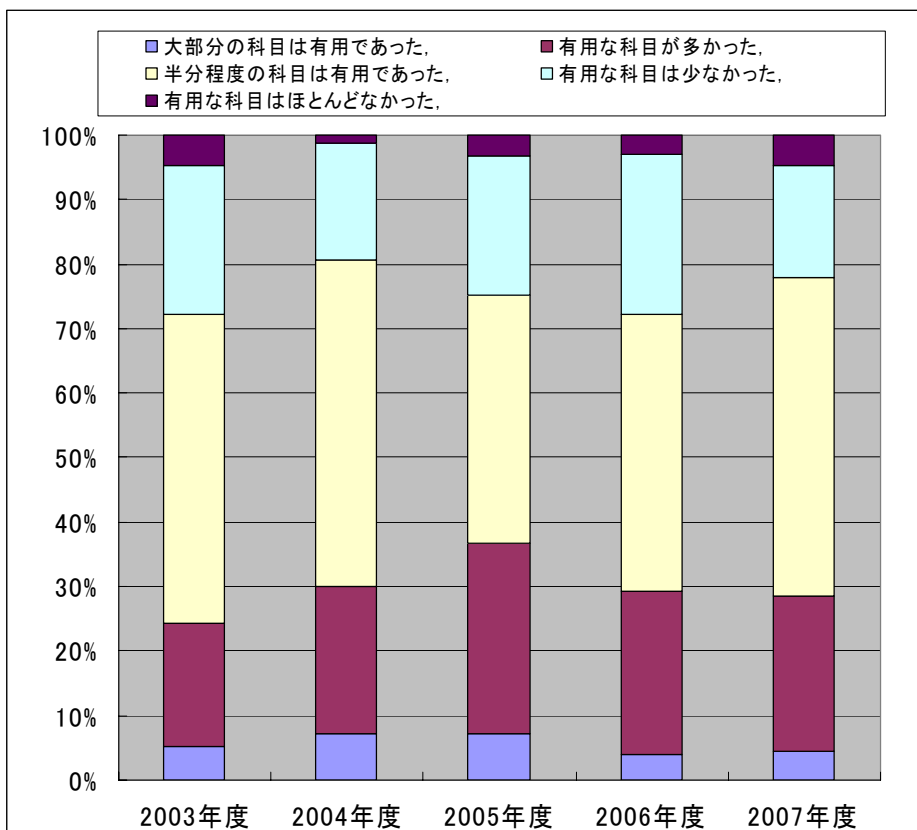
[11-2]工学研究科で受講した講義科目(演習科目を含む)の中で、自分自身の研究に役立った科目の割合はどの程度ですか。

「半分以上の科目は有用であった」と回答した院生は漸減し60%をきった。有用な科目が増加するように、さらなる講義(演習)内容の改善が必要である。



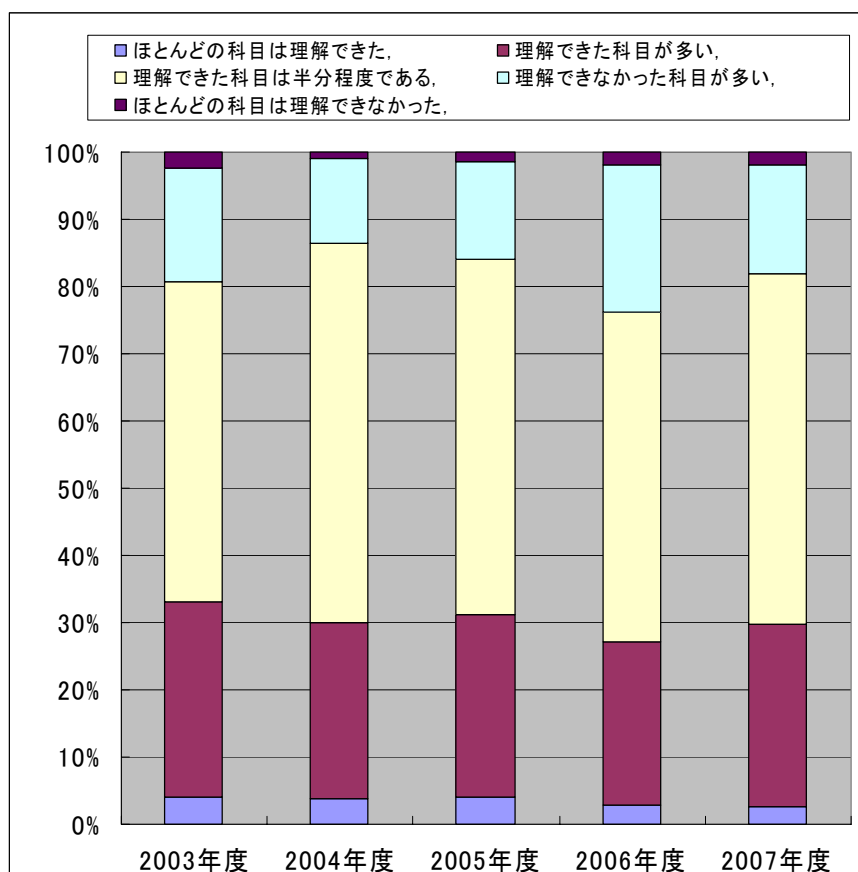
[11-3]工学研究科で受講した講義科目（演習科目を含む）の中で，自分自身の成長のために有用であり，履修価値があった科目の割合はどの程度ですか。

「大部分の科目は有用であった，有用な科目が多かった」は2005年度の36%まで増加傾向にあったが，それ以降減少し2007年度は28%となっている。一方，「半分以上の科目は有用であった」と回答した修了生が，ピーク時の81%には及ばないものの，2006年度より増加して77%となっている。受講者の意識・学力を把握，考慮した講義（演習）内容の検討が必要と思われる。



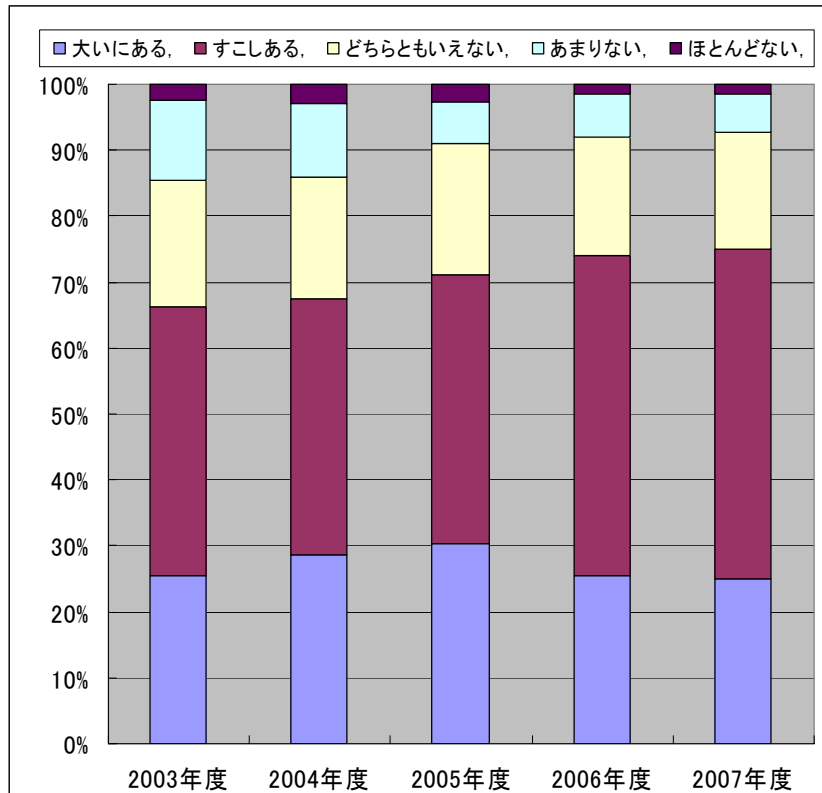
[11-4] 工学研究科で受講した講義科目の理解度はどの程度ですか。

「理解できた科目が半分以上」の修了生の割合が2004年度の86%から減少傾向にあり、2006年度に80%を割ったが、2007年度は82%に増加した。また「理解できなかった科目が多い」の割合も前年と比べて6%減少している。引き続き講義内容や教授方法の検討・改善が必要と思われる。



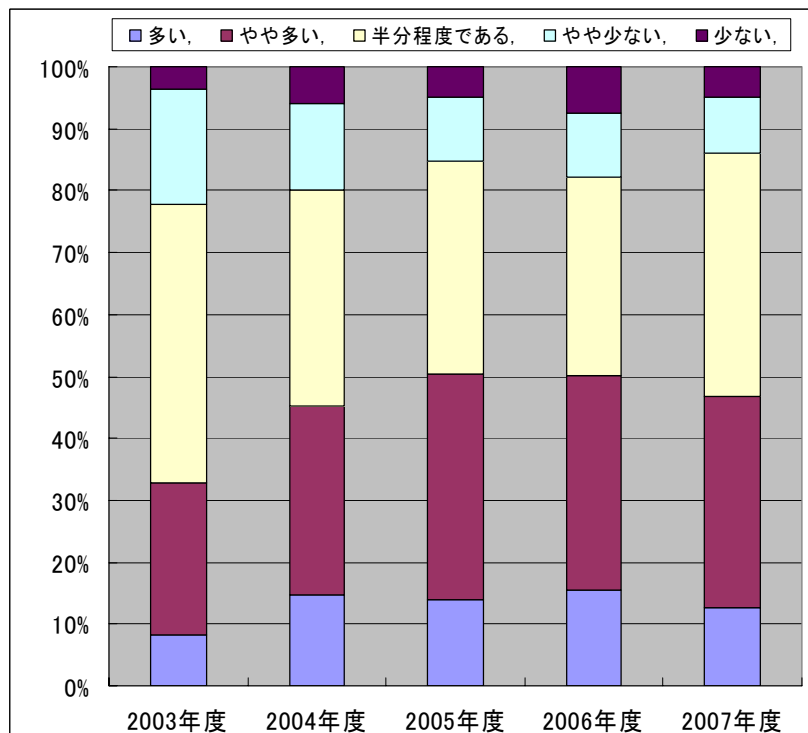
[11-5] 学部で履修した科目と研究科で履修した科目の間に、つながりがあったと思いますか。

「学部で履修した科目との関連がある」と回答した修了生の割合が67%から順次75%まで増加しており、学部で履修した科目との関連性は向上していると判断できる。



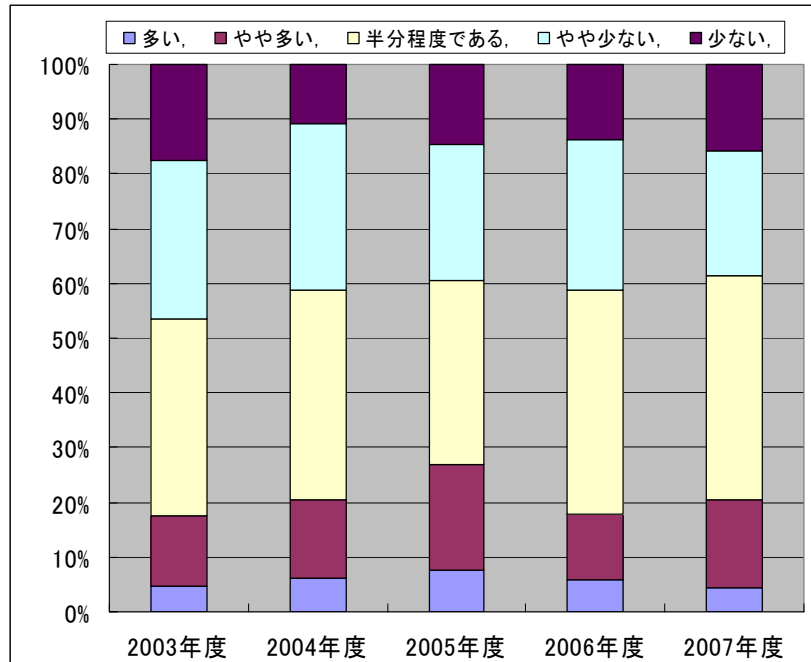
[11-6]工学研究科で履修した科目全般について、教育への熱意があった担当教官の割合はどの程度ですか。

「半分以上の教員に熱意があった」と回答した修生生の割合は、2006年度に若干の減少を見せたが、2003年度の78%から2007年度の86%までほぼ順次増加するとともに、過去4年間は80%台で推移している。



[11-7]工学研究科で履修した科目で、就職後、仕事をする上で役に立つと思う科目はどれくらいありましたか。

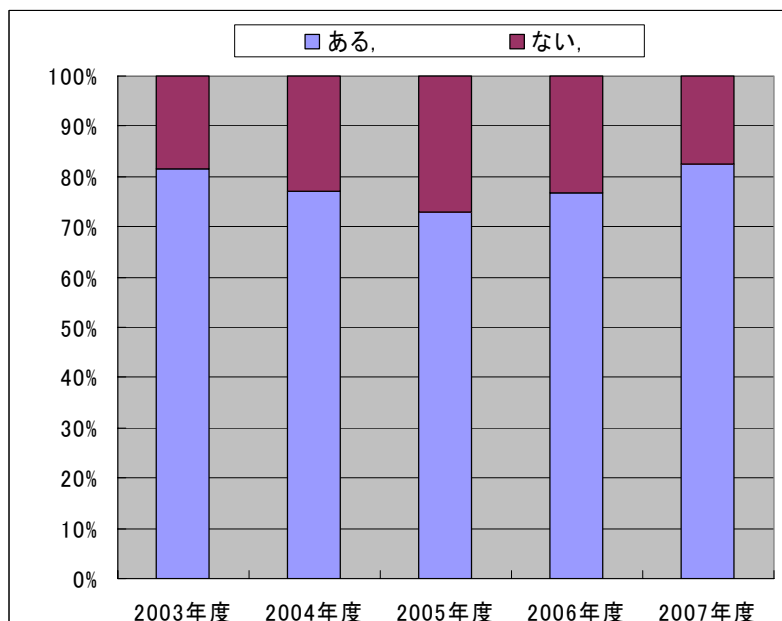
「半分以上の科目は仕事に役に立つ」と回答した修了生は、2003年度54%から2007年度61%まで増加しており、「実学」の観点からの教育効果は向上していると思われる。なお、40%前後は（仕事をする上で）「役に立った科目は少ない、やや少ない」と回答している。この点は本学は「技術に堪能なる氏君子の養成」にも係わり、必ずしも「実学」に直結しない科目の重要性を踏まえた総合的観点から検討する必要があるが、2007年度の比率は一つの妥当な割合と考えられる。



[2] T A , R A 等の制度についてお尋ねします。

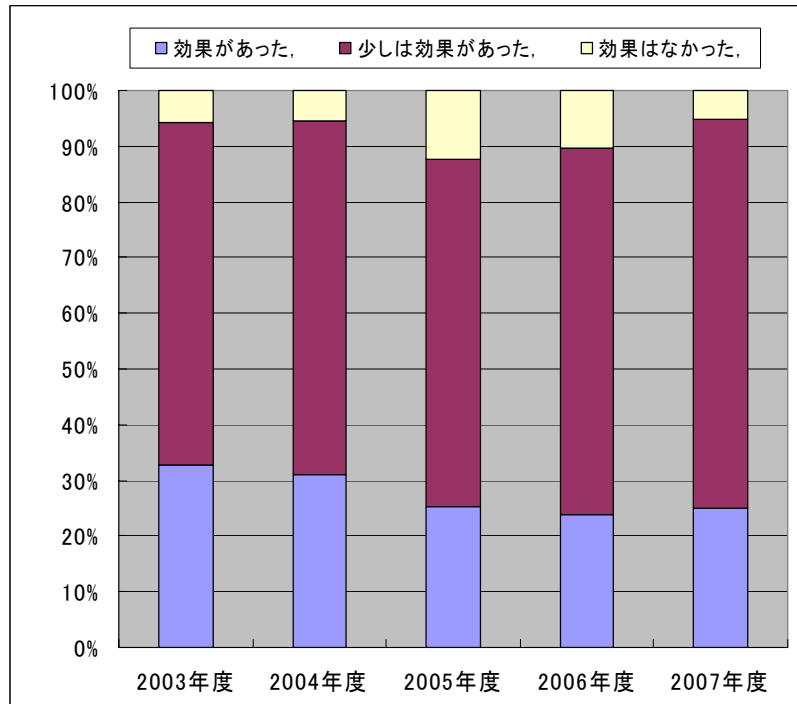
[12-1] T A を担当したことがありますか。

T A 経験者は2003年度の81%をピークに減少傾向にあったが、2006年度に増加に転じ、2007年度は過去最高の82%程に達した。



[12-2][12-1]でA（効果があった）と答えた方：TA活動を通して、学部学生に対して教育的効果があったと思いますか。

「効果があった」とする回答は30%弱、「少しは効果があった」とする回答はおおよそ60% - 70%で二つの回答を併せると90%前後が、TAが学部教育に貢献していると自己評価している。



[12-3][12-2]でC（効果はなかった）と答えた方：その理由は何ですか。

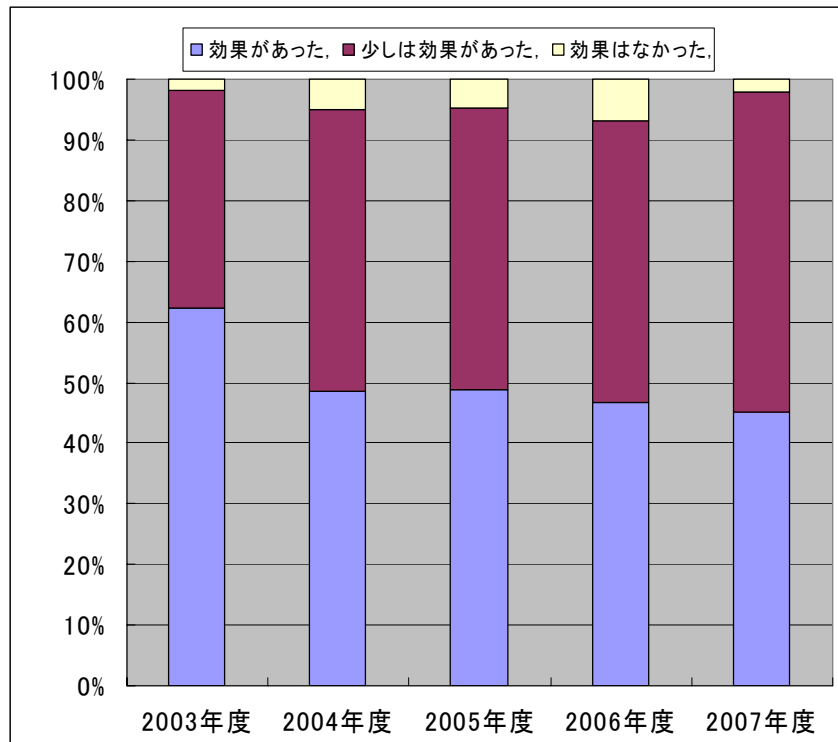
「効果はなかった」とする回答は5%から12%の間を前後しているが、過去3年間は減少し2007年度は5%だった。具体的な回答は以下の通りである。TA活動そのものが補助的であり、学部学生への教育効果を直ちに理解しにくい面もあると思われるが、ほぼ90%以上が「効果があった。少しは効果があった」としている。TA自身が学んでいる面が見られるが、TA制度の有効な活用についてさらに検討を進める必要がある。

A [具体的に： ]

- ・ そこまでTAが教えることはない。
- ・ 学部生には質問に答える程度であるが、納得してもらえなかった。
- ・ 学部生に意欲がみられない。
- ・ TAとして毎回参加したわけではないから。
- ・ 学生と直接関わる機会が少なかった。
- ・ わかってない。
- ・ 学部生と関わりを持つことがなかったため
- ・ レポートは資料を見て書かれていたため
- ・ ないものはない。
- ・ 特に生徒とふれあっていないから。

[12-4][12-1]でA（ある）と答えた方：TA活動は、自分自身にとって教育的効果があったと思いますか。

90%以上が、教育効果があったと答えており、TA活動が充分機能していると思われる。



[12-5][12-4]でC（効果はなかった）と答えた方：その理由は何ですか。

TA活動は自分自身にとって教育的効果がなかったとする回答は2007年度には2%と微少になり、この制度が十分教育的な効果を上げていると判断できる。

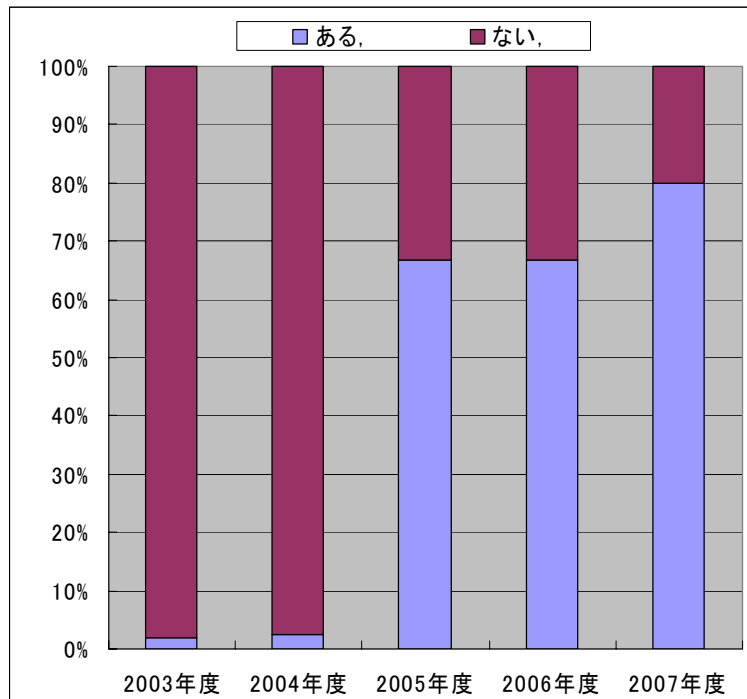
A[具体的に： ]

- ・ 工夫して活動したが、自分自身が何か学んだとまでは言えない。
- ・ 質問を受けなかったのだ。

[12-6] R Aを担当したことがありますか。（博士後期課程の修了生のみ）

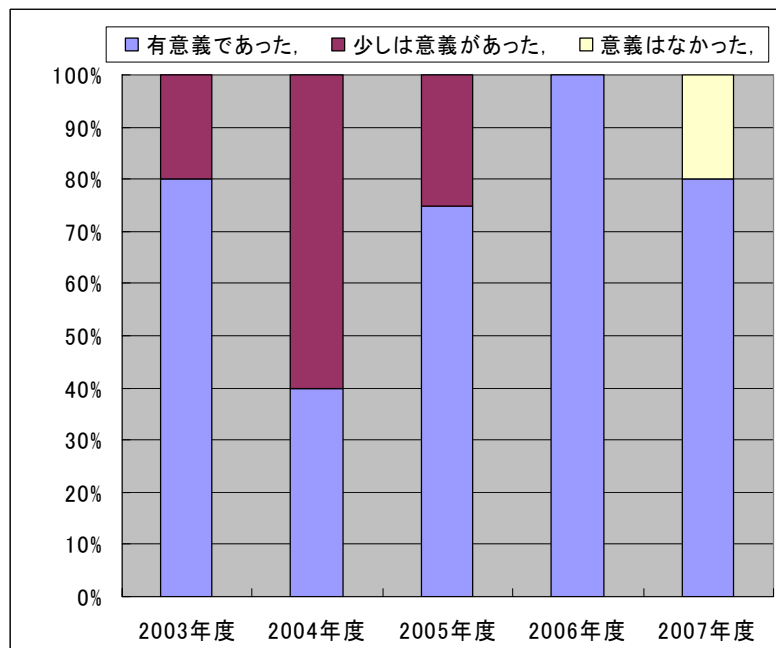
2005年度、2006年度とR Aを経験した博士後期課程の学生はそれまでの数%から70%弱と大幅に増加したが、2007年度にはさらに80%に達し、RA制度が定着しつつある。





[12-7][12-6]でA（ある）と答えた方。RA活動は、自分自身にとって意義があったと思いますか。

2003年度以来2006年度までRA活動の体験者全員がRAを肯定的に考えており、2006年度には100%の博士後期課程学生がRAに「意義があった」と評価している。2007年度にはそれが80%と減少し、20%が「意義がなかった」としている。



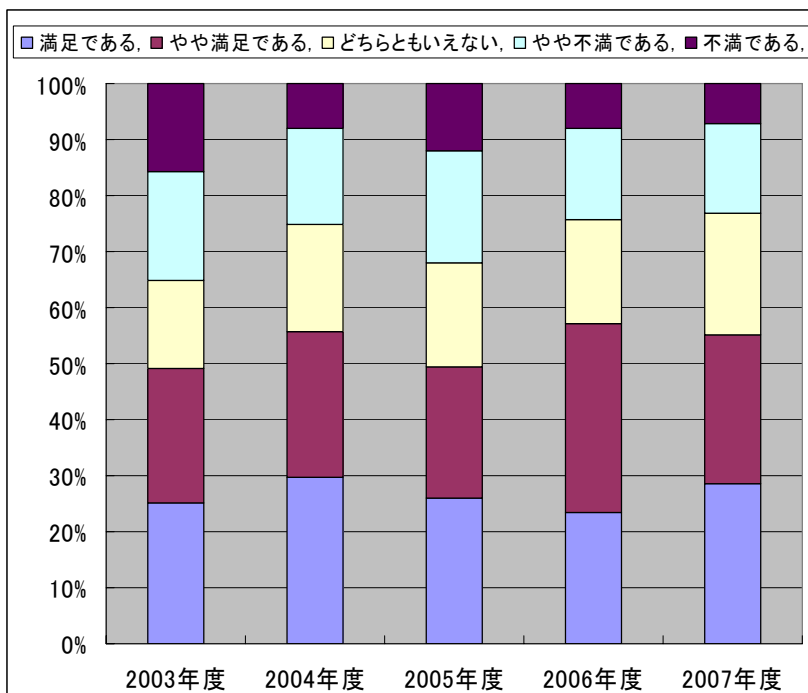
[12-8][12-7]でC（意義はなかった）と答えた方：その理由は何ですか。（博士後期課程の修了生）

A [具体的に： ]  
 （この項目に回答した学生はいなかった。）

[13]施設・設備等についてお尋ねします。

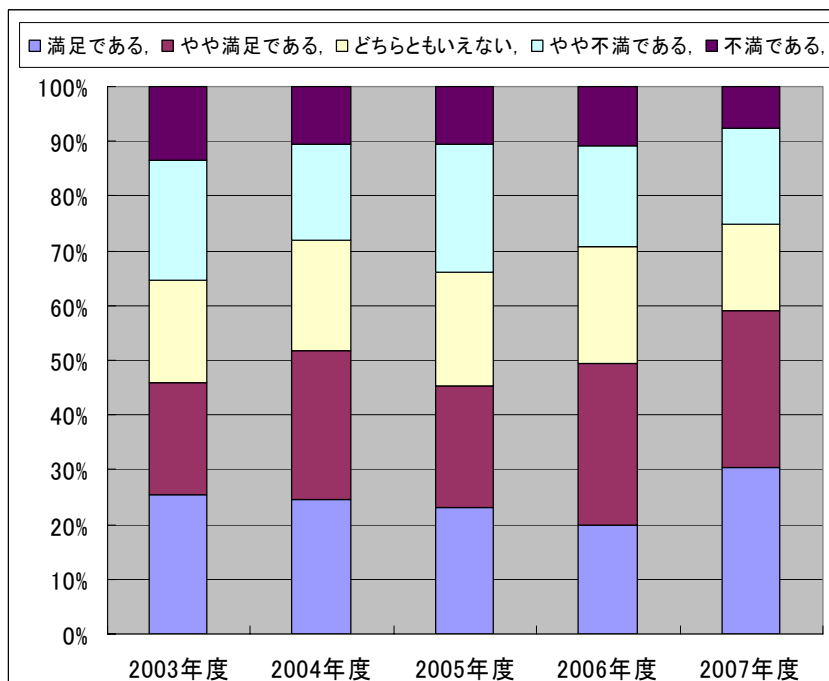
[13-1]研究に使った実験室・実習室のスペースや環境等について満足していますか。

「満足，やや満足」と解答した学生はほぼ半数以上である。2006年度に57%に増加したが，2007年度には55%とやや減少した。実験室・実習室等の施設・設備の整備をさらに進めていく必要がある。



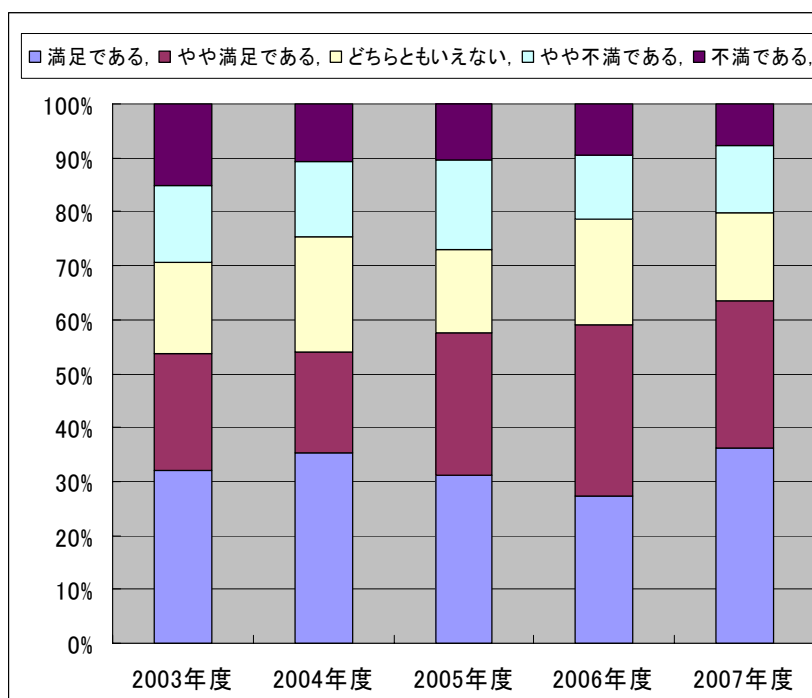
[13-2]研究に必要な設備・装置について満足していますか。

「満足，やや満足」とした回答は2006年度までほぼ50%前後であったが，2007年度には10%増加してほぼ60%になった。これより研究に必要な設備・装置の整備が進んでいることが窺えるが，教育の根幹の問題であり，更に効果的に整備を進めるべく検討する必要がある。



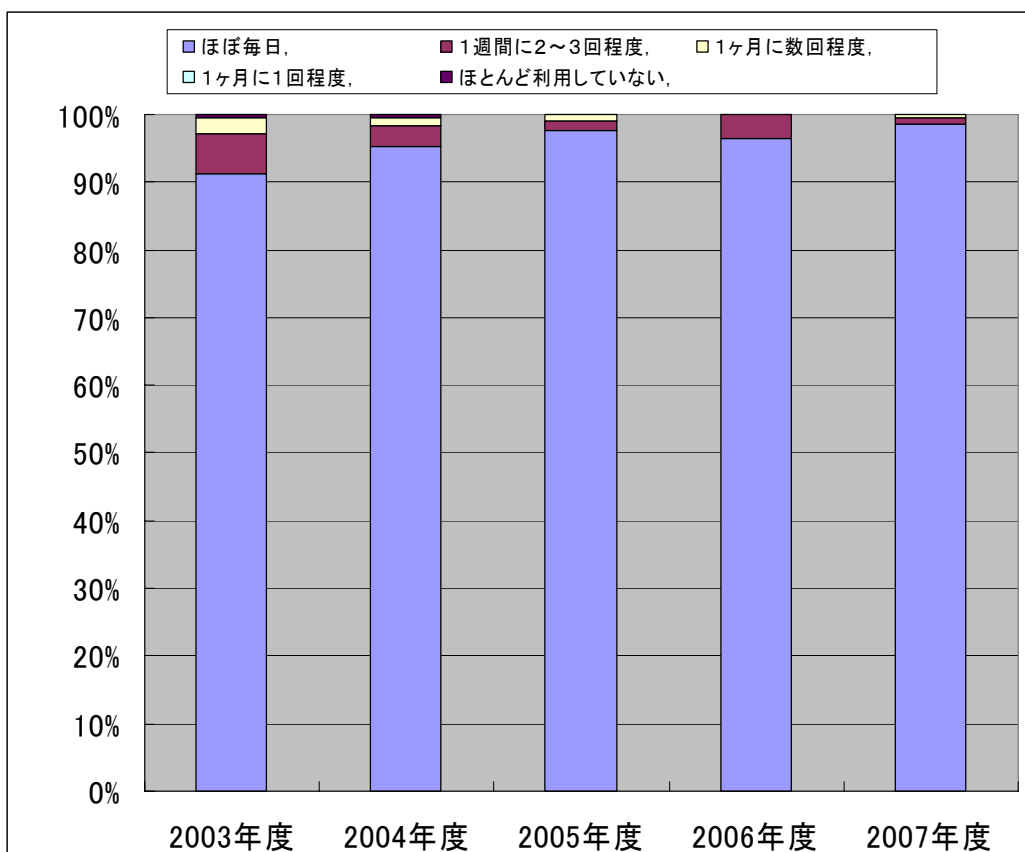
[13-3]研究に必要な情報機器（コンピュータ端末等を含む）の整備状況について満足していますか。

「満足，やや満足」と回答した学生の割合は63%まで着実に増加している。「不満」とした回答は年次毎に減少し2007年度は8%になっている。引き続き整備していく必要がある。



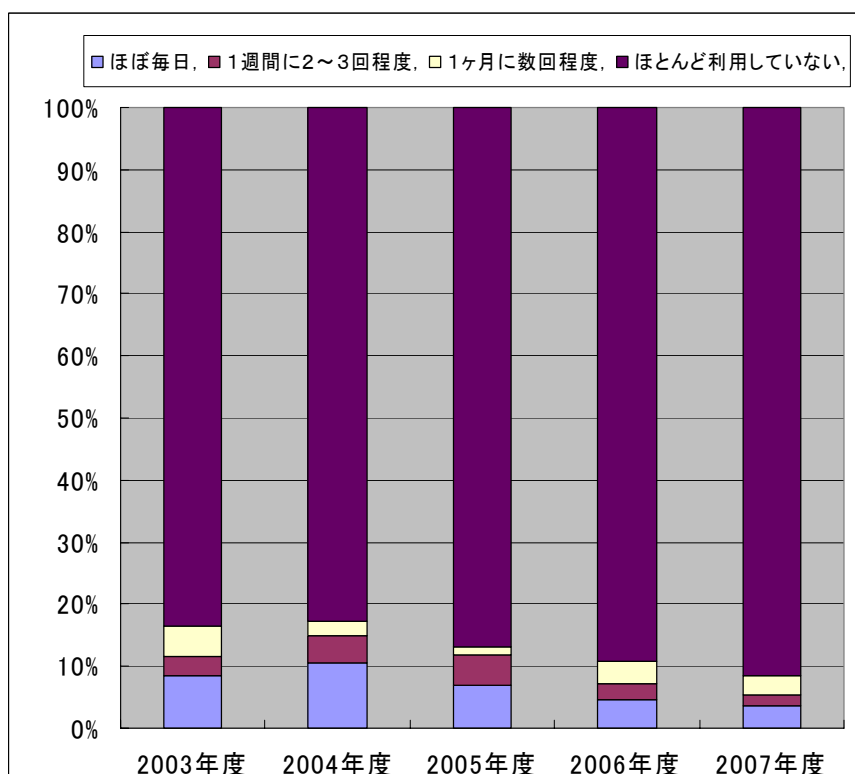
[13-4]インターネットをどの程度利用していますか。

インターネットを毎日利用する学生の割合はほぼコンスタントに増加し98%に達している。また全学生が1週間に2~3回以上インターネットを利用している。



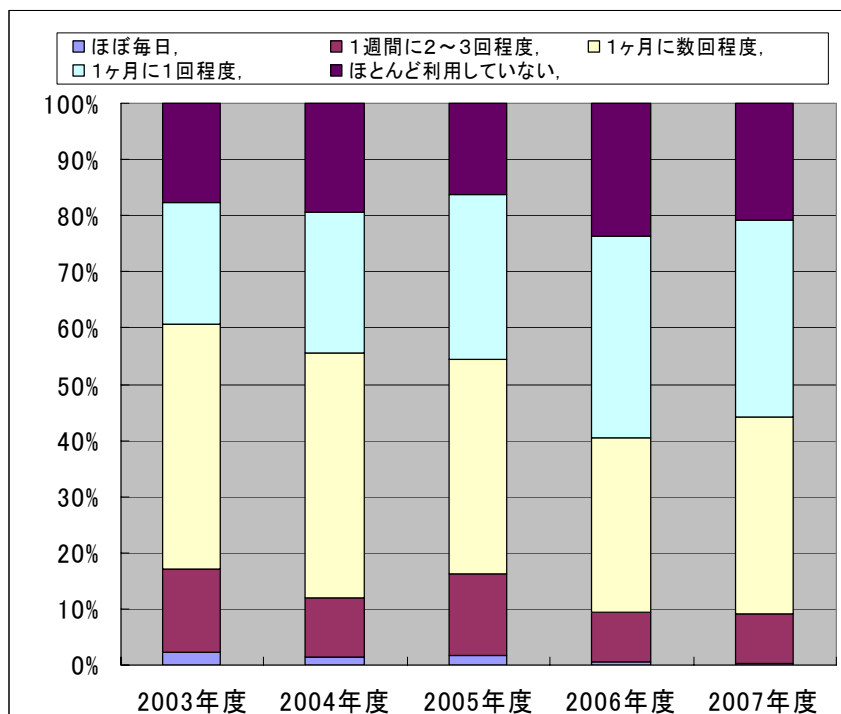
[13-5]情報科学センターが提供しているサービスをどの程度利用していますか。(インターネットや電子メールを除く。)

約85%以上の学生が情報科学センターのサービスを利用していない。これは増加傾向にあり2007年度は90%を超えている。情報科学センターのサービス利用の促進を検討する必要がある。



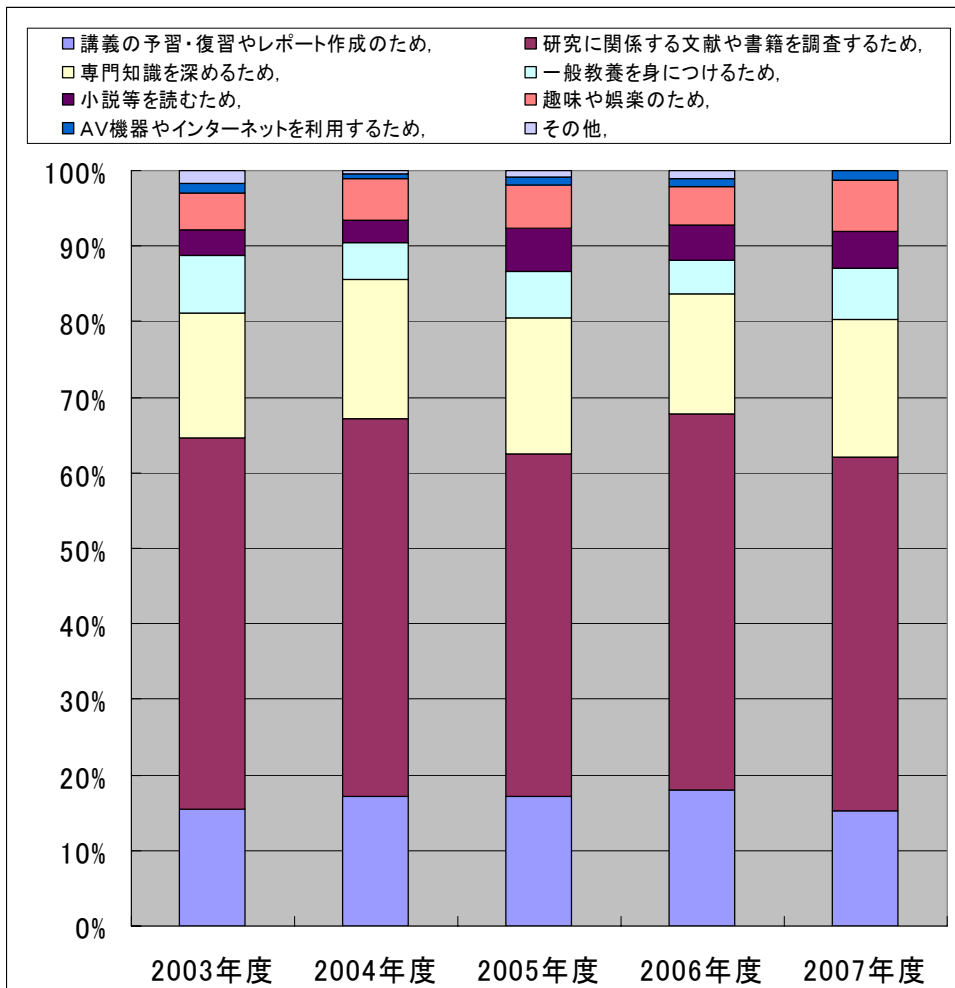
[13-6] 図書館を利用している頻度はどの程度ですか。

1週間に2～3回程度まで日常的に利用している学生の割合は10%台だったが、2007年度には10%を割っている。月に1回程度以上利用する学生の割合は80%前後であり、ほとんど利用しない学生の割合は20%前後である。



[13-7] 図書館を利用する主な理由をお答えください。(複数回答可)

学生が講義，研究，専門知識および一般教養に関して図書館を利用している割合は，それぞれおよそ15%，47%，18%，7%程度で合計は90%程度である。



H (その他) [具体的に： ]  
 (この項目に回答した学生はいなかった。)

## 2.3 教育達成度評価アンケート：雇用主 (2005年3月以前卒業生)

2007年度は、2001年度、2003年度、2004年度、および2005年度に実施したアンケートの結果を踏まえ、卒業生のレベルの変化や卒業生に対する企業の要求レベルの変化を調査することを目的として実施した。企業の評価の経年変化を継続して調べるため、2007年度も2004年度のアンケート項目に添って調査を行った。

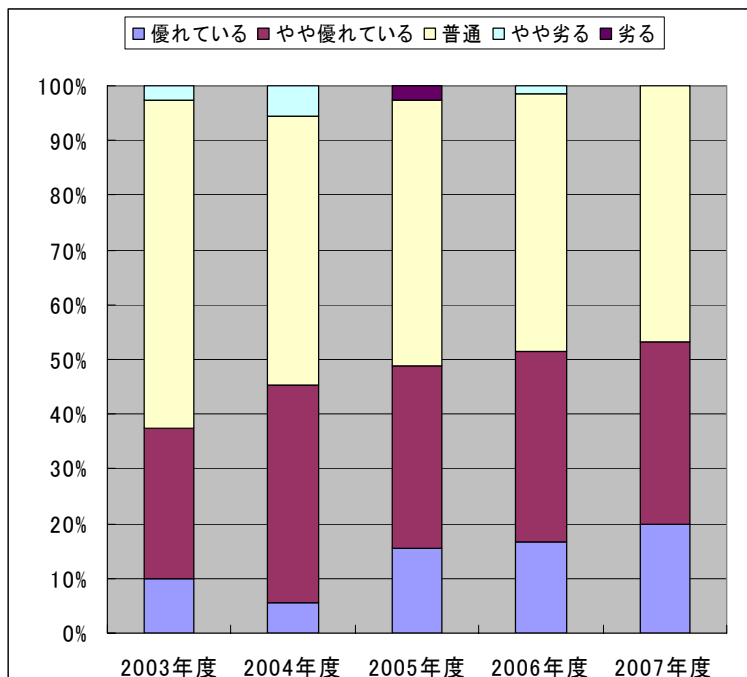
2005年3月期の卒業生のうち企業へ就職した者のリストに基づき、工学部総務係よりアンケートを郵送した。2007年度のアンケート用紙を送付した企業数は170社で、2006年度の送付企業数196社を下回った。2007年度のアンケートについて回答のあった企業は60社で回答率は35.3%であり、2006年度の32.6%より増加した。アンケートの内容や実施方法に継続性が必要と考えられるが、今後回答率を上げる取り組みも必要と考えられる。

以下、各質項目に対するアンケート結果を述べる。

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

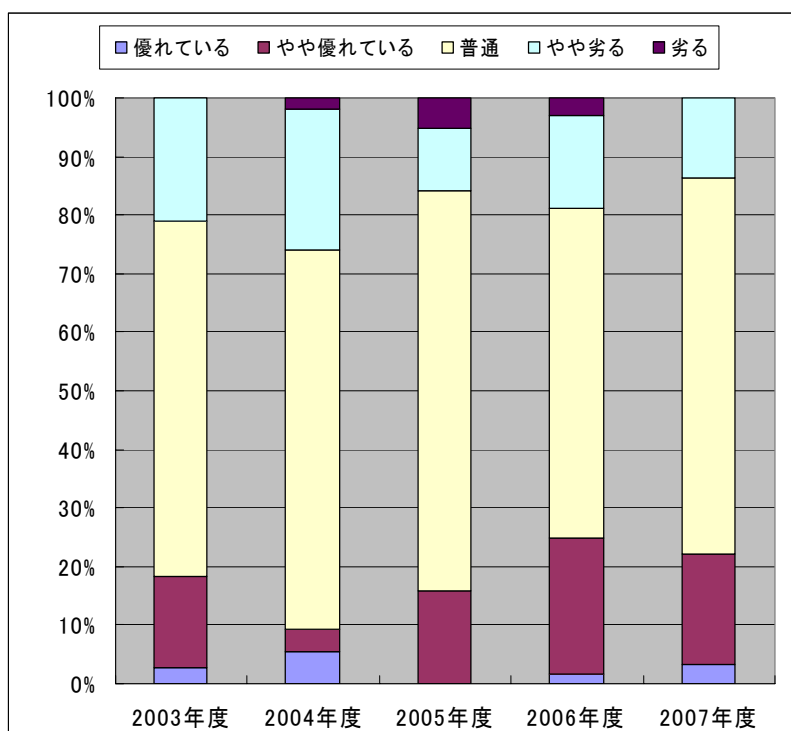
### (1) 卒業生が受けた教養(人文・社会等の一般教養)教育のレベル

「優れている、やや優れている」が2003年度の38%から増加を続け2007年度には53%に達している。



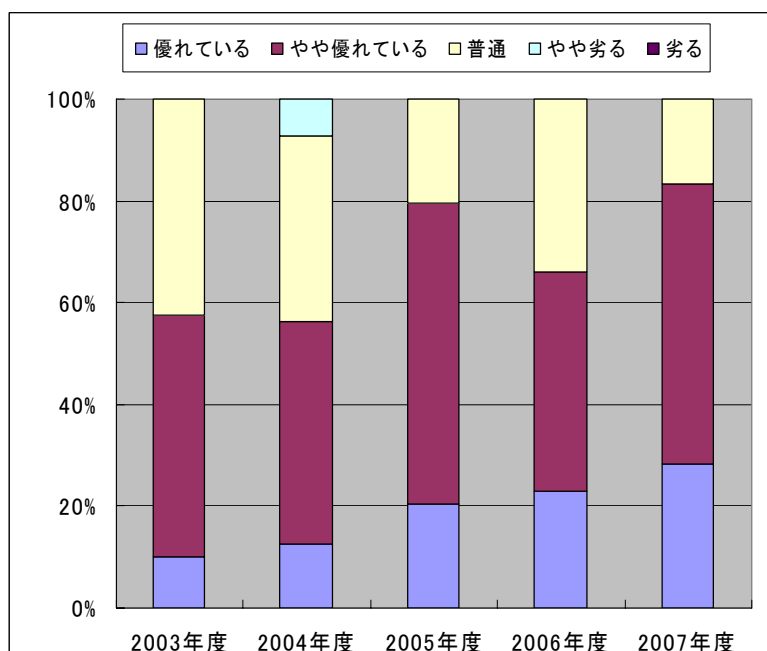
### (2) 卒業生が受けた語学(特に英語)教育のレベル

2004年度には企業の75%、それ以外の年度ではほぼ80%以上が「普通以上」と回答しているが、2007年度には86%に上昇しており、この比率を更に増やす努力が必要である。



### (3) 卒業生が受けた理数系（数学・物理・化学）教育のレベル

2004年度以外、全企業が「普通以上」と回答しているが、「優れている」、「やや優れている」と回答した企業が2005年度にほぼ80%、2007年度は83%に達した。年度ごとに一定でない入学者の母集団の特性に左右される面もあり、一喜一憂はできないが、今後この比率を更に上げる努力が必要である。

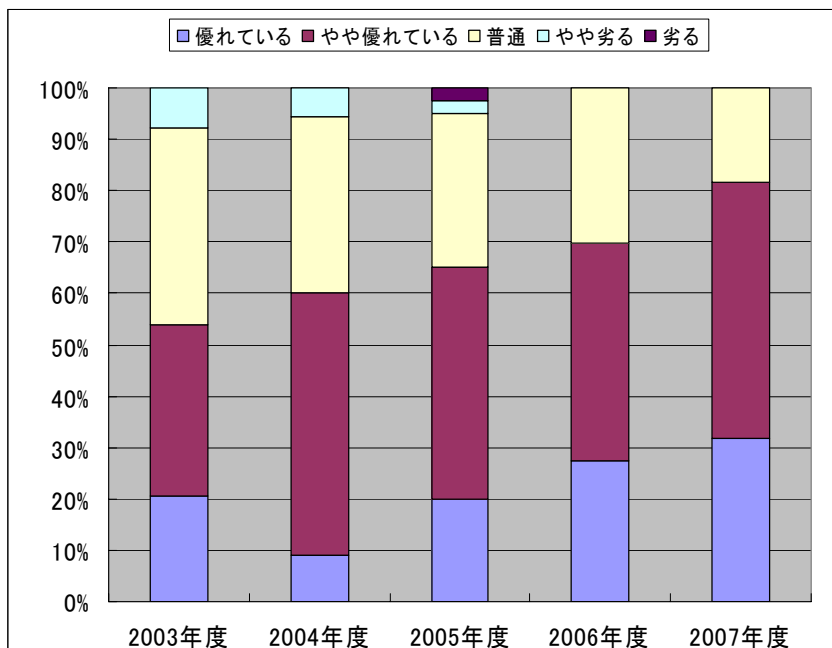


### (4) 卒業生が受けた専門教育のレベル

卒業生の専門教育レベルについては、「優れている、やや優れている」が2003年度の54%から着実

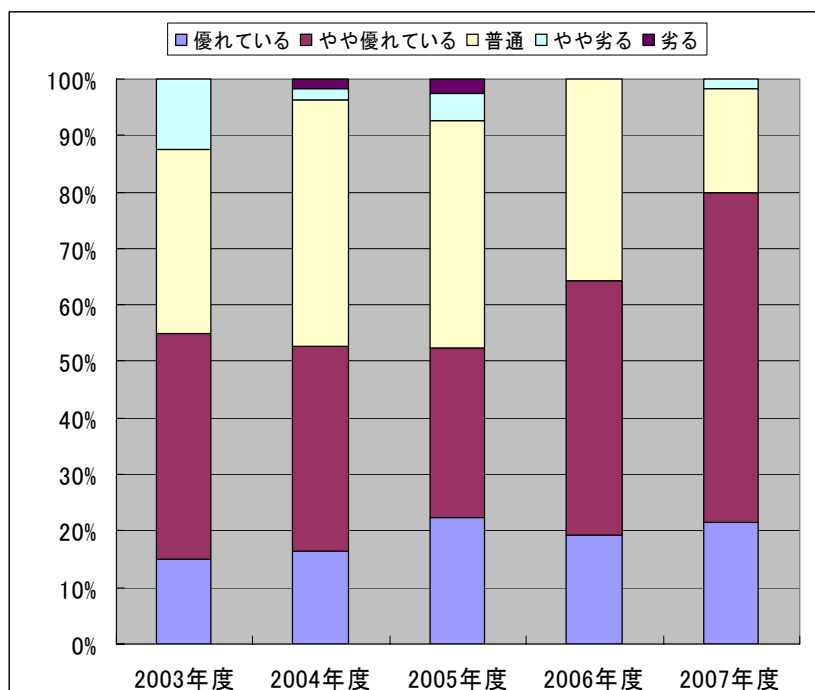


に増加を続け 2007 年度には 82%に達している。



#### ( 5 ) 卒業生が受けた課題探求能力教育のレベル

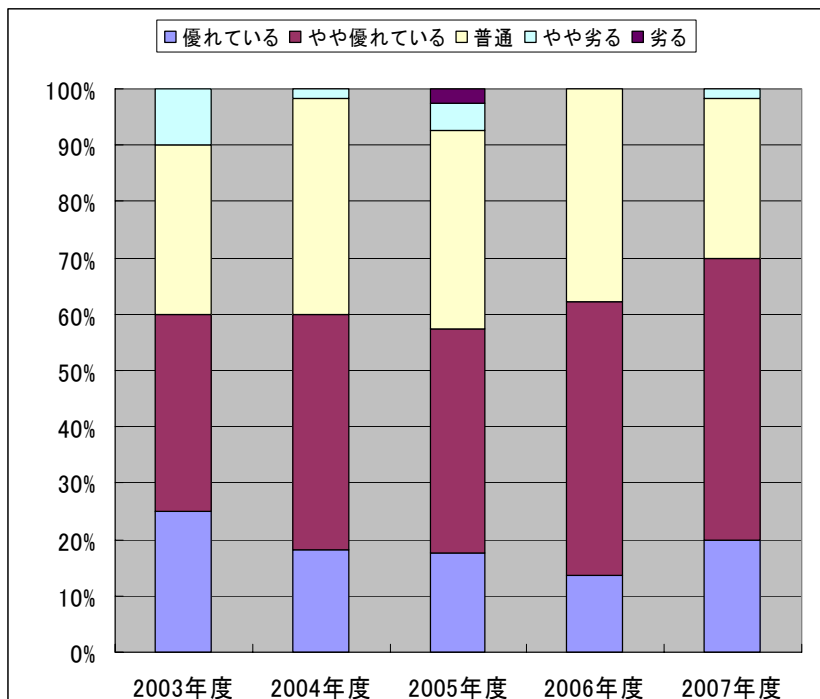
卒業生の課題探求能力レベルについては、「優れている，やや優れている」が 2003 年度～2005 年度の 50%台から 2006 年度 64%に増加し，2007 年度には 80%に達している。課題探求能力の涵養を目指した教育の効果が現れつつあると考えられる。



#### ( 6 ) 卒業生が受けた課題解決能力教育のレベル

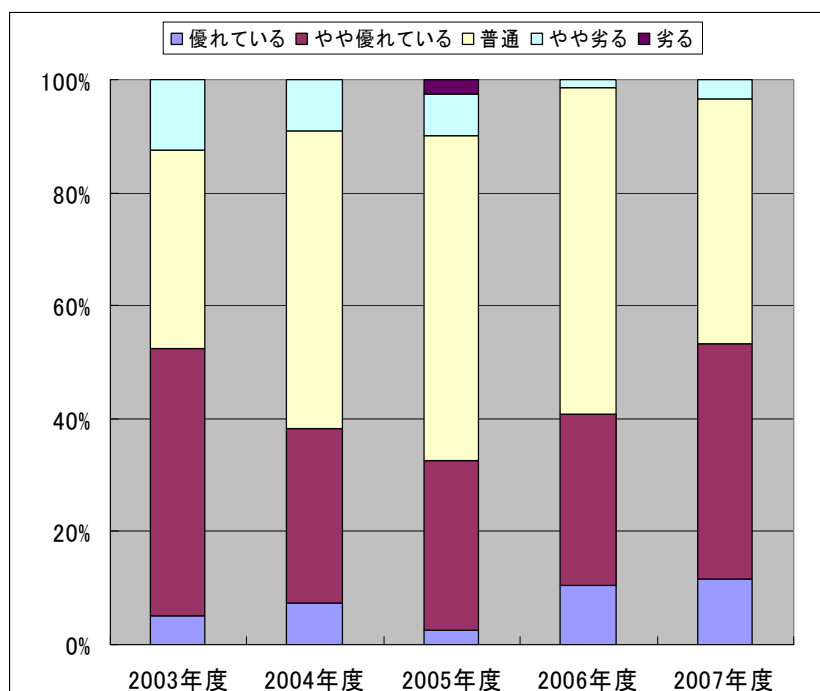
卒業生の課題解決能力については、「優れている，やや優れている」は 2006 年度は 62%まで上昇

し 2007 年度には 70%にまで上昇している。



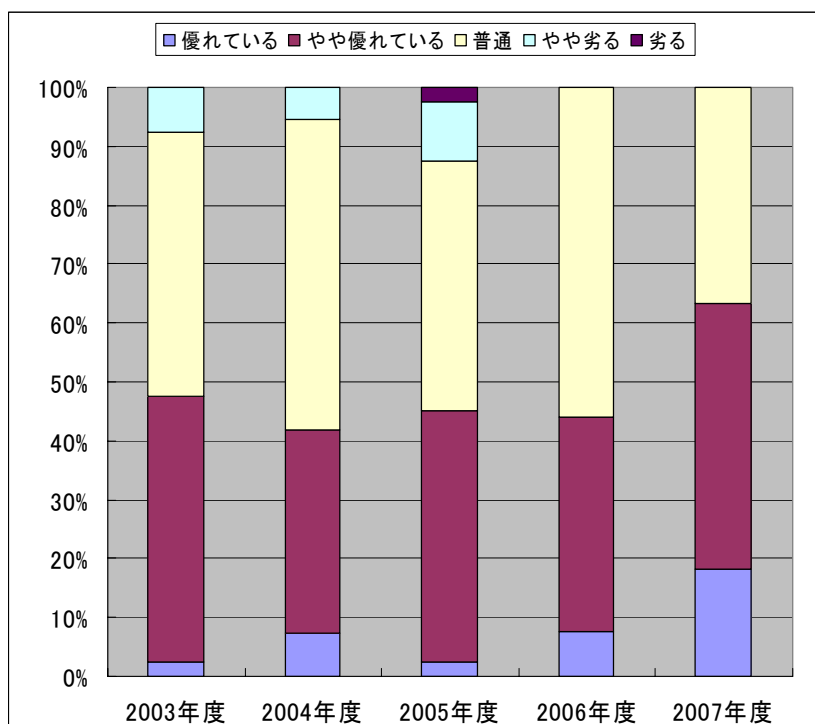
( 7 ) 卒業生が受けた独創性教育のレベル

卒業生の独創性については「優れている，やや優れている」が 2003 年度の 52%から年々減少しているが 2006 年度には 41%に増加し 2007 年度には 2003 年度当時の数字にまで持ち直している。今後も推移を見守る必要がある。



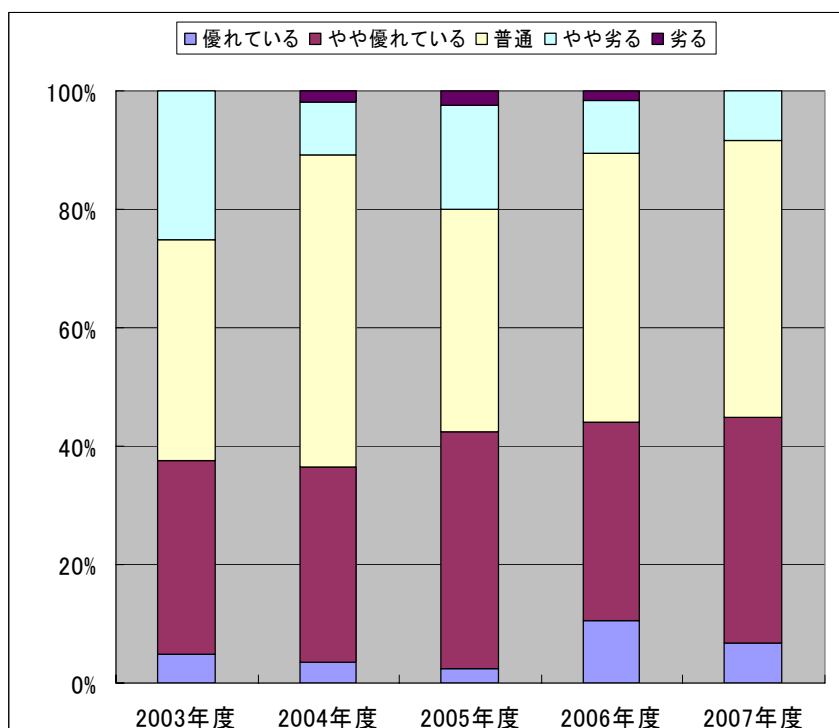
( 8 ) 卒業生が受けた構想力教育のレベル

卒業生の構想力については、「優れている，やや優れている」は2004～2006年度は45%前後を推移してきた。2007年度には「優れている」の回答が増え一気に60%を超えた。



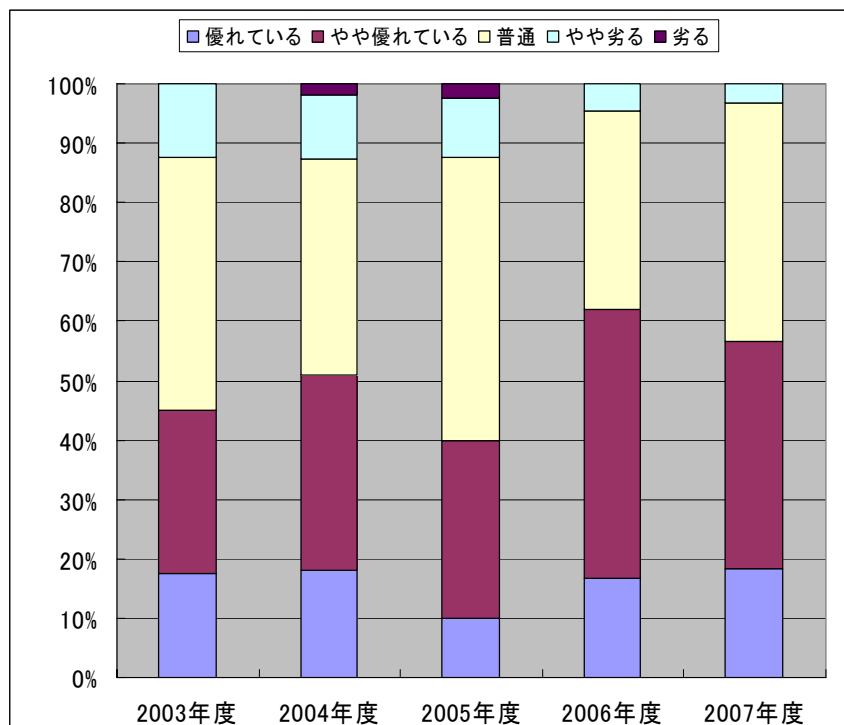
### (9) 卒業生が受けた表現力教育のレベル

2005年度に「普通」以上の評価が2004年度に比較し9%程低下したが、2006年度には再び2004年度と同じ値に戻り、2007年度もほぼ横ばいの状態が続いている。今後も注意して推移を観察する必要がある。



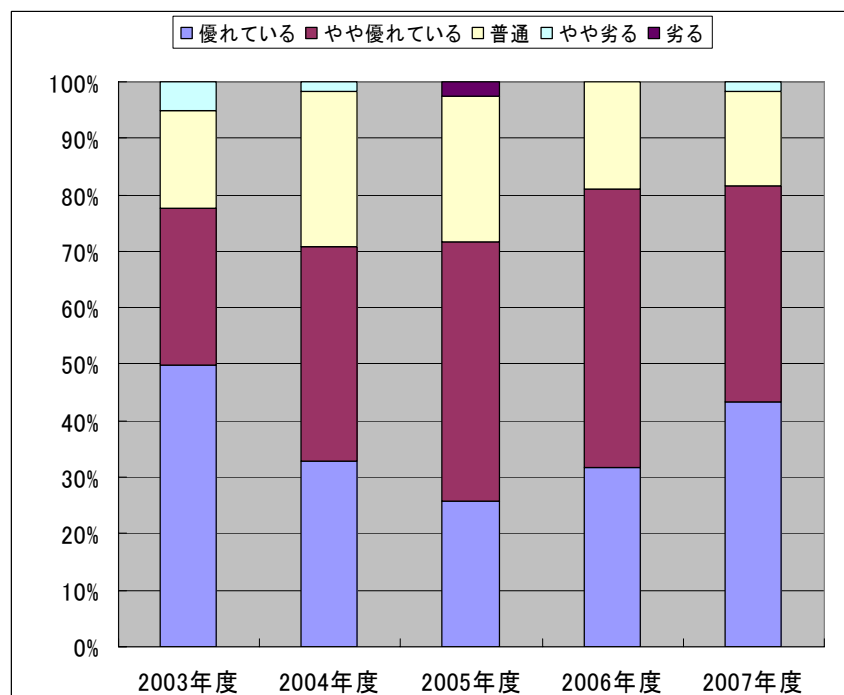
(10) 卒業生が受けたコミュニケーション能力教育のレベル

コミュニケーション能力に関しては「普通」以上の評価（約 85%）にここ 3 年ほとんど変化が見られなかったが、2006 年度は 95%に上昇し、2007 年度もほぼ同じ数字を保っている。この 2 年間「劣る」の評価はなくなり、改善の傾向が見られる。



(11) 卒業生が受けた仕事に取り組む熱意に対する教育のレベル

「普通」以上の評価が 95%以上であり、「やや優れている」以上の評価が 81%に達した。全体として評価は高い。



2. 貴社・貴機関が九州工業大学 工学部 卒業生に望む事項（卒業生の資質等）がございましたらご記入ください。

指摘が多様である。全体的に「真面目」で「熱意」があり「専門性」も持ち合わせているとの評価が多いが、一方で「表現力」、「語学力」、「コミュニケーション能力」、「積極性」の育成への期待が高い。

- ・ 1. コンピュータサイエンスを理解し、応用する能力。プログラミング言語の習得。アルゴリズムとデータ構造。2. 情報システムに関連する、数学および自然科学を中心とした理工学の基礎を理解し、応用する能力。解析学、自然科学：微分積分、ベクトル解析、複素関数論など。代数幾何、確立統計：行列・ベクトルを用いた情報の表現、統計的手法を用いたデータ解析。3. 与えられた課題を解決するための、情報の収集、計画の立案、計画を推進する能力。コンピュータリテラシ（基本的なコンピュータ操作能力、メール、WEB活用）。問題解決能力。情報収集能力。計画立案・遂行能力。
- ・ 仕事に対する取組姿勢、責任感は十分である。できれば、もう少し自分の意見を表現する積極性があれば、さらに評価されると思う。
- ・ 九州工業大学、工学部卒は弊社（長菱設計（株））に17名在籍しており（内訳、50才台=4人、40才台=2人、30才台=6人、20才台=5人）、いずれもそれぞれの職場の重要な核となっております。感謝の気持ちあり、注文点なしです。
- ・ 御校に限らず近年の学生さんはコミュニケーション能力が劣る学生が目立つ傾向にあると考えます。専門分野・専門知識も重要だが、社会人としてコミュニケーション能力の重要性についての意識付けが大切な事と考えます。
- ・ 特にありません。
- ・ 専門分野だけでなく広く興味を持って経験を積んで欲しい。
- ・ 特にございません。
- ・ 満足しています。現状の教育を続けていただけるよう希望します。
- ・ 明るく元気よくプレゼンテーションできる、技術者を目指して欲しい。
- ・ コミュニケーション。プレゼン。話す力。
- ・ 全体的レベルが高く、殊にありません。
- ・ 関東の会社にも興味を持ってほしい。
- ・ 個人的な性格もあると思われるが、対話能力がもうすこしあり、活発であれば更に、評価が上ると思います。
- ・ 積極性。疑問を解決しようとする貪欲さ。学ぶ意欲。
- ・ 語学力のさらなる向上を期待（特に高専から九工大に編入された方）
- ・ 特に国内外における技術環境の変化に対する問題意識を常に有することを求めています。
- ・ コミュニケーション能力の向上
- ・ 特になし
- ・ 物事への取り組み方が教科書通りではなく、その場の状況に応じた対応ができる人。専門分野以外の事にも興味を持つ人。
- ・ 自分の考えを論理的にきちんと相手に伝えることのできるコミュニケーション力のさらなる向上を期待いたします。
- ・ 常に向上心を持って仕事に取り組むことを望みます。
- ・ 問題解決能力、コミュニケーション能力のレベルを更に高めてほしい。
- ・ 九州工業大学卒業生の評価は高いものがあります。モチベーションも同期入社他校生徒の見本となっています。
- ・ 自分の意見を言える積極的で、元気な人を望みます。
- ・ 専門教育や一般教育の習得レベルはかなり高いと感じていますが、英語力はそれらに比べるとやや劣ります。今や海外とのコミュニケーションは当たり前なので、この点を更に高められればと考えます。
- ・ 特になし
- ・ 課題に対して、指示以上のものを、難しい問題でも出してくれる。積極性、リーダーシップを期待する。

- ・ 大変優秀な人材が多い学校と認識しております。今後は更に海外に目を向けた、語学力のスキルが備れば、世界で活躍できる人材が多くなるものと存じます。
- ・ 企業は組織であり、一人で問題解決するケースは少ない。表現力、コミュニケーション能力が低いと、個人のレベルが多少高くても良い結果に結びつかない。企業内にいる「その道の経験者」からの援助が十分に受けられない。
- ・ 当社では、貴学の卒業生には、全国で活躍して頂いており、満足しております。各個人毎に特性があり、資質については、特別な要望はございません。
- ・ 設備設計能力の高い人を望む。
- ・ 英語能力
- ・ アンケート項目で表現すれば、仕事に取り組む熱意、コミュニケーション力、を重視します。但し、専門分野の基礎学力は、当然身につけているという条件下です。
- ・ 特に貴大学に対してということではありませんが、企業集団行動の中での最低限のモラル、自ら学び自ら考える力、社会一般常識を持った豊かな人間性を望みます。
- ・ 勉学も大切ですが、学ぶことから何かを得た人となって社会に出てほしいと思います。
- ・ AutoCADの実習を取り入れてもらいCAD図に慣れてほしい。
- ・ 特にありません。

### 3.九州工業大学 工学部の教育に対して、ご意見・ご要望(企業が必要とする人材の専門分野、専門知識等)がございましたらご記入ください。

要望・意見は多岐に亘る。キーワードにすると、「語学力」、「情報基礎」、「IT」、「専門性」、「ソフトウェア」等が挙げられる。

- ・ 1. 語学力(特に英語)教育の充実を期待します。2. さらにまた、TOEIC等、一般的に評価可能な指標・資格を取得されて卒業されることを望みます。
- ・ 今後とも、学業だけでなく、礼儀等社会人として必要な資質への教育にも力を注いでいただけたらと思います。
- ・ 主体的に課題をみつけて解決する力が欲しい。多くの失敗と成功体験をさせて欲しい。実習、演習などの実技面を増やして欲しい。
- ・ 入社4年目の土木社員が当現場で勤務していますが、性格が明るく仕事に対して前向きで、当社JV社員及び協力会社社員、作業員まで広範囲において信頼を受けています。優秀な技術者になると確信しています。
- ・ 特にありません。
- ・ 組込みソフトウェア開発技術、ハードウェア設計技術ができるようになって欲しい。
- ・ 可能であれば機械系の方へ3D・CAD等の基本が履習できればと存じます。
- ・ 全大学に言える事ですが、きまったパターン(型)をぬけだす考え方、つまり世の中には答え・正解は無いこともある現実を教えてあげてほしい。
- ・ シーケンサーの用途が分かること。C言語又はVBをマスターしていること。
- ・ 鉄鋼メーカーからの要望として、1)材料系では、上工程(製鉄・製鋼、熱延)の基礎知識に強い人材の育成。2)機械系、電気系の学生にも鉄鋼の魅力を教えて欲しい。
- ・ ナブテスコ(株)は制御機器メーカーとして建設社会工学及び総合システム工学科のものを除く全分野についての専門分野のものを求めています。
- ・ 特になし
- ・ 大学で学んだ知識を実際の業務で反映させるのが難しい。プログラムにしても机上で確認できるレベルが多く実際に物を動かすレベル(自ら環境を作ってDebugできる)までできる様にて欲しい。
- ・ 講義と実践を融合した教育を今後も継続して実施していただければ幸いです。
- ・ 現状、中国へ進出する企業が増加しています。英語力も必要ですが、中国語についても今後必要となるのではと思っています。
- ・ 弊社採用活動に御協力頂き感謝しております。ここ数年、電気の採用を行っています。今後も電気分野の人材の需要は高いと考えます。
- ・ 専門英語の教育を行ってほしいと思います。
- ・ 本アンケートの内容はあくまでも弊社社員だけを見て記入していることをご了解願

ます。

- ・ 特になし
- ・ 工業炉のメーカーですが、現在、問題になっています、地球環境の問題に絡んで、省エネとか、リサイクルとかの基礎理論の勉強をされていて欲しい。
- ・ 特にございません。
- ・ 化学の基礎。化学工学（結局生産するのは化学設備である。）
- ・ 専門性もさることながら、本当の意見での基礎学力を付け欲しいと感じております。当社は商社であり、巾の広い知識も求められますので深くよりも、広く、基礎能力を有する人材に期待する事が多くあります。
- ・ 物づくり教育。T E教育や、工場改善教育。新しい物づくりの考え方。
- ・ 化学工業に興味をもつ、電気計装及び機械工学分野の学士を要望致します。
- ・ 上述の通りで、特別の専門知識は不要と考えます。学業の中で広い一般知識を身につけ、専門教育の中で「人には負けない」分野が一つでも多くあれば良いと考えます。
- ・ 学ぶことが好きになるような教育をしていただくと、会社に入ってから良い方向に向かうと思います。専門的な事を多く学ぶより深く学ぶことを望みます。
- ・ 特にありません。
- ・ 学ぶことが好きになるような教育をしていただくと、会社に入ってから良い方向に向かうと思います。専門的な事を多く学ぶより深く学ぶことを望みます。
- ・ 特にありません。

#### 4. 全体としての傾向

2007年度においては「普通」以上の評価が全ての項目において85%を越えた。語学以外の10項目は95%を超え、なかでも、一般教養、理数系、専門、構想力の4項目は100%であり、企業の卒業生に対する評価は高いと判断される。

「劣る」とする評価が全項目から消え、「やや優れている」以上の評価が、すべての項目についての評価に上昇傾向がみられる。

全般において卒業生は企業から高い評価を得ていると判断される。しかし、一方では、語学と表現力に「普通」の評価が残り、この項目をいかに解決するかという課題が残されている。

用語の説明

○ 課題探求能力

ひとつの課題を深く追求する能力。上司の期待が1であれば1.5倍、2倍等の結果を出す。ただし、結果を出す時間については考慮しない。

○ 課題解決能力

ひとつの課題に対し、現在所有する情報・知識を用いて、与えられた期限内に結果を出す能力。

○ 独創性

既存の概念にとらわれず新しいアイデアを創出する能力。

○ 構想力

既存の技術・装置を組み合わせて新しいシステムを構成する能力や、先を見る能力。

○ 表現力

資料作成能力やプレゼンテーション能力。

○ コミュニケーション能力

交渉能力や対話能力。



## 2.4 教育達成度評価アンケート：雇用主 (2005年3月以前修了生)

2007年度は、2001年度、2003年度、2004年度および2005年度に実施したアンケート結果に基づき、修了生のレベル変化や修了生に対する企業の要求レベルを調査することを目的として実施した。大学院教育に対する企業の評価の経年変化を調べるため、2007年度も2004年度のアンケート項目に添って調査を行った。

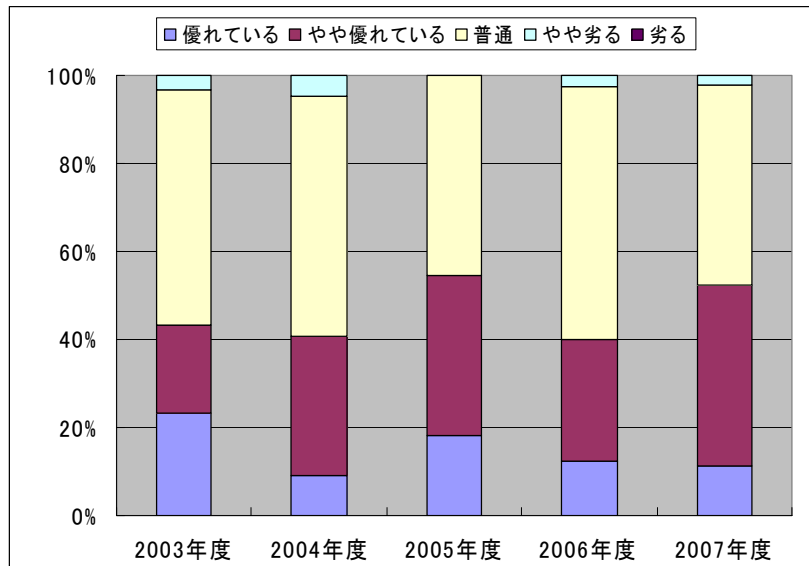
2005年3月期の修了生のうち企業へ就職した者のリストに基づき、工学部総務係よりアンケートを郵送した。2007年度のアンケート用紙を送付した企業数は159社で、2006年度の送付企業数167社を下回った。2007年度のアンケートについて回答のあった企業は44社で回答率は27.7%であり、2006年度の24.0%より増加した。アンケートの内容や実施方法に継続性が必要と考えられるが、今後回答率を上げる取り組みも必要と考えられる。

以下、各質問について、アンケート結果を述べる。

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

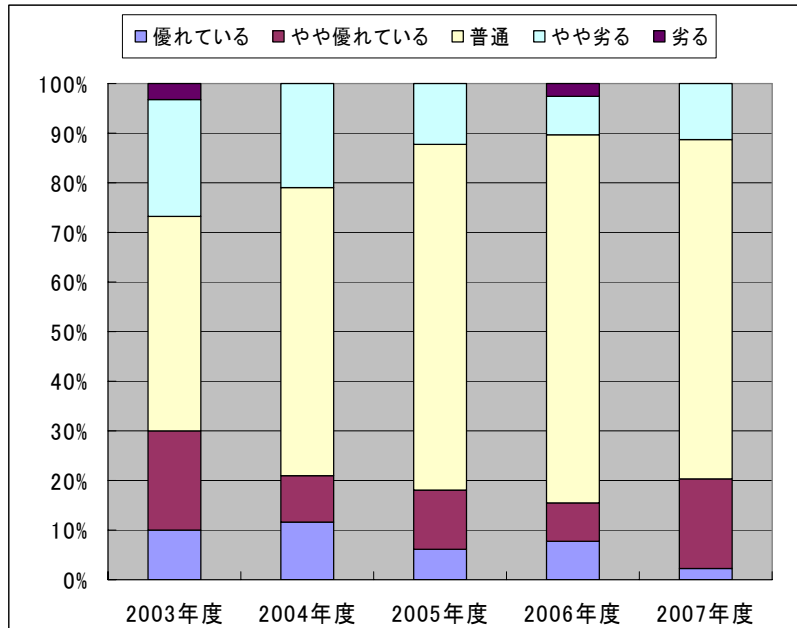
### (1) 修了生が受けた教養(人文・社会等の一般教養)教育のレベル

「やや優れている」「優れている」の回答が2005年度には50%に達したが、2006年度には40%に低下した。しかし2007年度には再び50%以上に戻している。全体として企業側の評価はこのレベルに定着しているとみられる。



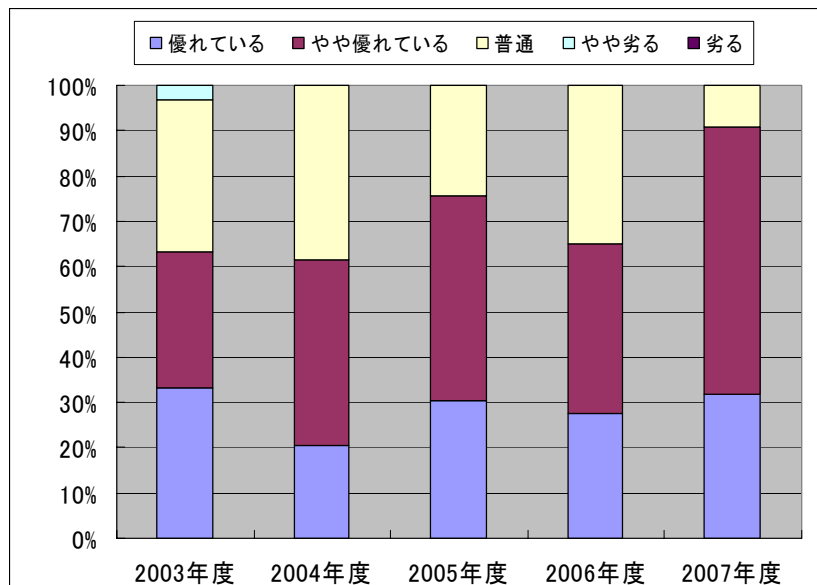
### (2) 修了生が受けた語学(特に英語)教育のレベル

「普通」以上の回答が90%に増加し、「やや劣る」の回答が減少した。企業側の評価に改善が見られる点では評価される。しかし、「やや優れている」以上の回答は2006年度までは低下の傾向がみられが、2007年度は再び20%にまで戻している。この数値は教養教育、理数系等の他の学力に比較するとかなり低い数値である。企業の英語に対しての実用的観点からの期待度の高さがわかる。実用的観点からの対策の練り直しが必要であると考えられる。



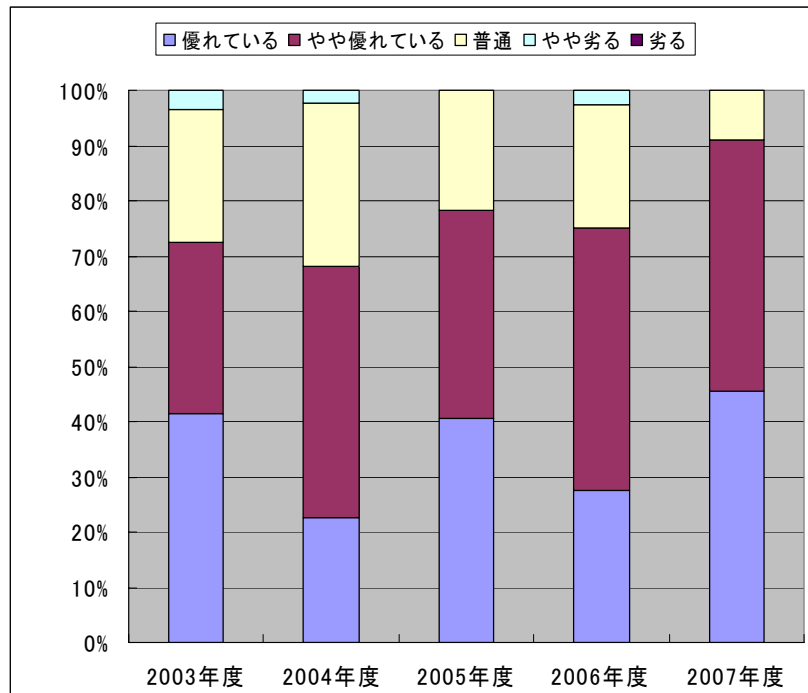
(3) 修了生が受けた理数系(数学・物理・化学)教育のレベル

2007年度は、「やや優れている」「優れている」の合計が90%に達し、昨年度より約25%上昇している。企業側の評価は高いと判断される。



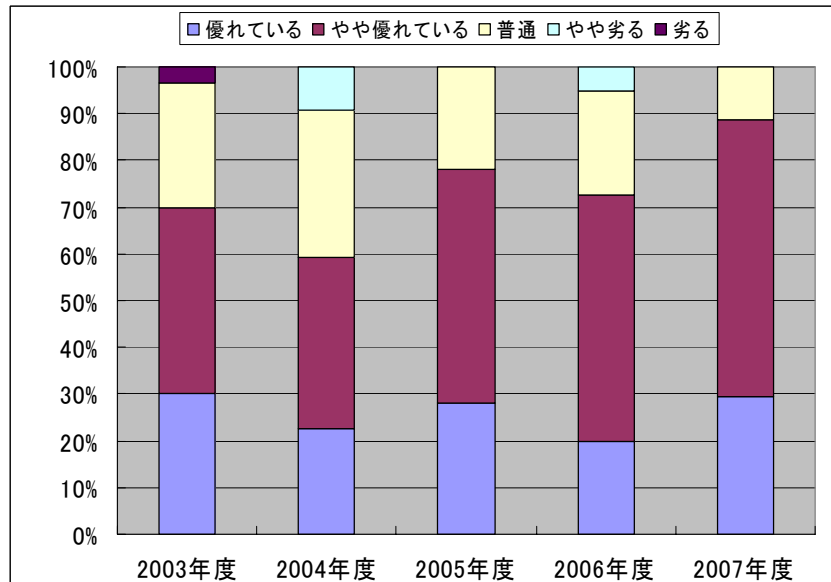
(4) 修了生が受けた専門教育のレベル

昨年度は「やや劣る」が数%あったが今年はその消えた。「優れている」が2006年度は28%であったが、今年度はそれが45%にまで伸びている。「やや優れている」「優れている」の合計が90%に達しており、企業側の評価が極めて高いことがわかる。



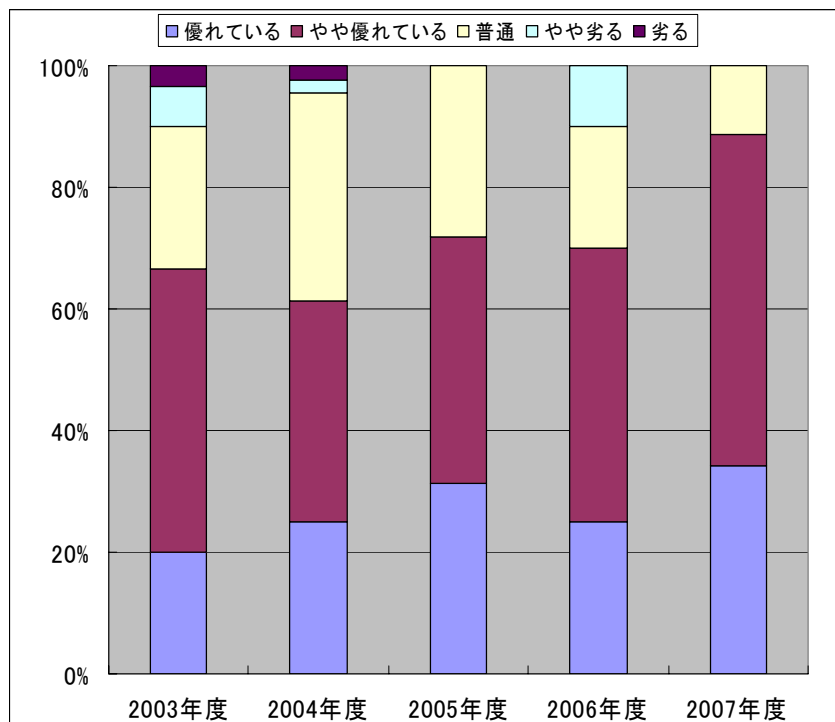
#### (5) 修了生が受けた課題探求能力教育のレベル

2007年度は、昨年度の「やや劣る」の回答はゼロとなり、「やや優れている」以上の回答が全体の89%を占めている。企業側の評価は高いと判断される。



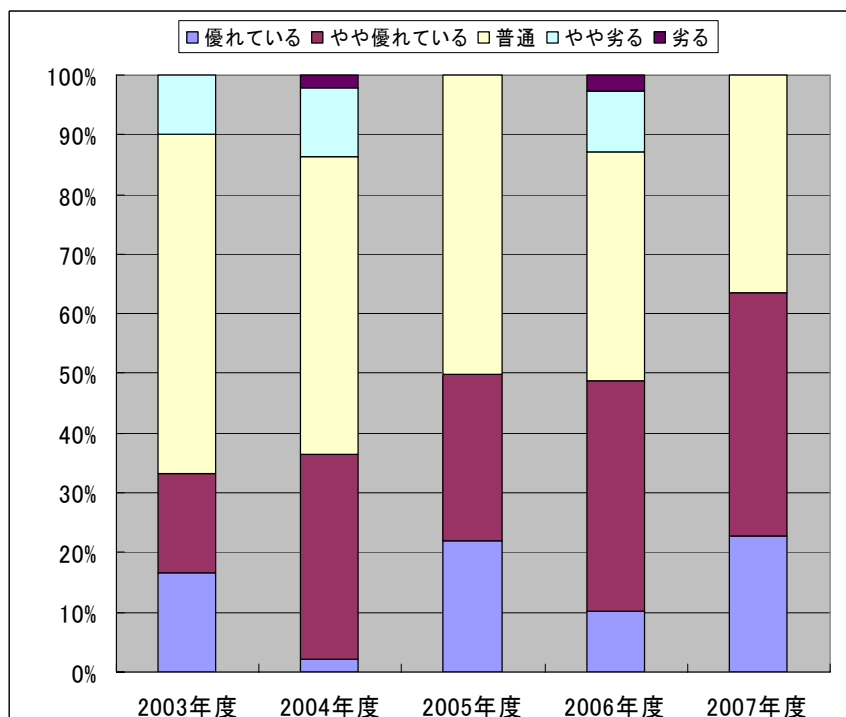
#### (6) 修了生が受けた課題解決能力教育のレベル

今年度は、昨年度は見られた10%の「やや劣る」の回答がゼロになり、その分「やや優れている」以上の回答が89%に達した。これは「やや優れている」はほぼ昨年並みであるが、「優れている」の回答が加算されたことに因るためだと分かる。企業側の評価は高い。



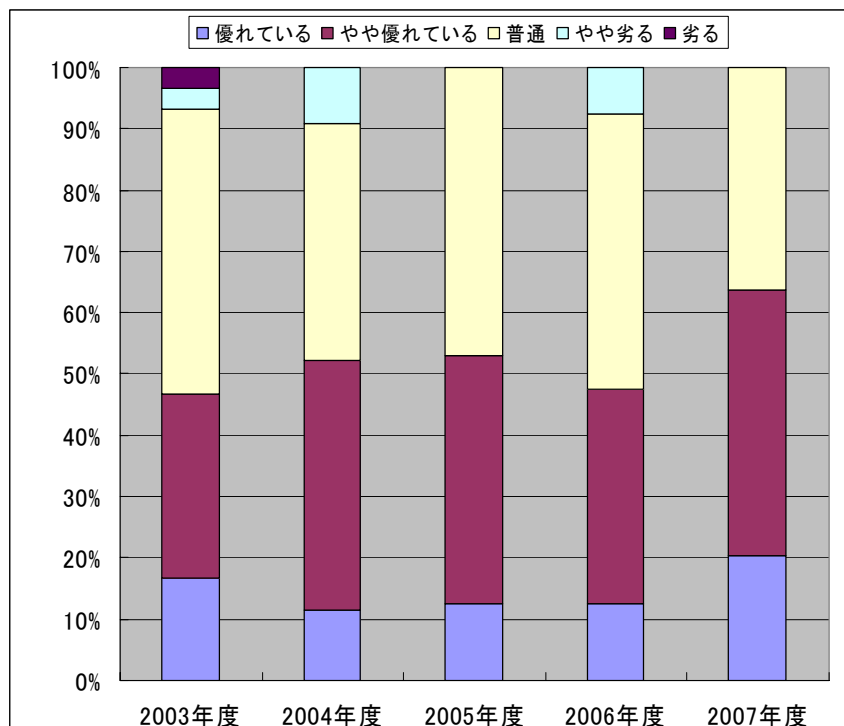
#### (7) 修了生が受けた独創性教育のレベル

2005年度は「普通」以上の回答が100%になったが、2006年度は再び「やや劣る」、「劣る」が2004年とほぼ同じレベルに増えた。しかし、2007年度には「やや劣る」、「劣る」が消滅し、「やや優れている」以上の回答が64%を占めている。「普通」の回答はそれほど減少していないが、企業の評価は上がりつつあることが分かる。



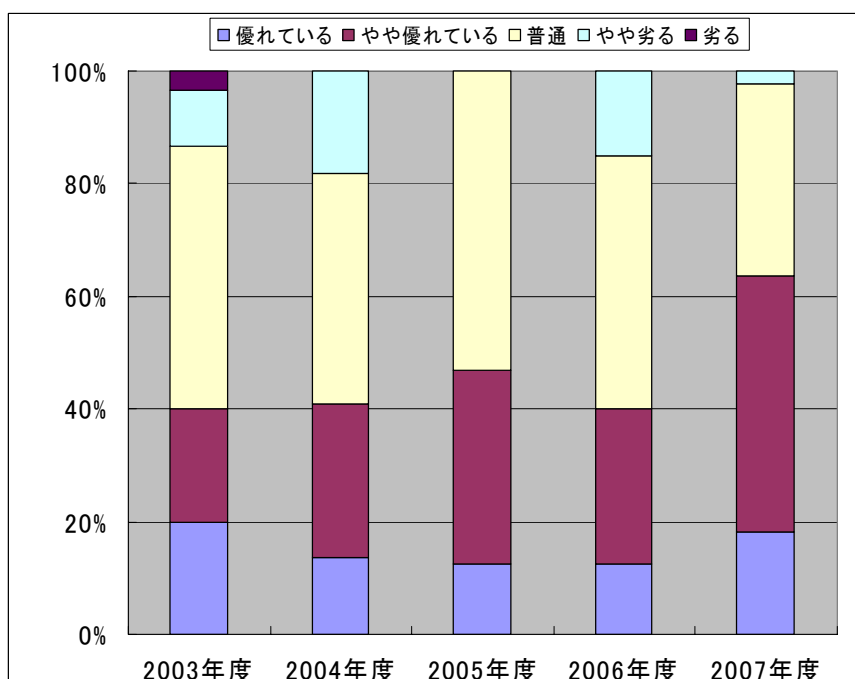
#### (8) 修了生が受けた構想力教育のレベル

2005年度は「やや劣る」以下の回答はゼロで、「普通」以上の回答が100%であったが、昨年度は「やや劣る」、「劣る」の回答が8%あったが、今年度はゼロとなった。また「やや優れている」以上の回答も従来より、10%程度伸びている。今後もこの数値を維持することが重要であろう。



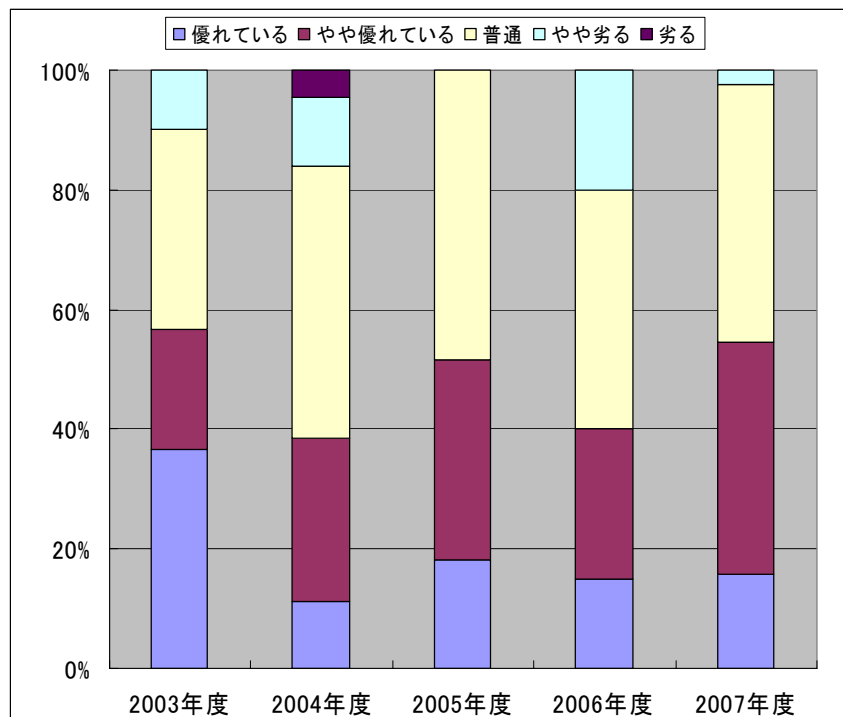
### (9) 修了生が受けた表現力教育のレベル

これまで表現力は本学の修了生の苦手の項目の一つと指摘されており、「やや劣る」「劣る」の回答が年々増加し、2005年度は一挙にこれがゼロとなるが、昨年には再び2004年レベルに低下した。しかし、今年度は「やや優れている」が22%上昇している。今後はこの数値を維持していく努力が必要である。



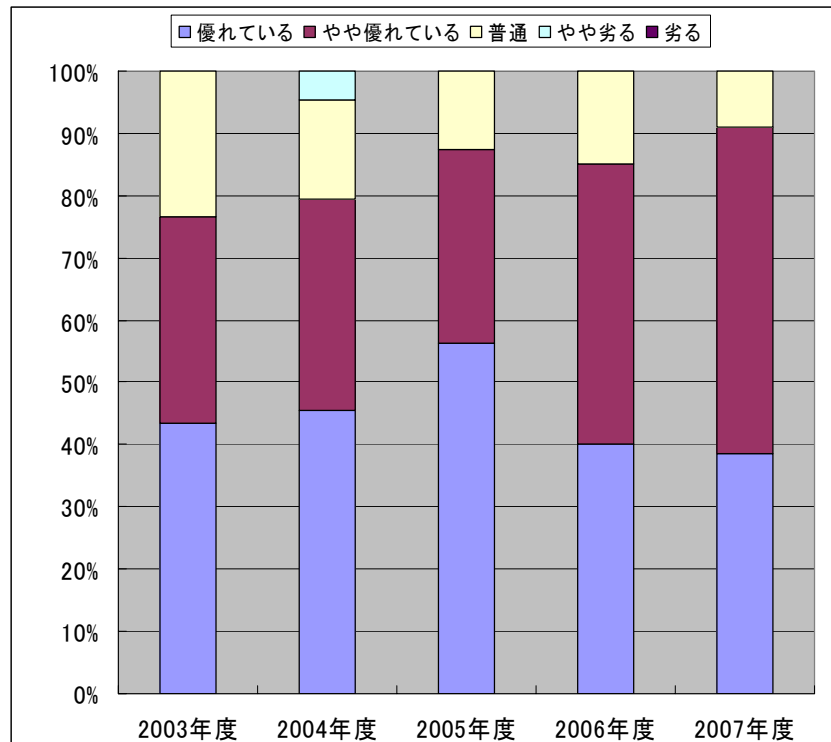
#### (10) 修了生が受けたコミュニケーション能力教育のレベル

コミュニケーション能力は本学修了生の苦手な項目と指摘されている。2007年度は「やや優れている」が2005年当時のレベルにまで上昇するが、依然「やや劣る」とする回答は残った。今後は「やや優れている」以上を維持する工夫が必要である。



#### (11) 修了生が受けた仕事に取り組む熱意に対する教育のレベル

2005年度以降「やや優れている」「優れている」の回答はほぼ安定して85%程度の数値を確保しているが、今年度は91%にまで達している。本学の修了生は企業から非常に高い評価を受けている。



2. 貴社・貴機関が、九州工業大学 大学院工学研究科 修了生に望む事項（修了生の資質等）がございましたらご記入ください。

キーワードとして列挙する。「語学力」、「積極性」、「社会人基礎力」、「コミュニケーション」、「意欲」、「問題解決能力」等。

- ・ 我々ゼネコンは物をつくる企業なので、現場でどのような段取りをすれば、早く、安く、良い物を安全に、できるのかを真剣に取組めるような人でないと、技術が身についていかない。
- ・ 論理的思考能力
- ・ 教養のみならず、1. 目標に向かってしっかりと計画を立てて取り組む姿勢。2. チャレンジしようという意欲。3. 仲間と力を合わせ物事をやり遂げようとする熱意を望みます。
- ・ 報告書や発表など表現力のレベルアップ。貴修了生のみならず全般的に言えることだが、報告や発表の起承転結が不十分で自分の仕事を他人に判らせることが下手。コミュニケーション能力のレベルアップ。個人の資質に依る所が大きいと思うが...
- ・ この2年修了生に入社してもらっているが、仕事に対する姿勢はたいへん評価されるものがある。教育レベルも弊社が望んでいるレベルにあり、今後社内でも期待される人材である。
- ・ 特にありません。
- ・ 学部生コメントと同様。問題解決能力、コミュニケーション能力のレベルを更に高めて欲しい。
- ・ 貴学ご出身の方々は、まじめに粘り強く仕事に取り組む姿勢が社内高く評価されております。今後も学生の方々のこうした点を伸ばす教育をお願い致したいと存じます。
- ・ 就職活動が年々早期化しているが、修論テーマを仕上げる最も大切なM1・M2の時間でしっかりと知識の掘り下げをして頂きたい。
- ・ 語学力のさらなる向上を期待。プレゼンテーション能力
- ・ 何事に対しても積極的に取り組めること。特に未知の技術領域に対して挑戦する気概などに期待します。
- ・ 特に国内外における技術環境の変化に対する問題意識を常に有することを求めています。

ます。

- ・ 基礎学力の充実を求めます。
- ・ 特にありません。
- ・ 修了生の皆様には日々ご活躍いただいております。今後も期待のおける存在となっております。熱心に専門を追求する能力を備えられた修了生の方にこれからもぜひご縁がありますことを希望いたします。
- ・ 現場密着となって問題解決にあたり、現象を論理的に分析できる能力。生産現場とのコミュニケーションが図れる、協調性、バイタリティ、積極性。英語、中国語の語学力またはそのための勉強意欲。
- ・ 対人コミュニケーション力
- ・ 経産省が提示した、「社会人基礎力」の中で特に、「考え抜く力」の養成が必要と感じています。「考え続ける力（姿勢）」と言い換えてもよいと思います。
- ・ 語学スキルがあれば申し分ございません。
- ・ 卒業された皆様は明るく積極的で責任感あふれている方が多い。グローバルに活躍しようという目的を持って成長してもらいたい。
- ・ 専門分野の基礎的な知識とコミュニケーション能力がベースと考えております。また、物事（専門的な内容を含め）をわかりやすく、説明する能力を備えていれば尚ありがたいと考えております。引き続き優秀な方のご推薦をお願いします。

### 3.九州工業大学 大学院工学研究科の教育に対して、ご意見・ご要望（企業が必要とする人材の専門分野、専門知識等）がございましたらご記入下さい。

キーワードとして列挙する。「コミュニケーション能力」、「IT」、「語学力」、「専門知識」、「課題解決能力」等。

- ・ あたり前の事ですが、土木は土と水の影響が大きく、コンクリートや鋼材を利用し、構造物を築り上げるのが基本であるので、その基本をしっかりと教えていただければ問題ありません。
- ・ 化学工学、反応工学
- ・ 申し訳ありません。異動してきたばかりで貴校の教育に関して熟知しておりません。教育に関するコメントは控えさせていただきます。化学業界は機械、電機系の人材を強く要望しております。弊社に限らず、業界発展のためにご協力お願い申し上げます。
- ・ 国内企業はいやが応でも海外との関係（技術協力、競争、進出...）を持たざるを得ない状況にある。英語教育に力を入れて欲しいと思う。
- ・ 例年御校よりご応募頂いております学生に関しまして技術力、コミュニケーション能力共に非常に高いと伺っております。昨今、技術力はあるもののコミュニケーション能力に劣る学生が多い印象を受けますので、引き続き研究活動を通じてコミュニケーション能力の高い方のご応募をお待ちしております。よろしくお願い致します。
- ・ 語学力特に英会話に関しては、今後益々重要性が増してくるので、大学、大学院でも相応の教育が求められると思われる。尚、東大大学院の講義はすべて英語であると聞いているが、このレベルでないにしてもスキルが必要であろう。
- ・ 学業への教育とともに、社会人としてのマナー等の資質についても今後も注力いただけたらと思います。
- ・ 日本企業といえども海外での売上が多きな比率を占める企業が多くなってきております。海外の文献などを読めるような知識の修得にも力を入れて頂きたいと存じます。
- ・ 特になし
- ・ 鉄鋼メーカーからの要望として、1)材料系では、上工程（製鉄・製鋼、熱延）の基礎知識に強い人材の育成。2)機械系、電気系の学生にも鉄鋼の魅力を教えて欲しい。
- ・ 特定の分野、知識等はありません。何にでも興味を持ち、疑問があればとことん考え抜く様な素養を身に付けられる、カリキュラムを期待します。
- ・ ナブテスコ（株）は制御機器メーカーとして建設社会工学専攻のものを除く全分野についての専門分野のものを求めています。
- ・ 特にありません。



- ・ インターンシップの受入先として当社も追加して欲しい。
- ・ 一つのことを究める力を持ち、人間としてもバランスのとれた（コミュニケーション力の高い）人材育成に期待をいたしております。
- ・ 機械工学（生産技術）（設備設計，開発）機械設計を実践で経験した人，製図（C A D）の素養。電子，制御工学系（設備制御，センシング技術）金属材料，冶金工学系
- ・ 特になし
- ・ 概ね企業ニーズに合致した教育を受けてきていると感じています。
- ・ 基礎的科目も，その応用と合わせて教えないと身に付きません。工夫をお願いいたします。
- ・ 今後ともよろしくお願い致します。
- ・ コミュニケーション能力だけではなく粘り強くやり通す意志を持てるように。

#### 4. 全体としての傾向

2007年度のアンケート調査の修了生の評価では，全ての項目で「やや優れている」の回答が増加し，「やや劣る」の回答が全項目で減っていることが分かる。またそれと整合して「劣る」の回答がゼロとなった。「理数系教育」「専門教育」の項目では「やや優れている」で90%以上の高い評価を受けており，これは卒業生からの評価よりさらに10%以上高いことが分かる。今後は「やや優れている」以上の評価が60%を切っている，語学（20%），教養，表現力，コミュニケーション能力の強化が課題であろう。

用語の説明

○ 課題探求能力

ひとつの課題を深く追求する能力。上司の期待が1であれば1.5倍，2倍等の結果を出す。ただし，結果を出す時間については考慮しない。

○ 課題解決能力

ひとつの課題に対し，現在所有する情報・知識を用いて，与えられた期限内に結果を出す能力。

○ 独創性

既存の概念にとらわれず新しいアイデアを創出する能力。

○ 構想力

既存の技術・装置を組み合わせて新しいシステムを構成する能力や，先を見る能力。

○ 表現力

資料作成能力やプレゼンテーション能力。

○ コミュニケーション能力

交渉能力や対話能力。

## 2.5 教育達成度評価アンケート：卒業生 (2005年3月以前卒業生)

中期目標・中期計画に基づいて、2005年度から卒業後3年が経過した企業へ就職した卒業生へのアンケートを実施した。

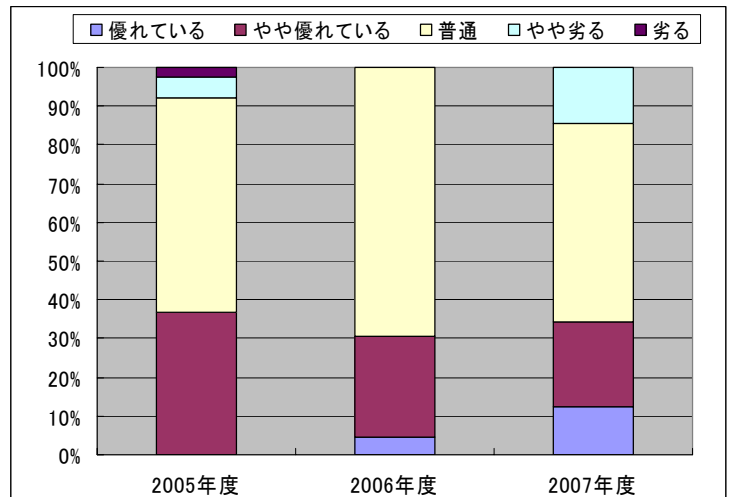
アンケートは、2005年3月期の卒業生のうち企業へ就職した者のリストに基づき、工学部総務係より郵送を行った。しかし、アンケート用紙を配布した企業に就職した卒業生は、191名(170社)で、回答のあった卒業生は41名であり、回答率は21.5%であった。今回のアンケート実施方法としては、問題ないと思えるが、よりアンケートの実施時期は早めて、人事担当者へ直接渡す枚数を増やす等、回答率を上げる必要があると考えられる。

以下、各質問について、アンケート結果を述べる。

### 1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

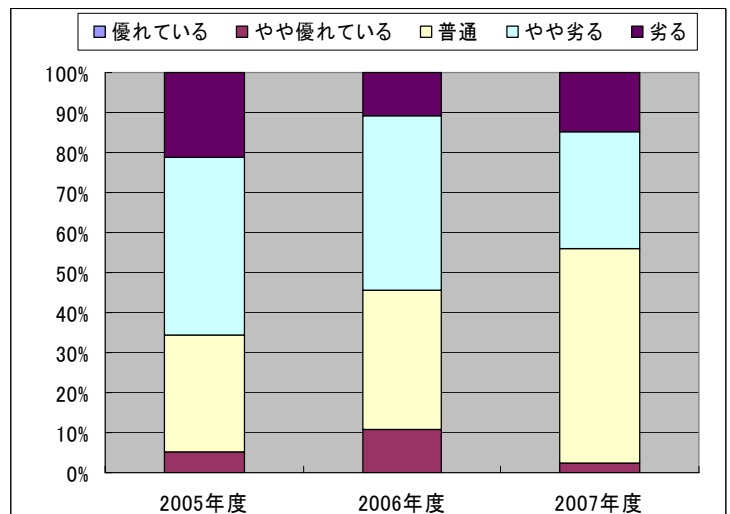
#### (1) あなたが受けた教養教育のレベル

昨年度は「普通」以上の評価が100%であったが、今回約85%に低下した。教養教育レベルは概ね肯定的評価を受けていると判断されるが、「やや劣る」の原因を明らかにし、対策を講じる必要がある。但し、「やや優れている」以上の評価の比率は昨年、一昨年から大きな変化はないが、今後さらに向上させるための改善が必要である。



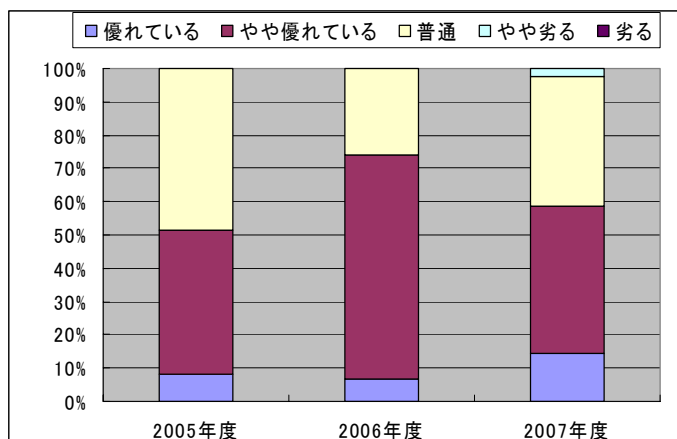
#### (2) あなたが受けた語学(とくに英語)教育のレベル

「普通」以上の評価は56%で、「劣る」「やや劣る」の評価が44%であり、2006年度よりは僅かに改善されているが、「劣る」の比率は約15%と高く、今後の対策が必要である。



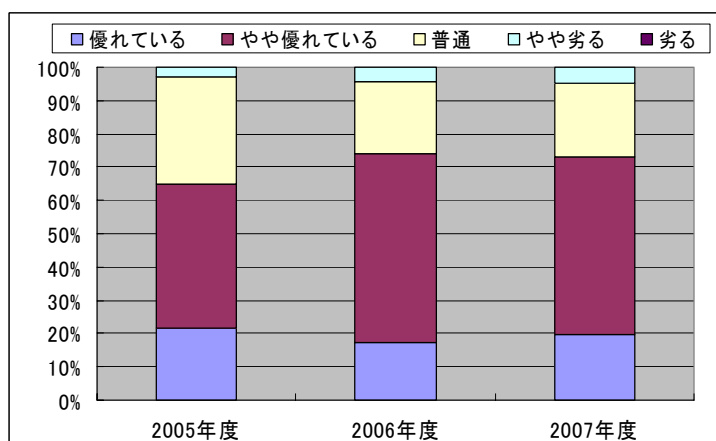
### (3) あなたが受けた理数系教育のレベル

2006年度は70%強の卒業生が「優れている」「やや優れている」の評価を与えたが、今回それが約59%に低下し、従来はなかった「やや劣る」も2.44%であった。卒業生の理数教育システムに対する評価は高いが、今後は「優れている」の評価を一層向上させるための工夫が課題であろう。



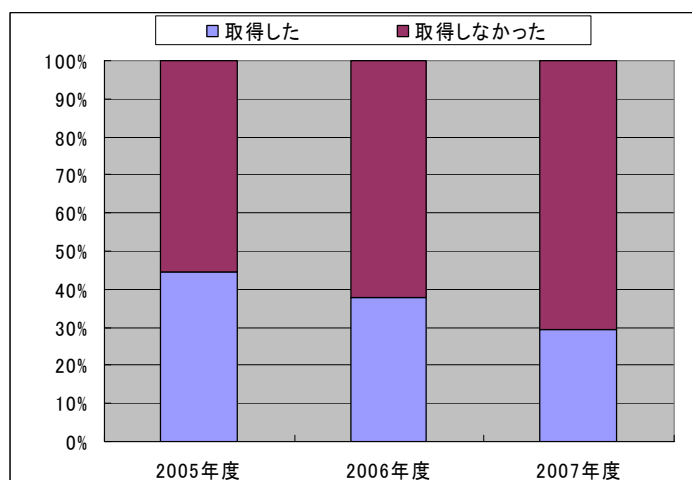
### (4) あなたが受けた専門教育のレベル

「優れている」で20%、「やや優れている」以上で54%、「普通」以上で95%の評価を得ている。非常に高い評価が得られていると判断されるが、一方で約5%の「やや劣る」の評価がなされている。課題として受け止める必要がある。



### (5) あなたは入社後資格を取得しましたか？

約30%の卒業生が入社後資格を取得しているが、この比率は年々低下の傾向にある、今後、資格に関する意識を高める教育も必要と考えられる。



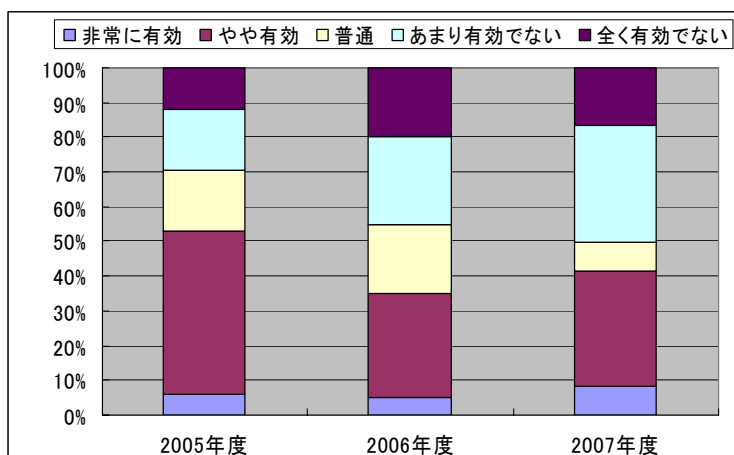
### (5) 入社後取得した資格は具体的に。

- ・ 二級土木
- ・ 危険物乙4類

- ・ 基本情報技術者
- ・ 基本情報処理技術者
- ・ 技術士（補）
- ・ 玉掛け，クレーン
- ・ 基本情報技術者，ソフトウェア開発技術者
- ・ 基本情報技術者 / 医療情報技師
- ・ 今後，取得するつもりです。 技術士（化学）一次。公害防止管理者
- ・ TOEIC，
- ・ コールドチャンバダイカスト作業（2級），機械系保全作業（2級），アーク溶接作業，フォークリフト運搬作業
- ・ 危険物（乙4），高圧ガス（1種冷凍機），保全技能士（2級）

（6）資格を取得した方にお尋ねします。本学の教育は資格取得に有効でしたか？

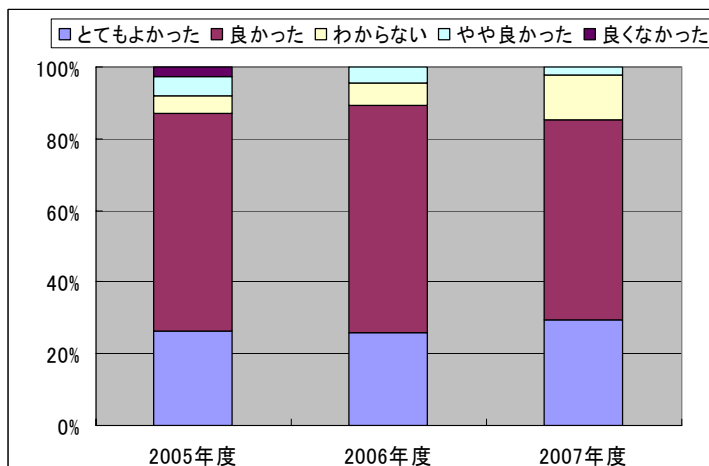
「普通」以上の評価が50%であり，「あまり効果がない」，「全く効果がない」が45%から50%に年々増加しており，卒業生が本学の教育が資格取得に有効であったと必ずしも評価していない。有効でなかったとの評価に関しては資格の種類（例えばフォークリフト等）と大学教育のマッチングの問題等も関連しているものと考えられる。



（7）あなたは，九州工業大学工学部を卒業してよかったですか？

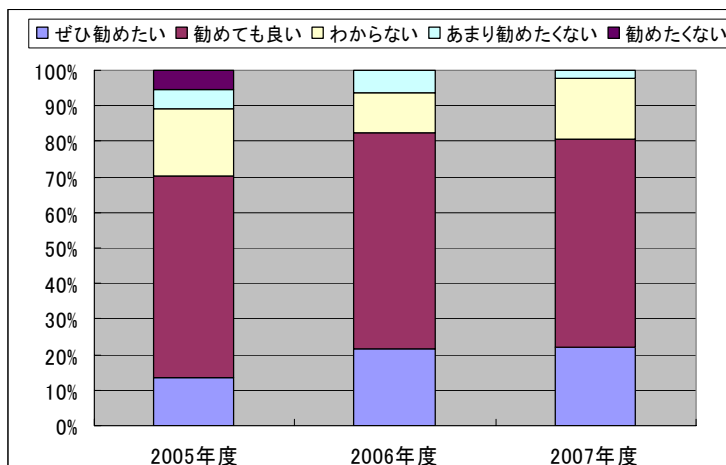
「とても良かった」「良かった」の評価は80%に達する。ほとんどの卒業生が今の仕事を続けていく上で，本学で受けた教育の成果を肯定的に考えている。

なお，アンケートの「わからない」より劣位に「やや良かった」とあるのは見直しが必要である。



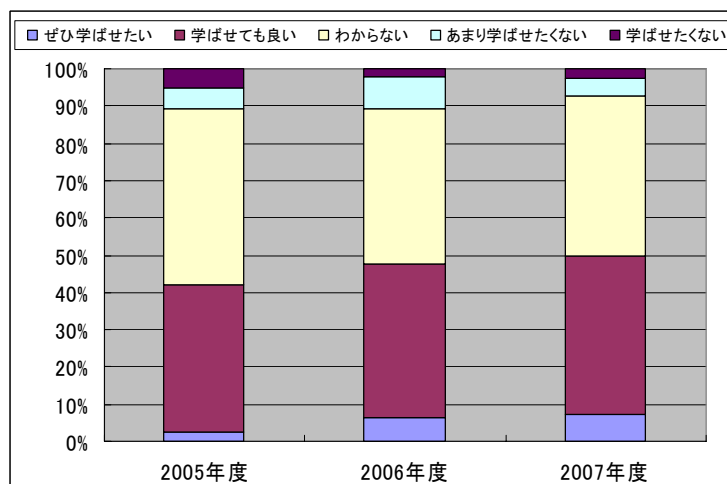
（8）あなたは，九州工業大学工学部を魅力ある学部として後輩に勧めたいと思いますか？

「ぜひ勧めたい」、「勧めても良い」の割合は82%から80%に僅かに低下したが、大きな変化ではないと考えられる、また「勧めたくない」の割合が0%であり、「あまり勧めたくない」も7%から2%に減少し、就職者は九州工業大学工学部を魅力ある学部として後輩に勧めたいと思う傾向が上昇している。



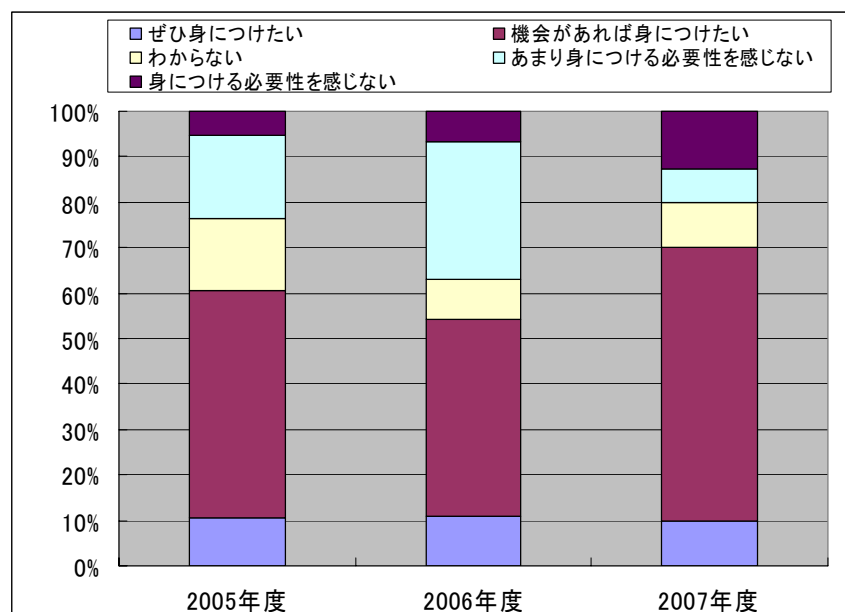
(9) あなたは、将来、子供ができれば、九州工業大学に学ばせたいと思いますか？

「ぜひ学ばせたい」、「学ばせても良い」の割合は48%から50%に微増しているが、九州工業大学工学部を後輩に勧めたいと思っている80%と比べてかなり低い。これは、子供に対してより慎重になる結果と思われる。「学ばせたくない」、「あまり学ばせたくない」、「わからない」の割合は、50%に減少しているが、依然高いと判断される。より魅力ある大学にする努力が必要である。



(10) あなたは、更に高度な学力(修士, 博士)を身につけたいと思いますか？

更に高度な学力を「ぜひ身につけたい」、「機会があれば身につけたい」の割合が54%から70%に上昇したが、一方で「あまり身につける必要性を感じない」、「身につける必要性を感じない」の割合も38%から20%に減少し、高度な専門性を身に付けたいという意識は高いとみられる。しかし、「身につける必要性を感じない」に限ると12.5%であり、年々増加する傾向にあり、2極化がみられる。



## 2. あなたが九州工業大学 工学部 に在学して良かった点がありましたらご記入下さい。

九州工業大学で学んだことが十分職場で役立っている。特に研究室に入ってからの研究と教育によって習得したことが有効であったと考えられる。カリキュラムや研究環境の満足度は高く、研究指導では学術面の指導のみならず有意義な人的交流も特筆されている。就職者が工学部に在学して良かったと述べている事柄は今後も継続していく事が必要である。

- ・ 就職できたこと。
- ・ a .就職の架け橋となった。先輩、後輩に恵まれ充実した4年間を過ごすことができた。あまりまじめでなかったので申し訳ないです。
- ・ 何より研究生活が充実していました。教授の方々や先輩方から、研究のことから、仕事に取り組む姿勢に至るまで多くのことを学ばせて頂きました。
- ・ 教授、教官に一定の厳しさをもって、指導頂いたこと。
- ・ 最先端の技術に触れられたこと。
- ・ 専門的な知識や研究等、設備や環境はとても学びやすかったと思います。
- ・ 高度な教育が適正に受講できた点。教育に対して熱心である教員が多かった点。課外活動が学生主体で、精力的に活動されている点。(どのような分野に興味を持つ者でも参加できる。)
- ・ 実習、講座共に技術力レベルが高く学ぶ者として非常に分かりやすかった。
- ・ 教授が優秀であったこと。
- ・ 建社の教育レベルは、九州内の他大学と比較すれば高いと思います。質の良い勉強ができたと思っている。
- ・ 大学で学んだ内容が仕事の内容に直結しているので仕事に役立っています。
- ・ 忍耐力がついた。他の大学より厳しいところがあるが、今思えば厳しさが良かったと思う。
- ・ あきらめずに努力すれば道が開ける。なぜなぜという視点が身についた。
- ・ 自分の興味のある分野、初めて知る分野のことを勉強できてよかった。
- ・ 知識の向上。人との出会い。
- ・ 大学に入学してから、サークルやアルバイトなど、行動の幅が広がった事でコミュニケーション能力が非常に成長しました。また、研究室での実験や研究を重ねた事で創造力や課題解決能力が身につき、それは社会に出た今でも大きく役立っています。
- ・ 大学側の就職活動に対する支援も厚く、就職活動が非常にスムーズにいった事。
- ・ 多くの技術分野の議義があり、どの科目にしても仕事にとっても役に立っている。



- ・ 特に無し。
- ・ 工学とは全然ちがう職に就いてしまったのでなんとも…。PCに触れる機会が多かったのはよかった。(情報センター, 図書館等)
- ・ 在学中は,今の職業をあまり意識していなかったが,今の職業の基礎知識がある程度修得出来ていた。
- ・ 就活にゆとり(九州に就職する場合)
- ・ 学業にはあまり熱心にはなれませんでした。戸畑という街・九工大で出会った仲間・サークル活動等は今でも私の人生のベースとなっております。九工大に通って本当に良かったと思っています。
- ・ 鉄鋼業界と係る分野で仕事をしている人が多く,情報を得やすいこと。工学の基礎分野を十分学んだこと。卒業後も在学中の友人と繋がりがあること。実験をたくさんやったこと。
- ・ 専門分野を広く勉強できたのが良かったと思います。部活や寮での生活が大変役に立っていると思います。(コミュニケーション能力, 礼儀, 等々)
- ・ 就職後も,他のOBの方々よりサポートを得られる。就職活動を良い条件で行うことが出来た。(推薦枠の多さ, 広範さ)基礎研究の大切さを学ぶことが出来た。
- ・ 材料工学の基礎を学ぶことができた。部活動を通して人間関係構築の基礎を学ぶことができた。
- ・ 第2外国語の先生方が非常に接しやすく,また授業内容も分かりやすかった。
- ・ コミュニケーション(人づきあい)
- ・ 信頼できる先生(友人)に出逢えた。入社後も役立つ知識が得られた。学ぶ環境が良かった。(冷暖房を除く)実験は大変でレポートに苦労したが楽しく学べた。研究室で細かい作業をしたいので入社後も違和感なく接する事ができた。卒業した先輩方のおかげで九工大の名が広まっていた事。レベルの高い授業を受ける事ができ大変良かった。
- ・ 入社後,OBが多く,仕事でつまずいた際,相談をしやすい。明専会も定期的にひらかれ,OB同士の交流がある。講義についても,会社に入ってから,“あっこれやったことがある。”と感じることが多く,十分役に立っていると感じている。

### 3. あなたが九州工業大学 工学部 に在学して不満を感じた点,こう改善すべきだと感じた(例えばこういう技術(科目)を教えてほしかった)点がありましたらご記入ください。

会社の業務遂行に対する卒業生の高い向上心と現実の充実感・手応えの多様性を反映した結果となっている。学部の教育・訓練の目的や課程と日常の会社業務遂行に必要とされる能力や資格の差異については本人の意識も截然としていないため,アンケートには「不満」として表れてしまったように見受けられる。特に卒業後の業務内容との関係で一般教育,専門科目,実験に対する要望が示されている傾向にあり,そのため実践的教育を望む声が比較的多い。大学教育における論理的思考能力の育成という基本的課題との調和を図りながら,英語教育,実験・実習,プレゼンテーション,経営学など実践的科目のより一層の充実が求められている。インターン制度は既に開始されているが,就職セミナーや卒業生を招いての講演会などをさらに充実していく必要がある。

- ・ ドイツ語は必要ないと思う。
- ・ a. 材料力学等の基礎もやったほうがいい気がします。電気工学科を卒業したのですがバネ屋さん就職してしまいましたので。。。基本的なものの考え方を知っているとは知らないのでは雲泥の差があると思います。誰しも会社に入って学ぶ事が多いのはもちろんですが。。。 b. 英語は英会話として取り入れるべきだと思う。クラスもレベル別に割り振り少人数制に出来るとより良いと思います。入社して3年経ちますが海外の技術者と仕事をする事が多くメールも資料も全て英語です。
- ・ 時々,座れない授業があったので,人数配分等をもう少し考慮してほしいと感じました。
- ・ 講義で,テキストを黒板に写すだけの様なものがあつたため,講義の意味がうすい。
- ・ 総合大学でない為,人文系の科目の教育について,力を入れる必要があると思う(特に英語)。他大学との技術交流もあつても良いと思う。



- ・ 数人の学生に1人の教授が担当されていたと思いますが、研究室に入るまで、1度も顔を会わせる事はありませんでした。進路や学校生活についての悩みなどに対して相談できる人の存在が希薄な気がします。もっとコミュニケーションをとれる様な、機会および、そういう人達（相談役）を増やしてはどうでしょうか？
- ・ 学務のサポートが不十分である。（掲示板のWeb化や、接客マナーの向上など）他学部を受講する際の申請を簡略化してほしい。（電子履修システム上で申請・登録・承認ができるように。）セクシャルハラスメント・アカデミックハラスメント対策の強化。（第三者による機関や匿名投書の機会を設けるなど。）
- ・ 成績が上位でないと、コース，研究室の希望が通らないのが不満。英語にもっと力を入れてほしい。
- ・ 多校との技術交流を増やす。地元企業以外との交流も然り。学生に世間を知らせておく必要有！
- ・ 共通科目は、卒業後にも勉強できる物がある。なので、少し減してでも専門科目を増してほしい。
- ・ 資格を取るチャンスはあったと思いますが、在学中に電気系の資格を取っておけばよかったなと思っています。
- ・ 実験器具（オシロスコープ等）の操作方法を、もっと詳しく教えるべき。（半田付けも）実験レポート作成にはばかり集中し、実験の本質は学べていなかった。学生本人も悪いが、改善は必要だと思う。難しい学問は身につけていても、電気専門の技術者としての最低限（オシロ、半田、回路シミュレーションetc）の知識を大学で身につけておきたかった。
- ・ パソコン授業
- ・ もう少し英語の単位があってもよかったのではないかな。
- ・ 実験だけでなく、普段の科目の中でもそのもの（半導体やIC）の実物を配ったりしての説明がほしかった（映像や板書のみではよくわからないところも多かった。）実験の背景などを説明し、なぜこの実験をやるのか、この実験はなにに活用できるのかという確認をしてもらいたかった。予習しただけでは意味をとり違えることもあり、レポートを書くときに理解するため、実験の本質がわからないままで行うこともあった。
- ・ 私は機械知能工学部の制御コースを専攻していましたが、制御に関する科目でも、論理的な内容や数式ばかりでした。今になって感じる事は、実際のプログラム作成や実機を使った実験などを、もっと増やせばいいのではないかと思います。
- ・ 英語教育において研修などより実践的な教育方法をとるなど力をもっといれてほしかった。
- ・ 技術系の仕事をしていく上で図面の読み方・書き方などが必要なので詳しく勉強できれば良いと思う。
- ・ 特に無し
- ・ 研究室によって、研究の難度や環境に差があったと思う。
- ・ 語学教育レベルの向上。早い段階からの職業（就職）についての提示
- ・ 特になし
- ・ 専門教科の難易度が高く、ついていけなかった。成績が悪かったので、専攻ではない仕事（SE）に就いたのですが大学時代の勉強はまるで役に立たなかった。そんな学生のためにも、もっと一般教養や語学等も学べるチャンス（選択教科などで）があったらいいなと思います。
- ・ 設計の演習を多くこなす機会があれば入社後、非常に役に立つと感じた。機械科に在学していたが、電気回路、シーケンス等の電気の基礎を学ぶ機会があればよかったと思う。教養として「省エネ」が1科目あればいいと思う。
- ・ 経営学や倫理をもう少し勉強しておけば良かったと思います。研究室によって様々だと思うのですが、プレゼン力を高められるようにしてほしいと思います。ISOの知識。インターンシップをもう少し積極的にあっせんしてほしい。
- ・ 教養教育の改善（特に語学に力を入れるべき。TOEIC義務化等）問題解決能力、アプローチ方法の取得。ディスカッション能力向上（一方的でない講義か）
- ・ 語学（特に英語）の教育にもっと力を入れるべきだと思う
- ・ CADを使用した製図を重点にしてほしい。鉄関係だけではなく、ステンレス等に重点をおいてほしい。（材料力学等で）

- ・ 飲食できるスペースの確保（現在はずいぶん増えているそうですが...）語学力をもう少し身につけたかった。大手だけでなく中小でも九工大を卒業した人との交流をはかりたかった。企業と交流をはかりたかった。トレンドとなる分野の知識を学びたかった。301教室の授業やテストにもう少し配慮が欲しかった。（暑すぎてテスト中、気分が悪くなった。）専門分野において難しい内容の場合、教科書の他にわかりやすい参考書も教えて欲しかった。研究室を平等にして欲しかった。（研究室で設備の差が大きかった。）今後、本当に必要となってくる言語に対する取り組み。入社3年未満で会社を辞めたいよう、学校側から企業に働くとは？とのセミナーや懇談会など開いてほしい。
- ・ 特にありません。

#### 4. 全体としての傾向

回答のあった卒業生は41名（回答率21.5%）であり、そのうち約76%がコメントを寄せている。同じような事柄について問2の「在学して良かった点」と問3の「不満を感じた点」で相反する形の回答も散見され、各人の在学中や就職後の充実感・手応えと言ったものが多様であること、また卒業生の向上心が高いことを反映している。

学部教育と大学院前期、そして大学院後期の教育の目的と実社会の業務遂行における能力・資格の差異が本人にも截然と意識されていないためアンケートには「不満」として表現されてしまったような部分が見受けられる。

大学教育における論理的思考能力の育成という基本的課題との調和を図りながら、英語教育、実験・実習、プレゼンテーション、経営学など実践的科目のより一層の充実が求められている。しかし、英語力の必要性については各人に早期に認識させ、その能力を高める抜本的な対策の検討が必要である。

用語の説明

○ 課題探求能力

ひとつの課題を深く追求する能力。上司の期待が1であれば1.5倍，2倍等の結果を出す。ただし，結果を出す時間については考慮しない。

○ 課題解決能力

ひとつの課題に対し，現在所有する情報・知識を用いて，与えられた期限内に結果を出す能力。

○ 独創性

既存の概念にとらわれず新しいアイデアを創出する能力。

○ 構想力

既存の技術・装置を組み合わせて新しいシステムを構成する能力や，先を見る能力。

○ 表現力

資料作成能力やプレゼンテーション能力。

○ コミュニケーション能力

交渉能力や対話能力。

## 2.6 教育達成度評価アンケート：修了生 (2005年3月以前修了生)

中期目標・中期計画に基づいて、2005年度から修了後3年が経過した企業へ就職した修了生へのアンケートを実施した。

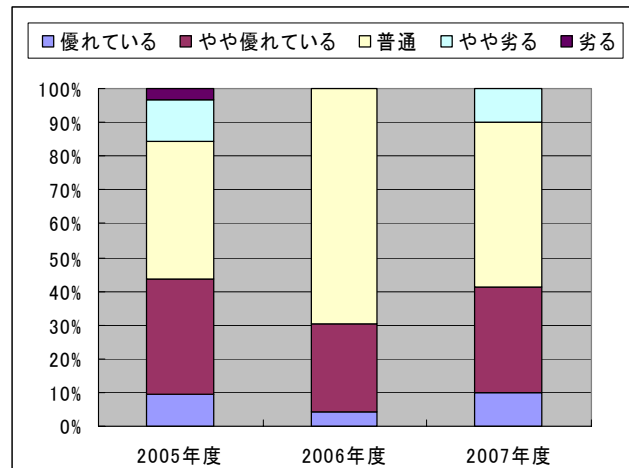
アンケートは、2005年3月期の修了生のうち企業へ就職した者のリストに基づき、工学部総務係より郵送を行った。しかし、アンケート用紙を配布した企業に就職した修了生は、201名(159社)で、回答のあった修了生は41名であり、回答率は20.4%であった。今回のアンケート実施方法としては、問題ないと思えるが、よりアンケートの実施時期は早めて、人事担当者へ直接渡す枚数を増やす等、回答率を上げる必要があると考えられる。

以下、各質問について、アンケート結果を述べる。

### 1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

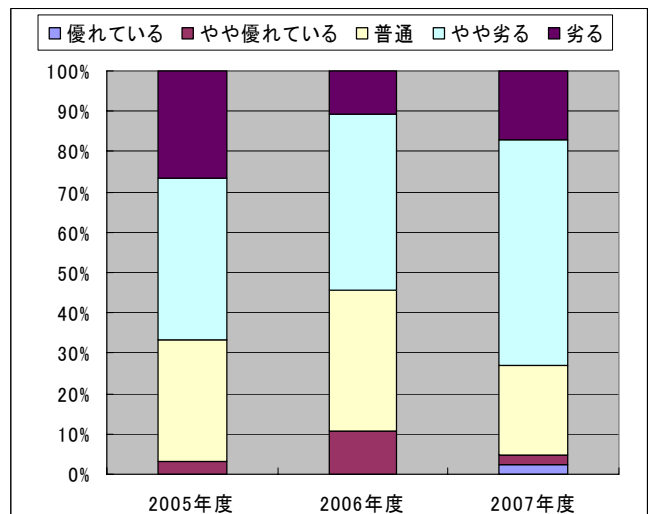
#### (1) あなたが受けた教養教育のレベル

「優れている」と「やや優れている」の割合が「劣る」の割合よりも大幅に勝っており教養教育のレベルについては一般論としては肯定的に評価されている。しかし、否定的評価が約10%であり、改善が望まれる。



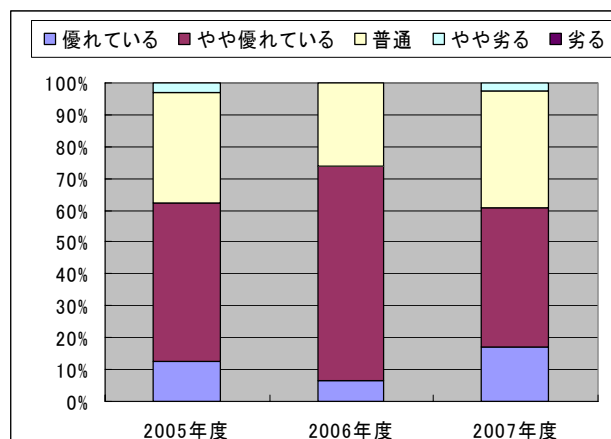
#### (2) あなたが受けた語学(特に英語)教育のレベル

英語等の語学教育については、現状の批判的評価が顕著で従来より増大しており、今後の英語教育を見直す必要が認められる。



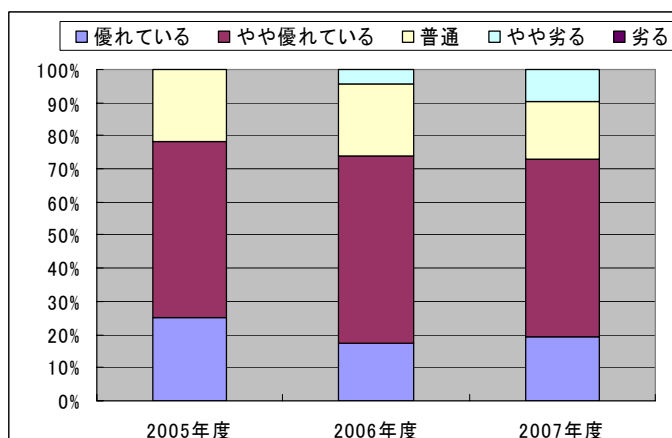
### (3) あなたが受けた理数系教育のレベル

理数系の教育レベルについては、肯定的評価が過半数を越えており現状で特に問題がないが、否定的評価も若干あり対策が必要である。



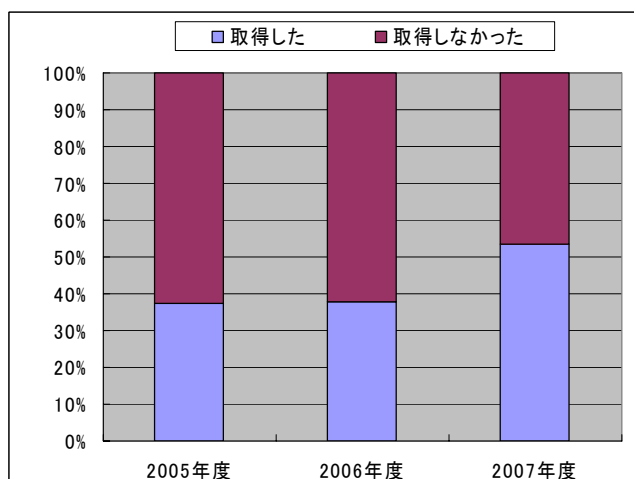
### (4) あなたが受けた専門教育のレベル

専門教育のレベルについては、肯定的評価が過半数を越えており現在の教育内容が肯定的に評価されていると判断できるが、否定的評価が昨年に比べて増える傾向にあり、対策が必要である。



### (5) あなたは入社後資格を取得しましたか？

入社後に5割強の者が資格取得を行なっていることから、入社前の基礎学力や課題探求力の育成が概ね問題なく実施されているものと推定される。



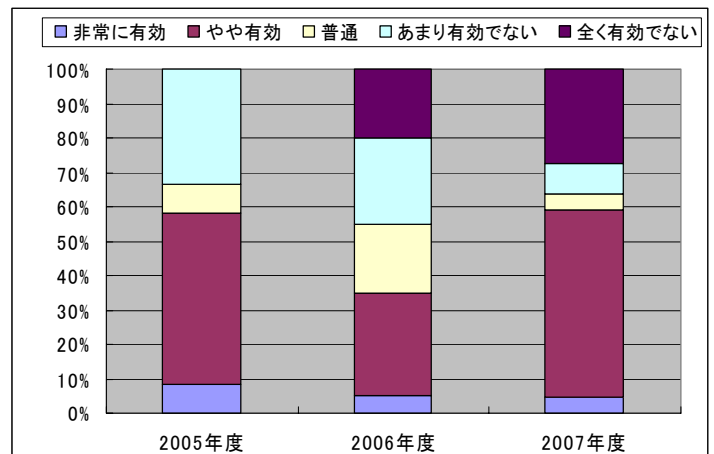
### (5) 入社後取得した資格は具体的に。

- ・ 甲種火薬類取扱保安責任者
- ・ 危険物取扱者甲種，有機溶剤作業主任者，特定化学物質等作業主任者，フォークリフト運転
- ・ 危険物甲，衛生管理一種
- ・ TOEIC
- ・ Oracle Master Silver Fellow

- ・ 一級土木施工管理技士，甲種火薬取扱保安責任者。
- ・ 工事管理者（営業線近接作業にて必要だったため）
- ・ 危険物乙4
- ・ 危険物（甲種），衛生管理者
- ・ 床上操作式クレーン，玉掛け，小型移動式クレーン，車両系建設機械，大型特殊自動車
- ・ 公害防止管理者騒音・振動
- ・ 1．危険物取扱者（乙種）2．機械製図手書き作業3．産業用ロボットの教示・操作
- ・ コンクリート技士，技術士補
- ・ 危険物甲種
- ・ T O E I C，玉掛技能，床上操作式クレーン運転
- ・ 電気工事士，危険物取扱者乙四
- ・ 甲種危険物，一種衛生管理者，（有キ溶剤，物定化学物質，酸欠・硫化水素，フォークリフト）作業主任者，局排定期自主点検者。
- ・ 玉掛け
- ・ 基本情報処理技術者
- ・ レーザー機器取扱技術者（第2種）
- ・ 危険物取扱者甲種
- ・ E T E CクラスB，初級シスアド

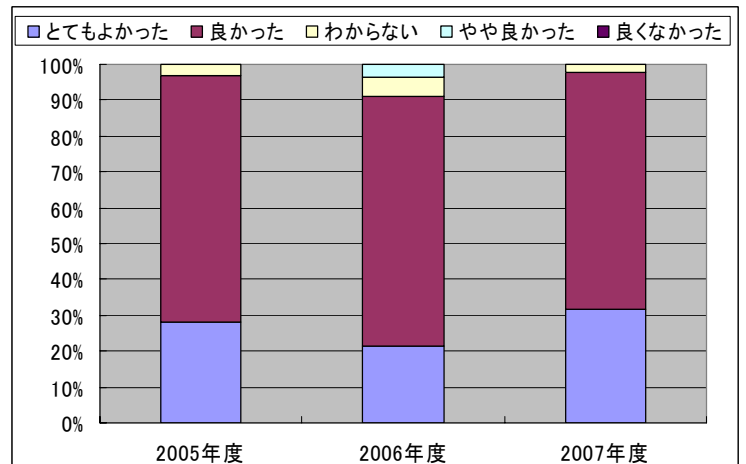
（6）資格を取得した方にお尋ねします。本学の教育は資格取得に有効でしたか？

資格取得に対する本学の教育を肯定的に評価する者が過半数を占めている反面，否定的評価が3割強を占めていることは学力の格差（二極化）を反映している可能性があり，今後の調査が必要である。



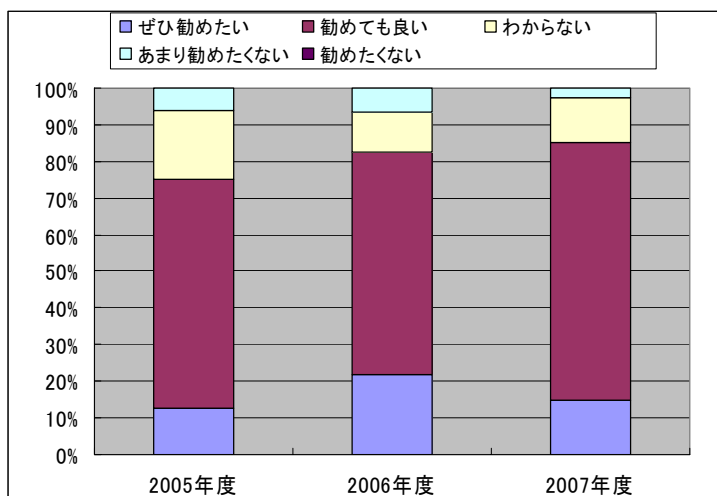
（7）あなたは，九州工業大学大学院工学研究科（博士前期又は後期課程）を修了してよかったと思いますか？

工学研究科の教育のあり方としては，「わからない」が若干あるものの，大多数から肯定的評価をいただいていると判断できる。



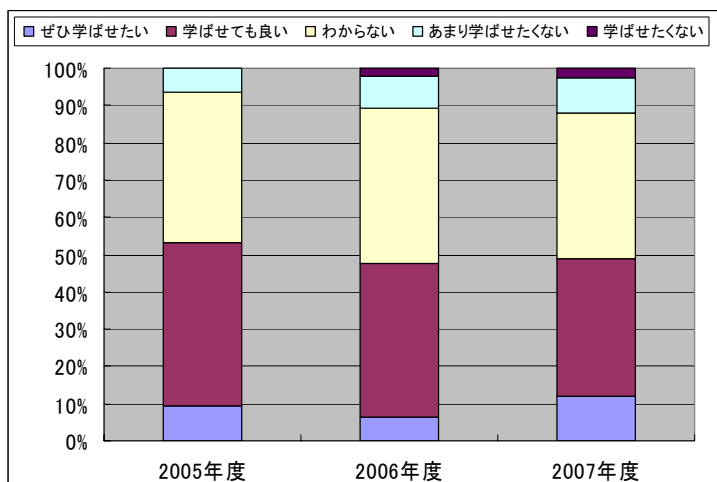
( 8 ) あなたは、九州工業大学大学院工学研究科を魅力ある研究科として後輩に勧めたいと思いませんか？

2006年度から2007年度の傾向を見る。「ぜひ勧めたい」が15%と「勧めても良い」が71%、「勧めたくない」が0%であり、「ぜひ勧めたい」と「勧めてもよい」を合わせると約85%で昨年の83%を若干上回ったが、「ぜひ勧めたい」は約5%低下した。今後は「ぜひ勧めたい」の割合を高める必要がある。



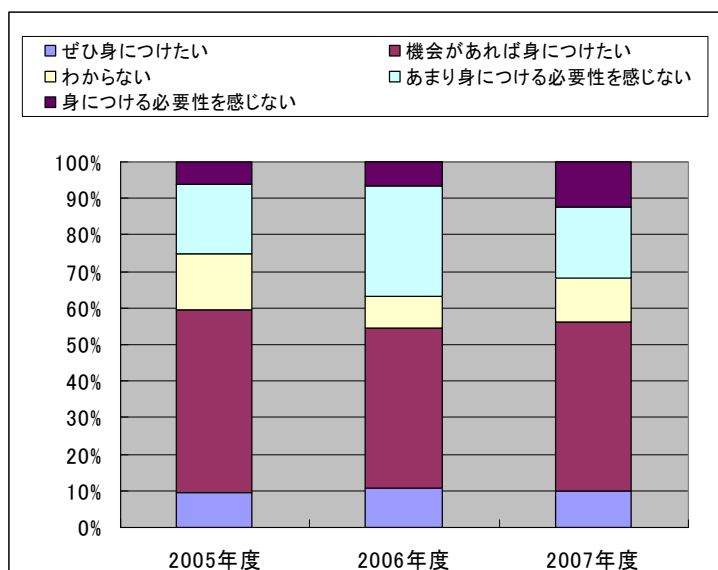
( 9 ) あなたは将来、子供ができれば、九州工業大学に学ばせたいと思いませんか？

2006年度から2007年度の傾向を見る。「ぜひ学ばせたい」が12%、「学ばせても良い」が37%、「わからない」が39%であり、「ぜひ学ばせたい」が約6%増加している。しかし、「あまり学ばせたくない」が毎年増加する傾向にあり、より魅力ある大学にする努力が必要である。



(10) あなたは、更に高度な学力（博士）を身につけたいと思いますか？

「ぜひ身につけたい」と「機会があれば身につけたい」が56%と昨年に比べて微増している。一方で、「あまり身につける必要性を感じない」と「身につける必要性を感じない」は32%で昨年とほぼ同じく比較的大きな比率を占めているので、高度な学力を身につける意識等を周知する必要がある。



2. あなたが、九州工業大学大学院工学研究科に在学して良かった点がありましたらご記入ください。

大学院に在籍してよかった点として、研究指導を通しての教員とのコミュニケーション、在籍中に学んだ専門知識、研究室での先輩、同輩、後輩との交流や深いつながり、研究環境が整備されていること、自由に研究ができたこと、さらに論文作成、論文発表の経験が社会で役立っていることなどを挙げている。このような評価は昨年と同様であり、今後もその維持と一層の高度化を図りたい。

- ・ 実験設備が充実して、高度な研究ができた。教授の指導レベルが高く、多くのことを学べる。良い仲間が多く作れる。
- ・ 専門的な知識（化学）を習得できる。
- ・ 研究室に在籍していた時には、多くの経験ができ、有用であった。（4年～M2）実験、学会への参加は有用であった。
- ・ 素晴らしい先生や先輩達に出会い、多くの刺激や影響を受けたこと。特に研究に対する姿勢や考え方は、社会人となってから特に役に立っている。
- ・ ゼミや学会など、人前で発表する機会が学部 비해多くあったこと。プレゼン能力向上につながるとともに資料作成等で先生方に質問・相談することで深い知識を得られる。
- ・ 学内・学外で、発表の機会を与えられたこと。プレゼンテーションを行う訓練になった。
- ・ 鉄鋼協会等学外で発表するチャンスをいただけた事は、学外の方々との交流、また知見を拡げる事ができたので、積極的に実施して欲しいです。
- ・ 博士号を取得できたこと。
- ・ 男子生徒が多かった為か、一致団結して物事に取組めた。教授と生徒の距離が近かったと思う。プラベートに関する悩みなど相談にのってもらった。
- ・ 九工大出身者が多いこと。（仕事をしていく上でネットワークは非常に重要です。）
- ・ 建設社会工学科に配属され、学部3年生までは、土木工学の基礎について、魅力ある多くの教官の方に指導して頂きました。また、学部4年次より、伊東啓太郎研究室に配属となり、院修了まで、土木、林学、環境...はもとより、一人の人間として在るべき姿について教えて頂きました。入学から院修了までの間に、様々な視点から物事を考える事の大切さを学ばせて頂けたことが、最も良かった事である、と思います。
- ・ 定期的な発表により、プレゼン力がついた。
- ・ 専門文野を学べたこと。幅広い知識を学ぶことができたのは社会に出て、役立ちます。



- ・ 専門を深く学べたこと。周辺の環境が良い。
- ・ プレゼンテーション能力や理論的な考え方の構築など会社でも生かす事の出来る土台となる部分を学ぶ事が出来た。
- ・ 研究室在籍中、実験の日々が続いた中で、チームワークを如何にして高めるか、又、先輩を指導する難しさ等深く考えさせられた。連日徹夜続きで体力的・精神的に厳しい日々ではあったが、この頃身につけた考え方や姿勢が現在、仕事を行う上でのベースとなっており、高い評価を得ている。
- ・ プレゼンテーション能力が身に付いた。
- ・ 研究内容に限らず、問題をどう捉え、どのように考えかや、解決にあたっての表現方法、取組み姿勢といった、物事に対する考え方を大学院を通じて築けたと思う。
- ・ 学会での論文執筆経験機会が多かった事は、今でも直接役に立っている。(私の場合)又、社会人の方と関わった(共同研究、社会人Dr)事は大きい。学生のうちから社会の厳しさのある程度知る必要があると思う。それには人と関わるのが一番良い。
- ・ 自由に研究を行えたため、社会人になった際に問題を自分で見つけ、解決する能力をやしなえた点がよかったです。
- ・ ある程度の基礎知識、ベースの確立はできていると思う。
- ・ より専門的な技術を学べ、社会人となった今でもその知識が活かされている。
- ・ 理系の基礎から専門知識を幅広く学べた事。電気実験を行えた事。
- ・ 研究室内のつながりが現在でも続いています。人の輪を広げるということでは大変良かったと思います。
- ・ 学部4年間で学んだ理論に基づいて、大学院において(機械分野)数値シミュレーション技術を習得できた事は、非常に良かったと思う。企業においては、設計、研究分野に限らず、生産技術等においても積極的にCAE技術が活用されており、今後とも、上記教育分野の充実を図っていただきたい。
- ・ 研究を行う上での、フィールド(環境)の充実度。企業へのインターンシップの充実さ。
- ・ 先生方が教育熱心な点が良かったと思います。
- ・ 1.企業でご活躍されている諸先輩がたくさんいらっしゃる為、人間関係(プライベート含)において有効な場合が多々有る。2.かなり高度な範囲まで学力を身に付ける事が出来た。
- ・ 研究・実験づけの生活が送れた事。他人には負けない専門知識を身につける事ができた。
- ・ 大学院で重要なのは、講義よりも研究室での研究、或いは人とのつながりだと思っています。そういった意味では在学して良かったと思っています。
- ・ 様々な分野で活躍されている先生方が多い。私はトライボロジー研究室でしたが、兼田先生にお会いできて良かったです。
- ・ 研究における基礎を築き、従来における問題点や新しい理論の組み立て方、考え方を学べたことが社会人になって有利であった。
- ・ 広く知識を修得出来た事
- ・ 研究に取り組む姿勢がそのまま仕事に取り組む姿勢に生かされた点がよかった。
- ・ 化学会社に勤めていますが、仕事で化学工学が必要となることが多々あります。九工大では他大学よりも化学工学系の授業が多く、就職後も役に立っていると感じます。
- ・ 本当に進みたい技術(の方向)を見つけられたこと。その技術を自ら学ぶ時間がとれたこと

### 3. あなたが、九州工業大学大学院工学研究科に在学して不満を感じた点、こう改善すべきだと感じた(例えばこういった技術(科目)を教えてほしかった)点がありましたらご記入ください。

英語教育の充実についての要望が圧倒的に多い。また、より実践的な専門科目や社会的に必要とされる教養やスキル(設計, 管理, 経営, 資格試験などに関する知識)を求める声も多い。今後は高度な専門教育と同時に企業等で求められるビジネスマインドを涵養するような教育への対応を考える必要がある。

- ・ 建設社会工学に関しては、コンクリートと土質についての分野の教育レベル、科目を強化した方が就職後に役に立ちます。加えて、ただ学ぶより実践を踏まえた教育でないと頭に入らないかもしれません。実験を増やすことをのぞみます。
- ・ 英語にもう少し力を入れた方がよい。
- ・ 大学院での専門知識は、研究テーマ、専攻した科目については深く学べたが、その他の科目については、学んだように感じない。大学院の講義は単なる単位取得のためであり、多くの知識を学生に対して要求していないと感じた。改善すべき点としては、英語教育である。
- ・ 今の学生は皆、知っているかもしれないが、ワード、エクセル等の使い方を勉強する機会が学校ではなかったのが、いざ使うときに困った。語学は自分なりに勉強したつもりだったが、不十分だと感じた。もう少し勉強する機会（時間）や方法を与えると良いかもしれない。
- ・ 専門知識以外にロジカルシンキング（論理立てて物事を考え伝えること）のような技術も教えたほうが良いと思う。
- ・ 金融工学、政治・経済、語学、キャリア教育
- ・ 研究室間の交流、発表会等が定期的に行われても良かったのではないかとと思う。互いに触発され、研究の質が向上すると思う。
- ・ 同じ材料系の外研究室では、どのような研究をどういった目的で取り組まれていたのか、知る機会が少なかったと思います。
- ・ 語学、プログラミング言語、資格取得などの充実を行ってほしい。
- ・ 講義は非常に難しく、更に淡々と進んで行く状況がねむたくて、しょうがない時があった。現場の人間を講師に迎えて、測量等より仕事（特に施工管理）に密着した講義があればよいのでは、と思います。
- ・ 実践的な電気回路の勉強をしておくべきだったと現在感じています。特に企業の場合、専門的な知識よりも回路図が読めるか？書けるか？などがとても重要であると思います。（ハードの人は）
- ・ 仕事（実務）を経験してきて感じる事は、学生時代にもっと仕事をされている方のお話や、実際に仕事をされている姿をもっと目の当たりにできる機会があっても良かったのではないかと、いう事です。（今思い返せば、院在籍時には、そういった機会を活かしていなかったのかもしれませんが...）。（自分が在籍していた専攻に関してです）。修了した今も、年に数回は大学に足を運んでおります。構内では至る所で土木工事が行われておりました。後輩の話聞く限り、工事の状況を観察している人は少ない様です。高度な専門教育はもちろん必要ですが、身近な所に“教材”はあるはずで。理論と実際の分別を合わせもった感覚こそが大切なのかな、と感じています。
- ・ シーケンス制御。工場電気設備について。
- ・ 女子トイレが少ない（工学部）。英語など理数以外の教科もどんどん教えてほしいと思います。
- ・ 実践的な英語教育。
- ・ 学会に参加する機会など、他の方と交流する場が多いと良かった。
- ・ 大学での教育は、理論的解釈が主体であり、構造物の挙動や内部応力、公式、解析的思考の世界的スタンダードとは等を教えてくれたが、それが現実世界とどのように結びついているかという視点が極端に脱落していたと感じる。社会の成り立ちを考える時、まず構造物が出来て、その後改善すべく、又は問題点を見い出すべく学問が生まれるはずであるから、例えば橋の形式、施工方法、設計手順を教えた後、あるいは数歩下って理論的教育をすべきであると思う。現状の教育は、それぞれの分野の核（コア）を教えていないと思う。
- ・ 『Microsoft Visio』を使ってのドキュメント作成。
- ・ ほとんどの学生がメーカーに行くと思います。例えば、設計、製造、生産技術などの職種では設計及び最新技術知識が必要ですので、もっと社会ニーズに基づいた教育を展開して頂きたかった。
- ・ 基礎科目に対する力の入れ方がだんだんと足りなくなっているのではないかと？先輩（会社の）の話を見ると、基礎科目のコマ数が多い。私の時は計画系の話が多かったように思う。
- ・ ディスカッション・プレゼンを学べる科目が必要だと思えます。

- ・ 就職を念頭においた、科目の説明を学生に行う。(プラント系なら、この科目が必要だとかいうアドバイス)大学での科目と就職後に必要な技術は、会社に入ってから初めて分かるものだと考えます。何が必要だったと後悔するのではなく確かこんなことを学んだなという記憶に従って勉強し直しています。学生がどのような職種を選択するかは分かりません。一概にこの科目は必須というものはないので、また就職を見据えたコース選択を学部2年生がやっているとは思えませんので…。強いて言うなれば、英語教育は、卒業するまで通年で実施することをお勧めします。週に一度でも、英語を使う、(話す)というだけで、仕事の助けにはなるかもしれません。
- ・ 不満は特にありません。社会人になった今になって、もう少しまじめに勉強しておけばよかったと思います。
- ・ 電子部品の知識(IC, 抵抗, コンデンサの役割等)
- ・ 高分子に関する講義をより専門的にしてほしい。例えば物性に関する事など。ほしい文献が手に入らないことが多々あった。
- ・ 企業において、設計, 研究, 品質保証, 工作, ほとんどすべての業種で必須となる以下の項目について充実を図っていただきたい。Design For Manufacturing, Design For raw material, Design For environmental, etc: 製造性や資材等を考慮する設計方法, 効率的なデータ取得方法: 実験計画法や田口メソッド等の手法, 英語による技術的議論能力の向上, 技術マネジメント: 新規製品開発に対するリスクマネジメント(FMEA etc) スケジュールマネジメント(PARTEtc) コストマネジメント(VE手法etc)
- ・ 語学構議のレベルが低い。1学科あたりの人数が多いので、グループによっては、同じ科目でも、受講時間を変え、出来る限り小人数での授業を行えるようにしてもらいたい。
- ・ 専門的な教育は十分だと思うが、特に英語に関する教育が不足しているように感じた。
- ・ 1. 何の為に勉強しているのか? 大多数は企業へ就職すると思うが、自分は就職して何がしたいのか? その為に今何をすべきなのか? ただ、目的もなく漠然と学生生活をこなしているだけの人が多いと思う。勉強した先にあるもの、勉強を頑張ったリターンが何なのか考える機会を与えるべきだと思います。
- ・ 応用化学棟が汚ない、せまい、ドラフトが少ない。ドラフトに除害装置がない。(有害物はそのまま大気放出) 図書館の専門雑誌が少ない(九大図書館まで行かないといけない。)
- ・ 私は高専からの編入生だったので、殆どの講義が既に学んでいたものでした。そして思ったのが「分かり難い」ということ。良くも悪くも「アカデミック」なもので、学生の何割がちゃんと理解しているのか疑問に思いました。もっと具体例で実践させたり、企業の方を講師に招いたりした方が良いのでは。実験での編入生と通常入学生の温度差がかなり感じられました。実際、社会に出てから役立っている知識は、高専の時に身を持って体験したことです。はっきり言って座学だけの知識はすぐに忘れられると思います。
- ・ 特になし。
- ・ 大学として改善すべき点というのは思いつかないが、個人的に他分野の技術や理論に興味を持ち、視野を広げておけば良かったと感じた。
- ・ 情報コースだったが、理論が多くプログラミング言語を教えてくれる科目(例えばJavaやVB, VC, 等)が不足していたと感じている。
- ・ 語学(特に英語) 語学の科目が少なかったように感じた。
- ・ 英語, 特にコミュニケーション力が身に付く授業があれば良かったと思います。
- ・ 座学の方が楽ではあるが、実験や課題などが少ないように思う。輪構は避けられることが多いので選択必修等にしてもよいと思う

#### 4. 全体としての傾向

回答者 41 名, 回答率 20.4%ではあるが、回答者のうち約 90%からコメントが寄せられている。修了生の工学研究科に対する評価はかなり高く、研究室での生活が充実したものであったことをうかがわせる。また、専門性、プレゼンテーション能力、問題解決能力の向上にも十分な満足度が得られているものと判断される。しかし、英語教育については不足感を感じており、この点は、大多数の修了生に共通した意見である。学部・大学院の英語教育のあり方を議論し、対策を施す必要がある。

用語の説明

○ 課題探求能力

ひとつの課題を深く追求する能力。上司の期待が1であれば1.5倍，2倍等の結果を出す。ただし，結果を出す時間については考慮しない。

○ 課題解決能力

ひとつの課題に対し，現在所有する情報・知識を用いて，与えられた期限内に結果を出す能力。

○ 独創性

既存の概念にとらわれず新しいアイデアを創出する能力。

○ 構想力

既存の技術・装置を組み合わせて新しいシステムを構成する能力や，先を見る能力。

○ 表現力

資料作成能力やプレゼンテーション能力。

○ コミュニケーション能力

交渉能力や対話能力。

### 3 工学部・工学研究科の管理運営

#### 3.1 工学部の組織図

平成19年度の工学部及び工学研究科の管理運営組織並びに意志決定体制を、図3.1.1及び図3.1.2に示す。

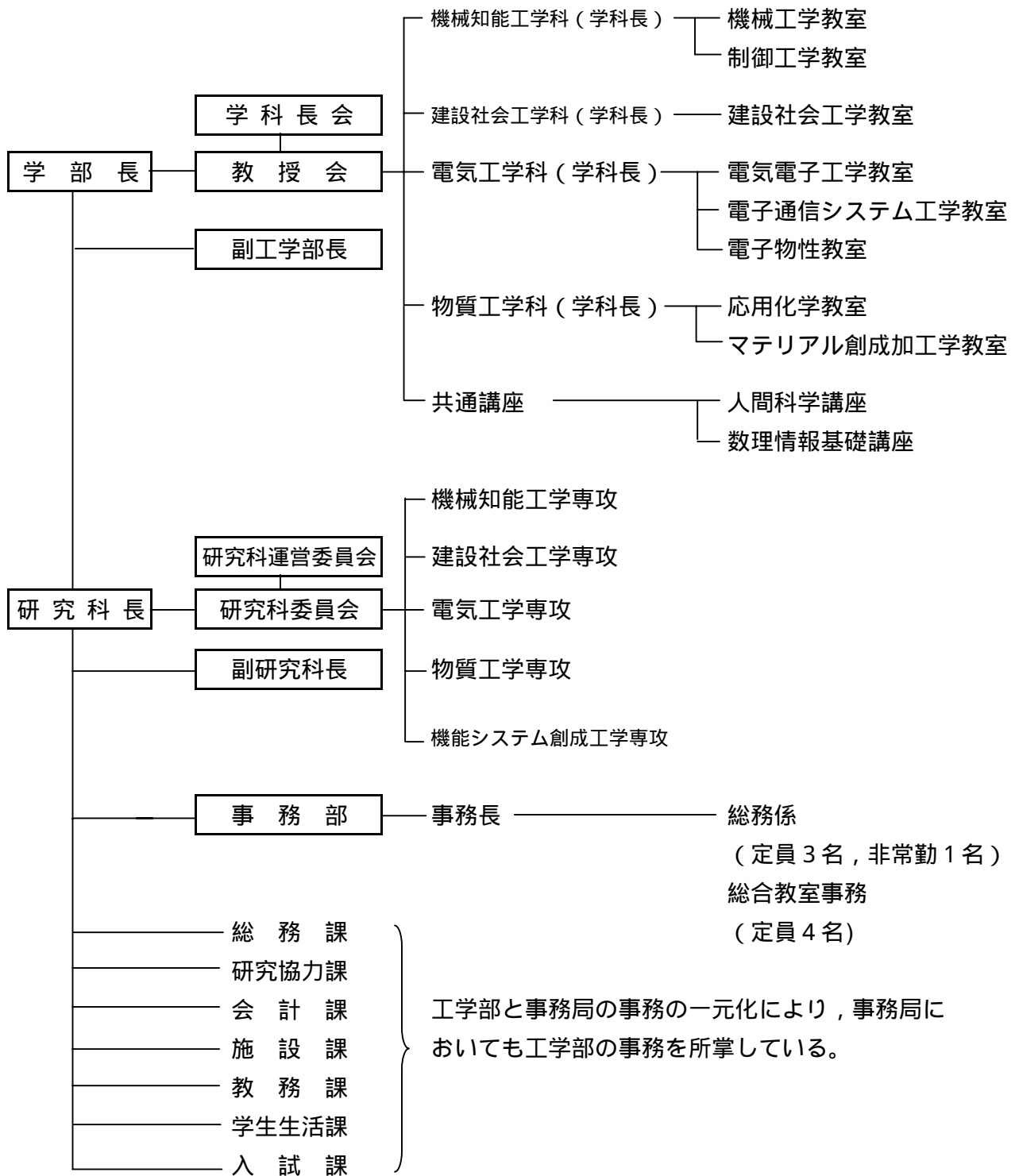


図3.1.1 組織図

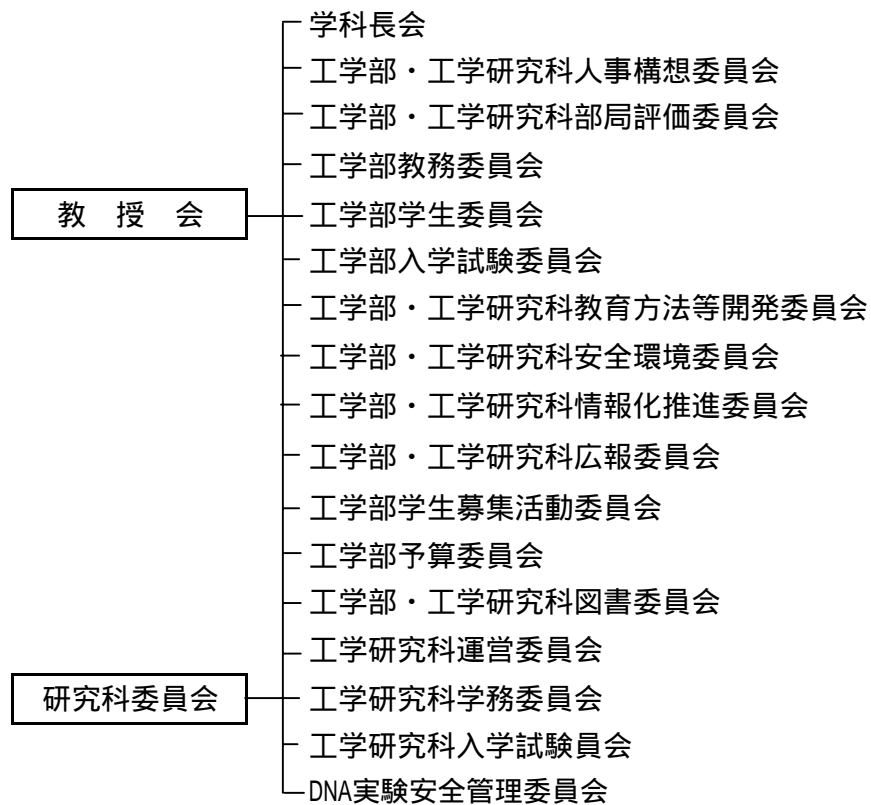


図3.1.2 各種委員会

## 3.2 各種委員会活動の点検・評価

### 3.2.1 工学部・工学研究科人事構想委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

- (1) H19.6.20 建設社会工学研究系(建築学部門)教授選考委員会の設置提案2件について審議した。
- (2) H19.6.20 建設社会工学研究系(建築学部門)准教授選考委員会の設置提案について審議した。
- (3) H19.6.20 建設社会工学科(国土デザイン工学講座)准教授選考委員会の設置提案について審議した。
- (4) H19.6.20 共通講座(数理情報基礎講座・数学分野)准教授選考委員会の設置提案について審議した。
- (5) H19.6.20 電気工学科(電子デバイス工学講座)助教の学内講師への推薦について審議した。
- (6) H19.7.18 機械知能工学科(熱流体学講座)教授選考委員会の設置提案について審議した。
- (7) H19.7.18 機械知能工学科(宇宙工学講座)教授選考委員会の設置提案について審議した。
- (8) H19.7.18 電気工学科(電気エネルギー工学講座)助教選考委員会の設置提案について審議した。
- (9) 今年度の人事のまとめを行い、今後の人事構想について審議した。  
なお、改組に伴う規則改正により、平成20年度からは本委員会を廃止し、系長会で人事に関する案件を審議することとした。

#### 2. 今年度採択した事項

- (1) 上記に掲載した選考委員会の設置について検討し、教育研究評議会および役員会に提出した。

#### 3. 委員会の議論に使用された資料

- ・建設社会工学研究系(建築学部門)教授選考委員会設置提案書
- ・建設社会工学研究系(建築学部門)教授選考委員会設置提案書
- ・建設社会工学研究系(建築学部門)准教授選考委員会設置提案書
- ・建設社会工学科(国土デザイン工学講座)准教授選考委員会設置提案書
- ・共通講座数理情報基礎(数学分野)准教授選考委員会設置提案書
- ・電気工学科(電子デバイス)学内講師選考調書
- ・機械知能工学科(熱流体学講座)教授選考委員会設置提案書
- ・機械知能工学科(宇宙工学講座)教授選考委員会設置提案書
- ・電気工学科(電気エネルギー工学講座)助教選考委員会設置提案書
- ・教員所属表・教員担当配置表

#### 4. 工学部・工学研究科の現状に関する意見または改善に関する提言

- (1) 定員の概念がなくなったため、従来の考え方では不都合が生じることとなる。(「教室の定員」「空きポスト」等)
- (2) 今後、教員の所属は系及び分門となるが、教育(学科)ベースでの人事の全体構想を考えていくことが望ましいと思われる。

人事構想委員会の廃止(平成20年度からは系長会で人事に関する案件を審議)

### 3.2.2 工学部・工学研究科部局評価委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 平成18年度卒業生、修了生アンケートの解析・まとめ
- (2) 平成18年度企業アンケートの実施と解析・まとめ
- (3) 平成16年度以前の卒業生、修了生アンケートの解析・まとめ

- (4) 平成18年度版「現状と課題」の発行
- (5) 平成19年度の各種アンケートに関する検討
- (6) 中期目標・中期計画評価のうち、教育水準、研究水準の評価に関する調査検討

## 2. 今年度採択した事項

- (1) 各種アンケートの結果をまとめ、「現状と課題」に掲載した。
- (2) 「現状と課題」をホームページに掲載し、公表することとした。
- (3) 平成19年度卒業生・修了生アンケート内容を検討した。
- (4) 平成19年度企業アンケート内容および実施方法を検討した。
- (5) 法人評価のための部局データの収集と検討への対応法を策定した。

## 3. 残された課題または将来解決すべき事項

- (1) 各種アンケート結果のフィードバック  
卒業生、修了生、企業の3つのアンケートを実施しており、アンケートデータの長年の蓄積を通して信頼性の高い教育システムを構築する必要がある。この課題に関連する委員会にフィードバックし、教育システムの改善に反映させる方策を強化する必要がある。
- (2) 教育と研究の活性化システム  
法人化後の第一期である5年が経過するが、中期目標・中期計画の評価を受けて、さらに教育と研究を活性化するシステムの構築が必要と考える。特に、研究院、工学府、そして工学部の体制とした組織改編を活用した仕組み造りが望まれる。
- (3) 教育職員評価システム  
教育職員評価実施委員会による分析結果等を基にして、次期評価に向けての評価システム、評価方法に関する検討が必要である。

## 4. 委員会の議論に使用された資料

- ・平成18年度卒業生・修了生アンケート、平成18年度企業アンケート、平成16年度以前の卒業生・修了生アンケート
- ・教育水準部会議事次第
- ・研究水準部会議事次第

## 5. 工学部の現状に関する意見または改善に関する提言

上記3.(1)(2)(3)と同様

## 6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 教育職員評価システム  
今年度は教育職員評価に関する議論が大学全体では行われておらず、次期評価システム等についての検討はされていない。今後、検討していく必要がある。
- (2) 企業アンケートの工夫  
昨年度に行った企業アンケートのタイミング調整が功を奏しない結果に終わったため、一昨年と同様の実施法とした。現状ではこの方法が良いものと判断された。
- (3) 学生アンケートの結果を受けて  
高学年における英語授業の活用法に問題が残されており、英語教育についてのより積極的な取り組みが必要と思われる。

## 3.2.3 工学部教務委員会

### 1. 今年度取り組んだ課題

- 1) 授業関係
  - (イ) H20年度中級英語の新設について



- (ロ) H20 年度リレーセミナーの新設について
  - (ハ) H20 年度人間科学リレー講義科目について
  - (ニ) 現代 GP 関係新設科目について
  - (ホ) 「応用物理学」の廃止について
  - (ヘ) 情報共通科目「情報処理応用」の内容変更について
- 2) 教育関係
- (イ) H20 年度からの GPA の利用について
  - (ロ) H20 年度改組に基づく時間割案作成について
  - (ハ) 履修登録単位数の上限設定について
  - (ニ) 履修登録上限単位数の緩和について
  - (ホ) 履修登録をしていない科目の取り扱いについて
  - (ヘ) 工学府授業科目の特例履修について
  - (ト) H20 年度履修課程表への PBL 科目, 少人数科目の明記について
  - (チ) 物理学のリメディアル教育について
  - (リ) 学習・教育目標の周知方法について
  - (ヌ) 全学科共通科目について
  - (ル) TA の配置について
  - (ヲ) 「成績評価に関する異議書」に関する手続きの流れについて
  - (ワ) 早期卒業取扱要項について
  - (カ) H20 年度以降特別講義の配分方法について
  - (ヨ) 工学部における人材養成上の目的等について
  - (タ) 単位の実質化について
  - (レ) 推薦入学合格者の入学前教育について
  - (ソ) 上級年次科目の履修について
  - (ツ) 仮 4 年制度の見直しについて
  - (ネ) 学修細則への指導教員制度の記載について
  - (ナ) 遠隔教育による単位互換制度について
- 3) 学生関係
- (イ) 学習成果自己評価シートの改訂について
  - (ロ) 除籍対象学生への通知について
  - (ハ) 編入生単位認定希望科目調査書フォーマットについて
  - (ニ) H20 年度進級卒業査定結果の開示について
  - (ホ) H20 年度入学生の指導教員の割振りについて
- 4) その他
- (イ) 福岡県立ひびき高等学校との高大連携について
  - (ロ) 教務委員会の下部委員会の廃止について

## 2. 今年度採択した事項

- 1) 授業関係
- (イ) H20 年度から中級英語を開講する
  - (ロ) H21 年度からリレーセミナーを開講する
  - (ハ) 「応用物理学」を廃止する
  - (ニ) 現代 GP 関係科目(総合連携実習, 理数教育体験 I, II) を新設する
- 2) 教育関係
- (イ) H20 年度からの GPA の利用について
    - ・コース分けに利用する
    - ・工学府入門科目受講資格に利用する
    - ・履修登録上限単位数の緩和に利用する
    - ・早期卒業資格に利用する
    - ・ GPA 算出に通算を追加し, 不可となっていた科目を再度履修して合格した場合は,

- それ以前の不可を通算 GPA の分母から除外する
- (ロ) H20 年度改組に基づく時間割案作成について
    - ・ H23 年度の時間割案を作成し,科目配置について大きな矛盾がないことを確認した
  - (ハ) 履修登録単位数の上限設定について
    - ・ 上限単位を 4 6 単位にする
    - ・ 建設社会工学科の 2 科目 4 単位 (建設力学基礎及び演習,測量学 I) は上限単位に含めない
    - ・ 成績優秀者に対しては上限単位数を緩和する
    - ・ 特別な事由がある場合は,教室で判断し,教務委員が認める
  - (ニ) 履修登録をしていない科目の取り扱いについて
    - ・ 履修手続きを速やかに行うよう指導する
    - ・ 追加登録には教務委員の承認を必要とする
  - (ホ) H20 年度履修課程表への PBL 科目,少人数科目の明記について
    - ・ 備考欄に P,S を記載する
  - (ヘ) 成績の評語の変更
    - ・ 「不合格」 - > 「再試験対象」
    - ・ 「未履修」 - > 「不可」
    - に变更し,在学生にも適用する
  - (ト) 学習・教育目標の周知方法を各教室ごとに改善する
  - (チ) 「成績評価に関する異議書」に関する手続きの流れを決定した
  - (リ) H20 年度以降特別講義の配分比率を決定した
    - ・ 超過分は各教室予算から補填する (H19 年度から補填可能)
  - (ヌ) 学修細則に指導教員制度を明記する
  - (ル) 遠隔教育においては相手大学の単位数で認定する
- 3) 学生関係
- (イ) 学習成果自己評価シートの改訂について
    - ・ 学習・教育目標の周知度調査に関する項目を加える
  - (ロ) 全学生の保証人への成績郵送について
    - ・ 成績不審者への通知も同封して,5 月中旬に発送した
  - (ハ) 除籍対象学生への通知について
    - ・ 例年 1 月に発送していたのを,1 1 月に発送した
  - (ニ) H20 年度進級卒業査定結果の開示について
    - ・ オリエンテーション時等において,学生に進級卒業査定結果を口頭で説明する
  - (ホ) H20 年度入学生の指導教員の割振りについて
    - ・ 機械知能工学科,電気電子工学科:人間科学教室を含めて割振り
    - ・ 建設社会工学科,応用化学科,  
マテリアル工学科,総合システム工学科:学科内担当教員で割振り
- 4) その他
- (イ) 福岡県立ひびき高等学校との高大連携について
    - ・ 機械知能工学科の付帯条件を削除した
    - ・ 総合システム工学入門 PBL を対象科目に加えた
  - (ロ) 教務委員会の下に存在する「工学基礎科目運営委員会」,「人間科学科目運営委員会」,  
「教職科目運営委員会」を廃止した

### 3. 残された課題または将来解決すべき事項

- (1) 授業関係
  - (イ) 入試委員会へ推薦入学試験の土曜,日曜日での実施を要望したが,実現できなかった
  - (ロ) 複数クラス授業の内容および統一化
  - (ハ) 成績評価の標準化
  - (ニ) 履修科目数上限の設定による問題への対応

- ( 2 ) 教育関係
  - ( イ ) 単位の実質化 ( 1 単位 4 5 時間相当の学習の確保 )
  - ( ロ ) TA の配置の見直し
  - ( ハ ) JABEE 受審に対する方針
  - ( ニ ) 卒業生や企業へのアンケート集計結果のフィードバックシステムの充実
  - ( ホ ) 推薦入学者に対する入学前教育
- ( 3 ) 学生関係
  - ( イ ) 学生の成績の保証人への送付に対する効果
  - ( ロ ) 学習成果自己評価シートのオンライン化
  - ( ハ ) 教務情報システムの Web 化, シラバスのオンライン化の充実
  - ( ニ ) 学生証 ( IC カード ) を利用した出欠確認システムの導入
  - ( ホ ) 欠席または不登校学生の早期発見と指導教員による早期指導

#### 4 . 委員会の議論に使用された資料

- ( 1 ) 九州工業大学中期計画・中期目標
- ( 2 ) 学習成果自己評価シート
- ( 3 ) 教育委員会資料
- ( 4 ) その他, 教務委員会資料

#### 5 . 工学部の現状に関する意見または改善に関する提言

- ( 1 ) 単位の実質化に向けた議論が必要である。
- ( 2 ) JABEE への対応を視野に入れ, 編入生に対する単位認定を弾力化する必要がある。
- ( 3 ) GPA に基づく退学勧告制度の創設と, 学則第 2 2 条に基づく再入学制度の再考が必要である。

#### 6 . 昨年度の改善に関する提言に対する, 改善状況と未改善及び新たな問題点

- ( 1 ) 工学基礎科目, 語学系科目, 人間科学系科目などを担当する教員間の連携については, 教務委員長が適宜連携の強化を図るため調整を行った。必要に応じて, 関係教員には教務委員会への出席を求め, 連携を図った。
- ( 2 ) 同一科目名の講義における授業内容と評価の均一化については引き続き検討する必要がある。
- ( 3 ) 20 年度入学生から適用される履修単位数を 46 単位とすることに対して, 学生への履修指導上の問題点について整理し, その周知を各教務委員を通じて行った。

### 3 . 2 . 4 工学部学生委員会

#### 1 . 今年度取り組んだ課題

- ( 1 ) 「大学への意見箱」の本格運用
- ( 2 ) 中期目標・中期計画の実行(中間評価)
- ( 3 ) 日本学生支援機構奨学生を選考
- ( 4 ) 学生寮の安全対策
- ( 5 ) 放置自動車・自転車の措置について
- ( 6 ) 期末試験における不正行為防止の検討
- ( 7 ) 工大祭への対応
- ( 8 ) キャンパス内喫煙場所の検討
- ( 9 ) 新入生研修の日程等について

#### 2 . 今年度採択した事項

- ( 1 ) 半月に 1 回意見箱への投稿意見を回収し, その半月後には回答を掲示する, とした運用を 4 月より本格的に開始した。H19 年度の一年間で, 投稿件数は 4 件と必ずしも多くはなかった。年度途中で学務部事務室の移動があり, これに伴って学務部前に設置した意見箱の移設も影響していると思われるので, 設置場所については今後も検討して行く。

- ( 2 ) 学生委員会担当項目の工学部担当分について、中間評価を行い、また次年度以降の年度計画を作成した。
- ( 3 ) 日本学生支援機構奨学生の工学部・工学研究科の候補者を選考した。
- ( 4 ) 明専寮の耐震強度の二次診断結果を受けた、寮の一部についての応急的な耐震補強工事および平成 20 年度からの入寮生募集停止という大学の方針を検討し、これを了承した。
- ( 5 ) 戸畑キャンパス内に放置自動車・自転車が多数あることについて、その措置を担当部局に要望した。
- ( 6 ) 前期末試験において不正行為者に一年次学生が含まれていた。不正行為者は、不正行為に対する罪悪感が欠如し、受ける処分の内容を理解していなかったことが報告された。不正行為防止のため、各試験開始前に不正行為についての注意を周知徹底させることを改めて試験実施担当者に要望することとした。
- ( 7 ) 学生委員会の工大祭担当委員・工大祭実行委員会・学生支援課の 3 者が協力して検討し、問題を起こした団体に対するペナルティーのあり方については、ほぼ昨年度の方法を踏襲した。また学科展の開催については、工大祭実行委員会への協力を各教室に要望した。
- ( 8 ) 安全衛生推進室より、戸畑キャンパス内での喫煙指定箇所の見直しについて協力要請があり、各教室に依頼した。
- ( 9 ) H20 年度の新入生研修の日程については、本年度と同様、特定の金曜日の午後のみを休講とする形で、同時に実施することとした。なお、休講措置を必要としない場合は、他の日程で実施することも可能であることを確認した。また、研修にかかる経費負担についての問題点が指摘され、支援経費の算出基準を見直すこととした。

### 3 . 残された課題、又は将来解決すべき事項

- ( 1 ) 意見箱の本格的な運用を開始したが、学生による利用は 4 件と必ずしも多くなかった。学生への周知と共に、意見箱の設置場所についても検討が望まれる。
- ( 2 ) 喫煙マナー啓蒙の看板のうち工学部学生委員会名で掲げている「歩きタバコ禁止」については、学内原則禁煙のキャンパスにはそぐわないとの意見があり、「指定場所以外禁煙」等に変更することを検討したが、実現できなかった。学内での喫煙指導は、学生だけでなく教職員も対象であり、今後は安全衛生推進室との連携を強め改善を図っていく必要がある。

### 4 . 委員会の議論に使われた資料

- ・九州工業大学中期目標・中期計画
- ・平成 19 年度～平成 20 年度における年度計画等について(評価と翌年度計画案)
- ・H19 年度日本学生支援機構奨学生 工学部推薦者選考資料
- ・明専寮の耐震補強工事について
- ・工大祭実行委員会からの依頼書
- ・戸畑地区喫煙場所

### 5 . 工学部・工学研究科の現状に関する意見、又は改善に関する提言

建物改修に伴う学務部の移転により、学生の利便性については大いに改善された。同時期に学生食堂ホールの拡張工事も行われたが、昼食時の混雑は期待されるほど緩和されたとはいえない。ホール拡張に見合うテーブル・イスの不足、出食能力、レジ数など、要因を分析し、検討し、改善していく必要があると考えられる。

### 6 . 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

意見箱の本格的な運用を開始し、運用体制に特に問題は生じなかった。しかし、学生の利用数は一年間で 4 件と必ずしも多くなかった。学生への周知と共に、意見箱の設置場所についての検討が望まれる。

## 3 . 2 . 5 工学部入学試験委員会

### 1 . 今年度、本委員会が取り組んだ課題

- ( 1 ) 平成 20 年度編入学試験選考方法について
- ( 2 ) 平成 20 年度入学者選抜要項について

- ( 3 ) 改組に係る選抜区分ごとの募集人員の設定について
- ( 4 ) 改組により，教育方針等の見直し・修正について
- ( 5 ) 入試科目に生物を導入することについて
- ( 6 ) 中期目標・中期計画について
- ( 7 ) 一般選抜において，志望学科に「学科を特定しない」を採り入れることについて
- ( 8 ) 選抜区分ごとの入学者の確保及び定員超過の抑制について
- ( 9 ) 平成 2 0 年度入学試験合格者等選考方法について
- ( 10 ) 推薦選抜の土曜日実施について
- ( 11 ) 平成 2 1 年度入学試験日程について
- ( 12 ) 平成 2 0 年度推薦選抜入学試験について
- ( 13 ) 平成 2 0 年度個別学力検査追加合格者決定要領について
- ( 14 ) 平成 2 0 年度欠員補充第 2 次募集の選考方法等について
- ( 15 ) 平成 2 0 年度推薦選抜・一般選抜・帰国子女特別選抜・私費外国人留学生，平成 2 1 年度編入学試験の募集要項について

## 2. 今年度，本委員会が採択し，実施した事項

通常の選考・審査，募集要項の作成については例年どおり実施した。ここでは，新たに実施した事項についてのみ記す。

- ( 1 ) 推薦選抜・個別学力検査の募集人員，学科概要等について
 

学科改組・学科新設などの平成 2 0 年度工学部改組計画を受け，選抜区分（推薦入学・前期日程・後期日程）ごとの募集人員数について，前年度の募集人員の割合を基に各学科で検討のうえ，本委員会で審議した。

これまで工学部では学科に依らず，推薦入学・前期日程・後期日程の定員配分を一律に決めていたが，審議の結果，平成 2 0 年度では前年度の割合を基に各学科の状況に合わせて募集人員の配分を決めることとした。

また，改組または新設学科の教育方針，学科・コースの概要等の見直し・修正について審議した。これらの見直し・変更の内容及び改組計画の予告を平成 2 0 年度入学者選抜要項に記載し，公表した。
- ( 2 ) 入試科目に生物を導入することについて
 

物質工学科応用化学コースから，改組後の応用化学科の入試科目に生物を導入することを検討している旨説明があり，問題点及び他学科での導入，導入した場合の生物受験者の第 2，第 3 志望学科の扱い，高校等での物理未履修者の入学後の物理教育などを検討・審議した。

しかし，現状では生物の入試問題を学内で作成できる状況ではないため，平成 2 1 年度入学試験からの導入はできないこととなった。
- ( 3 ) 志望学科に「学科を特定しない」を採り入れることについて
 

工学部の改組により 4 学科が 6 学科となるため，出願状況によっては定員割れや合格ラインの成績低下などが懸念されるため，第 3 志望に限り「学科を特定しない」を志望できるようにすることを審議し，第 3 志望に限り「学科を特定しない」を志望できることとした。

また，その場合の合格学科の決定方法は，学科充足率の低い学科とすることに決まった。
- ( 4 ) 平成 2 0 年度入学試験合格者等選考方法について
 

「学科を特定しない」を志望できることとしたことを受け，その場合の合格学科の決定方法を選考方法の事項に追加し，また，執行部から選抜区分ごとの入学者確保及び定員超過の抑制（特に推薦選抜）の要請があり，本委員会で審議した結果，選抜区分ごとの入学者を確保するよう努力すること及び平成 2 1 年度入学者選抜において，平成 2 0 年度入試の実施結果を踏まえて，選抜区分ごとの募集人員の配分を検討することとなった。

改組及志望学科の選択方法の変更などに対応するため，入試システムのプログラムが変更され，プログラム変更に伴う合格者選考システムの検証作業を本委員会委員で行った。
- ( 5 ) 推薦選抜の土曜日実施及び平成 2 1 年度入学試験日程について
 

教育委員会から推薦選抜の土曜日実施について検討依頼があり，平成 2 1 年度入学試験日

程と併せて、本委員会で審議した結果、推薦入試の土曜日実施については承認された。

しかし、全学入学試験委員会において、学部の授業調整期間が確保できたこと及び土曜日の実施は手当て支給の経費が発生することなどのため、平成21年度推薦入試は平日に実施することとなった。

(6) 平成20年度推薦選抜入学試験について

工学部の改組により教員の所属が異動することもあり、例年と同様に全面接グループに共通講座の教員が参加することが難しいため、面接員の構成について検討した。

なお、面接員の構成は出願状況を勘案して決定することとし、出願受付終了後に本委員会で議論し、専門学科の教員だけでは構成できない学科など、面接グループによっては人間科学講座の教員が加わってもらい、面接試験を実施した。

(7) 平成20年度個別学力検査追加合格者決定要領について

追加合格が必要となった場合の追加候補者への連絡方法・回答の待ち時間などを検討し、当初案では回答の待ち時間が短時間だったため、変更を全学入試委員会へ要請することとした。

(8) 平成20年度欠員補充第2次募集の選考方法等について

昨年度委員会で議論した結果を踏襲し、欠員補充第2次募集の選考方法は個別学力検査(前期日程)で利用する大学入試センター試験の教科・科目等とし、配点については、個別学力検査を行わないため、個別学力検査での数学・理科の配点各400点をそれぞれ加算することとした。

### 3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

- (1) 昨今の受験者が減少傾向にある中、学生募集活動を担当された方々の各方面での広報活動などの努力もあり、平成20年度志願者は前年度から増加したが、平成20年度実施の改組の影響など数年の経過を見ながら、推薦入試・前期日程・後期日程試験の定員配分、ひいては募集形態・入学定員をも含めた抜本的な検討が必要であると思われる。

### 4. 委員会の議論に使われた資料

- (1) 平成20年度大学入学者選抜実施要項等  
(2) 九州工業大学2008年大学案内  
(3) 平成19年度入学者選抜要項  
(4) 情報工学部の「学科を指定しない場合の合格学科決定方法」  
(5) 国立大学の定員超過を抑制する仕組みの導入について(国立大学協会照会文書)  
(6) 平成19年度一般選抜等各学生募集要項  
(7) 九州工業大学工学部「現状と課題」平成19年度版(18年度の活動報告) 九州工業大学工学部自己点検・評価報告書  
(8) 中期目標・中期計画(案)

### 5. 工学部の現状に関する意見、又は改善に関する提言

- (1) 毎年、12月に実施している予備校訪問により大学入試センター試験直前の受験者の志望状況情報を得ることができたが、年度当初から、予備校等が実施する模擬試験受験者の志望校データを取得するなどして、入試動向を把握することが望ましいと考える。
- (2) 入試選抜区分と入学後の成績の関係を分析のうえ、募集形態・定員配分などを検討する必要がある。しかし、その資料とすべき、入試情報・在学生の成績情報・卒業後の進路情報はそれぞれあるが、そのデータを網羅するデータベースシステム構築が、当年度の本委員会では取組めていないため、次年度委員会への積み残し課題となっている。
- (3) 学部の入試業務は大きく入試課に依存しているため、相互に密接な連携が要求される。この意味で、運営体制が一定程度、整備された。しかしながら、入試課の過重な仕事量については、入試におけるミスを防止する観点からかねてから懸念され、同委員会前委員長から全学入試委員会で増員が提言されていた。当委員会では引き続きこの件を要望している。平成18年度の事務系組織の改編に伴い、入試課に増員がなされているが、これは学

生募集活動に関連する業務がさらに集約されたためであり、今後の入試業務の安定的な遂行のためには、純粋に入試業務に専任するスタッフの確保が肝要である。

- (4) 入試業務の特殊性を考えると、入試業務担当は通常の配置換えによる職員の割り振りになじまない。入試業務に興味と愛着、そして責任感をもった人材の育成を図り、業務の安定的継承を図るべきであろう。今後、入試業務の重要性は一層増すことが予想されるため、重点課題といえる。

## 6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

### (1) 正員数の決定法について

この件については、従前から引き続き検討をされているが、平成20年度入試においても各学科の過去の実績に基づいて実施した。

現状の決定法で定員の確保及び執行部から要請のあった充足率の抑制はできたが、志願者の成績、併願校などのデータに基づく決定法など今後も引き続き検討・試行を行う必要がある。

- (2) 入試業務については年間を通してかなりの量の実務があり、ほとんど前年度どおり順次遂行される。そのスケジュールがタイトなため、改善すべき事項についても十分に検討・修正する時間が確保できない場合がある。この点は、例年どおりの日程より早めに対応すること等によって改善できると考えられる。

### (3) 入学試験成績、入学後の成績、卒業後の進路等に関するデータベースシステムの構築

中期目標・中期計画であるデータベースシステムの構築について、それぞれのデータは確保されているが、入学者選抜方法の改善を図るため、分析資料となる必要なデータの洗い出しなどデータベースシステムの構築に向け、引き続き検討が必要である。

## 3.2.6 工学部・工学研究科教育方法等開発委員会

### 1. 今年度、本委員会が取り組んだ課題

- (1) 授業評価アンケートの実施と実施方法の改善
- (2) 公開授業の実施
- (3) 学生懇談会の実施
- (4) 講演会の実施
- (5) FD活動の公表(FDニュースレター発行)
- (6) FD関連フォーラム出席
- (7) 中期計画における年度計画の実施

### 2. 今年度、本委員会が採択した事項

#### 2-1 授業評価アンケートの実施と実施方法の改善

授業評価アンケートについては、当委員会内にWGを設置しアンケートの実施方式・内容について検討を重ねた。また、教務委員会と連携して実施方法の改善案を構築し、教育改善会議に献策した。今年度の議論の結果をもとに、全科目実施を前提とした次年度のアンケートが行われる予定である。大学院については大学院学務委員会と連携し、履修者20名以上の全ての科目を対象としてアンケートを実施した。

#### 2-2 公開授業の実施

教員研修の一環として定例化した公開授業を今年度も実施した。その実施状況は以下の通りである。なお、授業担当者の推薦など実施方法についてはそれぞれの教室に一任した。

平成19年度公開授業実施一覧

学科等	日時	授業科目	担当教員	場所	参加者総数 (学科外参加者)
制御	2007/7/18 3時限目	電機基礎理論Ⅰ	黒木 秀一 先生	4-2A 講義室	6名(2名)

電子通信	2007/10/23 4時限目	ネットワークプログラミング	重松 保弘 先生	教育研究3号棟 413室(複合計算 室)	4名(2名)
電気電子	2007/11/20 4時限目	電子回路II	白土 竜一 先生	5-2A講義室	3名(2名)
応用化学	2007/12/7 3時限目	無機化学II	植田 和茂 先生	C-1A講義室	4名(1名)
人間科学	2007/12/17 1時限目	社会学II	井上 寛 先生	C-2B講義室	6名(5名)
建設社会	2008/1/7 3時限目	水環境工学	鬼束 幸樹 先生	1-3B講義室	6名(2名)
機能システム	2008/1/7 7時限目	マテリアル・ナノテクノロジー フロンティア	孫 勇 先生	総合研究棟 S-2A	4名(3名)
マテリアル	2008/1/10 3時限目	コンピュータ材料設計	長谷部 光弘 先生	情報科学センター 講義室1	5名(1名)
機械	2008/1/17 2時限目	材料力学II	原田 昭治 先生	1-3B講義室	3名(5名)
数理情報	2008/1/22 2時限目	情報処理応用	木村 広先生	総合研究棟2階 情報教育室	2名(3名)

公開授業においては、全ての授業について実施担当教室以外の教室に所属する教員が参加する方式を昨年度に続き本年度も実行した。

## 2-3 学生懇談会の実施

昨年度に引き続き「学生と教員との懇談会」を11月26日(月)13:30~15:00に総合教育棟第3会議室において実施した。出席教員は工学部・工学研究科FD委員会委員8名、および学生16名であった。

## 2-4 講演会の実施

平成19年度 FD講演会出席状況一覧

【第1回】平成19年12月26日(水) 14:40-15:20

	教授	准教授	講師	助教	計
工学部所属	48	40	3	9	100
センター所属	1	0	0	1	2
理事	1	0	0	0	1
合計	50	40	3	10	103

【第2回】平成20年1月23日(水) 15:00-16:00

	教授	准教授	講師	助教	計
工学部所属	44	37	2	7	90
センター所属	0	0	0	0	0
理事	0	0	0	0	0
合計	44	37	2	7	90

\*2回の講演会概要についてはFDニュースレターNo1を参照。

## 2-5 FD活動の公表

本年度のFD活動に基づいたFDニュースレター No.1を発行した。(H20.3.31付)

## 2-6 FD関連フォーラム出席

本年度に開催された下記FD関連フォーラムに委員が参加した。



第13回FDフォーラム(財団法人大学コンソーシアム京都主催)

平成20年3月8日~9日 芹川委員出席

第14回大学教育研究フォーラム(京都大学高等教育研究開発センター主催)

平成20年3月26日~27日 大屋委員出席

## 2-7 中期計画における年度計画の実施

中期計画に基づき全学の教育委員会に報告すべき工学部FD活動の内容の公表方策について評価・検討を行った。

## 3. 残された課題, 将来解決すべき事項

### 3-1 授業評価アンケートの実施体制確立

全科目実施を前提に諸方法を検討してきたが,次年度における実施体制の確立が急務である。これに加え,アンケート結果の分析をフィードバック・ループの中にどう活かしていくかを早急に検討する必要がある。

### 3-2 公開授業の参加者数拡大と実施時期の工夫

今年度も引き続き,FD委員が積極的に他教室の授業に参加する体制をとったが,昨年度に比べて参加者数に大きな変化が見られなかった。前期実施科目の増加や,事前通知方法の改善,学生へのアナウンスなど,引き続き参加者拡大に向けた工夫を図る必要性が残った。

### 3-3 FD活動に対する理解促進

当委員会を中心とするFD活動の公表媒体として,「FD News Letter」を発行することとした。今後継続して発行していくことが必要であり,そのための体制づくりが急がれる。

### 3-4 大学院(工学研究科)におけるFD活動

今年度後期において,履修者20名以上の科目を対象として,授業評価アンケートを実施した。また,アンケートに関するWGを設置しアンケート実施形式・アンケート項目について検討したが,引き続き方向性を探っていく必要がある。また,大学院独自のFD活動の実現も視野にいれ,活動の幅を広げていく必要がある。

### 3-5 研修会・講演会の充実

今年度はFD講演会を実施し,教員の教育研修の機会を設けた。次年度以降,どのような形で教員の教育研修に取り組むのか,数年先まで見据えたプランを構築する時期に来ている。

## 4. 委員会の議論に使われた資料

主な資料として

- (1)平成19年度 年度計画
- (2)平成19年度 授業評価アンケート
- (3)平成19年度 FDニュースレターNo.1
- (4)平成18年度 全学教育委員会資料

## 5. 工学部の現状に関する意見,又は改善に関する提言

FD活動の全国的な状況から考えると,FD義務化を背景に,教育研修など,組織(工学部)独自の取り組みが問われている。教育方法の開発・改善という従来活動に加えて,教職員の教育能力向上にとってどのような手段が有効なのか,将来像を確立し,それに向かった方策を検討すべきである。

## 6. 昨年度の改善に関する提言に対する,改善状況と未改善及び新たな問題点

公開授業や授業評価アンケート内容の公表方法に関しては,FD委員会だけでなく,教務委員会,大学院学務委員会と連携し,教育改善会議で議論することができた。また,委員会内にWGを置き,その検討案を文書で上程することで,議論を幅広く共有することができた。一方,FD義務化を背景として活動内容の増加・多様化が必至となったが,次年度から改組のためFD委員が減員となる。きめ細かな活動を継続して行うために,FD活動を実施する組織の強化が課題となろう。

### 3.2.7 工学部・工学研究科安全環境委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 安全衛生ミーティングの実施および実施結果の評価  
昨年度定められた「安全衛生ミーティング」の実施要綱をもとに、各教室で7月および12月に安全衛生ミーティング実施のアナウンスと「安全衛生ミーティング記録」の提出依頼を行った。また、委員会にて第一回の実施結果の評価を行い、各研究室でヒヤリハット事例など事故につながる恐れのある危険因子を学生と教職員で共有できたとの報告が多数見られ、本ミーティングが当初の実施目的を達成していることが確認された。また、本ミーティングを今後継続して行っていくことが事故防止に効果があるとの認識で一致した。
- (2) 講義室の安全巡視の実施とその評価  
安全衛生委員会による巡視に含まれない講義室等の巡視を本委員会で行うこととし、対象となる講義室と巡視担当を決定した。チェックリストに基づき巡視を行った結果、非常口の表示がほとんどなかったこと、消火器の本来あるべき場所が分からない等の意見があった。これらの点に関して検討した結果、非常口については事務でステッカーを作成していただくことになり、消火器については設置場所を記載した資料を各教室の委員に配布し、それに基づいてチェックすることとした。また、本検討結果をもとにチェック項目の改訂を行った。
- (3) 防災マニュアルおよびパンフレットについて  
過去に本委員会で作成された防災マニュアル案および防災に関する本学の規則を参照し、改善点を検討した。その結果を安全衛生委員会に報告したところ、会計課で詳細な防災マニュアルを作成しているとのことで、それをもとに両委員会でも再検討することとなった。
- (4) 「実験・実習における安全の手引き」の改訂  
本年度版の内容について、分野ごとに担当を定め改訂作業を行った。特に本年度は改組が行われたため、総合システム工学科など新設学科では大幅な変更となった。
- (5) 中期目標・中期計画の達成評価と次年度の計画  
ほぼ計画に従い活動を進め「3」の達成度と評価できた。また、次年度以降の計画に関しては、遅れの見られる防災パンフレットに関する項目のみ上記1.(3)に関連して修正を加え、残りは従前通りとすることとした。

#### 2. 今年度採択した事項

- (1) 講義室の安全衛生巡視チェックリスト（改訂版）  
第1回の巡視結果をもとにチェック項目の改訂を行った。
- (2) 災害時の避難場所（改訂版）  
建物の名称変更に伴う表示の改訂を行った。
- (3) 安全衛生推進員の兼任  
安全衛生委員会より、これまで教室毎におかれていた安全衛生担当者を安全環境委員が兼務してほしい旨の提案があり、安全環境委員会で審議の結果これを了承した。

#### 3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

- (1) 防災マニュアルの見直し、防災パンフレットの作成と配布
- (2) (1)に基づいた防災訓練の実施

#### 4. 委員会の議論に使われた資料

- (1) 工学部の平成19年度版「実験・実習における安全の手引」
- (2) 中期目標・中期計画 ファイル

#### 5. 工学部・工学研究科の現状に関する意見、又は改善に関する提言

学生の安全と教職員の安全は密接に関連しており重複する内容も多い。本委員会と安全衛生委員会との連携を強化することで両委員会の活動の合理化をはかることが必要である。

#### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

上記1.(3)および2.(3)のように安全環境委員会と安全衛生委員会で連携をはかること

ができた。特に1.(3)に関しては、両委員会で協議して早期実現をはかることが望まれる。

### 3.2.8 工学部・工学研究科情報化推進委員会

#### 1. 今年度、委員会が取り組んだ課題

- (1) 本委員会組織に関わる検討
  - A. 副委員長の選出,及び全学情報化推進委員会への副委員長のオブザーバー参加
  - B. 電話交換機システム技術審査委員会委員の推薦
  - C. 情報セキュリティーポリシー策定専門部会委員の推薦
  - D. 総合情報基盤構築計画策定プロジェクト委員の推薦
  - E. 全学統合ID管理システム仕様策定委員の推薦
- (2) 全学運用情報化関連ソフトウェアの工学部での運用方法の検討と実施
  - A. ウイルス対策ソフト
  - B. マイクロソフトキャンパスアグリーメント
  - C. マセマティカ
- (3) 違法行為防止,及びセキュリティ向上についての検討と対処
  - A. 情報モラル教育
  - B. 工学部情報倫理教育のための小冊子の配布
  - C. 工学部におけるインシデントに対する対応表の確認

なお,議事録から確認された議題は以下のとおりである。

- 副委員長の選出,及び全学情報化推進委員会への副委員長のオブザーバー参加 (第1回)
- 前年度からの課題の確認
- ウィスルバスターの運用に関する工学部の基本方針(2007年度版)について(池永案の承認)(第2・3回)
- 共通教育研究棟電気錠管理システムのネットワーク化について(情報基盤室からのリモート設定による作業負担軽減)(第3回)
- Mathematicaの更新ないしは代替についての工学部意見の集約(第4回)
- 工学部技術職員研修に対する協力について(講師推薦)
- 先端コラボ棟(総合教育棟)等のネットワーク管理について(全学情報化推進委員会への問題提起と工学部内での管理方針の確認)(第5回)  
この件は第9回まで継続審議
- 「セキュリティポリシーにおける情報システム利用規定(案)」について工学部意見の集約
- 平成20年度の改組に伴う諸規則・規定の改定について(名称変更に伴う改定について教育研究評議会への一任を承諾)
- 電話交換機システム技術審査委員会委員の推薦(第7回)  
(木村広委員を推薦)
- 情報モラルパンフレットに関する修正要望等について(第8回)
- 先端コラボ棟等のネットワーク環境整備・管理に関する要望書について(第9回)
- 先端コラボ棟・総合研究棟のネットワーク環境維持に関する原則の検討
- 「全学統合ID管理システム」仕様策定委員会の委員推薦  
(池永委員を推薦)
- 「総合情報基盤構築策定プロジェクト」仕様策定委員会の委員推薦  
(池永委員を推薦)
- 情報科学センター次期システム仕様策定委員の推薦  
(服部委員を推薦)
- 情報セキュリティーポリシー策定専門部会委員の推薦  
(岡野委員を推薦)
- 情報ネットワーク・セキュリティ専門部会委員の推薦  
(河部先生を推薦)

## 2. 今年度、委員会が採択した事項

- (1) 上記1(1)で示される各種委員の選出
- (2) Mathematicaの更新ないしは代替についての工学部意見の集約
- (3) 先端コラボ棟等のネットワーク環境整備・管理に関する要望書の全学情報化推進委員会への提出
- (4) 先端コラボ棟・総合研究棟のネットワーク環境維持に関する原則の検討

## 3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

- (1) 総合情報基盤構築や電子ジャーナル等への大学全体での支出が増大するなかで、教育基盤として整備しているウイルス対策ソフト・マイクロソフトキャンパスアグリーメント・マセマティカなどについて、どの程度まで整備するかの議論が必要。
- (2) 情報セキュリティポリシーの不断の周知徹底とネットワーク管理状況の確認・検証
- (3) ネットワーク管理や設定作業などの実務手順・対応部署の明確化と業務負荷の平滑化
- (4) 学生証・職員証がIC化されたことのメリットを如何に引き出すかの検討が必要。

## 4. 委員会の議論に使われた資料

- (1) 平成19年度工学部・工学研究科情報化推進委員会委員名簿
- (2) 九州工業大学工学部・工学研究科情報化推進委員会内規
- (3) 前年度活動内容および本年度課題
- (4) ウィルスバスターの運用に関する工学部の基本方針2007年度版(案)
- (5) 先端コラボ棟ネットワーク管理
- (6) 先端コラボ棟ネットワーク経緯
- (7) 先端コラボ棟ネットワーク図面
- (8) 九州工業大学コンピュータ・セキュリティ・インシデント対応機構図
- (9) Web of Science 利用講習会について
- (10) 戸畑キャンパスにおけるネットワーク環境の整備についての要望書(案)
- (11) 「全学統合ID管理システム」使用策定委員会(案)
- (12) セキュリティパンフレット2008年度版(再修正)
- (13) 情報セキュリティポリシー関連規程
- (14) ソフトウェア管理台帳(様式)
- (15) 戸畑キャンパスにおけるMathematica導入作業に関する協力をお願い
- (16) 全学情報化推進委員会資料
- (17) その他

## 5. 工学部・工学研究科の現状に関する意見、又は改善に関する提言

- (1) 情報科学センターや工学部情報基盤室に対する作業依頼が、個人的あるいは非文書化された形で行われており、対応範囲・責任範囲の明確化のためにも規則・内規等の整備を進める必要がある。
- (2) ネットワークの安全性および情報セキュリティーポリシーの不断の周知徹底
- (3) 法令順守の観点から、ソフトウェアのライセンス管理の重要性の周知と管理強化

## 6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

安全なネットワークシステムの構築については、ウイルス対策ソフトの配布と学生・教職員への周知徹底により少しずつ改善されている。しかし、ソフトウェア・ライセンス管理や情報セキュリティポリシーの実行といった個人の意識改革が必要な項目に対する教育活動はまだ弱い点があると思われる。

ネットワークシステムの管理・運営に関わる組織的な責任範囲の明確化がなされていない事例が現れてきているので、それらに対する全学的な検討ならびに規則整備が必要と思われる。

### 3.2.9 工学部・工学研究科広報委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

(1) 工学部ホームページの立ち上げ, (2) 工学部の改組に伴う広報資料の作成, (3) 学科改組に関する資料や学部紹介の動画, 現状と課題などのホームページへの掲載を行った。また, 全学としての博多駅電照広告, 九工大トップ技術の発行準備など広報活動に関する様々な試み, 提言がなされた。これを受けて, 工学部としては, 全学のこれらの活動に積極的に協力すると共に, 博多駅電照広告のデザインの提案を行った。

#### 2. 今年度採択した事項

- (1) 工学部ホームページの立ち上げを行った。
- (2) 九州工業大学大学概要の表紙となる写真を提供した。
- (3) 九工大通信の産学連携を担当した。
- (4) 工学部改組に関するパンフレットを作成した。
- (5) 工学部ホームページに学部紹介の動画を掲載した。
- (6) 博多駅電照広告のデザイン案を提示した。
- (7) 工学部ホームページに「現状と課題」を掲載した。

#### 3. 残された課題または将来解決すべき事項

工学部ホームページの効果的の使用と効率的な管理のあり方

#### 4. 委員会の議論に使用された資料

- (1) 平成19年度委員会名簿
- (2) 九州工業大学広報委員会規則
- (3) 九州工業大学工学部・工学研究科広報委員会内規

#### 5. 工学部の現状に関する意見または改善に関する提言

工学部における入学試験志願倍率を上げるためにも広報活動の強化が必要である。工学部全体での連携を深めると共に広報活動の充実のために, 工学部ホームページの効果的かつ効率的な運用のあり方を検討する必要がある。

#### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する, 改善状況と未改善及び新たな問題点

昨年度の残された課題として, 工学部のホームページのブラッシュアップと工学部広報用の DVD の作成が, また, 改善に関する提言として「広報活動の充実のための工学部ホームページの改善」が挙げられていた。ホームページについては工学部の改組に関するパンフレットや学科紹介の動画を掲載するなどのブラッシュアップがなされた。また, DVD については広報委員会とは別組織ではあるが, 改組広報 WG で作成された。このように, いずれの課題についても改善がなされた。今後は, 効果的に広報活動を行うためのホームページのあり方を検討する必要があると考えられる。

### 3.2.10 工学部学生募集活動委員会

#### 1. 今年度, 貴委員会が取り組んだ課題

当委員会に係わる定例的な活動は, オープンキャンパス, 大学説明会(高校訪問), 業者等が主催する進学説明会への参加, 高校等から依頼される工学部見学, 大学案内の編集補助等である。本年度は, 期中発生として, 平成20年度工学部学科改組が決まったため, 工学部として, 新学科の募集宣伝活動が加わった。さらに, 前年度の入試倍率低迷を受け, 学長より倍率アップに向けた取り組みの依頼があった。そのために, 情報工学部と協調可能な活動基盤の構築。大学説明用パワーポイントの統一。積極的な情報収集活動と広報活動。平成21年版大学案内の前倒し, 作製など, 多くの事業に当委員会は取り組むことになった。さらに, これら課題に対してはPDCAサイクルを徹底して, 問題解決の迅速化に取り組んだ。各活動の取り組み課題を, 以下にまとめる。

- ( a ) オープンキャンパス：6 学科への改組にともなう見学コースの見直し、タイムスケジュール全体の見直しによる自由見学時間の延長と各学科をまわってもらう工夫。
- ( b ) 大学説明会（高校訪問）：入試受験者の出身高校の調査と訪問校の選別。中国・四国・九州全域への高校訪問地域の拡大のための情報工学部との調整と運営方法の確立。
- ( c ) 進学説明会：業者主催の説明会への積極的参加。
- ( d ) 高校からの工学部訪問への対処：大学概要の説明への協力。
- ( e ) 大学案内の編集補助：研究室及び学生推薦等の取材協力、共通部分の企画。発行時期の検討。
- ( f ) 大学の戦略的パンフの作成：大学のめざす方向性、優れた研究の紹介、地の利、充実した就職、歴史ある大学など本学の優位性が、一目でわかるパンフの作成。
- ( g ) 工学部改組の広報チラシの作成：改組が一目でわかるチラシの作成。
- ( h ) 大学広告の作成：高校生向けの宣伝のための電車の吊り広告、新聞広告の作成。
- ( i ) 広報室の設置：工学部の学生募集活動の円滑化。高校向け学生募集活動や広報活動を 1 本化。一般向け広報との組織分化。
- ( j ) 広報企画の立案と調査：有効な広報戦略のための情報収集と分析。
- ( k ) 明専会との活動：同窓会 O B との募集活動の連携。

## 2. 今年度、貴委員会が採択した事項

前項目の活動及び各課題を解決するため下記事項を採択した。

- ( a ) オープンキャンパス
  - ( 1 ) 今年度のオープンキャンパスは 8 月 9 日(木)と 1 0 日(金)に開催した。参加人数は 1 0 6 5 人(前年比+ 9 7 人工学部のみ)( 1 日目 602 人, 2 日目 463 人)であった。
  - ( 2 ) 実施内容は次のとおりである。次年度からの学科改組により 6 学科となるため、昨年までように午前中全学科の見学は不可能である。そのため、移動距離を少なくするよう考慮した 2 つのブロック、機械知能・応化・総合システムと建社・電気電子・マテリアルを見学し、午後の自由見学時間を長くするとともに、スタンプラリーを行い、見学していない学科に人の流れを作るような工夫を行った。アンケート調査の回収は、スタンプラリーの景品交換場所をメインとし、各学科にも回収箱を設置した。
  - ( 3 ) 学科の見学会においては、昨年と同様に説明者の服装、態度に関して改善をお願いすると共に、より平易な説明を心がけていただけよう依頼した。また、各学科で教職員による「何でも相談会」を実施することにした。本年度のアンケート結果では、「わかりやすさ」が 5 点満点で 4.07, 「満足度」は 4.11 となり、前年両指標とも 3.79 から改善できた。
  - ( 4 ) 期間中にボランティアで協力していただく生協学生委員に対して、昨年同様、服装、態度に関して改善をお願いすると共に、説明内容をキャンパス生活などに限定するように依頼した。
- ( b ) 大学説明会（高校訪問）
  - ( 1 ) 本年度より、中国、四国、九州各県の本校受験者を調査して、志願者の多い高校をリストアップし、福岡県内を中心に志願者数上位 1 1 4 校、さらに県外を中心とした 7 0 校に対してアンケートを行った。訪問希望のあった高校及び個別に依頼があった高校、進路指導教諭に対してのみの説明も実施した。前年度 2 7 校であった訪問を、工学部・情報工学部のどちらか 1 名の派遣とし、大学全体を説明することで、県内 9 2 校、県外 7 0 校に増やした。  
工学部では、このうち、1 3 名 4 6 校を訪問した。さらに、高校への出前講義において、大学説明をした高校が 1 2 校あり、そのうち工学部が 1 0 校で実施した。
  - ( 2 ) 各校 1 名での訪問を実現するために、両学部共通のパワーポイントを作成して、説明する内容も統一した。1 年目の委員に対しては、講習会を実施し、練習を行った。
- ( c ) 進学説明会
 

業者主催の進学説明会については、積極的に参加する方針で 2 2 の説明会に参加した。広いエリアで入学希望者を募るという考えのもと、県外で実施される進学相談会にも参加した。
- ( d ) 高校からの工学部訪問
  - ( 1 ) 本年度は福岡県立戸畑高校他 計 1 5 校から見学、大学模擬授業、インターンシップの依頼があった。うち、早鞆高校のみが総務課が対応したが、残りに関しては、理数教育支援センターと協力して、大学説明の部分のみを実施した。このうち、PTA が参加したのは、須恵、大分西、玄

洋の3校であった。

- (2) 高校が運営する独自のホームページの取材のための訪問であった済美高校(愛媛県)では、事前の質問事項への理事承認済み回答を準備し対応した。
- (e) 大学案内の編集補助
  - (1) 平成20年度の大学案内は大幅に変更せず、学生のコメントとデザインの変更程度にとどめることを確認した。
  - (2) 期中発生として、平成21年度の大学案内を年度内に作成することになった。改組後の大学案内のために、学科部分の変更がなされた。また、大学発行の就職関連の他のパンフの内容を一部入れることにした。
- (f) 大学の戦略的パンフの作成
  - 学長より、研究や就職など、本学がアピールできる事項が一目でわかるパンフレットの作成を依頼され、高校訪問が始まる6月までに完成させた。
- (g) 工学部改組の広報チラシの作成
  - 工学部改組にともなう広報のため、DVDと工学部の新学科のパンフレットの作成依頼にともないWGが組織され、それにオブザーバーとして参加した。WGの作成するパンフレットは、次年度以降も使えるように、改組に関する文面をパンフレットに入れないことになったので、急遽、改組チラシの作成を行い、高校訪問に間に合わせることにした。
- (h) 大学広告の作成
  - 情報工学部の広報委員会より、新聞広告と電車吊り広告を実施したいとの打診があり、工学部も参加することとなった。キャッチコピー「やりたいことが きっと見つかる 工学系総合大学」を提案。新聞広告の基本のデザインとキャッチコピーを提案し、この原案をデザイナーが修正後、掲載した。
- (i) 広報室の設置
  - 情報工学部には、広報室が設置され、専属のパート職員により、大学説明会開催の高校への依頼がなされ、その結果、情報工学部の高校訪問件数は、100件を超え、工学部の活動の倍以上の成果をあげた。工学部は、両学部を統括する入試課が事務を兼務していたために、単独での活動が難しく、この点を改善することになった。議論の結果、情報工学部と同じような広報室を組織することを答申して、認められ広報室が設置された。
- (j) 広報企画の立案と調査
  - 進研アドのセミナー、理数教育支援センターの会合などに参加することにより、さまざまな情報を入手する努力をはじめ、データの蓄積を開始した。愛知以西の高校生へのアンケートを実施した。
- (k) 明専会との活動
  - 本学OBで学長特別顧問として高校訪問に協力していただいている島根の原氏、広島の守谷氏、筑豊の井上氏との連携をはかるために、尾形明専会常務理事を交えて、学務部との会議を開催した。

### 3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

本年度も、充実したオープンキャンパス、高校訪問を目指して検討してきたが以下のような課題が残されている。

- (a) オープンキャンパス
  - 昨年度に比べ、満足度の数値も良くなってきている。午前中の見学が、半分の学科しか見ることができないことへの不満が若干みられた。見学コースの選択を、事前に振り分けるシステムの検討が必要かもしれない。また、アンケートの回収率が低かったため、回収率を上げる対策が必要である。情報工学部は、広報室のパート職員が、この回収作業に専従できたと聞いている。工学部も広報室の専従の職員ができたので回収作業に専念してもらい。回収率のアップをはかりたい。
- (b) 大学説明会(高校訪問)
  - 情報工学部と比較し、半分程度の活動にとどまっている。同等の活動は必要ないが、徹底した分析を行い。ターゲットとする高校を絞り込み、確実な広報活動を展開することが必要である。

(c) 進学説明会

広い地域に広報する必要があると思われるので、参加が少なくても必要な県、高校訪問が手薄な県を見つけ、参加の判断をするためのデータが必要である。

(d) 高校からの工学部訪問

次年度までは、G Pの活動が続くために、さらに増加すると考えられる。2人程度の大学説明担当が必要である。

(e) 大学案内の編集補助

今年度に、次年度の大学案内を作成したために時間的な余裕ができた。この機会に、夏場から準備をして、内容の大幅な刷新や大学案内の登場人物の季節が偏らないようにする努力が必要である。

(f) 広報室の設置など

次年度は、広報室設置後の初年度にあたり、その活動を円滑に進める必要がある。ここで、分析データに基づく募集戦略を練り、高校への募集活動、広告など広報活動に対して、P D C Aの徹底をはかることが必要である。

#### 4. 委員会の議論に使われた資料

高校訪問アンケートおよび調査結果、オープンキャンパスアンケートおよび調査結果、大学案内、進学説明会趣意書等。

#### 5. 工学部・工学研究科の現状に関する意見、又は改善に関する提言

(a) 大学説明会（高校訪問）

高校訪問を高校側へ依頼する際の工学部と情報工学部の情報共有が問題。大学からの訪問は1度だけにするを原則とすれば複雑なシステムとなる。初回、7月までの全学での取り組みを共通化するのみで、その後は、各学部の高校訪問を1回のみ認めれば、多い高校で3回の訪問で済む。大学全体の説明と各学部別ということで高校も納得するのではないかと思われる。

#### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

(a) オープンキャンパス

昨年度の提言にしたがい、午後の自由見学時間を延長して、各学科長による紹介をなくし、高校生と教職員・学生がふれあう時間を少しでも長くとることとした。その結果、満足度は、昨年度の3.79から今年度4.11に大幅アップした。

(b) 高校訪問

県外実施、各校1名での訪問を実現した。情報工学部の機動性の高さに対抗するために、柔軟な組織の構築と広報スペシャリストの要請による質の高い広報活動を工学部は推進する必要がある。昨年度は協調した活動に取り組んだが、工学部独自の戦略をたて、活動を行う必要があると思われる。

### 3.2.11 工学部・工学研究科予算委員会

#### 1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 工学部・工学研究科当初予算案について審議した。
- (2) 工学部・工学研究科業績等評価配分経費案について審議した。

#### 2. 今年度採択した事項

- (1) 工学部・工学研究科当初予算を決定した。
- (2) 工学部・工学研究科業績等評価配分経費を決定議した。

#### 3. 残された課題または将来解決すべき事項

- (1) 研究経費について定員配分とするか現員配分とするかの検討
- (2) 将来にわたっての教育・研究経費の確保



(3) 全学的な予算配分方針の際に、学部・教室から意見を出せる仕組みの更なる検討

#### 4. 委員会の議論に使用された資料

- (1) 工学部・工学研究科予算について(概要)
- (2) 工学部・工学研究科予算配分方針
- (3) 工学部・工学研究科予算配分書
- (4) 工学部・工学研究科業績等評価配分経費配分方針
- (5) 工学部・工学研究科業績等評価配分経費配分書

#### 5. 工学部の現状に関する意見または改善に関する提言

- (1) 教育・研究経費の確保
- (2) 省エネによる光熱水料の節約

#### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 教育・研究経費の確保については、計 11,321 千円の増額となった。
- (2) 省エネによる光熱水料の節約については、約 2,000 千円(1.5%)の節約となった。

### 3.2.12 工学部・工学研究科図書委員会

#### 1. 今年度本委員会が取り組んだ課題

- (1) 工学部学生用図書の予算配分額と選定について
- (2) 本館図書の廃棄の決定について
- (3) 九州工業大学研究報告投稿要領の一部改正について
- (4) 九州工業大学研究報告の冊子体の取扱について
- (5) 九州工業大学研究報告の原稿募集について

#### 2. 今年度採択した事項

- (1) 工学部学生用図書の予算配分額と選定について：  
第1回本委員会において、工学部学生用図書の予算配分額案が提案され、審議の結果、原案のとおり承認した。また「学生用図書資料の整備・選定に関する実施要項」に基づいて選定作業を行うことを確認し、その後、選定作業を行い、期日までに完了した。
- (2) 本館図書の廃棄の決定について：  
廃棄委員会において廃棄について慎重に調査すべき意見があったため、第1回本委員会において、廃棄までの手続き(廃棄対象図書リストを公開し廃棄図書についての意見収集を行うこと、史料室にも意見を聴くこと、廃棄の決定は本委員会で行うこと)が提案され、原案のとおり承認した。  
その後意見収集を行った結果、廃棄対象図書リスト中23冊を史料室で保存することとし、残りを廃棄するという結論に至ったので、第2回本委員会(メール会議)において廃棄決定について提案がなされ、原案のとおり承認した。
- (3) 九州工業大学研究報告投稿要領の一部改正について：  
第2回本委員会(メール会議)において、研究報告の印刷部数が「九州工業大学研究報告投稿要領第9項」に規定されているが、近年、他大学等の機関リポジトリの導入や受入資料の見直し等により寄贈辞退が増加しており、予備が多くなってきているため、印刷部数については、発送部数や予備等を勘案して年度毎に決めることが妥当であり、投稿要領中の印刷部数についての条項を削除することについて提案がなされ、審議の結果、承認した。  
また、第3回本委員会(メール会議)において、学部、大学院改組及び委員会の統廃合等に伴い、本投稿要領中の組織の名称を変更することが提案され、審議の結果、承認した。
- (4) 九州工業大学研究報告の冊子体の取扱について：  
第1回本委員会において、九州地区国立大学の連携事業のひとつであるレフリー製の電子媒体による教育系・文系論文集の発行(各大学で進行中の機関リポジトリ等を活用)があること、

また本学の機関リポジトリも公開に向けて整備しつつある（平成20年3月一般公開済み）ので、研究報告（数理編及び人文・社会科学編）の冊子体の取扱いについて審議した結果、関連する学会、協会等が冊子体を基本としていること、分野により冊子体の発行が多いこと及び寄贈、交換のため冊子体が必要であるが、機関リポジトリには協力していくこととなった。

(5) 九州工業大学研究報告の原稿募集について：

九州工業大学研究報告（数理編及び人文・社会科学編）投稿要領に基づいて、ノーツへの掲載及び電子メールにより原稿の募集を行った。その結果、数理編2編、人文・社会科学編4編の投稿を受領し、確認をした。

### 3. 残された課題または将来解決すべき事項

昨年度の提言として、電子ジャーナル「Blackwell」コンソーシアムへの参加について検討依頼があったが、Blackwellは「Wiley」と統合したため、統合後は「Wiley Blackwell」となった。Blackwellジャーナルの価格についてはタスクフォースへ提案がなされているが、高額で現状では導入が困難な状況にある。全学共通経費の見直しを行なう際に検討する。

### 4. 委員会の議論に使われた資料

- (1) 工学部学生図書購入予算配分(案)
- (2) 本館所蔵図書（明治専門学校時代の蔵書）の廃棄について
- (3) 附属図書館研究報告投稿要領新旧対照表
- (4) 平成19年度第1回附属図書館運営委員会資料（研究報告・紀要の現状等）

### 5. 工学部の現状に関する意見または改善に関する提言

平成20年度から、学部・大学院の改組及び委員会統廃合のため、本委員会は工学研究院情報化推進委員会に統合されるが、図書館の運営、図書・雑誌の選定など重要事項の審議が十分行なわれるよう注視する必要がある。

### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善および新たな問題点

昨年度の提言として、電子ジャーナル「Blackwell」コンソーシアムへの参加希望についての検討依頼については、上記3.のとおり。

## 3.2.13 大学院工学研究科学務委員会

### 1. 委員会が取り組んだ課題

#### 1) 工学研究科改組に伴う教育課程等の見直しについて

今年度の学務委員会は、工学研究科改組に伴い全面的な教育課程等の見直しを行うこととなった。詳細は平成20年度版の学生便覧・教授要目に記載されているが、主な改正点を列挙すると次のようである。各専攻に教育コースを設け、内容をコース概要と教育・学習系統図で示した。博士前期課程には、従来の課程Aに加え新たに講義科目を多く履修し修了プロジェクトを課す課程Bを設け、多様な修了形態が可能となるようにした。技術英語に習熟する内容を含めた工学英語科目や成績上位者には学部時に事前に履修ができる入門科目を設けた。

「研究指導計画書」の様式を定め、学生個別への研究計画を提示・確認できるようにした。

博士後期課程の指導教員グループ、専攻内および論文審査会の構成員について学外審査員の活用も行きやすいように見直しを行った。

#### 2) 中期計画の実施について

中期計画において学務委員会が担当する事項は大学院での教育に関連した事項であり、教育理念や目標の設定、学部教育との関連、インターンシップなどに関して、各専攻や分野ごとに確定・実施して行くものであり、今年度も昨年度と同様、全委員の協力を受けてこれを行った。

### 3) 認証評価への対応について

来年度の認証評価に向け、当委員会の関与する部分での作業協力、文書作成を行った。

### 4) 奨学金返還免除候補者の昨年までの選考ルールを維持することを確認した。

## 2. 委員会が採択した事項

- (1) 学生の除籍について
- (2) 学生異動について
- (3) 長期履修申請について
- (4) 遠隔教育による大学院単位互換協定に基づく特別聴講学生の成績について
- (5) 博士後期課程指導教員グループについて
- (6) 日本育英会奨学金大学院奨学生の選考について
- (7) 大学院工学研究科学修細則(案)の改正について
- (8) 博士後期課程指導教員グループの決定・変更について
- (9) 博士後期課程の指導教員グループ、論文審査委員会の構成について
- (10) 外国人研究生の受け入れについて
- (11) 国費外国人留学生の受け入れについて
- (12) 外国人特別研究学生の受け入れについて
- (13) 「教育・研究活動報告書」の提出依頼について
- (14) 学年暦(案)について
- (15) 9月末修了者の認定について
- (16) 社会人修学支援講座(技術者大学院講座)科目等履修生・聴講生の受け入れについて
- (17) 他研究科授業科目の履修について
- (18) 博士前期課程学生の他研究機関における研究指導について
- (19) 工学府研究指導等計画書について
- (20) 工学府時間割表について
- (21) 短縮修了の取扱い等について
- (22) 派遣学生報告書について
- (23) 博士学位論文申請様式について
- (24) 日本学生支援機構大学院第一種奨学金の返還免除候補者の推薦について
- (25) 修了査定について
- (26) 長期履修申請について
- (27) 派遣研究学生について
- (28) 他研究科において修得した授業科目の単位認定について

## 3. 残された課題, 又は将来解決すべき事項

- (1) 改組に伴う教育課程等の見直しで新たな事項がスタートしたが、未経験であることや見落としに伴う問題点がないか確認し、適宜修正を加えていく
- (2) 新設した課程Bの運用方法
- (3) 博士論文目録の様式の見直し
- (4) 中期目標・中期計画の実行の継続

## 4. 委員会の議論に使われた資料

- (1) 工学研究科学生便覧教授要目
- (2) 九州工業大学大学院工学研究科委員会規則
- (3) 九州工業大学大学院工学研究科運営委員会内規
- (4) 九州工業大学大学院工学研究科学務委員会内規
- (5) 九州工業大学中期目標・中期計画
- (6) 九州工業大学における日本学生支援機構大学院第一種奨学金の返還免除候補者選考に関する規程

## 5. 工学部・工学研究科の現状に関する意見, 又は改善に関する提言

- (1) 改組に伴い新設された事項のうちとくに課程Bについては、どのような形態がふさわしくてこれに該当するのを見守りつつ、多様化に対応すべく成熟させていく必要がある。

- (2) 委員会で諮る必要があるのかを見直すべきと思う事項もあったが、そうはせずに例年通り審議した。事務的に決定できる仕組みを確立することで委員会の効率を向上させ、教員の学生への対応等に充当する時間をより確保することに繋げる工夫が願われる。

#### **6．昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点**

- (1) 博士後期課程の充足率は、改組に伴い改善されているが、例えば学生は博士後期課程修了後はどうなるのかといった根本的な議論が必要である。
- (2) 昨年度来、取組んできた新規・改善事項は委員・各教員の多大なる協力のおかげでいずれも良好である。今後は緩やかな改善を維持しつつ、教員が教育・研究に専念できる環境づくりに向かうことが切に願われる。

### **3．2．14 大学院工学研究科入学試験委員会**

#### **1．今年度取り組んだ課題**

- (1) 平成20年度募集人員（案）について審議した。
- (2) 出願資格認定委員会委員の選出について審議した。
- (3) 平成20年度工学府学生募集要項（改訂版）について審議した。
- (4) 中期計画の年度計画策定について審議した。
- (5) 平成20年度大学院工学府博士前期課程推薦選抜入学試験合格者の選考について審議した。
- (6) 平成20年度（推薦選抜合格者決定後の）大学院工学府博士前期課程一般選抜募集人員変更及び公表方法について審議した。
- (7) 平成20年度大学院工学府博士後期課程入学試験（第1回募集）の出願資格認定について審議した。
- (8) 平成20年度大学院工学府博士前期課程及び後期課程（第1回募集）入学試験合格者の選考について審議した。
- (9) 平成19年10月入学大学院工学府博士前期課程及び後期課程入学試験合格者の選考について審議した。
- (10) 大学院入試問題のウェブ上での公開及び入試実施状況アンケートの実施について審議した。
- (11) 平成20年度大学院工学府博士後期課程入学試験（第2回）の出願資格認定について審議した。
- (12) 平成21年度工学府入学者選抜要項（案）について審議した。
- (13) 平成21年度工学府博士前期課程推薦選抜学生募集要項（案）について審議した。
- (14) 平成21年度工学府博士前期課程及び後期課程学生募集要項（案）について審議した。
- (15) 平成20年度大学院工学府博士前期課程及び後期課程（第2回募集）入学試験合格者の選考について審議した。

#### **2．今年度採択した事項**

- (1) 改組に伴い、一部専攻の平成20年度推薦選抜、一般選抜の募集人員を変更するとともに、募集要項（改訂版）を作成することとした。
- (2) 改組により、教育コースが設置されるが、入学試験においては、試験実施の実情に合わせ、試験分野毎での募集を行うこととした。
- (3) 推薦選抜合格者が募集人員に満たなかった専攻について、その不足した人員を一般選抜（第1回）の募集人員に加えて募集することとした。

#### **3．残された課題、又は将来解決すべき事項**

- (1) 博士後期課程の定員充足にむけた方策の検討。
- (2) 各専攻の入試実施体制の把握とその改善。

#### **4．委員会の議論に使用された資料**

- (1) 平成20年度募集人員について（案）
- (2) 平成20年度九州工業大学大学院工学府学生募集要項（改訂版）

- (3) 「中期目標・中期計画」
- (4) 大学院試験過去問題の他大学ホームページ掲載状況
- (5) 平成21年度工学府入学者選抜要項(案)
- (6) 平成21年度九州工業大学大学院工学府博士前期課程推薦選抜学生募集要項(案)
- (7) 平成21年度九州工業大学大学院工学府博士前期課程学生募集要項(案)
- (8) 平成21年度九州工業大学大学院工学府博士後期課程学生募集要項(案)

#### 5. 工学研究科の現状に関する意見または改善に関する提言

- (1) 社会人学生受け入れ支援の充実。
- (2) 各専攻の試験実施状況の把握を行うため実施したアンケートの結果をもとに、入試実施体制の改善に向けた検討を行う。

#### 6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 改組に伴い、アドミッションポリシーの見直しを行うとともに、学生募集要項(改訂版)に掲載し周知を行った。
- (2) 募集要項により社会人長期履修制度等の周知を行ったが、依然定員を満たしていない専攻がある。

### 3.2.15 DNA実験安全管理委員会

活動実績なし。

### 3.3 教員組織

#### 3.3.1 教員の配置

専門学科

表3.3.1 工学部専門学科定員現員及び教員一覧 (平成19年4月1日現在)

学科	講座名	教授		助教授		講師		助手		技術職員等	合計
		現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	現員
機械知能工学科	材料科学	2	原田 昭治 野田 尚昭	2	黒島 義人 河部 徹	0		0			4
	生産工学	2	水垣 善夫 小林 敏弘	3	吉川 浩一 清水 浩貴 金 亨燮	1	高藤 和樹	1	田丸 雄摩		7
	熱流体学	1	鶴田 隆治	2	梅景 俊彦 長山 暁子	0		2	吉田 幸一 谷川 洋文	18	5
	制御知能学	3	田川 善彦 石川 聖二 坂本 哲三	3	大屋 勝敬 相良 慎一 黒木 秀一	0		2	西田 健 タジューキ		8
	宇宙工学	3	赤星 保浩 橘 武史 米本 浩一	2	松田 健次 平木 講儒	0		3	井上 昌信 西川 宏志 各務 聡		8
	小計	11		12		1		8		18	50
建設社会工学科	国土デザイン工学	3	渡辺 義則 秋山壽一郎 永瀬 英生	3	仲間 浩一 鬼束 幸樹 伊東啓太郎	1	寺町 賢一	0			7
	基盤建設工学	4	久保 喜延 山崎 竹博 幸左 賢二 山口 栄輝	4	廣岡 明彦 木村 吉郎 日比野 誠 重枝 未玲	0		1	加藤九州男	3	9
	小計	7		7		1		1		3	19
電気工学科	電気エネルギー工学	4	近藤 浩 匹田 政幸 三谷 康範 趙 孟佑	3	白土 竜一 大塚 信也 渡邊 政幸	0		0			7
	電子デバイス工学	3	並木 章 西垣 敏 藤原 賢三	3	和泉 亮 川島 健児 内藤 正路	0		5	稲永 征司 佐竹 昭泰 鶴巻 浩 羽野 一則 渡邊 晃彦	13	11
	電子機器工学	2	岩根 雅彦 二矢田勝行	0		0		2	山脇 彰 水町 光徳		4
	通信システム工学	2	桑原 伸夫 水波 徹	2	上松 弘明 市坪 信一	0		1	張 力峰		5
	センシング・システム工学	3	芹川 聖一 高城 洋明 前田 博	2	生駒 哲一 中司 賢一	0		2	楊 世淵 河野 英昭		7
	電子物性	2	高木 精志 出口 博之	1	美藤 正樹	0		1	松平 和之		4
	小計	16		11		0		11		13	51

物質工学科	分子創製化学	2	柘植 顕彦 吉永 耕二	4	新井 徹 荒木 孝司 岡内 辰夫 北村 充	0		2	橋本 守 毛利恵美子	8
	機能設計化学	3	横野 照尚 古曳 重美 竹中 重織	3	植田 和茂 津留 豊 坪田 敏樹	0		2	下岡 弘和 村上 直也	8
	物質生産化学	2	鹿毛 浩之 清水 陽一	1	山村 方人	0		2	馬渡 佳秀 高瀬 聡子	5
	マテリアル機能工学	2	長谷部光弘 松本 要	0		0		1	山根 政博	3
	マテリアルプロセス工学	3	寺崎 俊夫 恵良 秀則 大谷 博司	4	秋山 哲也 廣田 健治 篠崎 信也 高須登実男	0		4	伊藤 秀行 大坪 文隆 北村 貴典 和才 京子	11
	小計	12		12		0		11		46
合計	46		42		2		31		166	

上欄の( )数字は、臨時増募定員で外数。(以下、表3.2~3.4にも共通)  
技術職員等は、教務職員を含む。

### 共通講座

表3.3.2 工学部共通講座定員現員及び教官一覧 (平成19年4月1日現在)

講座名	教授		助教授		講師		助手		技術職員等	合計
	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名		現員
人間科学	7	井上 寛 本田 逸夫 村田 忠男 田吹 昌俊 藤澤 正明 橋本 年一 鳥井 正史	8	中村 雅之 水井万里子 李 友炯 今井 敦 ラックスト. I 虹林 慶 岡野 裕司 アブドゥル恭子	3	大野瀬津子 八丁 由比 東野 充成	0		0	18
数理情報基礎	8	加藤 幹雄 酒井 浩 三村 文武 池田 敏春 岡本 良治 西谷 龍介 金元 敏明 鎌田 裕之	8	鈴木 智成 藤田 敏治 中尾 基 岸根順一郎 浅海 賢一 木村 広 服部 裕司 川本 一彦	0		0		0	16
合計	15		16		3		0		0	34

### 工学部総括表

表3.3.3 工学部定員現員表 (平成19年4月1日現在)

学科等	教授		助教授						合計
	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員
専門学科	46		42		2		31		166
共通講座	15		16		3		0		34
合計	61		58		5		31		200

大学院工学研究科

表3.3.4 大学院工学研究科定員現員及び教官一覧 (平成19年4月1日現在)

専攻名	講座名	教授		助教授		講師		助手		技術職員等	合計
		現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	現員
電気工学専攻 独立講座	ネットワーク工学	1	重松 保弘	1	池永 全志	0		1	横尾 徳保	0	3
	小計	1		1		0		1		0	3
機能性材料創成工学 能成 工学専攻 ム攻	機能性材料創成工学	2	山崎 二郎	4	本田 崇 高原 良博 大門 秀朗 鈴木 芳文	0		3	竹澤 昌晃 山口 富子 合田 寛樹		9
	機能システム設計工学	3	松永 守央 小森 望充 増山不二光	2	孫 勇 脇迫 仁	0		2	森口 哲次 徳永 辰也	0	7
	小計	5		6		0		5		0	16
	合計	6		7		0		6		0	19

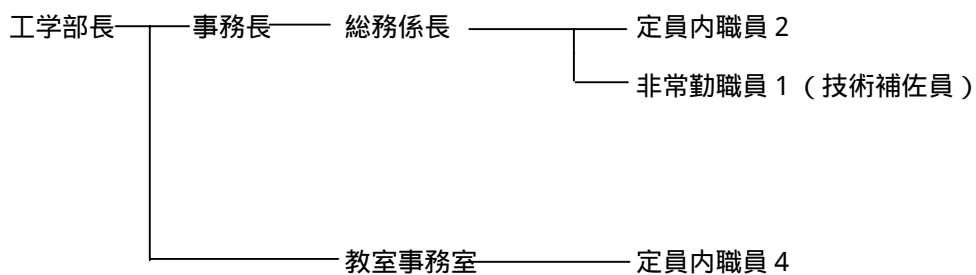
大学院工学研究科

表3.3.5 大学院工学研究科連携講座(定員外) (平成19年4月1日現在)

専攻名	講座名	教授		助教授		講師				技術職員等	合計
		現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	現員
機能システム創成工学専攻	エネルギー材料システム(連携)	2	納富 啓 開道 力	1	西 敏郎	0		0		0	3
	合計	2		1		0		0		0	3



### 3.4 事務組織



教室事務室の非常勤職員（パート）は、勤務場所が教室事務室になっている者の数である。

図4.4.1 事務組織図（平成19年4月1日現在）

## 4 工学部の財政

### 4.1 工学部の運営費交付金配分状況

表4.1.1 運営費交付金配分額，学部運営費，教室配分額年次変化

(単位：千円)

区分 \ 年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
運営費交付金配分額 (校費配分額)	(605,571)	(755,711)	423,601	391,496	409,336
学部運営費 (うち光熱水費保留分)	269,978	325,406	129,965 (11,357)	104,257 (11,383)	101,843 (11,460)
教室配分額	335,593	430,305	293,636	287,239	307,493

表4.1.2 平成19年度費目別配分額

(単位：千円)

費目	配分額	比率(%)
研究経費	75,900	18.54
教育経費	152,348	37.22
業績等配分経費	27,845	6.80
事項指定経費	51,400	12.56
学部運営費	90,383	22.08
光熱水費留保額	11,460	2.80
その他	0	0.00
合計	409,336	100.00

表4.1.3 過去5年間の学科等別積算校費配分額の推移

(単位：千円)

年度・科目	学科等	機械知能	建設社会	電気	物質	共通講座	機能システム創	その他
	工学科	工学科	工学科	工学科		成工学専攻		
平成15年度	教育研究基盤校費							
	教官数積算分	14,113	8,943	20,543	13,733	11,623	6,888	2,949
	学生数積算分	24,227	12,618	29,777	22,357	5,994	2,543	7,275
	大学分等	20,532	14,850	27,194	19,771	14,457	10,844	263,841
その他	3,144	584	8,915	3,491	1,356	417	24,636	
平成16年度	教育研究基盤校費							
	教官数積算分	19,487	9,964	25,176	21,135	22,387	9,771	0
	学生数積算分	34,152	16,588	38,610	27,423	6,438	9,340	7,655
	大学分等	6,368	4,329	10,651	9,745	3,956	2,079	0
その他	16,128	6,941	51,390	13,703	3,281	126,101	287,041	
平成17年度	教育・研究費							
	研究経費	15,293	7,819	19,641	16,382	17,155	7,667	0
	教育経費	33,289	15,317	35,181	25,547	5,727	10,299	7,655
	業績等配分経費	7,880	3,518	10,858	7,915	3,680	3,077	0
その他	1,727	0	35,141	1,846	0	1,022	129,965	
平成18年度	教育・研究費							
	研究経費	10,370	5,281	12,415	11,065	12,193	5,018	243
	教育経費	38,681	17,456	40,536	31,887	5,972	12,848	7,175
	業績等配分経費	5,286	2,641	8,547	6,145	3,360	2,107	0
その他	1,872	0	33,928	1,652	0	2,218	112,600	
平成19年度	教育・研究費							
	研究経費	13,089	6,967	17,504	14,861	15,400	6,371	300
	教育経費	37,310	16,395	40,249	32,817	6,540	13,270	7,175
	業績等配分経費	4,232	1,621	5,712	4,530	2,445	1,726	7,579
その他	1,422	0	33,928	1,652	0	2,218	114,023	

4.2 科学研究費補助金の採択状況

金額は、直接経費のみ。

(転出を含み、転入を除く)

表4.2.1 科学研究費補助金採択状況(平成15~19年度)

(単位:千円)

種目	年度	平成15年度		平成16年度		平成17年度		平成18年度		平成19年度	
		件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
特別推進研究		1	35,000	1	59,000	2	125,000	2	35,470	2	26,700
特定領域研究(A)(2)		2	2,700								
特定領域研究		2	2,700	3	15,000	3	14,600	5	21,500	4	18,400
基盤研究(A)(1)				0	0						
基盤研究(A)(2)		2	5,800	1	3,700			2	23,500	3	33,200
基盤研究(B)(1)		3	8,400	3	10,700						
基盤研究(B)(2)		15	51,900	14	61,300	15	68,600	15	59,300	12	40,600
基盤研究(C)(1)											
基盤研究(C)(2)		22	26,600	21	28,600	23	30,400	23	27,900	21	30,900
萌芽的研究		5	7,400	9	14,300	9	10,600	7	12,400	8	11,100
奨励研究											
奨励研究(A)											
若手研究(A)		1	14,300	1	1,600			1	15,900	1	2,100
若手研究(B)		14	18,338	12	15,100	17	25,300	16	20,100	17	23,600
特別研究員奨励費		2	1,600	1	1,200	1	600			1	900
計		67	172,038	66	210,500	70	275,100	71	216,070	69	187,500

4.2.2 平成19年科学研究費補助金学科等別申請,採択状況

(上段数字は継続課題で内数)

事項	機械知能工学科		建設社会工学科	電気工学科			物質工学科		共通講座		専機 能シ ステム 創成 工学 攻	合計
	機械 工学 教室	制御 工学 教室		電気電子 工学 教室	電子 通信 シ ステ ム 工 学 教 室	電子 物性 教室	応用 化学 教室	加工 学 教室	マテ リ ア ル 創 成	人間 科学 教室		
申請件数	21	8	14	22	17	4	39	9	9	14	13	170
採択件数	3	2	4	7	1	0	5	5	5	3	4	39
	9	3	10	12	4	1	7	6	6	6	5	69

申請件数・採択件数ともに、非常勤研究員を含む。また、申請件数には、特別推進研究の継続申請を含まない。

#### 4.3 外部資金導入状況

##### 4.3.1 寄附金（奨学寄附金）

表4.3.1 寄附金受け入れ状況

（単位：千円）

学科等	平成15年度		平成16年度		平成17年度		平成18年度		平成19年度	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
機械知能工学科	18	7,422	26	16,180	17	13,500	13	9,770	18	13,070
建設社会工学科	19	32,660	18	32,676	18	22,354	24	32,840	15	22,800
電気工学科	17	28,370	10	13,550	14	11,390	15	11,280	11	8,550
物質工学科	42	30,870	40	24,440	39	27,780	42	26,357	35	23,225
共通講座	1	1,500	1	500	3	4,500	5	2,400	4	5,980
機能システム創成工学専攻	16	10,549	14	9,250	10	5,200	8	5,385	6	3,900
合計	113	111,371	109	96,596	101	84,724	106	88,032	89	77,525

##### 4.3.2 民間等との共同研究

表4.3.2 民間等との共同研究受け入れ状況

（単位：千円）

学科等	平成15年度		平成16年度		平成17年度		平成18年度		平成19年度	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
機械知能工学科	2	1,550 (0)	4	3,100 (3,100)	9	6,168 (6,168)	8	5,670 (5,670)	8	7,489 (7,489)
建設社会工学科	11	35,250 (8,800)	6	16,950 (16,950)	5	7,100 (7,100)	5	10,806 (10,806)	4	8,500 (8,500)
電気工学科	14	34,485 (5,820)	20	43,725 (43,725)	26	46,930 (46,930)	24	36,085 (36,085)	27	39,649 (39,649)
物質工学科	10	15,622 (2,977)	10	13,640 (13,640)	26	30,500 (30,500)	20	25,399 (25,399)	26	32,791 (32,791)
共通講座	1	1,050 (0)	1	1,050 (1,050)	2	3,050 (3,050)	2	2,500 (2,500)	3	3,750 (3,750)
機能システム創成工学専攻	1	3,556 (556)	3	1,400 (1,400)	3	900 (900)	4	2,000 (2,000)	7	14,699 (14,699)
合計		91,513 (18,153)	44	79,865 (79,865)	71	94,648 (94,648)	63	82,460 (82,460)	75	106,878 (106,878)

下段の（ ）数字は民間負担分の歳入金額で内数。

複数年契約を含む。

### 4.3.3 受託研究

表4.3.3 受託研究受け入れ状況

(単位：千円)

学科等	平成15年度		平成16年度		平成17年度		平成18年度		平成19年度	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
機械知能工学科	4	5,760	6	6,665	10	29,007	15	24,283	12	18,514
建設社会工学科	3	8,558	1	4,975	4	12,300	2	6,465	3	19,015
電気工学科	9	27,475	7	39,704	10	54,484	12	72,469	17	79,013
物質工学科	9	18,899	13	19,460	10	28,441	11	24,903	10	149,586
共通講座	2	6,600	0	0	1	4,250	1	5,696	2	4,640
機能システム創成工学専攻	1	682	1	1,000	3	2,556	5	10,633	7	21,737
合計	28	67,974	28	71,804	38	131,038	46	144,449	51	292,505

複数年契約を含む。

#### 注意事項

- ・ 束ね契約もありますが、申請を1件としています。
- ・ 知的クラスターは1テーマを1件とし、代表者の所属で分けています。
- ・ 受託事業は含まれていません。

### 4.3.4 寄附講座

表4.3.4 寄附講座受け入れ状況

(単位：千円)

名称	所属学科	寄附者	年度別受け入れ金額					教員組織
			平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	
電力系統 制御工学	電気工学科	九州電力(株)	15,000	30,000	30,000	30,000	30,000	平成19年度 客員教授 1 客員助教 1

#### 4.3.5 寄附金の利息

工学部寄附金の利息を、工学部の共通経費として運用している。表4.3.5に平成19年度の使用内訳を示す。

表4.3.5 平成19年度工学部寄附金共通経費使用報告

(単位:円)

受入額		使用額	
事項	金額	事項	金額
前年度より繰越	8,460,594	中国揚州大学訪問団との国際交流に関する打合せ費	100,000
寄附金オーバーヘッド分	3,762,500		
		(小計)	100,000
		繰越額	12,123,094
合計	12,223,094	合計	12,223,094

## 5 工学部と社会のつながり

### 5.1 地域貢献活動

#### 5.1.1 大学公開

大学公開事業の一環として実施している高校生のためのオープンキャンパス（学内見学会）の実施状況を表5.1.1に示す。

表5.1.1 高校生のためのオープンキャンパス（学内見学会）の実施状況

年度	参加校数（校）	参加者数（名）		
		大学全体	学部別	
平成15年度	209	1,240	(工)	690
			(情)	550
平成16年度	224	1,481	(工)	892
			(情)	589
平成17年度	224	1,481	(工)	892
			(情)	589
平成18年度	255	1,543	(工)	968
			(情)	575
平成19年度		1,701	(工)	1065
			(情)	636

19年度より、個人の参加申込みとなったため、参加校数のデータは取っていない。

#### 5.1.2 公開講座等

表5.1.2 公開講座等実施状況

(単位：名)

年度	講座名	対象	参加者数
平成15年度	北九州工学体験工房	中学生	41
	通信の現在と未来	一般市民	11
	ふしぎ発見！わくわくサイエンスキッズ 2003	小・中学生	4,111
	土曜サイエンス講座	小・中学生	31
	本物ものづくり教室～ゆめをかたちに～	小学生	41
	最先端技術とものづくり体験講座	小・中学生	27
	ふしぎ発見！わくわくサイエンスキッズ 2004	小・中学生	2,862
平成16年度	技術士の専門知識	「技術士1次試験」を受験する者	19
	北九州大学体験工房	中学生	22
	体験学習「電気電子技術体験だい！」	下関西高校	40
	本物ものづくり教室		
平成17年度	エネルギー・エレクトロニクスの未来技術	一般市民・高校生	14
平成18年度	第3回 ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙を切って作るふしぎな図形」	小学生以上	59
	八幡大谷市民センター 折り紙講座	市民対象	27
	第4回 ジュニア・サイエンス・スクール 「光の不思議を体験しよう」	小学校4年生以上	55
	明治学園小学校 天体観測会	5年生	41
	戸畑子ども会 折り紙講座	小学生	50



平成18年度	第5回 ジュニア・サイエンス・スクール 「人力飛行機で学ぶ飛行機の仕組み」	小学校4年生以上	73
	第6回 ジュニア・サイエンス・スクール 「見て、触れて楽しもう！北九州工学体験工房」	中学生	17
	第7回 ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙をたたんで作るふしぎな模様」	小学生以上	64
	第8回 ジュニア・サイエンス・スクール 「圧力ガンガン」	小学校4年生以上	68
	第9回 ジュニア・サイエンス・スクール 「正六角形で作るふしぎな立体」	小学校以上	99
	第10回 ジュニア・サイエンス・スクール 「超伝導ってなんだろう？」	小学校4年生以上	63
	第11回 ジュニア・サイエンス・スクール 「発泡スチロールのリサイクル」	小学校4年生以上	44
	第12回 ジュニア・サイエンス・スクール 「燃える不思議 - 花火のひみつ - 」	小学校4年生以上	88
平成19年度	第13回 ジュニア・サイエンス・スクール 「正六角形で作るふしぎな立体」	小学校以上	97
	第13回ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙を組んで作るふしぎな立体」	小学生以上	97
	第14回ジュニア・サイエンス・スクール 「JSS in 環境ミュージアム」	小学生以上	
	第15回ジュニア・サイエンス・スクール 「見て、触れて楽しもう！北九州工学体験工房」	中学生	41
	第16回ジュニア・サイエンス・スクール 「人力飛行機で学ぶ飛行機の仕組み」	小学4年生～中学生	41
	第17回ジュニア・サイエンス・スクール 「正方形や長方形や三角形の折り紙をたたんでみよう！」	小学生以上	86
	第18回ジュニア・サイエンス・スクール 「光と色のマジック！～発光体～」	小学生以上	67
	第19回ジュニア・サイエンス・スクール 「天気のおぞに挑戦しよう！」	小学4年生以上	69
	第20回ジュニア・サイエンス・スクール 「身近な化学・・・しょっぱいだけじゃない塩水の不思議」	小・中学生	131
	第21回ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙をたたんで切って開いてできる、ふしぎな模様」	小学生以上	79
	第21回ジュニア・サイエンス・スクール(2回目) 「折り紙をたたんで切って開いてできる、ふしぎな模様」	小学生以上	70
	第22回ジュニア・サイエンス・スクール 「燃える不思議 花火のひみつ(2)」	小学4年生以上	85
もりつね祭ブース出展	一般		

毎日新聞社主催「ふしぎ発見ワークショップ」への協力	一般	
インフォネットフェスティバル2007への協力	一般	
青少年の為の科学の祭典 実験ブース出展	一般	
北九州市児童文化科学館「わくわくサイエンスキッズ」への協力	一般	
こどもエコクラブ全国フェスティバル in 北九州	一般	

### 5.1.3 北九州市民カレッジへの協力

本学は、福岡・北九州地域リカレント教育推進協議会主催のリカレント教育の実施大学の一つになっていたが、その後継事業として、平成16年度から北九州市民カレッジが始まった。これらの事業にこの5年間に工学部が協力したセミナーの実施状況を表5.1.3に示す。

表5.1.3 北九州市民カレッジ（リカレント教育）協力セミナー実施状況 (単位：名)

年 度	セミナー名	参加者数	備 考
平成15年度	プログラミングC言語	19	リカレント
平成16年度	Windows プログラミング入門	22	市民カレッジ
平成17年度	申込者が少数のため実施なし		市民カレッジ
平成18年度	申込者が少数のため実施なし		市民カレッジ
平成19年度	申込者が少数のため実施なし		市民カレッジ

### 5.1.4 出前講義

近年、社会的問題となっている、いわゆる青少年の「科学離れ」「理工系離れ」対策の一環として、小・中・高等学校の生徒を対象に本学の教官が小・中・高等学校に出向き、理工系分野の学問の最前線の話や魅力等について分かり易く講義をする。

表5.1.4 出前講義

年度	講義名	実施件数	対象者
平成15年度	地球環境と風力エネルギー	4	小学生
	時代を読む技術者とは - 文系/理系ではこれから生きられない -	2	高校生
	「ものづくり」とは何だろう? - 乗用車の開発から製造まで -	3	高校生
	進化する“ものづくり”～生産工学の最前線	3	高校生
	私たちの身近なみどりとまちづくり	7	小・高校生
	バリアフリーのまちづくり	3	高校生
	君はアトムを見たか：超ミクロの世界 - ナノテクノロジーの時代	5	高校生
	-		
	ITとコンピュータによるこれからの私たちの生活	5	中・高校生
	私達の暮らしと放射線	2	高校生
自分たちで判断して行動するロボットたち	20	小学生	
ハイテクを支える錯体（医薬から未来材料まで）	1	高校生	

	身のまわりのプラスチックとそのリサイクル	1	高校生
	「身近な科学の話」	8	小・高校生
	宇宙における元素形成の謎をさぐる	2	中・高校生
	地球の温暖化を防ぐ水と風	1	小学生
	宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	1	高校生
平成16年度	地球環境と風力エネルギー	6	小・中校生
	これから世界で活躍する技術者・研究者になるために、今、何をしておくべきか	5	高校生
	「ものづくり」とは何だろう？ - 乗用車の開発から製造まで -	3	高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用 - 脳をまねてロボットを動かすはなし -	8	高校生
	魚のすみやすい川づくり	7	小・中・高校生
	私たちの身近なみどりとまちづくり	10	高校生
	顔認証・世界最小のバーコード変換技術	19	小・中・高校生
	ITとコンピュータによるこれからの私たちの生活	10	中・高校生
	君も色のマジシャンになってみませんか - 新幹線から制がん剤まで -	3	中・高校生
	電池の科学 - クリーンでソフトなエネルギーの缶詰 -	4	小学生
	生活に見る材料力学	1	高校生
	身のまわりのプラスチックとそのリサイクル - ペットボトルをもっと知ろう！ -	2	高校生
	身近な科学の話	12	小・中校生
	シャボン玉から知る複合材料の科学	1	中学生
	宇宙・星のしくみと私たち	2	中・高校生
	地球を守る水と風	8	小学生
宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	7	高校生	
平成17年度	やさしい情報通信の世界 - インターネットの基礎と応用 -	2	高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用 - 脳をまねてロボットを動かすはなし -	6	中・高校生
	電子が創るナノワールド - 高校理科から最先端技術へ -	6	高校生
	光触媒を使った太陽光による環境浄化	1	高校生
	身のまわりのペットボトルのリサイクル - ペットボトルをもっと知ろう！ -	1	高校生
	身近な金属材料のリサイクル	3	高校生
	地球を救う水と風のエネルギー	1	小学生
	君も色のマジシャンになってみませんか - 新幹線から制がん剤まで -	2	中学生
	3次方程式の解法 - 楽しい数学 -	1	高校生
	宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	4	高校生
	進化する機械工学とグローバル化時代に期待される技術者	1	高校生
平成18年度	テレビはなぜ見える！ - テレビ・ラジオの原理と電波のふしぎ -	5	小・中学生
	迷路とマイクロマウス - 人工知能ってなに -	2	小・中学生
	物理と工学 - 物理は何の役に立つ？ -	2	高校生
	風を生活に役立てる最先端研究 - 何がわかって、何がわかってない？ -	1	高校生
	ひとにやさしいまちづくりって？ - バリアフリーのまちづくり -	1	小・中・高校生
	天気予報の物理と数学 - 流れの力学から気象予報士になる方法まで -	2	高校生

平成18年度	エコポ・ワークショップ！植木鉢から学ぶ身近な自然と日本の文化 - 自分でデザインした植木鉢をつくって植物を育てよう -	1	小・中・高校生
	魚のすみやすい川づくり	1	中・高校生
	身近な科学の話 - 理科（科学）の学習の意味を考える -	3	中・高校生
	3次方程式の解法 - 楽しい数学 -	1	高校生
	宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	2	高校生
	万有引力の法則の初等的な導出法 - ニュートンが目指したもの -	1	中・高校生
	相対性理論と4次元時空間 - アインシュタインが目指したもの -	3	中・高校生
	進化する機械工学とグローバル化時代に期待される技術者	1	高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用 - 脳をまねてロボットを動かすはなし -	1	高校生
	エネルギーと環境	1	中・高校生
平成19年度	「アポロ13」はただの冒険映画じゃない - 技術者ってカッコいい！ -	4	中・高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用 - 脳をまねてロボットを動かすはなし -	5	高校生
	やさしい情報通信の世界 - インターネットの基礎と応用 -	2	高校生
	テレビはなぜ見える！ - テレビ・ラジオの原理と電波のふしぎ -	4	小・中・高校生
	シミュレーションで学ぶデジタル通信の仕組み	1	高校生
	聞こえないことと、その支援方法	1	中・高校生
	視覚障害者のための福祉機器について - 視覚障害を体験して考えてみる -	1	中・高校生
	電気のいろいろな作り方 - 身近なもので電気をつくろう -	3	小学生
	超伝導体による浮上実験 - 超伝導体と磁石はどう違うか？ -	8	小・中・高校生
	シャボン玉から知る複合材料の科学	2	中・高校生
	携帯電話もパソコンもテレビも車も集積回路（LSI）がぎっしり - LSIってなに？半導体ってなに？ -	3	小・中・高校生
	水の不思議 - 20℃で、あたたかい氷をつくってみよう！ -	1	小・中・高校生
	遺伝子とゲノムと生命 - やさしい遺伝子のはなし -	1	中・高校生
	医薬品の安全で効果的な体内取り込み技術 - 生物に学ぶドラッグデリバリーシステム -	2	高校生
	マイクロ波が促進する化学反応 - 電子レンジで化学の実験 -	1	小・中・高校生
	身のまわりのプラスチックとリサイクル - ペットボトルやビニールについてもっと知ろう -	2	小・中・高校生
	あっ、プラスチックが水に溶ける！ - プラスチックのリサイクルを考える -	2	高校生
	生ゴミからプラスチックと肥料をつくる - リサイクルを考えよう -	2	小・中学生
	魚のすみやすい川づくり	1	中・高校生
	風を生活に役立てる最先端研究 - 何がわかってて、何がわかってない？ -	1	高校生
	エネルギーと環境 - おまけ 僕や私の生きる道（技術者編） -	6	中・高校生
	天気予報のしくみと地球の気候変動 - 気象現象の物理と数学 -	3	高校生
	身近な物理現象と、大学での研究例との関係 - 多様な知識と好奇心が共通にある -	1	小・中・高校生

3次方程式の解法 - 楽しい数学 -	2	高校生
宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	1	高校生
相対性理論と4次元時空間 - アインシュタインが目指したもの -	1	高校生
やってみなくちゃ分からない折り紙飛行機 - ものづくりの秘密 -	2	小・中学生
「紅の豚」はただのアニメじゃない - 技術者っていいもんだ！ -	4	中・高校生
進化する機械工学とグローバル化時代に期待される技術者	2	高校生

### 5.1.5 情報公開

工学部の情報公開の実施状況を表5.1.5に示す。

表5.1.5 工学部の各種情報公開の現状

現在公開（公表）している情報等	編集方針	年間発行回数、発行時期	公開・情報提供先	編集組織の名称
工学部自己点検・評価報告書	工学部とその関連部局における自己点検・評価を行い、その結果を公表する。	1回 12月	学内外（ホームページ上で公開）	部局評価委員会

5.2 学生の国際交流

表5.2.1 外国人留学生(国籍別・課程別・費用別)在学状況一覧表

◎外国人留学生在学状況 H19.5月現在

(単位:人)

国籍		中	マ	韓	タ	メ	パ	ベ	イ	エ	ス	コ	ケ	モ	イ	プ	台	ホ	オ	イ	南	オ	ペ	フ	合	
所属・課程・費用別等		国	レ	国	イ	キシ	ン	ト	ン	ジ	ス	ス	ニア	ロッ	ン	ラ	湾	ン	ス	ギ	ア	ル	ラン	計		
		国	シ			コ	グ	ナ	ド	プ	ラ	タ		コ	ン	ラ		ン	ス	リ	フリ	ス	ス			
工学部・工学研究科	課程別	博士後期課程	3	1		1		2		2	1										1				11	
		博士前期課程	13		1			2		3																19
	内訳	学部生	6	11					2																	19
		研究生/聴講生	4		6					1													1			12
		JASSO				1														1						2
	費用別	国費	4			1		3	1	5													1			15
		本国政府派遣		10																						10
内訳私費		22	2	8			1	1	1	1										1			1		38	
国籍小計	26	12	8	1		4	2	6	1										1		1	1		63		
		11カ国																								
情報工学部・工学研究科	課程別	博士後期課程	4				1	5		1		1		1	1		1								15	
		博士前期課程	2						2	2		1		1		2									10	
	内訳	学部生	9	7			1															1				18
		研究生/聴講生	2																					1		3
		JASSO																								
	費用別	国費	2				2	1		1			1		1				1							9
		本国政府派遣		7																						7
内訳私費		15					4	2	2		1		1		1	2	1						1		30	
国籍小計	17	7			2	5	2	3		1	1	1	1	1	2	1	1					1		46		
		15カ国																								
生命体工学部	課程別	博士後期課程	10	5	3			1		1					3					1					24	
		博士前期課程	6	1	4																				11	
	内訳	研究生/聴講生	1																			1			1	3
		JASSO																								
		費用別	国費	2	1	2					1															6
	内訳私費	本国政府派遣																								
		私費	15	5	5			1								3				1	1			1	32	
国籍小計		17	6	7			1		1						3				1	1			1	38		
		9カ国																								
合計	課程別	博士後期課程	17	6	3	1	1	8		4	1	1		1	4		1	1		1		1			50	
		博士前期課程	21	1	5			2	2	5		1		1		2									40	
	内訳	学部生	15	18			1		2										1							37
		研究生/聴講生	7		6					1											1		1	1	1	18
		JASSO			1															1						2
	費用別	国費	8	1	2	1	2	4	1	7			1		1				1			1				30
		本国政府派遣		17																						17
内訳私費		52	7	13			6	3	3	1	1		1		4	2	1		2	1		1	1	1	100	
国籍合計	60	25	15	1	2	10	4	10	1	1	1	1	1	4	2	1	1	2	1	1	1	1	1	147		
		23カ国																								

※ JASSOは、独立行政法人日本学生支援機構による短期留学推進制度によって在籍する者(費用別区分では私費を含む)  
 ※ 研究生/聴講生は、JASSO制度に係らない協定校からの特別聴講(研究)学生を含む

表5.2.2 外国人留学生（学科別・専攻別）在学状況一覧

（平成19年5月1日現在）（単位：人）

所 属 区分	機械知能工学科		建 設 社 会 工 学 科	電 気 工 学 科			物 質 工 学 科		機 能 シ ス テ ム 創 成 工 学 専 攻	合 計
	機 械 工 学 コ ー ス	制 御 工 学 コ ー ス		電 気 工 学 コ ー ス	電 子 工 学 コ ー ス	情 報 工 学 コ ー ス	応 用 化 学 コ ー ス	材 料 工 学 コ ー ス		
博 士 後 期 課 程	3	2	0	5	0	0	1	0		11
博 士 前 期 課 程	1	5	3	3	2	1	1	1	2	19
学 部 生 2 年 生 以 上	7	3	1	4	0	0	1	1		17
学 部 生 1 年 生	1		0	1			0			2
研 究 生 ・ 聴 講 生	3	2	3	5	1	0	0	0		14
短 期 留 学 生	0	0	0	0	0	0	0	0		0
合 計	27		7	22			5		2	63

表5.2.3 学生の海外派遣

年度	国名	交流協定校	学生派遣数
15	アメリカ	オールドドミニオン大学	語学研修8名(工学部8名)
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修12名(情報工学部12名)
		シドニー工科大学	交流協定による派遣4名(工学部2名, 工学研究科1名, 生命体工学研究科1名)
	韓国	忠州大学	相互交流16名(工学部16名)
		昌原大学	相互交流14名(工学部12名, 情報工学部2名)
			短期留学1名(工学部)
		韓国海洋大学校	相互交流17名(情報工学部17名)
	浦項工科大学	合同ワークショップ15名(生命体工学研究科15名)	
16	英国	サリー大学	交流協定による派遣1名(情報工学研究科) 短期留学1名(情報工学研究科)
	アメリカ	オールドドミニオン大学	語学研修8名(工学部8名)
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修12名(情報工学部12名)
		シドニー工科大学	交流協定による派遣2名(工学部1名, 生命体工学研究科1名)
	ニュージーランド	オークランド工科大学	短期留学1名(生命体工学研究科)
	韓国	忠州大学	相互交流14名(工学部14名)
		昌原大学	相互交流15名(工学部15名)
		韓国海洋大学校	相互交流8名(情報工学部8名)
マレーシア	プトラ大学	交流協定による派遣1名(生命体工学研究科)	
17	英国	サリー大学	交流協定による派遣3名(工学研究科2名, 情報工学研究科1名)
	アメリカ	オールドドミニオン大学	語学研修8名(工学部8名)
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修12名(情報工学部12名)
		シドニー工科大学	交流協定による派遣1名(工学部)
	韓国	忠州大学	相互交流12名(工学部12名) 短期留学1名
		昌原大学	相互交流8名(工学部8名)
		韓国海洋大学校	相互交流10名(情報工学部10名)
マレーシア	プトラ大学	交流協定による派遣2名(生命体工学研究科)	
18	アメリカ	オールド・ドミニオン大学	語学研修8名(工学部8名)
	イギリス	サリー大学	交流協定による派遣1名(情報工学研究科1名) 短期留学1名(工学部1名)
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修12名(情報工学部12名)
		シドニー工科大学	交流協定による派遣1名(工学研究科)
	韓国	忠州大学校	相互交流14名(工学部14名)
19	イギリス	サリー大学	短期留学1名
	アメリカ	オールド・ドミニオン大学	語学研修8名(工学部8名)
	オーストラリア	モナッシュ大学	語学研修12名(情報工学部12名)
	韓国	忠州大学校	相互交流12名(工学部12名)
	浦項工科大学	合同ワークショップ24名(生命体工学研究科24名)	



## 6 おわりに

卒業生・修了生アンケートや企業アンケートの結果の分析を通じて、工学部・工学府の教育改善を進めていくことができると思います。アンケート項目については、継続性の問題がある一方で、時間経過に伴って見直しが必要と思われる項目も出てきているように思いました。また、「教育」というすぐには成果が見えにくい事柄について「成果」を問おうとする場合、工学教育を通じて「人を育てる」といった学是「技術に堪能なる氏君子」の視点に立つことが肝要かと思いました。(加藤 幹雄)

部局評価委員会委員を務めた3年間の最後の年に委員長を仰せつかることになりました。部局評価委員会活動にも多くの経営資源が投入されており、工学研究院の更なる発展のためには今後とも卒業生、修了生や企業の声を謙虚に汲み取る努力を続けていく必要があります。アンケート調査からは厳しい環境の中にあっても教育職員の日常の努力は高いレベルにあることが窺えますが、学生や企業そして社会の変化に対応して教育や研究に更なる変化と改善を加えていくことが要請されています。来年度には認証評価が予定されていますが、「評価」の言葉に萎縮することなく、「技術に堪能なる士君子」の原点に立ち戻り、工業系単科大学における教育と研究のより一層の充実を心がけていきたいと思えます。委員の皆様のご多大のご協力に感謝します。(古曳 重美)

部局評価委員としてもっとも重い仕事はやはり「個人評価」であると思えます。不完全な私が他の人を評価するなど、とんでもないことであるとおもいますが、裁判員制度と同じように考えればお互いに輪番制でもできるのかなとも思っています。評価委員会の存在自体は少しでも職場を、大学を良くしていくことを旨としていると思えますので「目標に対してどれだけ達成したか」の検証役に徹してしまわないように注意する必要があると思えます。むしろトップダウン的に上層部から指令が来た時の指令内容の危険性などを指摘し、行きすぎのないようにストッパーの役割を果たすことも重要なことではないでしょうか。今後明るい活力のある大学へと発展するために部局評価委員会が大きく貢献することを切に願っています。(近藤 浩)

大学という教育・研究を目的とする非営利組織において、どのような評価が妥当で意味があるのかは非常に難しい問題だと思います。委員の一人としてこの業務に携わり、現在本組織で行われているものは、手法・内容に関しては、概ね理解されるレベルのものであらうと感じています。他方、評価を行うことで評価を高くすることが目的になりがちになったり、アンケートにおいては多面的な要素が結果に反映されることが見逃されたりすることなどの問題点や、何よりこれらの評価が先行することで教職員が従来行っていた学生

への“情熱的”対応を損なうことになるという点は常に問い続けて行かなければ、やがて“学破れて評価あり”となってしまうかねないことは強く認識しておくべきだと思います。  
(橘 武史)

本年より初めて部局評価委員会の委員を担当させていただきましたが、今まで務めてきた他の委員会とは異なるプレッシャーを感じざるを得ませんでした。それは常に「評価」という文言の圧力が背後にあり、学生や企業から挙がってきた大学への評価を、更にどのように評価し活用するかという使命に直面させられるからだと思います。教員というのはいつの時代でも、より良い教育方法を模索しつつ、この教え方なら自分も楽しいしやり甲斐も持てるという方法で学生の教育にあたっているものです。教育評価はそれに水を差し、教員のやる気を削ぐ様なものであってはならないと思います。しかし、場合によっては教員側の思い込みで教育にあたっているということもありますので、周辺からの客観評価も参考にしつつ、自分自身のプリンシプルを持って教育改善を行おうとする姿勢を持つことが重要なことだと考えます。(田吹昌俊)

部局評価委員会でのアンケート分析から抽出される課題をさらに詳細に解析し、具体的な行動プランの作成にまで発展させることができれば、このアンケート活動は本学の教育と研究の向上に大きく寄与するものと考えられる。また、現在のところ、調査年数が短いために有意な傾向として見えないことも、これを継続することによって明瞭になり、本学の貴重なデータベースになると期待される。これまでのアンケート結果から判断できることは、専門課程の教育と人間力や創造性に関する能力(課題探求力、課題解決能力、独創性、構想力、表現力、コミュニケーション能力)の育成については卒業生の活躍状況から概ね役割を果たしているが、語学能力の向上のために教育課程やシステムの改善と充実が求められている点であると考えられる。(増山不二光)

部局評価委員会委員の1人として、「現状と課題」の編集に携ったのは、今度で2回目である。この間、本学に対する法人評価が行われ、その現況報告書の素案をつくるワーキングにも参加した。周知のように、法人評価の基本は自己評価であるが、下した評価については他者を首肯させるエビデンスが必要である。しかし、何年にもわたって、統一的な方法で、本学の在学生・卒業生・修了生・企業の意識を調査・分析したものがなかなか見当たらず、「現状と課題」の必要性を痛感した。「現状と課題」の調査項目の中には、明らかに評価が上昇している項目もあるし、そうでない項目もある。前者については、努力が報われ喜ばしいことである。後者については、何らかの改善が必要と思う気持と、その一方

で、調査対象全員の評価が高いことは現実にはあり得ないので、何%をもって更なる改善が必要かを判断することは難しいと感じる気持がある。(渡辺 義則)

2008年(平成20年)12月

---

平成20年度 大学院工学研究院部局評価委員会委員(50音順)

小川 みやこ	工学部事務長
加藤 幹雄	工学研究院教授
古曳 重美	工学研究院教授【委員長】
近藤 浩	工学研究院教授
橘 武史	工学研究院教授
田吹 昌俊	工学研究院教授
増山不二光	工学研究院教授
渡辺 義則	工学研究院教授

---